

# モンテッソーリ教育 第53号

## 特集 コロナ禍と保育・教育

巻頭言 子どもとともに育つ～地球の十全さを保たせるために～…………… 乾 盛夫 (1)

基調講演 未来の子供たちに素敵なバトンを手渡したい! …………… 石田秀輝 (2)

### シンポジウム

#### 投稿型シンポジウム

第1シンポジスト 子どもとともに地球の十全さを保たせる生き方を求めて …… 堀田和子 (12)

第2シンポジスト 子どもとともに地球の十全さを保たせるために …… 福原史子 (19)

第3シンポジスト 子どもとともに育つ大人が地球のためにできること …… 田中昌子 (26)

コーディネーターとしての報告…………… 石田憲一 (33)

### 論文

モンテッソーリのコスミック教育における平和と子どもの使命について

…………… 前之園幸一郎 (40)

マリア・モンテッソーリの子ども観に見るカトリック的感受性…………… 林 悦子 (54)

### 研究ノート

子どもの生に音楽をきく～モンテッソーリの視点における音楽性について～

…………… 町田育弥 (66)

### 実践報告・事例報告

モンテッソーリ教育を取り入れた介護の実践…………… 和氣伸吉 (76)

### ルーマル賞

第6回・第7回「ルーマル賞」…………… 江島正子 (89)

### 海外情報

海外におけるコロナ禍と保育・教育…………… 三浦勢津子 (92)

### 特集 コロナ禍と保育・教育

編集委員会から…………… 江島正子 (96)

コロナ禍での保育…………… 森 円 (99)

東京モンテッソーリ教育研究所附属教育養成コース…………… 前之園幸一郎 (102)

コロナ禍からモンテッソーリ教育の提言…………… 佐々木信一郎 (105)

純心大学コース…………… 片岡瑠美子 (109)

東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンター…………… 三浦勢津子 (112)

コロナを理由にしない…………… 野村 緑 (114)

コロナ禍の保育について…………… 後藤洋美 (117)

コロナ禍と保育・教育…………… 上田真由美 (122)

感染症コロナ禍におけるモンテッソーリ教育の実践…………… 坂田久美子 (125)

コロナ禍における富坂子どもの家の発達支援の実践報告…………… 勝間田万喜 (129)

2021

日本モンテッソーリ協会

コロナ禍の保育—京都コース	長谷川美枝子(133)
コロナ禍と教員の養成—九州コース	藤原江理子(136)
コロナ禍における保育の現状と今後の懸念	大原青子(139)
コロナ禍における保育・教育～「新しい人間」に期して～	和野ともね(142)
コロナ禍での保育の取り組み	柳澤ナオミ(145)
コロナ禍と保育教育	森 純子(150)
COVID-19に関する埼玉県からの通知とモンテッソーリ園の対応	高橋修人(152)
コロナ禍において	力丸敏光(156)
コロナ禍での保育についての報告	川満すわ子(158)
コロナ禍での保育についての報告	末宗希望(161)
保育 with コロナ	田村澄子(164)
コロナ禍での保育についての報告～コロナ禍 2020 <sup>+</sup> in NAGASAKI～	池田洋子(167)
コロナ禍での保育	前田瑞枝(170)
コロナ禍を振りかえって—九州支部—	関 聡(172)
コロナ禍の中での中部支部研究会について	村田尚子(174)
コロナ禍と保育・教育で変わらないこと — 変わること	高根澄子(178)
新型コロナウイルス感染症での保育	板東光子(181)
コロナ禍での保育	木村悦子(183)
「コロナ禍での保育」以前とはどう違うのか～沖縄と離島での保育について～	照屋勝枝(186)
コロナ禍での保育・教育	米山美智子(189)
新型コロナウイルス感染症とモンテッソーリ教育	佐々木和美(193)
コロナ禍における現場の記録～子どもたちの幸せのために～	田中ポール(197)
コロナ禍での保育・教育—京都コース	岡山真理子(201)
コロナ禍で考えたこと	友井桂子(203)
コロナと保育	前鼻百合江(205)

## 図書紹介

『たんぼぼにかこまれて』	濱崎久美(207)
『子どものサインに気がついて』	岡田耕一(213)
『モンテッソーリ教育と子どもの幸せ』	鈴木弘美(218)
『発達障害児のためのモンテッソーリ教育』	早田由美子(226)

## 追悼

松本良子先生ご逝去を悼む	前之園幸一郎(231)
--------------	-------------

## 第 53 回全国大会参加報告

第 53 回全国大会報告 初となる Zoom 大会を終えて	岡村次朗(232)
第 53 回全国大会を準備して	吉村るみ子(234)

支部報告	(236)
------	-------

事務局報告	鈴木弘美(248)
-------	-----------

欧文摘要	(259)
------	-------

編集後記	江島正子(285)
------	-----------

2021

日本モンテッソーリ協会

## 巻 頭 言

# 子どもとともに育つ ～地球の十全さを保たせるために～

乾 盛夫

(鳴門聖母幼稚園)

創られた地球が、その本来の実りを得るために、私たちも子どもと共に、子どもを通して育つことを深く味わいたいと思います。私たちは、その地球の実りが豊かになるように望みながらも、一方では科学の進歩と共に、破壊ももたらしてしまいます。私たちは人類として地球を託されたことを忘れてはいけません。できれば、しなければならぬことは、それを子どもと一緒に唱えていくことです。私たちは自分で育っているようで、実は色々な生き物の生命の恵みで育まれています。

私たちは家庭家族、人類家族、そして地球家族の中で、特に子どもと一緒に育つという特別な恵みを頂いています。幼年期から少年期、青年期へと、良いものになろうとするこの子どもの心に触れられる私たちは、大きな大きなお恵み、特権でしょう。そのことを味わっていくのが、私たちモンテッソーリ教育の土台です。

子どもと共に育つという、地球上での人類の役割を十二分に実らせていく、その大切な大切な使命を、私たちは人類という名前において預かっています。預かっているのがあって、ちゃんと返さなくてはなりません。誰にでしょうか。生命の創り主です。その創り主が私たちに全てをお任せになったように、全ての生き物は、共に生命を喜ぶ生命に育つことを、私たちは探し求めなくてははいけません。それは、小さい子ども、あるいは小さくされた人々と共に働くことによって成り立つ人類の文化でもあるのです。「小さいから」ではなく、純粋だから、多くを持たないから、本物を求めるから、彼らと共に歩むことが私たちに託されている秘訣、地球を平和に作り変える秘訣です。それを目指し、手を繋いで一緒に歩んで参りましょう。

---

# 未来の子供たちに素敵なバトンを手渡したい！

石田 秀輝

(地球村研究室代表・東北大学名誉教授)

## 1. 何が問題なのか？

地球上の生物の総重量は1兆1千億トンあるが、人間が生み出す人工物の総量が2020年12月にそれを超え、さらに毎年300億トン—毎週世界中のすべての人が自分の体重以上の人工物を生み出しているのと同じ—を生み出し続けているという<sup>(1)</sup>、アントロポセン(人新生)の環境危機である。

この危機を乗り越えるために2050年を目指して日本を含め世界の124ヶ国(2021.01)がカーボン・ニュートラルを宣言しているが、自然界での炭素は主に太陽エネルギーを駆動力として完璧な循環を持つのに比べ、人工物はほとんどの場合、つくる時、運ぶ時、使う時、そしてその寿命を終える過程で炭素は循環せず、蓄積してしまう。それが温暖化という気候変動につながり、さらには生物多様性の劣化にも大きく影響している。現に、この50年間で地球上の脊椎動物は68%減少<sup>(2)</sup>、昆虫はこの27年間で最大75%減少した。昆虫がいなければ90%以上の植物は受粉出来ず、植物がいなくなればほとんどの動物は生きていられない、人間もである。だからこそ、カーボン・ニュートラルが不可欠なのである。

カーボン・ニュートラルとは、人為的に排出する炭素量と主に地球が吸収する量(海洋、陸地)が相殺され、収支ゼロになるということである。それが崩れ、排出量が吸収量を上回れば地球の平均気温が上昇し、気候崩壊が起これば現在の文明を維持することが出来なくなる。

8月9日にIPCC第6次評価報告書のうち、第1作業部会報告書が発表された<sup>(3)</sup>。IPCCとは『国連気候変動に関する政府間パネル』のことで、地球温暖化などの気候変動問題に関して、科学的、技術的、社会学的、経済学的な視点から包括的な評価を行う組織として1988年に設立された。ここには各国政府を通じて推薦された数百人の科学者が参加しており、5—6年ごとにその間の気候変動に関する膨大な科学研究論文から得られた最新の知見を整理する。第1作業部会はその中で自然科学的根拠を議論する部会である。今回の報告書は約3000ページに及び、1万4千報以上の

科学論文を参照しており、その過程を含め、世界で最も信頼できる報告書といえる。

前回の報告から6年が経過したが、国連のグテーレス事務総長が『地球が火事になっている』と述べたように、この間に気候変動は益々重大な局面を迎えていることが明らかになってきた。まず前提として知っておいて頂きたいのは、現在の文明を維持するには、産業革命以前に比べて気温の上昇を1.5℃未満に抑えなくてはならない（現在すでに1.07℃上昇）ということだ。それでも1.5℃上昇すると（1850-1900年の平均に比べ）熱波などの極端な高温が4.1倍になり、夏はほぼ毎日が猛暑日となるかもしれない。また、極端な豪雨の発生が1.5倍に、農業に大きな影響を与える干ばつの確率は2倍になる。そして2100年までの海面上昇が0.22-0.55メートルとなる。日本全国の砂浜では、約9割が1メートル以上の海面上昇で失われ、東京でも江東区、墨田区、江戸川区、葛飾区のほぼ全域が影響を受けると言われている。すでに『2018年夏の日本の猛暑は、人為的な温暖化がなければほぼ発生しなかった』『2018年7月の瀬戸内地域の豪雨は人為的な温暖化によって発生頻度が3.3倍になっていた』などの報告も出ており、温暖化の影響を現実的に受けていることは間違いない。

では、1.5℃未満に抑えるためにはどれほどの努力が必要なのだろうか。多くの国が2050年カーボン・ニュートラル宣言を行っているが、今回のIPCC報告書では、それでは間に合わない現実を突きつけられた形だ。1.5℃未満に抑えるためには二酸化炭素換算で約4000億トンの温室効果ガス排出量しか猶予がない。現在、世界では年間約335億トンを出し、その量は年々増加しており、このままでは単純に計算しても猶予は12年ほどしかないことになる。2050年ではなく、遅くとも2040年にはカーボン・ニュートラルを達成しなくてはならないということになる。

もう一つの大きな問題は現在の資本主義（グローバル資本主義、金融資本主義、新自由主義）そのものが限界にあるという事実である。アベノミクスの6本の矢はどこに飛んで行ったのか解らず、異次元の金融緩和は功を奏さず、何をやっても経済成長につながらず、日本は1991年のバブル崩壊からこの30年間のたうち回っている。何故か、一つは経済成長神話である。現在の資本主義はGDP成長を暗黙的に絶対善とみなす特殊な形而上学の上に成立している。そのため、短期的な利潤が得られる目先の成

長戦略ばかりが重用され、例えば DX、グローバルなどという言葉が繚乱している。農業であれば、食料自給率が 38% と危機的状態であるにもかかわらず、輸出に強い農業は支援するが、主食を支える農家には実質的な減産を強いるような戦略がまかり通る(農業白書 2021.05)。その結果、『農』の劣化は無論のこと科学技術立国を標榜しながら半導体もワクチンも作れない国になってしまった。そして、この 30 年間の平均経済成長率は 0.65% (1991-2020) で先進国最下位である。一方で 21 世紀に入ってから「幸せ」の概念は大きく転換している。国連の「世界幸福度報告書」は、GDP 中心主義を相対化し、日常生活から得られる幸せを含む「情動的幸福」社会関係資本(所得、心の健康、コミュニティー)を扱う「評価的幸福」を導入した。経済成長=幸福であるという概念はすでに過去のものなのである。

2 つ目の理由、こちらの方がはるかに根本的な問題なのであるが、それは「環境と経済は両立しない」ということである。最近、経済学者の多くの本がベストセラー入りしているが、そのほとんどは現在の資本主義を否定するものばかりである<sup>(4)</sup>。それは、地球環境と経済成長は表裏の関係にあり、現在の資本主義の延長で経済成長を目指せば、地球環境はさらに劣化するということを明確に示している。要するに、過去の成功体験は役に立たないということである。すでに現在の資本主義(グローバル資本主義

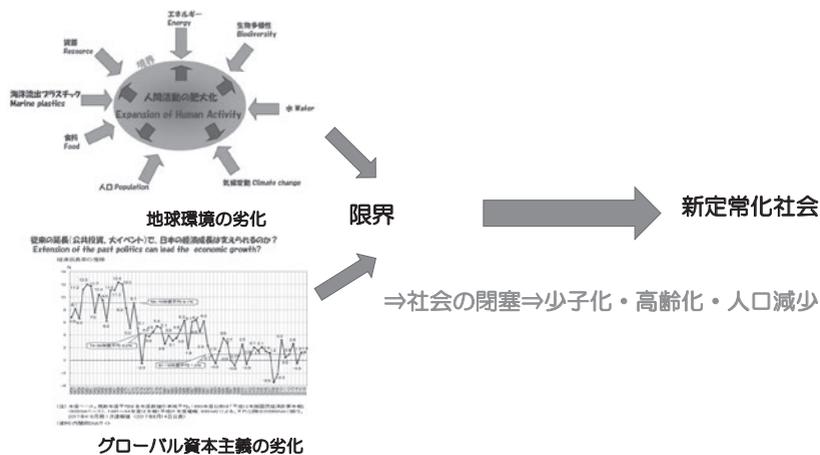


Fig.1 今考えなければならない2つの限界

あるいは新自由主義と言われる形態)は限界にあり、何をやっても経済を浮揚させることが出来ず、強引にそれを進めようとするれば更なる地球環境の劣化を招くことが明らかになったということなのだ。こうなると、本来リーダーたちはあらゆる可能性に耳をそばだてる、寛容なリーダーでなければならぬがなかなかそうはいかぬ。大脳新皮質の極度に発達した人間は、近くの危機よりも遠くのぼやけた希望に縋りつきたい、思考の限界に突き当たると楽観主義に縋りつき現実から逃避する。その結果、根拠のない希望論がまかり通る。安易な希望論や道徳論や精神論が人を酔わせて判断力を鈍らせてきたことは歴史的には常識だ。

要するに、今の延長上には持続可能な未来は無いのだ。では、未来の子供たちにワクワクドキドキするバトンを手渡すためにはどうするのか。それこそがローカルが豊かになる教科書をつくることだ。

我々は今、地球環境の限界と資本主義の限界という過去人類史で経験したことの無い2つの限界に同時に解を示さなくてはならない。そして次の定常化社会を創り出さねばならないのだ (Fig.1)。

## 2. では、どうするのか？

このままでは間違いなく20年後、いや10年後には文明崩壊の引き金に手を掛けることになるのだろう。未来の子供たちに手渡すバトンとは、あらゆるものが循環するものづくり、暮らし方のかたちを創り上げるしか無いのだ。間違っても何か革新的な技術がこの問題を一挙に解決してくれるなどと思うなかれ。テクノロジー進歩の歴史は、それが出来ないことをすでに証明している。古くは1865年の石炭問題(ジェボンズ)<sup>(5)</sup>に始まり、最近では2009-11年に日本で行われた家電エコポイント制度に明らかである。当時の日本のエコ・テクノロジーは革新的に進歩し、15年前に比べエアコンは6割、冷蔵庫は2割のエネルギーで動く、生活者の環境意識は高く、9割の生活者が環境に高い意識を持っている。そうであれば、エコ・テクノロジーの市場投入が環境負荷の低減に大きく貢献するはずだったが、結果は殆ど役に立たなかった。環境省の試算で約270万トンの二酸化炭素削減効果があるはずであったが結果は21万トンにとどまった。エコ商材が消費の免罪符となったのである(エコ・ジレンマ)<sup>(6)</sup>。エコだからテレビを大型にしよう、エコだからもう一台エアコンを買おう…大量生産

---

大量消費の構造には何も手を付けず、看板をエコに変えただけで、結局大きな環境負荷を生み出したのである。

カーボン・ニュートラルを目指すということは、従来の化石エネルギーに変わって再生エネルギーを導入したり、車を電気自動車に変えたりというような、単純なエコ・テクノロジーへの置き換えでは到底果たせないことは明らかである。何かと何かを置き換えるテクノロジーは必ずエコ・ジレンマを起こすのである。

大事なことは自然界と同様に、『あらゆるものを循環させる、循環しないものをつくらない、使わない』ということである。無論それが、我慢であってはならぬ、心豊かであることを前提としなければならないのである。

### 3. では、どうやって？

循環しない暮らし方や循環しないものづくりからの離脱に必要とされるのは足場の大きな変更である。カーボン・ニュートラルという厳しい制約の中で、どうやってワクワクドキドキ心豊かなライフスタイルを生み出せるのか、そしてそこに必要なテクノロジーやサービスが何かを考えねばならないが、それは思考の足場を少し変える（バックキャスト思考）ことで見えてくる<sup>(7)</sup>。

我々の思考は基本的にはフォーキャストである。今、目の前にある問題を考え、そこにある制約を排除するという思考である。では地球環境問題は排除できるのか？ もちろん不可能である。そんな時にはバックキャストという、制約を肯定する思考を採用せざるを得ない。単純な例で言えば、居間の電球が一個切れました、フォーキャストなら、制約を排除するので切れた電球を新しいものと交換することになり、バックキャストなら、切れた電球を受け入れて、例えば、『一つくらい切れても全然問題ないね、たまには全部消して、窓を開けて風の匂いや虫の音を聴いてみよう…』そんなライフスタイルをイメージいただければよい。

詳細は別に譲る<sup>(8)</sup>が、6千を超えるバックキャスト手法で描いたライフスタイルの社会受容性研究や90歳ヒアリングによる日本の文化要素の研究から『心豊かに暮らす』という構造が少しずつ見えてきた。今、我々は依存型の社会に居る、それは、『あなたは何もしなくて良いのです、テクノロジーやサービスがすべてを代行します』という物質型の社会である。

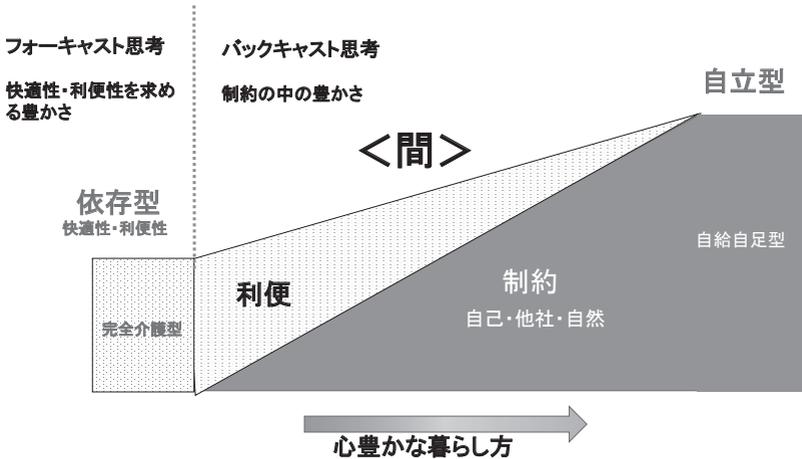


Fig.2 心豊かな暮らし方のかたち 『間』を埋める

ブレーキを踏まないでも止まる車、全自動の何とか… 物質的に飽和している今、これでもか、これでもかと次から次へと新しい商材を口に詰め込まれるような時代に生活者がストレスを感じていることは間違いなく、今、多くの人々が求めているのは自立型の社会なのだ<sup>(8)</sup>。その究極は自給自足であるが、それは極めてハードルが高い。依存型の暮らしをしてきた人にとって、それは全く不可能ともいえる暮らし方のかたちなのであるが、実は、この依存と自立の間に大きな隙間『間』が空いている、このエリアこそが宝の山、未来社会が求めているテクノロジーやサービス、さらには未来研究の種の宝庫なのである。この『間』は、ちょっとした不自由さや不便さ(喜ばしい制約)を、個(人)やコミュニティーの知恵や知識・技で乗り越えることにより埋められ、その結果、愛着感や達成感、充実感の生まれる暮らし方を生み出す社会なのである。(Fig.2)<sup>(8)</sup>。

例えば『間』を埋めるテクノロジーとは、自らが主導的に関与するテクノロジーであり、テクノロジーに使われるのではなくテクノロジーを使い切るということでもある。今AI(人工知能)恐怖という言葉が流行り始めている。AIが進歩すれば、我々の仕事がどんどん奪われ、2045年頃には人間を超えたAIが生まれる(シンギュラリティー)という恐怖である。

これはまさに依存型の社会視点（テクノロジー・オリエンテッド）である、すなわち AI に何が出来るかを徹底的に追及した結果であり、それは物質型社会で培われた、テクノロジー絶対善的思考である。それを『間』という概念で考えて見れば『AI に何をしてもらおうか？ 同じ繰り返しのこの面倒くさいけど複雑な計算は AI に任せて、その結果に基づくクリエイティブな仕事は私にお任せ！』というヒューマン・オリエンテッドという世界が見えてくる。教育という視点で考えれば、自分で考えて行動し、その結果に基づいてさらに考えて行動する、ということであるから、これはまさに非認知教育そのものである。

すでに、この間を埋める色々なアクティビティーは予兆として見えてきた。車から自転車へ、家庭菜園、週末アウトドア、DIY・・・すべて、ちょっとした不自由さや不便さを自分や仲間の知恵・技・知識で越えることにより、達成感や充実化、そして愛着を生み出す楽しさを創り上げているのだ。

このような、『間』を埋めるライフスタイルを描き、それに必要なテクノロジーやサービスを創成する手法として『ネイチャー・テクノロジー』



Fig.3 ネイチャー・テクノロジー創出システム

という概念がある (Fig.3)<sup>(9)</sup>。それは、バックキャスト思考でライフスタイルを描き、それに必要なテクノロジーやサービスの要素を抽出し、完璧な循環を最も小さなエネルギーで駆動する自然にその要素を探しにゆくものである。残念ながら、現在の科学では自然の模倣を十分に行えず大きな環境負荷を生み出すことがあるため、持続可能というフィルターを通してテクノロジーやサービスをリデザインする必要がある。

このようなネイチャー・テクノロジー創出手法で、泡に学んだ水のいらぬお風呂 (3L程度は必要)、土に学んだ無電源エアコン、カタツムリに学んだ汚れ無い表面、トンボに学んだ超微風でも回る風力発電機などいくつもの技術が生み出され始めた<sup>(10)</sup>。

#### 4. そんな社会に本当に移行できるのか？

今回のコロナ禍の三密という制約の中で多くの人たちが新しい暮らし方のキーワードを見つけた。2020年4-5月に300人近くの方々のインタビューを行った。三密という厳しい制約の中で多くの人たちが、心豊かな暮らしを見つめる努力をしていることが明らかになり、その暮らしをつくっている200を超えるキーワードも採集できた。それは、テレワークが地元や家族の再発見につながり、自分時間や家族時間を大切に、ワークとライフが重なる暮らしを楽しみ、近所にある小さな自然が愛おしく思えるようになり、文化が人にとっての生命維持装置だったと認識し…というような従来の延長ではなく全く新しい暮らし方の視点であった。

江戸末期から明治維新にやって来た多くの外国人が絶賛した日本文化の根底には『地域』(支え合い、協働、行事)・『家族』(思いやり、役割、伝承)・『自然』(活用、備え)の強い連携があり、その結果、生産や商売という概念が成立するという連関があった。この30年を振り返ると、特にこの『地域』・『家族』・『自然』の劣化が現在の多くの混沌を招いたことは一つの要因として間違いのないことだろう。そして、その重要性は今回のコロナ禍で明確に認識されたのだと思う。

この調査で、2つの大きな学びがあったように思う。一つはライフがワークの形やビジネスの形を変え得ることが明らかになったことである。哲学者フリードリッヒ・ヘーゲルが『人類は究極的な目的(自由の理念の実現)に向かって進歩し続ける』と言ったというのが、まさに横並びではな

---

く個（個人・家族・関係者・小さな行政。小さな企業）として色々なことをデザインする『個のデザイン』が極めて重要な時代に向かっていることを示しているように思う。個で暮らしをデザインする、個で仕事をデザインする、個で学びをデザインするための新しい潮流を迎えたのだろう。2つ目は、このコロナ禍で温室効果ガスの排出量がおおよそ30%（米・英、日本も筆者の計算ではほぼ同量の削減があった）近く削減されたことである。30%削減のために最先端テクノロジーが投入された訳でもなく、（日本の場合）ロックダウンが適用された訳でもない、自らの意思で色々なものをデザインした一個のデザイン—結果なのである<sup>(11)</sup>。

ちょっとした不自由さを個（人）やコミュニティーの技や知識や知恵で乗り越えた結果である。これこそがコロナが教えてくれた時代のイノベーションと言えるのだろう。

コロナ禍で物質の移動が大きく制限され、温室効果ガスの排出量が30%も削減された、それは日本の目標である2030年-26%（2021.04に目標は-46%に変更された）を超えているのである。今回は我慢という制約であったが、我々は自分たちの意思で行動変容を起こせる（個のデザイン）ことが明らかになった。今回は我慢であったが、それを達成観や充実感に変えることが出来れば、世界はドラスティックに変えられ、そして未来の子供たちに、心豊かな暮らしという素敵なバトンを手渡すことが出来ると確信した。その新しい達成感や充実感、自然を基盤とした自立的な暮らしの中にあり、それはちょっとした不自由さや不便さ（喜ばしい制約）を、個やコミュニティーの知識、知恵、技で越えるところに生まれる『間』である。今こそコロナ危機をチャンス（加速器）にしなくては未来の子供たちに手渡すバトンがつかれなくなるのだ。

未来の子供たちに手渡さねばならない素敵なバトンとは、真っ白いキャンパスにゼロから描くことではない、長い歴史の中で学んで来たことをオシャレに紡ぎ直すことなのだ。確かな未来は懐かしい過去にあるのだ、それは都会ではなく、ローカルが主役の時代がすでに始まっているということでもある。

イノベーションはテクノロジーによって起こるのではない、暮らし方のかたち（ライフスタイル）が創り出すものなのである。

## 引用文献

- (1) National Geographic (2020.12.11) 『地球上の人工物と生物の総重量が並ぶ』 <https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/20/121100731/> (2020年12月閲覧)
- (2) Living planet report 2020 WWF、Living Planet Report 2020 | Official Site | WWF (panda.org) (2021年4月閲覧)
- (3) Climate Change 2021: The Physical Science Basis <https://www.ipcc.ch/report/sixth-assessment-report-working-group-i/> (2021年8月閲覧)
- (4) 例えば 斎藤幸平 (2020) 『人新生の資本論』 集英社新書、諸富徹 (2020) 『資本主義の新しい形』 岩波書店
- (5) Alcott, Blake (July 2005). “Jevons’ paradox”. *Ecological Economics* 54 (1): 9–21. Jevons’ paradox - ScienceDirect 2011年4月15日閲覧
- (6) 石田秀輝・古川柳蔵 (2014) 『地下資源文明から生命文明へ』 東北大学出版会
- (7) 石田秀輝・古川柳蔵 (2018) 『バックキャスト思考』 ワニプラス
- (8) 石田秀輝 (2015) 『光り輝く未来が沖永良部島にあった』 ワニブックス
- (9) 石田秀輝 (2009) 『自然に学ぶ粋なテクノロジー』 化学同人
- (10) Emile H. Ishida・Ryuzo Furukawa (2013) 『Nature Technology』 Springer
- (11) 石田秀輝 (2021) 『危機の時代こそ心豊かに暮らしたい』 KKロングセラーズ

モンテッソーリ教育を実践してみても

## 子どもとともに地球の十全さを保たせる 生き方を求めて

第1 シンポジスト

堀田 和子

(モンテッソーリ原宿子供の家園長・モンテッソーリすみれが丘子供の家園長)

今回の大会はリモートで行われ、シンポジウムも画期的なものとなりました。その内容は参加者の投稿の中から、テーマに即してお話するという形式で、ぶっつけ本番的な意見交換となりました。シンポジウムの発言の内容を記録していないので、当日に話した内容と違う原稿になることがあるかと思えます。予めお断りしておきます。

今回の大会のテーマが、「子どもと共に育つ・・・地球の十全を保たせる為に」ということで、私は実践者としての経験の中での事例を紹介し、そこから気付いたこと、学んだこと、そして、それらをどう子どもに返さなければいけないかを考えてみました。

また、モンテッソーリ教育を通して、子どもに育んでゆくべき事は何か、私たち大人の使命、モンテッソーリメソッドの奥深さを考えてみたいと思います。

私は上智大学でモンテッソーリ教員養成コースが開かれた最初の年に理論聴講生として入講を許され、諸講師の講義を拝聴する中で、ある言葉に心を動かされました。それは、モンテッソーリの著作にある、「子どもは永遠の救世主です。我々に、何が大切なことなのか、何をすべきなのか気付かせるために、この世に繰り返し生まれてくるのです。」という一節でした。

その翌年、正課生としてコースに学び、ディプロマを頂き、修了後「原宿子供の家」を、20年後、「すみれが丘子供の家」を開設し、現在も現役で子どもたちの保育に関わっています。

「何が大切なことなのか、何をすべきなのか」は、子どもに視点を置いて子どものサイン、発信している事に気付き、自分の取るべき行動を決める。そして、求めている子どもの要求は何か、深い洞察力で、その子のた

めの環境を整えてあげることが大切なのではないでしょうか。子どもから学び、子どもと共に育ち、その上で、大人である私たちは子どもに何を返してあげるべきか、を考えて行きたいと思います。

そして今、SDGs が叫ばれる中、モンテッソーリ教育になが出来るのかを考えてみたいと思います。

## テーマ1 「子どもと共に育つとは何か」

ある3歳児の事例です。

「黄色いものが 落ちている。」

ある3歳男児が野菜切りのお仕事をし、その野菜をウサギにあげようと席を立った時、私のスカートを引っ張って小さな声で「黄色いものが落ちている。」とごみ箱をゆびさしました。ごみ箱には、しおれた花が入っていました。「何かしら」と言いながら、それを徐に拾い上げ、「お花だね。ここに生けてあげようね」と小さい花瓶にそれを生けると安心したようにお仕事に戻っていきました。

それは一人の保育士が新しく花を用意し、古くしおれた花を始末し、花瓶に花を生け、子どもの環境を整えてくれたものなものでした。一輪だけ、最後に残ったしおれた花を、ゴミ箱にいれてしまったものでした。この時の子供の言葉は単に「花がゴミ箱に落ちている。」ではなく、「花がゴミ箱にあるわけがないけど入っている」「先生が花を捨てるわけがない」という花に対する大事な気持ちと、大好きな先生への思いやりのような言葉に聞こえました。それで、保育後皆でこの言葉の意味を考えてみました。

日頃から子どもたちに花の水換えを提供している時には、切り取った葉や茎は紙に包んで捨てています。なのに、われわれの日常ではつい何気なく花の命を終わったものとして、捨ててしまいがちであることなど話し合い、「あっ、すいません。ちょっと忙しくてそこに捨てちゃいました。」という弁解でなく「忙しくても命のあるものを扱う時には、それまで飾って環境を美しく和ませてくれた事に心を寄せて紙に包んで捨てよう」ということになりました。子どもの一言から命の大切さに改めて気付かされ、日ごろの環境整備の心の齊へ方に気付かされた出来事でした。

参加者の方々のテーマ1に関する投稿の中にも「まわりや物に対して尊敬の気持ち、大事に思う気持ちをもって子どもに接し提供してゆくことを

---

大切にしている」「子供からのメッセージを受け止めるセンサーが 保育してゆく上で大切だ」という意見が寄せられていました。子どもは直接私たちに、「こうしろ、ああしろ」というわけではありません。ふとした行為、ふとした言葉が何を意味しているかサインに気付くことが大切だという意見も寄せられていました。

## テーマ2「教育現場で感じること」

自園を見学していた見学者との話し合いの時のことです。

私の園では、毎朝登園時に年長児が中心となる、いくつかの係の仕事があります。自分でやりたい仕事を決め、ひと月単位でそれを自主的にやり、子どももクラスの環境を整えるというものなのです。どんなお仕事があるかということ、お天気係、植物係、鉄製柵係、ハンガー係、ヒストリアン（日直）などで、その中に動物係があり、それは毎朝動物の世話をする係なのです。野菜を切ってウサギに餌を与えたり、亀の甲羅を洗い水換えしたり、メダカの水を換え、餌を与えます。ある子どもは生き物一人ひとりに話しかけています。「ウサちゃんお腹すいた？今人参切ってあげるね」とか、「カメさん水換えて気持ちいい？今餌をあげるから待っててね。」など嬉しそうに生き物たちと会話しながら世話をしています。その様子を見ていた見学者は感動したように眼を潤ませながら言いました。

「動物にもクラスの友達のように話しかけ、世話を丁寧に行っている姿に感動した。動物もクラスメートとして、関わり合うことで、『同じ仲間』という気持ちが育っている。これこそが『生きているもの皆友達』という共生の心が育っているのだと思う。」

「環境を整備する」ことはモンテッソーリ教育の中では大切な教師の心得の一つですが、この事例のように、子どもが身近なことで自然に命について気づき、一人ひとりがかけがえのない存在として仲良しで幸せな時間を共有できるということを、生活を通して自然に身に付けてゆける環境が大切のように思います。肩肘張らずに出来ることから、子どもといる幸せを感じつつ、子どもに寄り添って自分も楽しみながら観察してみましょう。見えてくるものがあるはずです。

ここで、「係の仕事」についてお話します。1988年にモンテッソーリの小学部のディプロマ取得のためにアメリカで学んでいた時のことです。

このコースが運営される時に、学生一人ひとりが出来る仕事を申し出て、それを1—2週間単位で担うのです。

ある日私は、ニュートリションとって、学生が授業中に飲むお茶類を準備する係になりました。日本でお茶を用意するといえば、麦茶をポットに作り紙コップを用意するものと考えますが、ここでは、一人ひとりの好みを聴き、20人の学生一人ひとりの好みのお茶・コーヒー・水などを用意します。ある学生が特別にそこでしか手に入らない自然食ハーブティーを注文したので、土日に遠くパークリーまで買い出しに行った事もありました。

小学校で実習をしましたが、自由な自己選択のお仕事とは別に、係の仕事を行います。

そのコンセプトはこうです。

クラスの皆が一人ひとり担っている係は、皆が気持ちよくクラスで生活する為に大切な行動で、どれが欠けてもクラスがうまく回らない。どんな仕事でもクラス運営にとっても大切な仕事である。それを自分でも楽しみながら行い、同時に皆の役に立っていることを実感する。地球上のどの生き物も地球にとって、大切な役割があり、皆に必要なことである。こういうコンセプトで実践されているようです。

帰国後自園でも取り入れて実践しています。テーマ2での参加者の意見でも、環境を整えることの大切さ、子どもの求めていることを気付く人的環境の重要性、また、コロナ禍にあって、消毒、手洗い、ディスタンス、共有しない、シールドを作るなど以前と違う環境づくりが求められますが、「みなで共有してお互いの為に調える教材や食卓の準備などが出来にくい。」「いつもと同じ空間で安心感を持つことの大切さに気付いた」などの意見が寄せられました。

教具やその提供は大切な環境ですが、身近な生活の中でモンテッソーリ教育の心を実践できる教材を見つけてゆくと良いと思います。

庭の草むしりをしながら草を観察し、葉の形や構造、砂場遊びでも水の力、砂の動き、石の種類などよく観察すると、それがモンテッソーリ教育の文化（地球）の学習につながります。子どもが目を輝かせていることを見逃さずによく観察して見ると良いでしょう。

---

### テーマ3「モンテッソーリ教育について自由投稿」

私の園では10月ごろから3月にかけて、「生命の歴史」を1-2週に一紀づつお話しています。人間が誕生するまでの生命の進化を5-6才の子どもに分かり易くお話してゆきます。そして地球に生命が誕生した時からずっとその命のDNAを引き継いで今の私たちが存在していることを話してゆきます。チンパンジーと人間のDNAの96パーセントは同じだそうです。また、魚だった事は髪の毛に鱗の痕跡が残っていることで知ることができます。最近の解析では数十億年前の太古の海で生まれた海綿のDNAが残っていると新聞で読んだことがあります。命はどんなものも無駄なものはなく、いま地球上にいるどの命も私たち人間に繋がっている事を話してゆきます。化石や模型を見たりしながらイメージを膨らませ、いろいろな時代を想像し、自分で各世紀の生物や地球の様子を絵に描いて5メートルぐらいの年表を作ります。子どもの中には「大きくなったら古生物を研究したい。」とか「研究ではなく、ぼくはそれらの生物の姿を絵に描く人になりたい。」とか言う子どももいます。子どもがどのように想像力を膨らませて行くかを楽しみにしながら進めてゆきます。その進化の中で、必ずしも勝ち組が残ってゆくのではなく、木登りのへたな猿が木に登れないので木の実を拾う為に歩くようになり、直立歩行へと進化したことなどを伝えます。生物はみな一生懸命自分の命を生きることで成長し、環境に順応して生きていること、それが互いに相手を支えたり、支えられたりしていることに気付くようにと思います。

モンテッソーリ教員養成では日常生活、感覚、数、言語などの領域に続き、文化が大切な領域になります。植物についてじっくり観察したり、栽培したり、動物を飼育したりしながら命の育て方、命の繋がり、水の循環など学ぶことも大切です。地球の歴史や創造の実験などでじっくり子どもと話す時間も大切な環境だと思っています。

私は特に進化について考える時、人間はどこに行くのか、人間のDNAが次の生命にどう繋がってゆくのか、何を残せるのか、そして今私たち大人は、子どもの何を育てなければいけないのか、を考えます。

あるモンテッソーリ研究者は、人間の脳のある部分を「天使脳」と呼び、他者を思いやり、他者の心に共感することができ、他者の痛みを感じとり、他者の喜びをじぶんの事のように感じられる脳の存在をあげています。こ

れは子どもが周りの人に愛され配慮されて育てられることで育つ、とされています。放っておいて自然に育つのではなく、大人が心がけて育てることが大切なのです。

早く文字や英語を覚え、簡単に話せるとか、早く上手に何かができるかということに心を砕くのでは無く、相手の求めていることに気付いて手を差し伸べ共感することのできる想像力のある人間に育てる事に心を砕くことが大切だと思います。

SDGs といって、持続可能な社会を築くために様々な提言や試みがなされています。気候変動や食料不足、エネルギーの問題も、今ある地球の十全をいかに保たせるかを考えて対策を実行してゆく事が大切だと思います。地球ひいては宇宙の秩序に基づいて、自然な発達を援助するモンテッソーリ教育の実践の中に、その答えがあると思います。私たちの命には沢山の命の連帯がある事を自覚し、地球にある生命がより良く生きるためにどうしたら良いのかを考える知恵と創造力を持ち、実践してゆく人を育てることが大切だと思います。

「GOOD FOR THE EARTH」「DOING GOOD FOR THE EARTH」子どもはそう言っているように思います。大人のわたし達は、何が大切なことなのか、何を選択すべきなのか迷った時、子どもの視点で良いことは何かを選択してゆくことが大切だと思います

投稿の中でも「モンテッソーリ教育のコスミック教育の部分をもっと普及、啓蒙して、広い大きな視野でモンテッソーリ教育が理解されると良い」「地球の未来につながる環境についてもっと知識を広げたい」「モンテッソーリ教育の平和、宇宙の秩序などの理念を伝えることが大切だ」などの意見が寄せられました。まさに同感です。

最後になりましたが、2000年にマリア・モンテッソーリ生誕100年を祝う大会がモンテッソーリの生誕地キアラヴァレであった時、「モンテッソーリアーナ」という楽曲が発表され、2007年のローマ大会で「サンロレンツォ子供の家100年祭」を祝ってその楽曲とダンスのパフォーマンスが披露されました。その楽曲の最後にマリア・モンテッソーリの言葉を歌詞にして子どもたちが合唱したのですが、その曲が今回の大会のテーマにぴったりだと思い、その曲を聴きながらモンテッソーリ女史の子どもへの思いをかみしめたいと思います。

---

歌詞の翻訳は、モンテッソーリ協会会長（理事長）である前之園幸一郎先生にお力をお借りいたしました。ありがとうございます。では、邦訳を載せます。

「モンテッソリアーナ」より

わたしたち子どもは、とても小さいけれど

まぎれもない「人間」です。

ごくありふれた日常の仕草（行動）で、全人類を結びつけます。

わたしたちは、泣いている時も笑っている時も遊んでいる時も、いつもお仕事をしていますのです。

わたしたちは、勤勉で愛らしく満ち足りた生徒です。そしてすでに「先生」なのです。

わたしたち子どもはとても小さいけれど、まぎれもない「人間」です。

ごくありふれた仕草（日常の行動）で全人類を結びつけています。

わたしたちは日々の行動を通して「平和」を実践しています。

世界の有力者たちに「戦争をはねつける」よう訴えたいと思います。

「人間は生まれた時から人間です」これは大きな事実です。

しかし、私たちの成長には「愛と時間」が必要なのです。

「人間は生まれた時から人間なのです。」

しかし私たちが成長するには、周りの人たちによる「愛」と「時間」が必要なのです。

皆さまの貴重な投稿をありがとうございました。また、大会の運営スタッフの皆様、とりわけ、リモートのシンポジウムを成功裏に導いて下さった岡村次朗氏、司会の石田憲一先生のコーディネートに感謝申し上げます。

# 子どもとともに地球の十全さを保たせるために

## 第2 シンポジスト

福原 史子

(ノートルダム清心女子大学)

### はじめに

第53回全国大会は、コロナ禍でのオンライン開催となり、Zoomのウェビナー機能を用いた大会運営をはじめ、投稿型シンポジウムの試みなど、チャレンジングで充実した大会であった。プログラムを通して、我々が直面する地球全体の大きな課題と向き合う、これからの教育の責任の重さを痛感させられた大会でもあった。

さて、筆者は公立小学校教諭として勤務後、アメリカに渡り3年間を過ごしたが、そこでの子育てを通してモンテッソーリ教育と出会い、Ohio Montessori Training Instituteで国際モンテッソーリディプロマ(3-6)を取得した。その後、オハイオ州にあるHorizon Montessori SchoolでDirectressを務めた。車いすで生活するDiane園長のもと、筆者自身は英語に不安を抱えながらも、多国籍の子どもたちが集まる温かく居心地のよい園で学びの多い日々を過ごすことができた。この「多様性」を尊重し合える環境で育った子ども観や世界観は、筆者の教育研究活動の素地となっている。

現在は、ノートルダム清心女子大学においてSr. Christina Marie Trudeauと元本学教授の奥山清子先生が追究してこられたコスミック教育を発展させるよう、教育実践研究を続けている。本シンポジウムに登壇させていただいたのは、本学や本学附属幼稚園においてモンテッソーリ教育を築き継続してこられた先生方がおられるからこそであり、また、本大会実行委員長の乾盛夫先生が私どもの実践を理解し、励まし、ご支援し続けてくださったからだとして理解している。「教具の扱いに終始するのではなく、モンテッソーリの精神を理解し、新しい事実を目を開き、取り組んでいく研究心と勇気と努力が重要」という軸と、「コスミック教育」を推進する伝統とを受け継いで、日々、考え悩み続けているからであろう。

そこで、本稿では、地球の十全さを保たせるための課題を自分事として

---

捉え、思考し、他者と協働して実際に行動できる子どもたちをどう育てるかについて、当日のシンポジウムでは伝えきれなかったことを加筆し再構成しながら述べていきたい。

## 1. 子どもとともに育つとは

本シンポジウムは投稿型ということで、皆さまから寄せられた投稿には、「子どもとともに育つ」とは、「『提示』、つまりして見せる、ということ」を本当にやろうとすると、自分自身を見つめ直すことを避けて通れません」や、「目の前にいる子どもたちと過ごす中で、日々新たな学びを生み出すこと、子どもから学び続けること」、「教具を使って楽しいと思っている気持ちが伝わるように関わること」等が挙げられていた。その通り、提示は、教具の扱いに終始するのではなく、楽しさや魅力を伝えることだと考える。「提示＝Presentation＝プレゼント・贈り物」とトレーニング時代に教わったことがある。このように提示が子どもたちへのプレゼントになるよう、日々の観察による子どもの興味・関心を見つける力、教具の意味とおもしろさを知り動作を分析する力、子どもを信じて見守る力が問われている。教具に熱中している子どもの姿と、その後に現れる、関心・意欲と思いやりにあふれた子どもの姿の中に、神様を見る実感は多くの先生方が経験なさっていることであろう。一つ一つの成功体験やうまくいかない試行錯誤の体験を通して、子どもたちは真に自分自身を創る神様から受け継いだ創造のお仕事をしているのだと考える。

本学附属幼稚園は、カトリック幼稚園として祈ることを教え、感謝する心、ともに生きる心を子どもたちの中に育み、一人格としての自由と責任、相互の信頼と尊厳を身につけてほしいと心を尽くし、「子どもとともに親も教師も育つ幼稚園」をモットーに歩みを続けている。初代園長のSr. 渡辺和子先生は、「子どもは大人の言う通りにはしないけれど、する通りにする」と述べておられた。その上で、教職員にも保護者にも学生たちにも、自ら考え、選び、選んだことに対して責任をとる生き方をし、後ろ姿で教育できる大人になるよう常にご教示くださっていた。

子どもとともに育つとは、謙虚に自分自身を省みて、子どもの思いに対応できるよう、新しい知識・技能を得るとともに、感情をコントロールして他者と協力する努力を続ける大人の在り方のことを示しているのではな

いだろうか。

## 2. モンテッソーリ教育現場で感じること

皆さまからの投稿には、「環境を整えることの大切さ、大変さを日々感じます。思うように整えることが出来ないジレンマがあります」や「本当はもっとゆったりと子どもたちと関わりたいが、トイレトレーニング、給食、午睡などの時間の制約があり思うようにいきません」等のように、子どもたちの成長を促すために、少しでも良い環境を創造したいという高い理想をもちながらも、多忙な日常において時間に追われ余裕がない様子が窺える。そこで、様々な制限のある中で、工夫が問われているのではないかと考える。

この点は、コロナ禍のオンラインでの全国大会開催に向けた、高知大会スタッフの方々のご尽力から学ぶところが多い。必要なことを洗い出し、すべきことを整理し、分類し、実現手段を選び、実行し、生じた課題に対しては電話やメールで「誤りの調整」をして来られたのではないかと。今、達成感に溢れておられることであろう。さらに、同様の機会があるならばと、新しい課題も見つけておられるのではないかと。この姿勢こそ、今、求められている学びの姿だと考える。プロセスの中に、新たな価値を見出し、新しい知識・技能を身に付けていく在り方が問われており、モンテッソーリアンには、その思考回路ができていていると考える。

大学においても、コロナ禍でオンライン授業が続いており、どうすれば学生に「学び」の意義や楽しさが伝えられるか考える日々である。先述した通り、現実と向き合い精一杯取り組み、改善していく姿勢こそモンテッソーリ教育だと考えて、今、ここでしかできないチャレンジをしているところである。本学で開講しているモンテッソーリ教育に関する授業も、多くがZoomを使ったリアルタイムのオンライン授業となった。ノート型パソコンを子ども役に見立てて提示し、オンラインでつながる学生たちに向けて発信したり、それでは味気ないので、ぬいぐるみにカメラをくくりつけて、子どもに見立てて提示したりした。少しでも学生たちが教具の特徴を実感できるよう、感覚教具の「構成三角形」や「ピタゴラス板」、数教具の「スタンプゲーム」等は各自、自宅にて色画用紙で作成したものを操作するよう促した。授業を録画して、後日視聴できるよう配信もした。こ

---

のことで、これまで自身には無縁と考えていた YouTube や Google Drive に録画をアップロードする技術も獲得することができた<sup>(1)</sup>。結果として、課題に向けて「思考する」ことで新しい「アイデア」が生まれることや、自分自身も「やろうとすればできる」ことを学んだ。

一方で、実際の教具に触れる機会が格段に減少したことにより、教具の特徴や提示方法の理解が進まないことも判明した。この点は、対面授業が再開した際、特別に時間を確保し補ったが、一度に多くを求めると学生たちが飽和状態になることもわかった。これまで当たり前できていた対面授業で直接教具に触れる機会や、直に話し合える機会の有難さを学生たちとともに実感したところである。

以上より、子どもの観察と深い教具理解を通して、一人一人の子どもたちの敏感期に適した教具を提示するのと同様に、目の前の現実を見て、時間や環境に制限のある中で解決の手段を選び最適解を導く姿勢が、モンテッソーリアンの在り方ではないかと考える。

### 3. モンテッソーリ教育に関わる者として思うこと—地球の十全さを保たせるために—

投稿からは、「宇宙レベルで考え、平和のために貢献できる子どもを育てる、そのために何をすべきか、そこに焦点を当ててほしい」、「目の前のことだけでなく、その子の未来を考えることが、地球の未来を考えることにつながるということ。地球環境について学び、考えていきたいと改めて感じました」、「環境問題は子供と共に取り組むところにきているし、子供が自然を愛し関心を持てるように遊ぶ権利を尊重しコスミックな要素を大事にしていけないといけない。それが平和教育にも繋がるのかな？と思う」といった意見が寄せられた。地球、宇宙、自然、生命のつながり、そして平和は、本大会を通して貫かれているテーマである。ESD（持続可能な開発のための教育）とモンテッソーリのコスミック教育は、地球の十全さを保たせるとともに、平和な世界の構築に向けた取り組みという点で理念が合致する<sup>(2)</sup>。それでは、子どもとともにどう学んでいけばよいのであろうか。

幼児期におけるコスミック教育の可能性を追究する中で、教育の鍵は、地球や生命の不思議さや相互依存について、いかに子どもたちが「実感」

できるかにあることがわかってきた<sup>(3)</sup><sup>(4)</sup>。「暗闇の実感」とその上での「光の明るさや温かさの実感」、「氷の冷たさの実感、硬さの実感」、「形を変える水の柔軟さの実感」、「何も感じられない空気の実感」、「山に降る雨が川を下り海にそそぐ大冒険の実感」、「四季の実感」、「地球に比べてはるかに大きい太陽の大きさの実感」、「お金の価値の実感」、「お金に換えることのできない価値の実感」、「大切なわたしと大切なあなたの実感」等が例として挙げられる。幼児期には、実感をともなう具体的な活動を通して、Wonder（何だろう）がFull（いっぱい）でWonderful（わあっ、すばらしいと心が動く）な直接体験が必要で、そのためにどのような活動や機会を創造すればよいかという視点で考えることが重要である。

本協会（学会）会長・理事長の前之園幸一郎先生は、「基礎講座」において「子どもは人々を結びつける大きな力を持っています」「子どもは人類の生みの親であり、人類の父であり、子どもには私たち人類の源泉という偉大な秘密が潜んでいるというのです」と述べられている。また、深津高子先生は「特別講演Ⅱ」において、保護者と一緒に選挙に行ったことのある子どもは、大人になって投票率が高いという興味深いデータを示された。講演にあった「『ビン』と『カン』で『敏感期』」というフレーズは、子どもたちの分類整理が好きという本性と、環境を美しく保つ行動とを一致させる、絶妙な表現である。落ちているごみをさりげなく拾う、雑巾が落ちていたらかけ直す、ペットボトルが落ちていたら拾う、空き缶が落ちていたら拾う、資源ごみを分別する、といった行動を見せながら必要なメッセージを伝えていきたい。そして、それを受け取った子どもたちに、未来を託したい。

筆者はNPO法人こくさいこどもフォーラム岡山の理事として、グローバルな活躍を目指す塾生たちの志を育てるため、SDGs（持続可能な開発目標）についてともに学びながら実践する「国際塾」の運営に携わっている。ESD（持続可能な開発のための教育）に関する学習の機会に、岡山ユネスコ協会会長の池田満之氏が、「Think Globally, Act Locally（地球規模で考えて、足元から行動する）」というスローガンの下で、一人の100歩より、100人の一歩が大切」と述べられていた。本大会の参加者一人一人が一歩を踏み出せば、未来を変える推進力となるであろう。

---

## おわりに

2021年1月に出された中央教育審議会答申『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して』では、全ての子どもたちの可能性を引き出す「個別最適学習」と「協働的な学び」が謳われている<sup>(5)</sup>。これら二つの目標の実現のためには、これまで100年以上にわたる実践を通して蓄積してきたモンテッソーリ教育のノウハウが、「学びの環境構成」と「一人一人の自己発展の助成」という点において活かせるのではないか。このように外堀は埋まりつつあるので、今後の教育発展のために誇りをもって進んでいきたい。

イギリスBBCが作成した、世界で活躍し成功を遂げた女性に焦点を当てた、12巻シリーズのDVD『Extraordinary Women:20世紀に輝いた世界の女性たち』の第1巻として『マリア・モンテッソーリ』がある<sup>(6)</sup>。その末尾に、自分たちが受けて育ったモンテッソーリ教育が、その後の仕事に大きな影響を与えたと語るGoogleの創始者二人、Larry Page氏とSergey Brin氏の言葉が流れる。

The work should be challenging.

The challenge should be fun.

“Work”には、いろいろな活動が当てはまるだろう。子どものお仕事も“Work”であるし、私たちの仕事や学びも“Work”であろう。それが挑戦的で難しいものであるべきだという。そして、その挑戦や困難こそを楽しもうというのである。

このような生き方は、本大会の基調講演において石田秀輝氏が述べられた、「不自由さや不便さ、制約の中で、いかにドキドキ・ワクワクすることを考えるか」という世の中や人生に対する見方・考え方につながる。地球の十全さを保たせるために、制限のある中でのチャレンジを楽しむ生き方をし、子どもたちに後ろ姿で伝えていきたい。

## 文献

- (1) 福原史子・蜂谷里香・岡本純子「コロナ禍のモンテッソーリ教育に関する研究—ポストコロナ時代へ活かす成果と課題—」『ノートルダム清心女子大学紀要人間生活学・児童学・食品栄養学編』第45号、2021年、35～55頁。
- (2) 福原史子「コスミック教育展開の可能性を探る：コスミック教育と

ESD (持続可能な社会のための教育)』『モンテッソーリ教育』第 44 号、2011 年、118～130 頁。

- (3) 福原史子・蜂谷里香・岡本純子「コスミック教育の実践：『創造のおはなし』を通して」『モンテッソーリ教育』第 45 号、2012 年、107～118 頁。
- (4) 福原史子・蜂谷里香「モンテッソーリ教育におけるプロジェクト型の活動の実践：金融・金銭教育の研究委嘱を契機として」『モンテッソーリ教育』第 51 号、2018 年、91～103 頁。
- (5) 文部科学省中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」2021 年。  
[https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt\\_syoto02-00012321\\_2-4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-00012321_2-4.pdf) (2021.7.30 閲覧)
- (6) BBC, “Maria Montessori”, *Extraordinary Women*, DVD, 1 (2016), 丸善出版。

---

# 子どもとともに育つ大人が地球のためにできること

## 第3シンポジスト

田中 昌子

(エンジェルズハウス研究所)

### はじめに

2020年に高知で開催されるはずだった第53回全国大会では、一般公開講座で「家庭でできるモンテッソーリ」についてお話をする予定だった。コロナ禍で1年の延期を経てWEB大会となり、初の試みである投稿型シンポジウムに、子育て支援という立場から回答してほしい、とお招きいただいた。現場の経験もない私が僭越ながら登壇することになったのは、まだITという言葉も一般的ではなかった頃から、モンテッソーリIT勉強会を主宰してきたことも遠因であろう。見えないけれど画面の向こうにいる大切な方々と繋がっているという感動を、四国支部の皆さまのご尽力によって全国大会（学会）でも共有できたことに、時代の変革を感じている。

一方で、便利さと引き換えに失ったものも多く、地球は危機に瀕している。それを受けて今大会では、100年以上前からモンテッソーリが提唱してきた、地球レベルで全体を捉えることの重要性を示唆するプログラムが、数多く展開された。ともすると忙しさに紛れ、目の前の子どもの困りごとに終始しがちだが、今こそモンテッソーリ教育の普遍的な理念に立ち戻る時である。すべての大人が子どもの良き援助者となれば、子どもは広い視野を持つ大人、すなわち宇宙の市民に成長し、自身の手で地球の十全さを保たせることができるはずである。

このことを踏まえ、3つのシンポジウムテーマに沿って、参加者の皆さまからの投稿と自身の回答、また時間の都合で割愛した内容も含め、地球のためにできることを、考察してみたい。

### 1. 子どもとともに育つとは

このテーマの投稿に繰り返し出てくるのは「子どもから学ぶ」という言葉である。モンテッソーリは「子どもから即座に学び、できるだけ奉仕をするのがわたしたちの義務です。」<sup>(1)</sup>と述べているが、これこそモンテッ

ソーリ教育が他の教育と最も異なる点である。今大会では、映画「モンテッソーリ子どもの家」が大会期間中に特別上映された。2018年からご縁があり、字幕監修にも携わったが、コロナ禍の公開で見られなかったという声も多く、上映を実現された関係者に敬意を表したい。この映画の原題は「Le maître est l'enfant」、英題は「LET THE CHILD BE THE GUIDE」である。いずれも「子どもを導き手としましょう」といった意味であり、よりの確な日本語にするならば「子どもは私たちの先生」となるだろう。ここに引用はできないが、映画の最後にもモンテッソーリのせりふとして同様の意味の言葉が出てくるので、注目してほしい。

このように子どもを先生と位置づけ、そこから学ぼうという姿勢は、モンテッソーリアンにとってはごく当たり前であり、それが投稿にもよく表れていたが、世間一般では違う。大人は子どもより偉い、だから子どもが大人から学ぶべきである、という考えから抜け出せない。先の見えない不透明な社会では、親が不安を抱えているせいか、すべてをコントロールする親、夢を子どもに託し叱咤激励する親、あなたのためだからと押し付ける親など、過保護や過干渉の親が増えている。良い点を取れたら、良い学校に合格したら、といった条件付きの愛しか与えられない親に、子どもは必死で応えようとして心が崩れていく。

基調講演で石田秀輝先生が、フォーキャスト思考とバックキャスト思考についてお話をされ、考え方を根底から変えない限り、地球の危機は救えないことがよくわかったが、子どもの見方も180度変わらなければならない。モンテッソーリの子どもの見方を学んだ親たちが変わっていく姿は、これまでたくさん見せてもらった<sup>(2)</sup><sup>(3)</sup>。親は子どもとともに育っていくものだと感じているが、同時に自分の成育歴を振り返る人も多いのが興味深い。私の勉強会で学んだ方からのレポートを紹介しよう。

子どもへの理解の欠如から、子どもは何も知らない、聞き分けがなくうるさい、大人が指導や管理をするものとの思い込みがありました。私自身もそのような存在だと思われて育てられたのではと、時折感じてきました。親から「なぜできないの」と自尊心を傷つけられ、「あなたにはできない」と否定されたことも1度や2度ではありません。その後、私は娘を通してモンテッソーリ教育と出あうことができました

---

た。学んだことで子どもに対する認識は180°変わりました。子どもには自己教育力があり、大人は子どもがその力を最大限に発揮するための援助だけを行うべきだという、この1点を腹落ちさせることが、子育てにおける私への宿題であったのだと感じています。

(記入時 小1女子の母)

シンポジウムの最初のテーマ「子どもとともに育つ」とは、大人が子どもから学び、その成長に必要なことを見極め、子どもの成長を邪魔せず良き援助者となっていくことであろう。そのために、親にも正しいモンテッソーリ教育に触れる場が必要である。今大会は子育て中の保護者も参加しやすく、初参加の方々から、素晴らしい経験だった、次回の大会もWEB参加を可能にしてほしい、という意見が多数あったこともお伝えしておく。

## 2. モンテッソーリ教育現場で感じること

投稿の中で多かったのは「環境」に関するものであり、多くの投稿者が環境を整えることの難しさを感じておられるようだった。その中で、私は自身の活動に関係する3つの投稿に注目した。

「モンテッソーリの良さを選んで入園してくる家庭はごくわずかです。もっと知ってもらいたいと思うのですが。」「子どもが生きる家庭環境の重要性を感じます。保護者の方と一緒に子どもを育てる姿勢、園での取り組みを常に保つ事が、子どもの健やかな成長を支えると感じています。」「今家庭で何かにじっくりと取り組む環境を作る事が難しい為か集中して活動に取り組む子どもが少なくなっている。」

家庭環境や保護者との関わり方の重要性は、どの園でも実感されているだろう。2020年はコロナでロックダウンとなる国も多く、園や学校も閉鎖された。日本では地域差はあるものの、休園や休校は2～3カ月だったが、アメリカでは10カ月に及んだという報告もあった。実は、ロックダウンになって海外からの問い合わせが増えた。通えなくなって初めて、モンテッソーリ教育を理解していなかったことに気づき、学びたいという内容だった。また、欧米では一斉にオンライン授業に切り替えられたが、幼児期の子どもには、液晶画面ではない具体の世界が大切であるため、主に保護者が授業を受け、身の回りのもので実践したそうだ。これはまさに

IT 勉強会でお伝えしてきた方法であった。

今大会の応用講座で大原青子先生が、「3歳までに育む人格の基礎」でお話しされたとおり、0歳から3歳の間は特に整えられた環境が大切であることはここで論じるまでもない。すべての子どもが0歳からモンテッソーリ園に入園できれば確実に世界は変わるだろう。ただ現状はそうではない。文部科学省の分科会である「幼児教育の実践の質向上に関する検討会（令和2年）」の参考資料「幼児教育の現状」<sup>(4)</sup>には、働く母親は増えたが、3歳未満の半数以上が家庭にいるというデータ（平成30年度）がある。3歳未満で就園中の子どもは約106万3千人だが、そのうち何人がモンテッソーリの環境にいるのかと考えると、やはり親という人的環境も大切である。

保護者への対応については、コロナ禍でお受けした先生方向けのオンライン研修の中で提案したことが、わかりやすかったというご意見を多数いただいたので、先の3つの投稿への回答としてそれを紹介することにした。

1つめは、「ひとりで解決するのを手伝う」である。もちろんこれはモンテッソーリの言葉「ひとりでするのを手伝って！」<sup>(5)</sup>が元である。これにひと言加えるだけで、保護者への良い対応になるのではと考え、提案してみた。ポイントは、「じっくり・じわじわ・繰り返し」である。私の勉強会に参加する親たちも最初は、歩かない、興味を持たない、と細かく質問してくる。でも2年間かけてじっくり、じわじわ、繰り返し学ぶと、卒業レポートには、子育ての軸ができた、ぶれなくなった、という言葉が並んでいる。「まだまだ悩みもありますが、答えはモンテッソーリ教育の中にあるので、ひとりで解決できると思います。」という一文に、先生方が立派に自立した卒園生を送り出す時と同じ感動を味わった。ぜひ保護者には、気長に、水が浸み込むように、あきらめずに伝え続けてほしい。

2つめは、「親も誤りの自己訂正」である。周知のとおり、モンテッソーリ教育では子どもの誤りを指摘しない。環境をいつも整え、正しい手本を見せるなど、先生方は子ども自身が気づくような工夫を日々されている。それが「誤りの自己訂正」であり、そこに親を加えてみた。勉強会の受講生の8割はモンテッソーリ園に通えないという方だが、残りの2割はモンテッソーリ園の保護者である。その方たちから「モンテッソーリ教育は子どもには優しいけれど、親には厳しい」という声が時折ある。先生方には

---

意外だろう。実は私も最初の頃、よく失敗をした。モンテッソーリ教育を理解すればするほど、問題点は子どもの側にはなく、大人にあることが見えてしまう。子どもには指摘しないようにぐっとこらえていても、大人が相手だつといそれを指摘してしまうが、子どもと同じように自分で気づいて訂正できるように心がけたい。ポイントは「聞いて・頷き・ヒントだけ」である。まず話に耳を傾け共感する、答えを与えず気づくヒントを与えることで「親育ち」を援助し、良い関係が築けることを実感している。

### 3. モンテッソーリ教育に関わる者として思うこと

「未来」「平和」「生命」といった広い視野からの捉え方が多く、投稿内容は多岐にわたった。その中で私は以下の投稿に注目した。

「地球の十全さを保たせるためにという本大会のサブテーマは、モンテッソーリの宇宙観と深い繋がりがある。最近、モンテッソーリブームで世間の注目も集まっているが、天才児とか教具とか提示とか表面的な捉え方ばかりである。モンテッソーリ教育と関わる者はもっと人格形成や平和、宇宙といった核になる理念を伝えていくべきではないだろうか。」

昨今はモンテッソーリ関連の書籍が多数出版され、ネット上でも簡単に情報を検索できる。将棋の藤井聡太さんを始めとする著名人の活躍で、知名度が上がったのは良いことだが、ネット上の情報は玉石混淆で、誤りも散見される。また「できる子を育てる」など英才教育の部分だけが注目されているのも事実である。もちろん有能で優秀、社会に貢献できる人が育つのは確かであり、地球のために働ける子どもを育てるのも使命である。

それなら活動できない人間には価値がないのだろうか？戦後最悪の大量殺人「やまゆり事件」の犯人は、重度の障害者には生きる価値がないと19人を殺害した。もちろん身勝手に許されない犯行である。ではそういう人たちが生きる意味は何か？ 明解な答えを手渡してくださったのは、亡き恩師、相良敦子先生である。最後のお電話で私に勧めてくださったのが『ぼくの命は言葉とともにある』という本だった。9歳で失明、18歳で聴力も失い、盲ろう者で東京大学の教授でもある福島智氏の名著。聞いて驚いた。なぜなら、モンテッソーリ教育の内容と全く同じ言葉が並んでいたからだ。

「私たちはこの宇宙の中で、一瞬にも等しい時間だけ生きている存在で

す。宇宙創成期から138億年が経ち、この地球の誕生から数えても46億年の歴史があるといわれています。」<sup>(6)</sup> ビッグバン、生命の歴史がすぐに思い浮かぶだろう。「宇宙空間や月面から見れば、地球は暗黒の虚空に浮かぶひとつの青い球体。その表面に国境線はありません。国家や民族の違い、個人の能力の違い、そして障害の有無……。こうした人間の『違い』から生まれる差別や争いも、宇宙からの視点で考えれば、存立基盤を失うでしょう。」<sup>(7)</sup> モンテッソーリ教育で最初に触れる白と青の地球儀、モンテッソーリの宇宙観そのものである。「宇宙の中になぜ私たちが生きているのだろうかと考えるとき、そこには何か意味があるにちがいないと思えるのです。もし無意味だとしたら、そんな奇跡的なことがなぜ起こったのでしょうか。そして、何か意味があるのだとすれば、それは限られた一部の人間だけではなく、どんな人間にも生きる意味がないとおかしいのではないのでしょうか。」<sup>(8)</sup> 生きる意味についての答えがここにあった。

前之園幸一郎先生の基礎講座でも、自然界の相互依存関係と宇宙的ヴィジョンについてお話があったが、命あるものすべては畏敬の念を持つべき存在である。命というものは、そこにあるだけで尊く意味があるというごく当たり前のことを、私たちは忘れがちである。「ありのままのあなたでいい、ありのままのあなたが好き」というメッセージを、私たちは子どもに送らなければならない。壮大な生命の歴史がつないできた命のバトンを受け継ぎ、多くの恩恵を受けながら生きている、子どもはその究極のところにいるかけがえのない存在である。これが命、生きるということについて相良先生が残されたメッセージであり、シンプोजウムという場を借りて、多くの方とシェアしたいと思い、お話しさせていただいた。

## おわりに

地球の十全さを保つために、環境問題や貧困、教育など地球レベルで取り組むべき課題は多い。そうした今、何より大切なのは未来を生きる子どもたちの育ちである。故相良敦子先生が提唱された「モンテッソーリ教育の一般化」とは、モンテッソーリの子どもの見方と援け方をすべての大人が身に付け、特別なことではなくごく当たり前に日々実践することである。今も果てしなく続く大人と子どもの戦いを終わらせるのは簡単ではないが、子どもから学ぶ大人を一人でも増やす努力を今後も続けていきたい。

---

## 文献

- (1) M・モンテッソーリ 鼓常良訳『子どもの心—吸収する心—』国土社、1992年、86頁。
- (2) 田中昌子「IT社会におけるモンテッソーリ教育の展開」『モンテッソーリ教育』第38号、2006年、90～99頁。
- (3) 田中昌子「モンテッソーリ教育を学んだ親たち—情報化社会における新たな試み—」『モンテッソーリ教育』第47号、2015年、151～163頁。
- (4) 文部科学省幼児教育の実践の質向上に関する検討会（第9回）〈参考資料5〉「幼児教育の現状」令和2年5月11日。  
[https://www.mext.go.jp/content/20200424-mxt\\_youji-000006830\\_08.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200424-mxt_youji-000006830_08.pdf) (2021.7.31 閲覧)
- (5) M・モンテッソーリ 中村勇訳『幼児の秘密』財団法人 才能開発教育研究財団 日本モンテッソーリ教育総合研究所、2004年、230頁。
- (6) 福島智『ぼくの命は言葉とともにある』致知出版社、2015年、54頁。
- (7) 同上、65頁。
- (8) 同上、66頁。

## コーディネーターとしての報告

石田 憲一

(長崎純心大学 人文学部 こども教育保育学科)

### はじめに

今回の第53回大会では、日本モンテッソーリ協会全国大会ではじめての投稿型シンポジウムが開催された。このシンポジウムは、あらかじめ掲げられた3つのテーマに沿って大会参加者に投稿を行っていただき、それを基盤として3名のパネリストから、ご自身の経験や知見に基づきご意見をいただく形式で進められた(当初4名のパネリストの予定であったが、「学校法人暁の星」学園理事の乾盛夫先生は諸事情のため登壇できなくなられたため)。

そのテーマとは①あなたは大会を通じてのテーマである「子どもとともに育つ」とはどういうことだと捉えたか、②あなたがモンテッソーリ教育現場で感じること、③モンテッソーリ教育とかかわる者としてあなたが思うこと、という3つであった。

登壇していただいたのは、「モンテッソーリ原宿子供の家」「モンテッソーリすみれが丘子供の家」の園長で「東京モンテッソーリ教育研究所附属モンテッソーリ教員養成コース」をご担当されている堀田和子先生、「ノートルダム清心女子大学児童学科」准教授の福原史子先生、「エンジェルズハウス研究所」所長でモンテッソーリIT勉強会「てんしのおうち」主宰者の田中昌子先生の3名の先生方であった。

大会参加者から寄せられた投稿は、テーマ①では27通、テーマ②では26通、テーマ③では25通、合計78通であった。

### (1) テーマ①「子どもとともに育つ」とはどういうことだと捉えたか

このテーマに対して大会参加者からは「子どもを大人の感覚で決めつけないこと、そして子どもの姿から次の手助けなどの関わりを学んでいく姿勢が大切だと感じました」「子どもを育てているという上から目線ではなく、子どもと同じ目線に立ち、日々一緒に考え、学びながら過ごしていく事」などのように、「子どもに学ぶ」こととして捉えている投稿を多く寄せて

---

いただいた。そのためには「謙虚である」ことが大切だとどの文章も見られた。こうした参加者の投稿をふまえながら、先生方にそれぞれのご経験をふまえて話をしていただいた。

堀田和子先生からは、教育の現場で実際に出会われた子どもの姿についての話をいただいた。ある時、3歳の子どもの黄色いものが落ちていって拾ったところ、実際には花であった。その花の命の大切さをその子どもは感じていたようだった。そのあと、教師と子どもとの間で、花を大事に紙に包んで捨てようということとなった。このように教師として、子どもの表情から気持ちをくみ取るセンサーを持つことの重要性について語られた。

次に、福原史子先生からは、モンテッソーリ教育の「教具」の面白さや奥深さなど、モンテッソーリ教育の本質について話をいただいた。例えばモンテッソーリ教育における「提示」は、教具の扱いに終始するのではなく、楽しさや魅力を伝えることであり、「提示＝presentation＝プレゼント・贈り物」として、日々の観察による子どもの興味・関心を見つける力、教具の意味と面白さを知り動作を分析する力、子どもを信じて見守る力が問われているとのことであった。話のなかで、子どもは「大人の言う通りにはしないが、する通りにする」という、ノートルダム清心女子大学附属稚園初代園長のSr. 渡辺和子先生の言葉を紹介され、ご自身の体験をふまえて、後ろ姿で教育できる大人となることの大切さについても述べられた。

田中昌子先生は、今回上映された映画のタイトルに関連して、子どもから学ぶこと、教師を導くガイドとしての子どもの姿について述べられた。また現在の社会では、親が子どもに対して条件付きの愛情しか持てない場合が見られるとの問題点を指摘された。

## (2) テーマ②あなたがモンテッソーリ教育現場で感じること

このテーマへの投稿では、「環境を整える事の大切さ、大変さを日々感じます」「人的環境や物的環境を整えることが一番重要であると感じます」というように「子どもの環境を整えることの大切さ」に関することが、参加者より多く寄せられていた。他にも「観察すること」「ちょっと待つ」ことの大切さについての投稿もいただいた。(1)のテーマのときと同様、3名の先生方から、参加者の投稿とこれまでの経験をふまえたお話をいた

だいた。

福原先生からは、モンテッソーリ教育から学んだ考え方や視点等を活かして大学の教育現場で工夫されていることを中心に話をしていただいた。子どもの観察と深い教具理解を通して一人ひとりの子どもたちの敏感期に適した教具を提示するのと同様、目の前の現実を見て様々な制限のある中で解決の手段を選び最適解を導くことが、モンテッソーリアンのあり方だと考えたことなど述べられた。この点は、コロナ禍のオンラインでの全国大会開催に向けて、試行錯誤を重ねて来られた高知大会スタッフの方々のご尽力から学ぶところが多いともお話しになられた。

堀田和子先生からは保育実践の中で子どもの環境を整えることについて、提示・提供の方法、環境構成、着地点という3つの観点について話をいただいた。モンテッソーリ教育に入られる前に、例えば車が好きな子どもには車に関係したものを教育のはじめに使ったり、一人ひとりの「おどろぐセット」を丁寧に準備したりといったように、一人ひとりの存在、個性を大切にしているとのことであった。また、親が子どもと関わる際の「じっくり」「じわじわ」「繰り返し」「聞いてうなずき」「ヒントだけ」という大切なポイントについて話をしていただいた。

田中先生からはコロナ禍において親と関わるなかで、日ごろ感じ、考えておられることについて話をいただいた。海外では長期にわたって園や学校が閉鎖され、家庭環境の重要性が再認識されていること、コロナ禍において親自身が不安な生活をしていること、そうした親に対して先生方が「親育ち」の援助をするときの大切なポイントについて話をしていただいた。

### (3) テーマ③モンテッソーリ教育とかかわる者としてあなたが思うこと

このテーマに対しての投稿では「モンテッソーリ教育と関わる者はもっと人格形成や平和、宇宙といった核になる理念を伝えていくべき」「今ここにいる、その時、その瞬間、いのちを大切にすることを忘れない人間であることを目指していきたい」「子どもが自然を愛し、関心を持てるように遊ぶ権利を尊重しコスミック的な要素を大事にしていかなければいけない」といったモンテッソーリ教育の理念を教師が大切に、子どもに伝えていくことの重要性に関して述べているものが多かった。中には「パート

---

や派遣が多く、そろって研修なんてできない現状、なかなか伝えられない難しさの中で、「モンテッソーリ教育を高めていけない」という問題点を指摘されているものもあった。こうした投稿をふまえて、パネリストから話をいただいた。

堀田先生は、アメリカの小学部ディプロマ取得のためのクラスで学ばれていたときの話をしていただいた。クラスの一人ひとりが、何らかの役割をもって毎日の活動をすることがある。これは、モンテッソーリの小学校で子どもたちが毎日行っていることだが、天気を調べる人、植物の世話をする人、毎日の出来事を記録する人などがいて、地球にいるどんな生き物も大切な使命を持っていて、むだなものではなく互いの助けとなり地球の秩序を保っているという考えのもと、子どもたちが自分の出来る活動をしてきたとのことであった。日本に帰国してから、働いた園で子どもたちの朝の活動として「動物係」といって、イモリ、ザリガニ、かめ、うさぎ、メダカ、金魚、おたまじゃくしといった小動物を飼い、子どもたちが日々の水を換えたり、かめの甲羅の苔を落としたり、うさぎの餌の人参を細かく切ったりといった活動を行った。その中で「共生」の大切さについて子どもたちは自然に学んでいたのではないかと述べられた。このように日常生活のなかで、平和の理念を伝えること、子どもに身近なことで丁寧に伝えていくことの大切さについて語られた。

田中先生からは、将棋界の藤井聡太さんや社会で成功されている方々にはモンテッソーリ教育を受けてきた方が多いことに世間の関心が向けられがちであるが、そのことよりもモンテッソーリ教育においては命の大切さ、ありのままの人間の存在の大切さについて理解することこそが重要であるとの話をされた。その中で、恩師である故相良敦子先生からのメッセージとして『僕の命は言葉とともにある』という本を紹介された。

福原先生からは、国が現在、教育政策で重視し進めている「深い学び」「個別最適な学び」「協働的な学び」について考えるとき、モンテッソーリ教育には大きな可能性があることを述べられ、さらに、こうしたことを社会に発信していくことの重要性について、特に指摘された。

## まとめ

今回の第53回全国大会のテーマは「子どもとともに育つ～地球の十全

さを保たせるために～」であった。テーマ①「子どもとともに育つ」とは、どういうことだと捉えたかについて、先生方がそれぞれの経験から語られ、深く考えることができた。その中で、子どもの心の動きに対して教師側がセンサーをもつことの重要性を貴重な体験からお話された。参加者からも「子どもとともに育つとは、いかに子どもに学ぶ姿勢を身に付けるか、と感じております。子どもとうまくいかないときは、知識や経験がないことよりも、子どもからのメッセージを受け取るセンサーのようなものが鈍感な時がほとんどのように思っています。そこを向上させるためには自分の中のバイアスに気がつく、思い込みを捨てる必要があるのだと痛感します」との投稿が寄せられていた。また、他の参加者の投稿では「子どもと共に育つ、その言葉からモンテッソーリの子どもの前で頭を垂れるという言葉が浮かんだ。(中略)子どもの敏感期を見たり、平和な心、子どもが素晴らしい存在であることを体験するなかで、本当に頭を垂れる。そんな気持ちにさせられる。その出会いによって、大人は変えられていく。それが子どもと共に育つということだと思う」という文章が寄せられていた。花が落ちてるところから、命の大切さを考え始めた子どもとともに、次の行動を考える教師のように、学習する者とともに、授業を創る姿勢を大切にしたいと思った。そのためには改めて教える側に「謙虚さ」が求められることを、改めて考えさせられた。

次にテーマ②あなたがモンテッソーリ教育現場で感じること、については先述の通り「子どもの環境を整えることの大切さ」についての投稿が多かった。その中には「子どもの環境を整えるには、大人の人的環境がもっと豊かになる知恵が必要に感じます。組織や行政の、上から変えることは難しいかもしれませんが、今日の基調講演を伺って、外堀を小さなスコープ一つ分でも埋めるような発想を目指そうと思えました」という投稿のように大人の側の姿勢を問う投稿が寄せられていた。基調講演でお話いただいた石田秀輝先生の、「未来の子どもたちに素敵なバトンを手渡したい!」とのテーマでの基調講演とつながることも多かったように思う。2050年のカーボン・ニュートラルを達成することを世界の多くの国が宣言している。この50年間で地球上の脊椎動物の68%が減少、昆虫は最大この27年間で75%減少している現状、昆虫がいなければ90%以上の植物は受粉出来ず、植物がいなければほとんどの動物は生きていられないこと

---

を、石田先生から教えていただいた。その中で石田先生は「あらゆるものが循環するものづくり、暮らし方のかたちを創り上げる」ことを提案され、実際に奄美群島の沖永良部島にお住まいになりながら、豊かに暮らされている。一人ひとりの大人が主体的、積極的に行動することによって、環境をより良いものに変えていくことができるのだと強く感じた。パネリストの先生方からも、それぞれの立場で、学ぶ側の環境をよりよくする具体的な取り組みをお話いただき、自ら動くことの重要性と可能性について深く考えることができた。

テーマ③モンテッソーリ教育とかかわる者としてあなたが思うこと、については「宇宙レベルで考え、平和のために貢献できる子どもを育てる、そのために何をすべきか、そこに焦点を当ててほしい」「子どもが自然を愛し、関心を持てるように遊ぶ権利を尊重し、コスミック的な要素を大事にしていかなければいけない。それが、平和教育にもつながるのかなと思う」といった投稿に見られるように、「自然」「平和」「コスミック」「宇宙」といった、より広い高次元の世界とモンテッソーリ教育とを結びつけて考えられている参加者が多くおられた。パネリストからは、自然と共生するための環境設定での工夫や、モンテッソーリ教育における一人ひとりの存在を大切にするという理念について改めて考えること、社会に対してモンテッソーリ教育の意義を発信していくことの重要性について述べておられ、モンテッソーリ教育の意義や価値を考えながら、日々の教育活動について見直し工夫していくことが大切なことを学ばせていただいたように思う。

このシンポジウムの司会者を担当させていただいて、特に感じたのは、「子どもに視点をおく」ことの大切さであった。私自身、比較教育学を専門として研究している。その中で、シンポジウムするとき、ユネスコのことを考えていた。1956年、日本が正式に国連に加盟を認められた。その5年前の1951年、日本はユネスコ加盟を認められており、さらに4年前の1947年、戦後2年しか経っていないときに、仙台で世界初のユネスコの民間活動が始められている。こうした先人の主体的取り組みから、その後の日本の国際社会への復帰、平和国家としての繁栄がもたらされたともいえる。当時の日本人々は、これからの子どもをどのように導くべきか、どのような社会にするべきかを真剣に考えたのだと思う。今、現在、同じことが問われている。子どもに視点をおき、どのような世界を手渡し、ど

のように子どもたちに働きかけ、導いていくかという問いに対する答えである。

### おわりに

今回の大会では、はじめて投稿型シンポジウムが開催された。その中には、「子どもとともに育つ」「地球の十全さを保たせるために」何が必要なのかという、本大会のテーマに沿いながら、大会参加者の投稿や、それをふまえたパネリスト3名の先生方の話し合いから、モンテッソーリ教育についての考えを、より深めることができたのではないかと思う。オンラインによるこのような新しい試みに挑戦して下さった大会事務局の皆さまに心から、改めて敬意を表させていただきたい。

# モンテッソーリのコスミック教育における 平和と子どもの使命について

前之園 幸一郎

(青山学院女子短期大学名誉教授)

## はじめに

本稿はモンテッソーリの独自の視点である〈宇宙的ヴィジョン〉(visione cosmica)を主題とする。〈宇宙的ヴィジョン〉はモンテッソーリ教育思想の根底を貫いている。この視点が具体的に展開されたのは1949年にイタリアのサン・レーモ(San Remo)市で開催された戦後最初のモンテッソーリ国際大会においてであった。モンテッソーリは第二次世界大戦直後の混乱する世界の状況について〈宇宙的ヴィジョン〉による明快な分析を行い、子どもの個性的発達と世界の平和実現についての説得的な提案を行った。コスミック教育の理論はインド・コダイカナールのモンテッソーリ教員養成コースの講演で1943年に明らかにされた。平和の実現については「忘れられた市民」(cittadino dimenticata)である子どもの視点から論じられている。〈宇宙的ヴィジョン〉は、われわれの目に見えないもの、普段、われわれの意識に上がらない事象を鮮明に提示することを可能にした。

## 1. モンテッソーリの宇宙的ヴィジョンとサン・レーモ国際大会における講演

### 1.1. 〈宇宙的ヴィジョン〉

モンテッソーリの〈宇宙的ヴィジョン〉(visione cosmica)という考え方は、彼女の教育論に通底する「宇宙的計画」(piano cosmico)の思想を背景としている。この思想の誕生にはモンテッソーリの母方の大叔父にあたるアントニオ・ストッパーニ(Antonio Stoppani, 1824-1891)の大きな影響があるとされている。<sup>1)</sup>ストッパーニは司祭で著名な古生物学者であった。パヴィア大学とトリノ大学で教授として地質学を教えた。さらに現在の「ミラノ自然史博物館」の創設者の一人であり、その館長をも歴任した。このストッパーニによる動植物の発生をたどる地質学的な著作『水と空気』(Acqua e aria)からモンテッソーリは大きな影響を受けたとされる。この

著作によって彼女は世界の成り立ちと生命の不思議について強烈なイメージを抱き、それを〈宇宙的ヴィジョン〉と呼んだ。この概念は「子どもの家」の子どもたちとの出会いを通じてモンテッソーリの内部で成熟し、彼女の教育思想を豊かなものにしていく。すでに1930年代から〈宇宙的ヴィジョン〉は明確な表現で語られるようになったが、1943年には彼女自身が設立した小学校のあるインド南部の小さな村落コダイカナルで、モンテッソーリは「宇宙的計画」についての講演を行っている。<sup>(2)</sup> その要点は、人間を含む生物・無生物のあらゆる被造物はそれぞれが自分では意識していない存在理由を持っており、また明確には自覚されることのない役割を担っているという点にあった。

モンテッソーリによると、すべてのものは創造による壮大なる「宇宙的計画」においてそのふさわしい位置におかれている。微生物から人間に至る大きな生命の円環においてすべてのものにそのための位置が備えられており、われわれ一人ひとりはその固有の場所を占めている。なぜならわれわれの一人ひとりとは唯一無二の存在であり、私と同じような人間存在は他にはいないからである。「私たちがこの宇宙の働きを理解し始めるとき、あらゆる事物は一つの意味を持つようになる」。<sup>(3)</sup> また『平和と教育』において、モンテッソーリは「多かれ少なかれ地上に存在するすべての生命あるもの (*tutti gli esseri viventi sulla terra*) は 宇宙的使命 (*missione cosmica*) を持っている」と述べている。<sup>(4)</sup>

モンテッソーリが用いるイタリア語の「コスモ」(*cosmo*) は「宇宙」を意味する普通名詞であり、「ユニヴェルソ」(*universo*) と同様の意味で用いられている。「コスモ」の形容詞は男性形が「コスミコ」(*cosmico*)、女性形が「コスミカ」(*cosmica*) である。これはギリシャ語の「コスモス」(*κόσμος*) に由来する。この語の本来の意味は秩序、整然としていること、きちんとしていること、折り目正しいことであり、宇宙、天空、恒星天などの意味もある。「コスモス」は混乱を意味する「カオス」(*χάος*) の対極にある状態をイメージする観念であり、調和、美しさも含意している。

モンテッソーリは宇宙的な秩序について首尾一貫する統一的なヴィジョンに立脚していた。それによると「宇宙は唯一のものに向かって進んでいるところのもの (*l'universo è ciò che va verso l'unico.*)」である。そして世界についての統一的、究極的ヴィジョンは、水平的には人間生活と自然と

---

の調和・共存をめざすものであり、垂直的には時代と歴史の軸にしたがって発展的に展開するもの」とされている。<sup>(5)</sup>

## 1.2. サン・レーモ国際モンテッソーリ大会

このモンテッソーリの〈宇宙的ヴィジョン〉の具体的内容は1949年に彼女自身によって明らかにされる。モンテッソーリは1947年にイタリア議会から招請を受けて戦後の祖国イタリアへの帰国を果たした。同年の憲法制定議会に出席してイタリア共和国憲法の成立に立ち会った後、モンテッソーリは2年後の1949年にサン・レーモ (San Remo) 市において戦後初のモンテッソーリ国際大会を開催した。大会テーマは「世界再建のための人間の形成」(La formazione dell'uomo nella ricostruzione mondiale)であった。この大会においてモンテッソーリは〈コスミック教育〉(Educazione cosmica)の視点に立つ四つの講演を行った。

最初の講演は「時間と空間における人間の連帯」(La solidarietà umana nel tempo e nello spazio)である<sup>(6)</sup>。これは、個人としての人間の形成の問題と同時に人類が社会的な関係における成員としてどのような歩みを辿って現在の地点にまで到達したかを整理し、未来をも展望することをねらいとしている。人類は地上に出現すると、まず生きてゆくために労働に従事し、その置かれた環境において生活条件を改革するために自らを組織した。歴史は多様な文明のサイクルにおいて個々に生まれた初期の社会集団の存在を私たちに示している。集団の成員の言語と独特な諸習慣が結びついた社会集団がしだいに国家に発展し、多様な国家が生まれて今日に至っている。

しかしながら飛行機や瞬時に通信を可能にする諸手段の発展は、原料や商品や多様な生活物資の交易を容易なものにし、それぞれの国家の国境による防衛の必要性を減少させている。諸国民の間の物的な結びつきの必要性が世界規模で痛感されるようになり、国家間の障壁である国境の意味が急速に失われつつある。ここで注目したいのは、モンテッソーリの発言が行われたのが現在から70数年前である点である。彼女は1949年当時に、今日の問題であるグローバリゼーションの課題をすでに視野に入れて未来を展望していた。

モンテッソーリは本講演で人類が結びつくためにはどのような手立てが

必要かに焦点を当てて述べている。彼女は、歴史の推移の中で見落とされている人類が相互のために働くように組織化されているという事実に着目した。彼女によると、今日、他者のために働かない人間など一人も存在しない。(Non c'è infatti, ai nostri giorni, nessuno che non lavori per gli altri.)

生活のために私たちが必要としている物品や医療などについて具体的に見るなら、それを作り、あるいは医療行為を行い、加工し、消費財としてそれを私たちに提供している職業的な訓練を受けた人々との深い相互依存的な関係によって私たちは結ばれている。今日、私たちは大昔に自然の中で生活していたようには単独では生活できない。日々の労働が社会的に組織化されているからである。私たちは他者の労働に依存して生活しており、同時にまた他者のために労働しなければならない。それは私たちの衣食住が誰か他の人々の労働によって提供されていることから明らかである。モンテッソーリが強調したのは、人間が生命を維持できるのは他者の労働によってであり、同時に私たちも他者の生活のために貢献しているという点であった。さらにモンテッソーリは労働が犠牲的精神によって行われていない点にも注目している。医師は患者の苦痛を和らげるためにひたすら努めている。家具職人はその技を総動員して自分で満足のいく製品を仕上げることに喜びを感じている。これは人類の間の「結びつき」(unione)がすでに存在していること示している。人間はすべて必要な事柄に対して、他者の援助によって生活しなければならないという相互依存の関係を発展させてきたのである。この事実は私たちに「人類に対する感謝の意識」(sentimento di gratitudine verso gli uomini)という気持ちを抱かせる。その気持ちが「人間の連帯の観念」に向かわせる。

モンテッソーリは聖書のパウロの言葉「体は一つでも、多くの部分からなり、体のすべての部分の数は多くても、体は一つである。」(コリントの信徒への手紙 I、12・12)を引きながら、世界中の人間は一つの生きている身体だということができるとしている。人類は世界的に「人体において血液が循環するのと同様に、ほぼ完璧な調和的交換(un'armonia di scambi quasi perfetta)を実現している」。私たちは世界の遠隔の各地からの生産物を食料としている。運輸・交通手段の発達は距離の障壁を取り去り、世界中の人間の結びつきの実現に貢献している。「宇宙的視点に立つならば

---

人類の一体化はすでに労働によって成立している。人類の相互依存と社会的連帯を実現するための深い絆はすでに存在している」。このような現実は大変大人より子どもの方が素直に理解することができる。「社会の根底にあるこの真実についての自覚と確信をいかに子どもに育てるか」が今日の教育が取り組むべき主要テーマであると講演は結ばれている。

「乳幼児期の創造的能力」(La capacità creatrice della prima infanzia)<sup>(7)</sup>は大戦直後のあらゆる立場の人々による平和への願いの機運に着目した講演である。思想的立場の違いにもかかわらず人々が一致したのは戦前の教育の見直しであった。モンテッソーリはこの戦後社会の平和への潮流を背景に可能性に富む提案を行った。それは出生直後からの乳幼児の教育の重要性である。

モンテッソーリは、多様に異なる言語や対立する思想がまだ実質的意味を持たず、お互いを理解し合う能力も失っており、相互に耳を傾け合う柔軟性に富んだ乳幼児期から教育は始められるべきだと述べた。この時期に教育が始められるなら人類の間に調和を創造するための道を発見することが可能になるだろう。「子どもを通して世界の運命が変わりうるという希望」(la speranza che le sorti del mondo possano mutare attraverso il bambino.)はすべての人にとって大きな救いである。そして聖書にある遠くからベツレヘムにやってきた「東方の三博士」(マタイ 2・1)が引用される。聖書によると、新しく生まれた世の中を変えてくれる赤ん坊を讃えるために、博士たちは大きな希望を抱いて遠隔の地からやってきた。新生児への聖書におけるこの敬意は現代においても深く顧みられるべきだとモンテッソーリは考えている。

子どもは、未だ特定の社会的地位も権利も与えられていない。それでも子どもは将来の人類を代表する存在だ。世界中に満ち溢れている乳幼児たちは日々の生活の中で無意識のうち一人ひとり異なる個性的な「人間の建設」(la costruzione dell'uomo)に勤しんでいる。モンテッソーリによると「子どもは創造者です。無から人間を創造します (Dal niente crea l'uomo.)。この強力な創造的能力は、地球上のすべての場所のすべての子どもたちに共通に与えられています (è comune a tutti i figli dell'uomo, in tutte le parti della terra.)。子どもの創造的精神は崇拝すべき法則 (da leggi divine)に導かれた計り知れないエネルギーを持っています」。そして、

私たちの身近にいる子どもたちが世界市民として成長するよう私たちが望むなら、私たちは抜本的に私たち自身の考えや伝統的教育制度などを変革しなければならないと述べている。

講演「吸収する心」(La mente assorbente)<sup>(8)</sup>は人間の幼児が持つ神秘的な能力への注目がテーマとされている。私たちは誰でも自然の驚異的な営みを称賛する。夜空の星の整然とした運行や花々の調和に満ちた美しさや昆虫の知恵深い動きなど、造化の妙について科学はもちろん文学や思索もそれを対象としている。しかし、宇宙を統べる最も感嘆すべき神秘の一つである幼児の言葉の習得がまともに顧みられない点をモンテッソーリは指摘する。それは幼児が生まれながらに持っている吸収する心による。幼児は2歳ごろまでに言葉を発するようになる。しかも言葉の習得は当たり前のことと当然視されている。だがそれは神秘的なことだ。子どもは大人と同じように言葉を習得するのではない。子どもは言葉を「忘れようのない仕方」で学ぶ、つまり吸収するのである」(impara in modo indelèbile, assorbe, per meglio dire.)。読み書きのできない人々の存在は思い描くことができる。しかし、しゃべることのできない人の存在は、特殊な場合を除けば通常は想像できない。「子どもは言葉の習得とともに自分自身の内面に未来の人間を形作っていく」(Con la conquista del linguaggio il bambino plasma in se stesso l'uomo futuro.)。言葉に限らない。「子どもの心は環境から様々な事柄を吸収し自分の内部に血肉化する。これは両親を通じてではなく、子どもの創造者的能力 (una potenzialità creatrice del bambino) の結果として生じるのである。地球上のすべての子どもが、同じ方法で、同じ熱心さと同じ能力を持ってこの法則に従っている。この創造性の力は特定の民族の特性ではない。子どもの本性に備わったものなのである。」

子どもは行き当たりばったりで吸収するのではない。厳格な案内人を子どもは内部に持っている。その案内人の助言のもとに、子どもは学ぶ事柄だけでなく、学ぶ事柄が生じる時期を決定する確固たる法則にも従っている。それは、具体的には子ども自身の内部に存在する「目に見えない先生」(Il maestro invisibile) による。その先生は、気づかれることなく定められた時間にテストも行い、知識を与え、次のステップへ進級させる。つまり、それは自然が定めた人間の発達のプロセスそのものである。子どもは脆弱な相貌にもかかわらず、地球上のあらゆる場所で同じような過程をたどり

---

ながらその秘められた自身のエネルギーによって個性的な人格を創造しているのだ。小さくて虚弱な存在であるから保護しなければならないなどと考えて、大人は子どもを牢獄に閉じ込めてはならない。教育者はこの時期を支配している発達の法則を注意深く尊重して背後から子どもを見守るべきだと訴えている。

大会結びの講演は「子どもを通しての世界の一体化」(L'unità del mondo attraverso il bambino)<sup>9)</sup>である。第2次大戦直後の混乱の中で、人々は共通の希望と利害が一致できる合意点を求めていた。人類社会に調和を生み出すためには人種差別や民族的偏見のない社会の実現から始めるべきだ、など多くの議論が展開されていた。未来への展望が混沌として錯綜する中で、モンテッソーリが独自の観点から提案したのが「子どもを通しての世界の一体化」の道である。彼女は、すべての人々の賛同と一致が得られるためには人種の偏見反対などのような否定的スローガンでは合意の形成は困難だと考えた。目標は肯定的な内容の主張でなければならない。そして人々の気持ちを結びつけるのは子どもである。

モンテッソーリは述べている。「子どもは精神的で普遍的な力です。愛と高尚な感情が湧き出る泉です。子どもは人類と世界に一体化をもたらすための確実な道です (Il bambino è, quindi, una forza spirituale universale, è sorgente di amore e di sentimenti elevate: è la via certa per raggiungere l'unità fra gli uomini, nel mondo.)。その根拠は次の通りとされている。「何も持っていないけれどもすべてを約束してくれる子どもは至る所に存在しています。豊かな家にも貧乏人の家にも、あらゆる人種、あらゆる国家のうちに子どもは存在しています。その子どもは政治的党派性も社会的差別や社会的不一致も知りません。子どもはあらゆるところに生まれ同じような共通の特質を持っています。」人間としての共通の成長発達の特質を持つ子どもが世界中に存在していることを述べたうえでモンテッソーリは結論に移る。「私は断言します。子どもは存在するものの中で最も堅固な普遍的絆です (il bambino è il legame universale più saldo che esista.)。人類の間に完璧で調和的な合意に到達するための唯一の希望は子どもです」。

モンテッソーリはその宇宙的視点から戦後の混乱する社会的現実の背後にある法則性の存在について明らかにした。そして基本的に人類社会が結びつき一体化できる条件がすでに整っていることを強調した。また子ども

は民族、文化、宗教、言語、時代、地域性などの多様な違いにもかかわらず、すべての子どもが本質的に共通する人格的存在であることを明らかにした。したがって私たちが世界中の子どもに働きかけるなら、私たちは平和に一歩近づくことができるとモンテッソーリは考えたのであった。

## 2. 有機体としての地球とコスミック教育

### 2.1. コダイカナルに設立された小学校

1939年に神智学協会の招きによってインド旅行を行ったモンテッソーリは第2次世界大戦の勃発によって7年間にわたりインド滞在を余儀なくされた。イギリスの植民地であるインドに滞在するイタリア人に対しては、イギリス政府により敵性外国人として収容所に抑留する措置が断行されたからである。しかしモンテッソーリに対しては特別な配慮がなされた。彼女は神智学協会の本部のある白人居留地に形式的に軟禁されたが、インド南部の高原避暑地コダイカナルで夏を過ごすことも許された。

このコダイカナルにおいて1943年にモンテッソーリはモンテッソーリ教育の教員養成コースを開催し「宇宙の計画」(PIANO COSMICO)についての講演を行った。その講演集録が2冊の英語版著書として出版された。1946年の*Education for a New World*と1948年の*To Educate the Human Potential*である。この二つの英語版の著作はC. グラッツィーニ(Camillo Grazzini)の校訂によって1970年にイタリア語版*Educazione per un mondo nuovo*ならびに*Come educare il potenziale umano*として出版された。グラッツィーニはこの二つのイタリア語版にそれぞれ上記講演の背景についての同内容の序文を付している。

### 2.2. 児童期とコスミック教育

『人間の可能性をいかに伸ばすか』(*Come educare il potenziale umano*)はモンテッソーリがコダイカナルに創設した小学校の教育実践から生まれた。その学校で学ぶのは、6歳以上のこの土地に暮らす土着の貧困階層の家庭の男女の子どもたち、インド人の公務員家庭の子どもたち、植民地インドに居住するイギリス人の市民、公務員、軍関係者の家庭の子どもたちであった。彼らは、人種、民族、文化、宗教、社会的諸条件が大きく異なっていた。モンテッソーリは多様な文化的宗教的背景を持つ子どもたちが一

---

緒に成長していく様子を細かく観察する貴重な機会に恵まれた。ヨーロッパの文化から遠く隔たったこの地で異文化による様々な刺激を受けながら、モンテッソーリは人間の諸問題について、民衆の教育の現実について具体的な考察を深めていった。そして彼女が子どもたちに見出したのは〈人類の息子〉(Figlio dell'Uomo) を特徴づける根源的で共通する「統一の諸特徴」であった。

大きく異なる文化的宗教的環境のもとで6歳までを過ごし、学校生活で初めて出会って一緒になり、自然や宇宙に対する好奇心で夢中になっているコダイカナルの子どもたちによって、モンテッソーリは「宇宙的計画」という壮大なヴィジョンが真実であるとの確信を抱いた。その「宇宙的計画」の根本にあるのは、人間を含むすべての生物・無生物のあらゆる被造物はそれぞれに自身では知り得ない存在理由をもっており、また明確には自覚されることのない役割を担っているとする考え方である。

6歳から上の年齢の子どもたちに見られる大きな特徴はその「内面における根底的な変化」(un profondo cambiamento interiore) である。知的対象が外部世界に向けられるようになり、知識への飢え、両親の言いなりにならない精神的な独立、よし悪しを自分で判断する欲求などが強まり、熱心に探索を望むようになる。<sup>(10)</sup> この変化に応えるためにモンテッソーリは「宇宙全体についてのヴィジョン」(una visione dell'intero universo) の提示を提案する。宇宙は壮大なる現実であってあらゆる疑問への答えを用意しているからだという。すなわち、あらゆる事物は宇宙の部分であって、「一つの全体的統一」(un tutto unico) を形作るために相互に結びついていることを学ぶからだとされる。このような考え方は子どもの精神を集中させ、目標もなく知識を求めてさまよい歩くことをやめさせる助けになる。子どもは、最終的に自分自身とすべての事物の宇宙的中心を発見して満足するからである<sup>(11)</sup>。

モンテッソーリはさらに述べる。「宇宙についての観念が正しく子どもに与えられるなら、それは子どもの興味を目覚めさせる以上の働きをなすだろう。なぜなら子どもの内部に感嘆と驚きを、すなわち、最も高められた興味と満足に満ちた感情をかきたてるからである。そうなれば、子どもの思考はもはや迷うことなく一点に集中するだろう。そして子どもの知性が活動することが可能となるだろう。そこで子どもの知性は組織化され、

体系化される。』<sup>(12)</sup>

その宇宙を支配する諸法則 (Le leggi che regolano l'universo) は、子どもにも興味を抱かせ驚嘆でいっぱいになるような仕方でも秩序立てて説明することができる。子どもたちは、やがて宇宙の法則そのもの以上に自分自身に興味を向けるようになる。そして問い始める。私は何者だろうか？この驚きに満ちた宇宙における人間の役割とは何だろうか？私たちはここで自分たちのためだけに生きているのだろうか、あるいはより高尚な役割を担っているのだろうか？<sup>(13)</sup>

### 2.3. 他者への畏敬と敬意

〈コスミック教育〉における大切な観点としてモンテッソーリが強調しているのが他者への畏敬と感謝の気持ちである。私たちは生まれた時から自然ならびに人々と深い関係によって結ばれている。しかしながらこれまで私たちに必要な衣食住を提供してくれた人々、数えきれないほどの発明発見を行ってきた先人たちに対して、私たちは愛の感情を抱くことも感謝の念を持つこともなかった。私たちは、今は存在しない誰かの犠牲によって達成された成果をただ受け取り享受しているだけである。「賞賛の光が照り輝くこともない多くの人々の隊列に子どもの注意を向けさせましょう。そうすることによって、人類に対する愛を子どもたちの内に養い育てましょう。』<sup>(14)</sup>

私たちは人類のみならず自然の営みにも助けられている。私たちはわれわれが呼吸している空気と生存のために不可欠な水を絶え間なく準備している自然の働きを意識することはない。モンテッソーリは、人類ならびに自覚することなく自然の創造に参加している被造物へのまなざしを忘れてはならないと考えていた。

## 3. 平和の実現と希望としての子ども

### 3.1. 平和とは何か

モンテッソーリは今から 85 年前 (1936 年) のブリュッセルでの講演において平和実現のための二つの方法について述べた。一つは暴力を用いずに紛争を直接的に解決すること、つまり戦争を回避するように努める方法であり、他の一つは長期的展望のもとに平和を築き上げる方法である。そ

---

してあの有名な言葉「紛争を回避するのは政治の仕事であるが、平和を建設するのは教育の仕事である」(evitare i conflitti è opera della politica: costruire la pace è opera dell'educazione.)<sup>(15)</sup>を残した。武器によっては決して平和は生まれないとモンテッソーリは考えていた。武器という言葉は似つかわしくないが、彼女によると「平和のための武器」(armamento per la pace)は教育であった<sup>(16)</sup>。

さて、それでは平和とはどのようなものなのか。分立している諸国家の間の部分的な休戦の成立は平和を意味するのか。モンテッソーリよると条約の締結によって達成される休戦は平和とは呼ばれない。「平和とは人類全体を包括する一つの永続的な状態」(uno stato permanente che abbracci l'umanità intera)<sup>(17)</sup>。でなければならなかった。これを可能にするのは人類の間の連帯である。その連帯を生みだすことができるのは子どもであると考えた。「子どもは迷路にあってさ迷う私たち大人に行く手を示すために自分自身を現わします。子どもは、私たちを取り囲んでいる暗闇に輝く灯火をもたらすのです。」(Il bambino si rivela a noi, adulti, per orientarci nel labirinto. Il bambino ci porta la luce nelle tenebre che ci circondano.)<sup>(18)</sup>

子どもにたいしてモンテッソーリは大きな信頼と期待をよせていた。子どもは「大人とは異なる存在です。… 私たち大人が持っていない能力、つまり人間を建設するという能力を持っています。」(Il bambino è un essere diverso da noi. …ha un potere che noi no abbiamo : quello di costruire l'uomo.)<sup>(19)</sup>と述べて、子どもによる「いのちの法則」(le leggi della vita)が支配する時代の到来を待望している。戦争の勃発によって特徴づけられる時代を「大人の時代」と名づけることができるなら、平和の建設によって始まる時代は「子どもの時代」ということができる。古い時代には「力の法則」(la legge della forza)が勝ち誇ったが、「子どもの時代」には「いのちの法則」が勝利を収めなければならない。<sup>(20)</sup>

### 3.2. 「忘れられた市民」への信頼

モンテッソーリは久しく「忘れられた市民」(cittadino dimenticato)として黙殺されていた子どもに正面から光を当てた。子どもに対する伝統的な偏見があまりに強固であったために、子どもの真実の姿を大人は理解できなかったのである。彼女は子どもを人格の主体として認めた。「子どもは、

もっぱら保護と援助のみを必要としている弱々しく無防備な存在であると  
考えられてはなりません。むしろ、生まれつき心的生命を備えており、極  
めて繊細な本能に導かれて人間らしい人格を積極的に造り上げてゆく精神  
的胎児とみなされなければなりません」(Il bambino non va considerato  
come l'essere debole e indifeso, che bisogna soltanto proteggere ed  
aiutare : ma come un embrione spirituale, dotato di vita psichica fin dalla  
nascita, e guidato da istinti sottili a costruire attivamente la personalità  
dell'uomo.)<sup>(21)</sup> 平和の建設はこの可能性に満ちた子どもの全面的な協力に  
よって進められていくことになる。聖書の言葉「はっきりしておく。わ  
たしの兄弟であるこの最も小さい者にしたのは、わたしにしてくれたこと  
なのである。」(マタイ 25・40) を引用しながら、モンテッソーリは「キ  
リストが子どものいろいろな姿のもとにすべての人々を助けて下さるのを  
われわれは見るでしょう」(vedremo che Cristo aiuta tutti gli uomini  
sotto le sembianze del bambino.)と述べている<sup>(22)</sup>。ここでの「最も小さい者」  
は、すべての受刑者たち、すべての苦しむ人々のうちに隠れておられるキ  
リストを意味している。モンテッソーリは、そこに子どもも含まれている  
としている。そして「自分が新しくなることを助けてくれる子どもがいな  
ければ、人間は墮落してしまうでしょう。大人がみずからを新しくしようと  
求めなければ、その精神は固いよろいでおおわれていき、何も感じられ  
なくなってしまう。」と子どもの存在の意味について述べる<sup>(23)</sup>。

平和の実現についても、モンテッソーリは子どもが果たす役割に大きな  
期待をよせながら、多くの発言をおこなっている。「子どもを通じて、私  
たちには大きな希望と新しい展望が開けます。教育を通じて、人類に深い  
相互理解とより大きな繁栄とより高度な精神をもたらすために、多分、多  
くのことは行うことができるでしょう。」(Ci viene dal bambino una grande  
speranza e una nuova visione : molto forse si potrà fare con l'educazione  
per portare l'umanità ad una maggior comprensione, ad maggior benessere,  
ad una maggior spiritualità.)<sup>(24)</sup> 「子どもは、人類にとっての希望であり、明  
るい約束でもあります。この胎児を最も高価な宝として養い育てるならば、  
それは、人類の偉大さへの向上に貢献することになるでしょう。」(Il  
bambino costituisce insieme una Speranza ed una promessa per l'umanità.  
Curando dunque questo embrione come il nostro Tesoro più prezioso, noi

---

lavoriamo alla grandezza dell'umanità。)<sup>(25)</sup>

1952年にオランダで亡くなったモンテッソーリの墓碑銘には「なんでも可能にすることのできる子どもたちが私と一緒に人類と世界のために平和を築くことを願っています」と刻まれている。<sup>(26)</sup>

## 注

- (1) *Da Antonio Stoppani a Mario M. Montessori Lo sviluppo della cultura naturalistica*, VITA DELL'INFANZIA, Marzo/Aprile 2021, p. 28.
- (2) 「モンテッソーリのコスミック教育における子ども観」、『モンテッソーリ教育』第44号、p. 74.
- (3) M. Montessori, *The creative development in the child*, vol. 2, p. 163.
- (4) M. Montessori, *Educazione e pace*, edizione ONM, 2004, p. 98.
- (5) Raniero Regni, *Visione cosmica e geopedagogia in Maria Montessori*, CENTRO DI STUDI MONTESSORI ANNUARIO 2003, FrancoAngeli, 2004, p.59.
- (6) M. Montessori, *Il metodo del bambino e la formazione dell'uomo*, a cura di Augusto Scocchera, edizione ONM, 2002, p.139-147.
- (7) *Ibidem*, pp.133-138.
- (8) *Ibidem*, pp.149-160.
- (9) *Ibidem*, pp.161-170.
- (10) M. Montessori, *Come educare il potenziale umano*, Garzanti, 1992, p. 17.
- (11) *Ibidem*, pp. 19-20.
- (12) *Ibidem*, p. 20.
- (13) *Ibidem*, p. 21.
- (14) *Ibidem*, p. 44.
- (15) M. Montessori, *Educazione e pace*, edizione ONM, 2004, p.29.
- (16) *Ibidem*, p. 37.
- (17) *Ibidem*, p. 87.
- (18) *Ibidem*, p.131.

- (19) Ibidem, p.73.
- (20) Ibidem, p.49.
- (21) Ibidem, p.47.
- (22) M. Montessori, *Il segreto dell'infanzia*, Garzanti, 1992, p. 142.
- (23) Ibidem, p.141. “Senza il bambino che l’aiuta a rinnovarsi, l’uomo degenererebbe. Se l’adulto non cerca di rinnovarsi, una dura corazza si va formando attorno al suo spirito e finisce col renderlo insensibile.”
- (24) M. Montessori, *La mente del bambino*, Garzanti, 1992, p. 68.
- (25) op.cit. *Educazione e pace*, p.41.
- (26) *An Anthology, Maria Montessori, 1870-1952*, AMI, 2005, p. 57.

---

# マリア・モンテッソーリの子ども観に見る カトリック的感受性 —知性と愛の発見—

林 悦子

(長崎純心大学)

## はじめに

医師であったモンテッソーリに教育者としての道を歩ませたのは、関わった子どもたちの中に現れた新しい姿の発見であった。晩年の書である『創造する子供』の1章に彼女は自らが発見した子どもたちの新しい姿のことについて次のように表現している。

私たちの目の前に一つの新しいものが姿を現すことになったのでした。それは学校でも教育でもありませんでした。「人間」が姿を現してきたのです。自由な発達の中に本来の性格を現した「人間」の姿でした。<sup>(1)</sup>

そして、人間の全体的形成がなおざりにされては知識の伝達は意味を持たず、子どもは人間の建設者であると続ける。モンテッソーリは子どもの姿に何を発見し、それを「人間」と捉えたのであろうか。その生涯にわたって「深い意味での現実の子供」に捧げた<sup>(2)</sup>ともいわれるモンテッソーリの子ども観は、彼女の教育思想を理解するうえで重要である。

注目したいのは、モンテッソーリが晩年に向かうにつれて「カトリック教徒の教育者」と呼ばれることが多くなった<sup>(3)</sup>という事実である。敬虔なカトリックの家庭に育った彼女の宗教的な感受性が子どもの捉え方、子ども観の深まりに影響を与え、同時に子どもたちの姿によって彼女の宗教的人間観が形作られていったと考えられるのである。

カトリック教会はカトリックの信仰と教理が体系的にまとめられた『カトリック教会のカテキズム』において「神にかたどってつくられた人間」について次のように述べている。

見えるすべての被造物の中で、ただ人間だけが創造主である神を知り愛することができます。……人間だけが知と愛によって神のいのちにあずかるよう招かれています。人間はこの目的のために造られました。が、まさに、そこにこそ、人間の尊厳の基本的根拠があるのです<sup>(4)</sup>。

すなわち、カトリック教会は、神の似像として創られた人間だけが与えられた「知性」と「愛」によって、神の命に預かるよう招かれていると述べ、そこに人間の尊厳の根拠を置いている。モンテッソーリも先に述べた晩年の書『創造する子供』に子どもを「私達の知性の建設者のようなもの」、また「愛の湧き出る泉」と表現しており<sup>(5)</sup>、モンテッソーリの子ども観の中に「知性」と「愛」というカトリック的視座が存在することは確かであろう。

そこで本論文ではモンテッソーリの中にあるカトリック的感受性が子ども観の中にどのようにあらわれてきたかを彼女の叙述に拠りながら「知性」と「愛」という視点から考察する。

## 1. 知性の発見

### 1.1 知性を求める子どもの姿

モンテッソーリについての著書や伝記を見るかぎり、モンテッソーリに影響を与えた最初の子どもは、彼女が医学生のとときにピンチオ公園で出会った物乞いの女性が連れていた子どもである。物乞いをする母親の横で、小さな紙きれで夢中になって遊んでいる子どもの姿と幸せそうな表情から、本人自身が後に「説明のしようがない」と語ったインスピレーションを受けたのである。スタンディングによると、それはモンテッソーリが、一人で屍体の解剖をする時の臭気と光景に対する嫌悪感から、医学の道に挫折しかけたときの出来事であった<sup>(6)</sup>。この子どもの姿に感動したモンテッソーリは、今失意のうちに出来た大学の解剖室へまっすぐにもどり、以後2度と自分の進むべき道を疑うことはなかったという<sup>(7)</sup>。この時、モンテッソーリはまだ医学生であり、自分の生涯をかける使命が教育の分野にあらうとは思っていなかった。しかし、この子どもと小さな紙切れの関係への気付きは大きな鍵となった。子どもの知性への欲求というものを理解する最初のきっかけとなったと考えられる。

---

それはまず、医師となったモンテッソーリが知的障害のある子どもたちに対する理解のしかたに現れる。保護施設で子どもたちを担当する職員が、あからさまに辟易とした様子で子どもたちを卑しむ様子にモンテッソーリは心を痛める。訳を聞くと、その担当者は「なぜって、食事が済むとすぐ床はいずりまわってパン屑をあさるんですからね」<sup>(8)</sup>と答えた。この言葉と、子どもたちが何一つない空の部屋に押し込められている状況から、子どもたちは卑しいのではなく手を使うことによって獲得できる知性への糸口を本能的に求めていると考えたのである。ピンチオ公園で幸せそうに紙切れを使って遊ぶ子どもの姿から受けた印象が彼女に与えた気付きだと言えるだろう<sup>(9)</sup>。

知性への要求を子どもたちの中に発見したモンテッソーリは、知的障害のある子どもたちにとって問題なのは、医療よりむしろ教育だと考えた。そこで野生児の教育を試み治療教育学の基礎を築いたイタルやその後を継ぎ、知的障害児のための教具の開発と教育の体系化を果たしたセガンの方法を研究<sup>(10)</sup>し、独自の方法も使いながら、知的障害のある子どもたちの教育を試みる。その結果子どもたちは、読み書きの国家試験<sup>(11)</sup>に健常児と同等か、それ以上の成績で合格するという成功を収める。モンテッソーリはその結果から、健常児が知的な障害を持つ子どもと同等の成績しか上げられない教育に問題を感じる事となる。

自身の教育法を健常児で試したいというモンテッソーリの願いは、1907年サン・ロレンツォのスラム街に住む子どもたちの教育を引き受けることで実現する<sup>(12)</sup>。「子どもの家」と名付けられた教室で子どもたちに起こったことはモンテッソーリにとって驚きと発見の連続であった。詳細はその著書に数多くの事象と共に書かれているが、最も大きなものとして「集中現象」が挙げられるであろう。子どもが自由に選んだ活動を集中して繰り返し、自分の意志で終わらせることで子ども本来の正常な人格形成が行われていくという、モンテッソーリ教育思想の中心となる概念である。この最初の発見は複数の著書に登場している有名な「はめ込み円柱」の作業に集中している女兒の観察<sup>(13)</sup>から得られるのであるが、この集中する子どもの姿は、モンテッソーリがピンチオ公園で出会った子どもと紙きれの関係の再現とも言えるだろう。

## 1.2 集中現象後に現れる子ども本来の姿

モンテッソーリを驚かせた集中現象は相次いで現れるようになる。両親に放置されて優しく扱われる経験の少ないスラム街の「おずおずと不器用で愚かで無能に見える」<sup>(14)</sup> 子どもたちは「社会的で話し好きになりました。お互いに、これまでとは異なった関係を見せてきました。個性が発達し、素晴らしい理解力、行動力、活力、そして自信も見られます。幸せで、喜びにあふれているのです」<sup>(15)</sup> というふうに変わってきたのである。この集中後の変化についてモンテッソーリは次のように述べている。

この精神的特徴が出ると、宗教的改心のようにさらに高次な意識が覚醒されていく。・・・注意の集中が起こると意識の無秩序な魂は組織化され、精神的創造が行われ、驚くべき特質が新たに作られるのである。・・・人間本来の姿が現れ、本当の生を生きることを始める。<sup>(16)</sup>

モンテッソーリは、集中現象の後に出てくる「落ち着き、知的になり、心を開き始める」子どもの姿こそが本来の子どもであるとしている。そしてその現象が起こるたびに驚き、感動する。錯覚ではないかと長らく半信半疑であったモンテッソーリも、ある日ついにそれを確信する。

ある日とうとう、わたしは深く動かされ、その信念を強めるために、手を胸に置いて、あの子たちへの畏敬で、自分にこう問うてみました。「あなたがたはどなたですか」と。わたしは結局、キリストが抱き上げた、また彼をして、次の神々しい言葉を口にさせるほど感激させた、あの幼児(おさなご)たちに会っていたのではなかったのでしょうか。「このようなひとりの幼な子を、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れるのである」「なんじらは、幼な子のようにならねば天国には入れないでしょう」と。<sup>(17)</sup>

一般に、このキリストの言う幼子とは、純粹無垢な様子と解釈されがちであるが、モンテッソーリには集中現象後に現れた新しい子どもの姿がそこに重なったのである。それは神の似姿として創造された人間の姿であったとも言えるであろう。

---

## 2. 愛の発見

### 2.1 愛する者である子ども

モンテッソーリの最初の著書『子どもの家の幼児教育に適応された科学的教育学の方法』には、子どもと「愛」を結ぶ表現は見られない。子どもと知性の関係に驚き、集中現象を発見し、子どもの正常化を体験したモンテッソーリの報告と方法が述べられている。最初の「子どもの家」を引き受けた理由は実験のためであった。のちに書かれた『幼児の秘密』の中で彼女自身が述べているところによると、彼女の計画は「五感の組織的教育を試みること、正常児と薄弱児とのあらゆる場合に見られる異なる反応を研究すること」であり、とりわけ関心があったのは「幼い正常児と大きい薄弱児との反応の間にあり得る一致を確認すること」だった<sup>(18)</sup>。しかし「学校そのものは、わたしがそこで重要な実験を始めるので、得意な意識で胸をいっばいにしてくれるようなものではなかった」<sup>(19)</sup>とある。もとよりこの学校が日雇い労働者のための民衆アパートに設置されたのは、子どもが階段に放置されたり、壁を汚したり、いたずらをしないように一室に収容することが目的であった。それによって壁の損傷を防ぎ、塗り替えの回数を減らすという維持費削減のためだったのである<sup>(20)</sup>。

モンテッソーリにしても知的障害児で著しい成果を取めた自分の教育法を健常児で試してみるという研究を行うために、その仕事を引き受けたのであり、初めから集中現象と、その結果への確信があって、子どもたちを救おうとしたわけではなかった。ところがモンテッソーリに「この種の経験に出会うごとにわたしは長らく半信半疑でいましたが、同時に驚き、感動し、戦慄しました」<sup>(21)</sup>と言わしめる予想外の展望が開かれ、ついには前項で紹介した「あなたがたはどなたですか」という、子どもたちへの畏敬の念にかられることになる。

カトリックの信仰に生きるモンテッソーリはキリストを受け入れるがごとく子どもたちを受け入れることになったと言えるだろう。「幼子のようにならねば天の国には入れない」とキリストの言う幼子として子どもたちを捉えなおしたのである。それまでの子どもは、モンテッソーリにとって救済、教育の対象であり、ある意味実験の対象でもあった。もちろんそれまでに出会った子どもたちに対する感受性、医者としての義務を超えた診療の仕方を見ても彼女の子どもたちに対する愛を感じることはできる<sup>(22)</sup>。

しかし、「子どもの家」の体験によって、モンテッソーリは子どもの中にはっきりと神の業を発見し、畏敬の念を感じるようになっていく。モンテッソーリにとって、子どもは、もはや単なる愛すべき存在としてあるのではなく、神と人間、人間と人間を結ぶ重要な存在として捉えられていったと考えられるのである。その思想は徐々に深められていった。

「愛」に関する記述は27年後に書かれた『幼児の秘密』に現れる。ここで子どもは愛される者というより「愛する者」として捉えられている。「創造実現の際に本能は愛情を呼び起こそうとします。そこで子どもの意識は愛情で満たされている、否、子どもは愛情によってこそ自己実現に到達するということが起こります。」<sup>(23)</sup>そこで子どもは環境にあるもので自身の形成に必要なものに愛情をもつわけであるが、子どもにとって最も大切に重要な対象は大人であるとしている。

そして、そのような子どもからの愛情が大人にとっていかに重要であるかについては、朝まだ寝ている父母を起こしにやってくる「やっかいな」子どもの習性を例にして次のように述べている。

彼らをめざまし、彼ら自身はもう持っていない新鮮な生き生きしたエネルギーで活かしてくれる若々しい者が必要なのです。それは彼らと違った状況から彼らに毎朝こう呼びかけます。「違った生活に目ざまなさい。もっとよく生きることをお習いなさい」と。・・・もっとよく生きるとは、愛情の息吹を感じることです。絶えず新しくなることを助けてくれる子どもがなければ、人間は変質してしまうでしょう。<sup>(24)</sup>

## 2.2 愛の源としての子ども

さらに15年後となる晩年の著書『創造する子供』においては、その最後の章を「愛の源—子ども」と題して、子どもそのものが「愛」であるとした。すなわち、子どもを「愛する者」から「愛」そのものと捉えるようになり、また愛の最重要性を訴えている。その最終章でモンテッソーリはまず、子どもがこの世の全方向から微妙な愛情が集結する唯一の点であり、子どもは愛の源であって、子どもに触れているときは愛に触れていると述べる。次いで「愛は単なる創造や熱望ではなく、何者にも破壊することの出来ない永遠のエネルギーだという現実、・・・愛は創造そのものです。『神

---

は愛なり』』<sup>(25)</sup>と愛の偉大さを述べ、その価値と性質について聖パウロの言葉を引用している。

たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰をもっていようとも、愛がなければ、無に等しい。全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、私に何の益もない。(Iコリント 13.1～3)

愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。(Iコリント 13.4～7)

モンテッソーリはここに表現されている愛が子どもの「すべてを吸収する心」と重なるという。「赤ん坊はこの世に生れ出て、たとえいかなる環境に生まれつこうとも、生きるためにその中で自分を形成し適応させてゆきます。・・・総てを受け入れ、総てを信じます。貧困も富裕も同様に受け入れ、あらゆる信仰を取り入れ、自分の周囲の既成概念や慣習を受け入れ、それがみんな自分の血肉になっていきます」<sup>(26)</sup>と考えるからである。

そして、「子供一人ひとりが黙っていてもあらわにしてくれる現実によって」<sup>(27)</sup>愛は理解され、現実存在する力であるから、すべての環境をも抱合するものであるとする。この宇宙の中に存在する複雑な力の一つとして、モンテッソーリは愛の力について次のように結ぶ。

人間が発見し利用してきたいかなる力よりも、愛の方が値打ちがあるのです。何にもまして重要です。・・・人間の自由になる力のうちで最高のもので。・・・他の力は環境に対して貸し出されているのですが、愛の力は環境ではなく私達に対して貸し出されているものだからです。愛を研究し活用しようとするれば、私達は結局、愛の湧き

出る泉、すなわち子供、に行きつくことでしょう。<sup>(28)</sup>

前項で見た「知性」に関してはモンテッソーリの「発見」によるものであったが、「愛」に関しては、「導かれた」とするのが適当であろう。「子どもの家」以前にモンテッソーリが教育にあたった知的障害児は、彼女自身の言葉によると、「当時は甲状腺の臓器治療法が十分に発達したため、医師の注意が精薄児に対して向けられた」<sup>(29)</sup> のであり、当時注目されていた研究対象だったようである。そのような中でも「私は、研究において、子ども達の不幸に対して抱いた深い関心と、不幸な子ども達が、自分達の近くにいる大人達にいかんにか覚醒させるかを知っている愛情によって導かれた」<sup>(30)</sup> という言葉もあり、研究を進めるモンテッソーリの中に、もともと持っていたカトリック的愛に加え、子どもたち自身によって覚醒させられた愛情があったことも確かである。しかし、愛そのものの重要性とそこに伴う子どもの価値についての認識は、子どもを観察し関わり続けた生涯の中で徐々に導かれ、深められていったと言える。子どもたちへの愛情を持って研究を始めたモンテッソーリは、「子どもの家」における正常化された子どもたちによって、愛するのはむしろ子どもたちの方であることに気づき、さらに子ども自身が「愛」であるという理解へと深まっていった。そして晩年に向かって、愛と子どもの重要性と崇高さを訴えるようになっていったと言えるだろう。

### おわりに

晩年のモンテッソーリの未発表資料を編纂し出版しているシュルツ・ベネシュはモンテッソーリが早くから宗教教育を展開していることや、のちに彼女自身の宗教上の原点を明らかにして宗教応用人類学の一面を明確にしていることを上げ、モンテッソーリに宗教心があったのは限られた期間でしかなかったという仮説に反論している<sup>(31)</sup>。

忍耐強く子どもそのものの観察を続け、深められていったモンテッソーリの教育思想は、初めからカトリック思想による構築を行ったのではないと思われるが、生涯にわたって深められた彼女の信仰が、子どもや出来事に対する感受性や解釈に影響を与え続けたということは言えるであろう。

カトリック教会が、人間は与えられた知性と愛によって神に造られた目

---

的に達すると述べているように、モンテッソーリも本来の子どもの姿に知性と愛を見いだしていたことがわかった。

最初の著書『子どもの家の幼児教育に適応された科学的教育学の方法』は、『モンテッソーリ・メソッド』とも訳されながら改訂を重ね、晩年となる42年後の最終の版では表題を『子どもの発見』と改めている。モンテッソーリは序文の中でその表題を「達せられた結論」としており、ピンチオ公園での発見からの生涯が、子どもを発見し続けたものであったことを示している。その発見とは、「知」を求め、「知性」に導かれ、真の人間を現す新しい子どもの姿、そして、神の似姿として与えられた最高の賜物である「愛」であったと言えるだろう。

ベネシュはモンテッソーリの信仰心について述べながら、重要な点として、遅くとも1910年代以降、モンテッソーリがその教育学を一定の信仰あるいは彼女自身の宗教に限定させなかったことを加え、彼女が「世界中の子どものために」活動することを望んでいたことも強調している。「カトリック」という言葉が「普遍」という意味であり、教会がこれを「すべてに及ぶ」「すべてを含む」と訳している<sup>(32)</sup> ことを見れば、子どもたち自身やその地域の宗教にこだわらなかったモンテッソーリの態度はむしろ極めてカトリック的だったとも言えるであろう。

さらにモンテッソーリは、その知性と愛が子どもと環境との関係の中で昇華され、自らのみならず人類を含む他の被造物をも完成に向かわせるといふ、子どものコスミックな役割について述べている。この主張はカトリック教会の言う、環境と人間の関係における神の似姿としての人間の役割と一致するが、これについては別の機会に論じたい。

## 注

- (1) M・モンテッソーリ『創造する子供』武田正寛訳、エンデルレ書店、1973年、7頁。
- (2) M・モンテッソーリ『人間の形成について』坂本堯訳、日本モンテッソーリ協会監修、ヘンデル代理店/エンデルレ書店、1970年、3頁。
- (3) リタ・クレーマー『マリア・モンテッソーリ子どもへの愛と生涯』平井久他監訳、新曜社、1981年、523頁。
- (4) 『カトリック教会のカテキズム』(CATECHISMUS CATHOLICAE

*ECCLESIAE*) 日本カトリック司教協議会教理委員会訳・監修、カトリック中央協議会、2002年、106頁、356頁。

- (5) 『創造する子供』前掲7・293頁。
- (6) モンテッソーリは、当時女性には開かれていなかった医学の道を選び、唯一の女子学生として医学部に在籍した。しかも一連の奨学金を獲得するほど優秀な成績を収めたため、男子学生の嫉みから不当な非難の数々を受けなければならなかった。また、自分が選んだ生き方に保守的な父親の同意が得られなかったことなど、様々な困難に直面していた。E・M・スタンディング『モンテソーリの発見』クラウス・ルーメル他訳 エンデルレ書店、1975年、6、7頁参照。
- (7) 『モンテソーリの発見』前掲8、9頁参照。
- (8) 『モンテソーリの発見』前掲12頁。
- (9) またモンテッソーリは別の個所で、知的障害児を教育する教師が陥りやすい失意と一種の無関心状態について、自身を被教育者と同じレベルにおかなければならないと考える偏見からきていると指摘する。モンテッソーリ自身は、子どもたちの不幸に対して抱いた深い関心と愛情によって導かれたと述べており、弱者に対する先の担当者との感受性の違いは顕著である。M・モンテッソーリ『モンテッソーリ・メソッド』阿部真美子他訳 明治図書、1973年、34頁参照。
- (10) モンテッソーリは、「わたしはセガンの本で見当をつけ、イタールのすばらしい経験を肝に銘じました。」と述べており、イタールやセガンの著書について「これについて熟慮する必要を感じ」て、全ページ手書きでイタリア語に訳しながら清書している。モンテッソーリ自身のイタールとセガンについての記述は、M・モンテッソーリ『子どもの発見』鼓常良訳 国土社、1971年、36-47頁に詳しい。
- (11) 当時イタリアでは義務教育終了時に国家による試験委員会によって卒業認定のための試験が行われていた。
- (12) サン・ロレンツォ地区は、ローマ市内の労働者や最下層の人々が住む特に劣悪な環境であったが、国が打ち出した低所得者の住宅政策によってアパートの修復が行われた。そこに最初の「子どもの家」が開設され、モンテッソーリに指導が依頼された。
- (13) 3歳くらいの女兒がはめ込み円柱に熱中している姿に強い集中を見た

---

モンテッソーリは、その子の周りで唄を歌わせたり、椅子ごと持ち上げたりしてみたが、その女兒は集中を妨げられることなく、数え出してからでも 42 回繰り返し、ようやく中止すると「あたかも午睡から爽やかに目覚めたかのように満ちたりた様子であたりを見回した」

M. モンテッソーリ『自発的活動の原理』阿部真美子訳 明治図書出版、1990 年、92 頁・『幼児の秘密』鼓常良訳 国土社、1968 年、139 頁。

- (14) 『子どもの発見』前掲 49 頁。
- (15) 『マリア・モンテッソーリ子どもへの愛と生涯 -』前掲 146 頁。
- (16) 『自発的活動の原理』前掲 92 頁。
- (17) 『幼児の秘密』前掲 136 頁。
- (18) 同上 138 頁。
- (19) 同上。
- (20) 『幼児の秘密』137 頁に書かれているモンテッソーリの説明によるとこの学校は社会福祉施設ではなく建築会社建築物維持費の一部とされていた。ただ一つの可能な支出は、事務所のよう家具と備品に関するものであり、それが既製品の学校用ベンチをあてがわれることなく、彼女が考えた家具や、知的障害児研究所で使用していたものと同じ教具を作らせることを可能にしたのだった。また先入観を持たない無資格の女性しか雇えなかったことも、教具を指示どおりに提供し、モンテッソーリでさえ最初は信じなかった子どもの正常化の様子を率直に報告するという結果につながったのである。
- (21) 『幼児の秘密』前掲 135 頁。
- (22) スタンディングは医師となって開業したモンテッソーリが、瀕死の状態にあった双子の新生児のために呼ばれた貧しい家庭で、母親を寝かせて双子をお湯に入れ、抱きかかえながら食事を作り、時間をかけて二人を甦らせたエピソードを紹介している。  
また、スタンディングは、モンテッソーリがこのような貧しい人々からは治療費をとっていなかったことにも触れている。  
『モンテッソーリの発見』前掲 22 頁。
- (23) 『幼児の秘密』前掲 121 頁。
- (24) 同上 125 頁。
- (25) 『創造する子供』前掲 288 頁。

- (26) 同上 290 頁。
- (27) 同上。
- (28) 同上 293 頁。
- (29) 『モンテッソーリ・メソッド』 前掲 30 頁。
- (30) 同上 34 頁。
- (31) G・シュルツ・ベネシュ『モンテッソーリ 子どもと学校の危機 社会—学校—世界』 クラウス・ルーメル 江島正子共訳 エンデルレ書店、1982 年。
- (32) 『カトリック教会のカテキズム』 前掲 260 頁 830。

## 子どもの生に音楽をきく ～モンテッソーリの視点における音楽性について～

町田 育弥

(作曲家 恵泉幼稚園理事長・上田女子短期大学客員教授)

### はじめに

本稿の目的は主に以下の二つである。

- ①人の生き方について、または幼児観察において、「音楽」をキーワードとする、ある視座を提示すること。
- ②モンテッソーリが子どもの生に見出し、着目し、それに謙虚に従うべきと考えた原理は、実は「音楽」なのではないか？と問うこと。

本稿では「音楽」を、人の生と時空の関係性の一様態にして、必ずしも音に依拠しない営みであると捉える。これは、音およびそれに付随する営為をもって「音楽」とする一般的通念とは大きく異なるが、この視座に正しく読者を導くことができれば、①の目的は達成と言えよう。①の成功を前提とする②は、長年にわたって教育に関わり、特にモンテッソーリ教育実践園を身近な環境として過ごしてきた音楽家としてのリアリティーからの問いである。筆者の答えは「Yes」で、実はそれ以上の説明も考察も不要だと感じている。このことについては稿末に記すこととする。

なお、タイトルに「音楽」という語を含むため、いわゆる「モンテッソーリの音楽メソッド」や彼女自身の音楽観についての論述か、との先入観を持たれる恐れがあるが、そうではない。理由は以下の通りである。

「モンテッソーリの音楽メソッド」は、音または楽曲を聴くことや、それらとともに動くことを通じて得た心身の感覚を理論（記譜法、音階、調性、拍子、楽曲構造、様式など、中世～18世紀に西欧で構築された、極めて限定的なローカルルール）の理解に結びつけ、歌唱や演奏の技術を身につけながら、最終的には作曲（創造）に至るまでの方法論であり、感覚→概念化→創造という筋道において、他のカテゴリーにおけるモンテッソーリの基本的な考え方と何ら変わりがない。つまり目的は実は社会化なのだが（→第4章第3節）、その目的のために、音およびそれに付随する営為

を扱うが故に「音楽メソッド」と呼ばれているに過ぎない。このことは、モンテッソーリの音楽観が一般的通念の域を出ず、瞠目すべき特徴を持っているわけではないことを示している。したがって、本稿において筆者が言わんとするところの「音楽」は、このメソッドや彼女の音楽観とは直接的には関係がないのだ。

音をめぐる事象や営為の内のみならず、モンテッソーリが人（子ども）の中に見出した、ある特徴的な命の振る舞い。彼女はそれを音楽だとは思っておらず、そう呼んでもいないが、実はそれこそが「音楽」だ、と筆者は考える。そのことをあらためて念押しし、以下本論に入っていく。

## 第1章：音楽を定義する

### 第1節 音楽の本質

一般に「音楽」は、演奏、歌唱、舞踏、鑑賞、作曲など、「音」との関わりにおいて営まれる営為であると理解されている。また、鳴らされた音そのものや構造物としての楽曲、作品を指す言葉として使われることもある。こういった一般的認識を否定するわけではないが、本稿では「音楽」を、「くきく、という生き方」であり、必ずしも音に依拠しない生の一様態であると定義する。これを説明するために、まず次節で、誰もが「音楽」と認めるであろうところの「演奏」を例に挙げて考察する。

### 第2節 演奏者は何をしているのか

演奏という行為は、イメージする音像の実現に向けて自身を変化させつつ生きることで成り立つ。想いを持って鳴らし、鳴った音をイメージと照応し、次の音像を想い、その実現に向けてまた…。この一瞬の弛みもない反復。あらゆるイベントは常に、どの瞬間にいかにか起こったか（既知）と、いかにか起こる（起こって欲しい）か（未知）の間で生じ続け消え続ける点としての「私」そのものになる。時間の流れの中で「私」と「音」の関係性を問い続け、その関係性によって自身を世界の中に正確に定位し続けようとする営み。音と自身は互いに影響し合い変化し続け、既知・未知、どの時点においても、必ず「鳴った・鳴る」音とともに、「鳴らした・聴いた」「鳴らそうとしている・聴こうとしている」私が生じ、存在するのであり、どちらか一方しかないという瞬間はどこにもない。（→第5章第4節）

---

### 第3節 「きく」ということ

前節の「音」を「筆跡」に、「鳴らす」を「描く」に、「音」を「ボール」に、「鳴らす」を「蹴る」に置き換えると、書家の揮毫や競技中のサッカー選手の描写となる。これらは生き方としては同質なのだ。その時間内では特定の対象に向かって意識がフォーカスされ、それ以外は無化する。

「聴く」はどうか？ 実はこれにも共通性がある。ただし、そう言うには「聴く」ではなく「きく」と表記するべきであろう。

日本語の「きく」は音の知覚のみならず、注意深く判断する、関係性を推し量る、鋭敏である、働きかけ作用する、受け容れる、などの意味を表現する。いわく「酒を・香を・事情を・道順を・鼻が・目が・葉が・ネジが・願ひ事を」…。そのような意味において、演奏者は「私と音」を、書家は「私と筆跡」を、サッカー選手は「私とボール」を「きいて」いる。この本質はその生き方であり、対象が何であるかは問題ではない。筆者が「音楽」を、本章第1節下線部のように定義する理由は以上である。

### 第4節 「きく」における時間の質

「きく」は高度な集中力を要し、長時間の継続は難しい。だから人はこれを常態とはせず、多くの時間を漫然と生き、必要に応じて「きく」に移行する。そして用が済めばまた常態に戻る。そのように、「きく」は、常態から切り取られた異質の時間の中で行われ、そこにおいては、「何が」「いつ」「いかに」起こるか、「何を」「いつ」「いかに」行うか、の正確さが非常に重要となる。このことは、本章第2・3節で挙げた例からも明らかであろう。音の前後関係や長短の比率が恣意的であればそもそも旋律は成り立たず、筆の速度が不適切ならば墨は意に反して滲み、かすれる。ボールが「そこ」に来る瞬間は唯一無二の「その時」一回のみ。遡行も停滞も許されない時間の中で、全ての出来事はその時その瞬間に起こることによってのみ意味を持ち、その「意味」は過去の影響を受けながら未来に影響し続け、「私」は自身を相対的存在として客観視しながら、同時に不定で流動的な事象としての「今」そのものとなるのである。

## 第2章：時間の多義性

### 第1節 三層の時間

本章ではまず、人の生き方との関係、あるいは個人にとっての意味という観点から、時間を、図-1に示すような三つの層に分けて考えてみる。

図-1 三層の時間 ..... (進行方向).....▶

① General time (Gn.)	絶対的・不変・不可侵 (出会いを保障する秩序)
② Public time (Pb.)	相対的・可変・共有可 (出会いが生じる領域)
③ Personal time (Ps.)	相対的・可変・不可侵 (悟性が生じる領域)

そして、人はこれら同時進行する三つの時間層(領域)において、常に①に支配されつつ②と③を往還しながら生きていると仮定し、以下、それぞれの時間層について考察していく。

### 第2節 General time (Gn.)

人の認識とは無関係、かつ人からの働きかけの影響を受けない、不変で無機的な持続。②も③もここに包含される。絶対的・普遍的秩序と言ってもよく、ここからの離脱は不可能。「出会いを保障する」領域としているのは、たとえば、人が水を飲むという行為が成立するためには、飲む人と飲まれる水がそこに同時に存在していることが絶対条件であり、その「同時」は、このGn.上の必然によってのみ起こり得る、という意味である。

### 第3節 Public time (Pb.)

「私」と「私以外の事象」が出会う領域。五感での知覚が可能であり、言語が有効な領域でもある。「理解」が生じる領域だと言ってもよい。ここで言う「私」は唯一無二の自分自身とは限らず、複数の「互いに『私以外の事象』と認識し合う『私、たち』」である場合もある。あらゆるものが互いに「環境」として存在する、という意味において共有される(共有されざるを得ない)領域だとも言えよう。第1章の第4節で「常態」としてしているのは、「私」と「私以外の事象」との関係性をゆるやかに曖昧に感じながらこの領域を泳いでいるような状態だが、ある出会いを契機にPs.に

潜行する場合には、瞬時にここを離脱することができる。

#### 第4節 Personal time (Ps.)

「私」しかおらず、「私」という概念もなく（言語が無効だから）、喜怒哀楽、快不快（実際には無名）をはじめ、様々な感覚がありのままに起こる、純粋で原初的、他者の不可侵な領域である。真実はこの領域で察知されるが、それがいかなるものかは、他者にはもちろん、本人にも分からない。「理解」のためにはそれが五感で知覚可能な事象に置換される必要があり、それは Pb. で行われるからである。ここを「悟性が生じる」領域としたのはそのためである。たとえば作曲家は Ps. で楽想を得るが、それを「ヴァイオリンのドミソ」として認識したり、そのように五線紙に書くというのは、彼が Pb. に泳ぎ出てきたことを意味する。そして、書かれた楽譜も、それをもとに鳴らされる音も、元の楽想そのものではなく、あくまでも音符や音に置き換えられた結果にすぎない。（→第4章第2節）

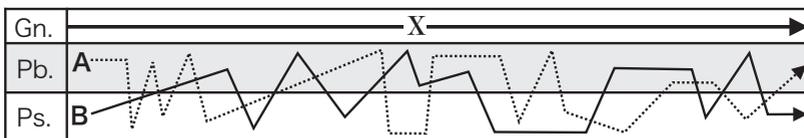
### 第3章：個のリズム

#### 第1節 誰もが個別の時間を生きている

ここでは、前章第1節の仮定（下線部）にもとづき、個のリズムについて考える。

図-2において、Xは不変の時間の進行を、実線と点線の折線は二人の人物（A・B）が Pb. と Ps. を往還する様子を、折線の高さや深さは、そのまま Pb. と Ps. の境界からの近さや遠さを表している。つまり、Pb. の高い位置にあれば、より積極的に「私以外の事象」と関わっており、Ps. の低い位置にあれば、より深く「私」の内側に潜行している状態である。

図-2 時間領域の往還



このように、人は個別のリズムをもって二領域を往還していると考えられる。たとえば幼稚園などの施設において、この折線は子どもの数だけ描

かれ、一つとして同じパターンを示すものは生じない。また、当然のことだが、保育者一人一人も独自の折線を描いて生きている。したがって、子どもへの直接的な働きかけは、今、子どもと自身が互いに Pb. の領域にいる、ということが確認できる状況において行われるべきであろう。

## 第2節 Xの長さや折線の振幅

前章第4節で挙げた「きく」は、比較的短時間の範囲で起こる。仮にXを10秒とすれば、A・B二人とも短時間にPb.とPs.を頻繁に往還していることになり、これはかなり集中して「きく」を行っている状態だと言える。第1章で挙げた、演奏、揮毫、サッカーなどでは、この長さは2秒や3秒、あるいはもっと短い可能性も充分にあり、折線はさらに狭い間隔と大きな振幅を示すか、あるいはPb.とPs.の境界付近で細かく震えるような形状を示すのかもしれない。逆に、このXを非常に長い時間、たとえば朝から夜までの12時間とし、傾向としてどちらの領域にあるかを示す大まかなダイアグラムを描くことも可能であろう。いずれにせよ、観察の対象が幼児であるような場合、その活動のリズムをこうした視点と長短様々なスパンで捉えることは、保育者にとって有効な方法であると考えられる。

## 第3節 幼児の時間

ここでは、筆者が主宰するこども園で見られた二件の事例を紹介する。

- 1) 螺旋階段の下から二段目に立つ2歳児。床を覗き込むように何度も膝を屈した前傾姿勢をとり、それを解き、階段に腰掛け、立ち位置を少し変えて前傾し…。やがて一段下に静かに降り、間髪を入れずそこから全力で飛び降りると、何事もなかったかのようにスタスタと駆け去った。
- 2) ダンスの振り付けを一人自習する保育者を見つめる2歳児。しばらく注視の後、後追いで曖昧に模倣してまた注視。再度後追いの模倣。そしてそれまでより長い注視の後、ある動作を狙い澄ましたように保育者と同時にキメて嬉しそうに笑った。

1) 2) とも濃密な「きく」が行われた数十秒間であった。1) のフォーカスは、Pb. 領域では段の高さ、踏み板(扇型)の幅の違いによる床面までの距離、自身の身長や体重などに、Ps. 領域では好奇心、挑戦意欲、恐怖、跳躍のイメージなどに向けられ、2) のフォーカスは、Pb. 領域では保育

---

者の動き、反復の規則性、楽曲の旋律などに、Ps. 領域では同期したい欲求や、動くことで生じる快感、周期への興味などに向けられていたと考えられる。このような状況は幼児の活動においては非常にしばしば起こり、解除され（上記の例では「駆け去った」「笑った」が解除の瞬間である）、また起こる。そしてこのサイクルが自身の内的欲求によって頻繁に繰り返される。これが幼児の活動の自然なリズムであろう。

## 第4章：「きく」における非言語認識から社会化へ

### 第1節 非言語認識の重要性

言語能力は、他の生物に対する人の優位性の根拠とされるが、裏を返せば、ものごとをありのまま正確に認識する能力に劣る、ということでもある。それは生来的にはなく、言語獲得の過程で徐々に発揮の機会が減り、結果的に劣化するのだ。芸術家やアスリート、職人といった類の人はこの劣化に抵抗を試みるが、言語獲得の途上にある幼児は抗うまでもなく、まさにこの能力をもって世界と対峙する。その現れが頻繁な「きく」行動である。螺旋階段の子どもは段差が何cm、跳躍可能距離は、高さは、踏み板の右端か奥か…などとコトバで考えてはいない。ダンスを見ていた子どもは、ヨンフリーズメノサンハクメデミギテヲ…などと考えてはいない。黙って静かに「それが」「そのとき」「そう」なることを悟り、その瞬間に向かって正確に生きたのである。真実は常に言葉に先行して在る。

### 第2節 社会化へのステップとしての言語認識

こうした「悟り」は実際にその時間を真剣に生きることで得られるが、それは固有で唯一にして一過性の真実にすぎない。そこに言語認識が結びつくことで「悟り」は「理解」に、「悟性」は「知性」となり、汎用性・再現性をもつ。それは Pb. における思考やコミュニケーションを可能にすることを意味し、人が社会化する上での重要な過程である。ただし、言語はあくまでも代替物に過ぎず、事実を覆い隠して細部の具体性や差異を不問にする装置であることも忘れてはならない。（→第2章第4節）

### 第3節 社会化とローカルルール

教育の目的はつまるところ社会化であり、それは常に特定のコミュニ

ティ（広くは「文化圏」など）におけるローカルルールに依拠する。言語はその最たるものであろう。ローカルルールの在処は言うまでもなく Pb. であり、社会化とは、個人が Pb. においてローカルルールに適応し、それを使いこなし、コミュニティ内の人間関係の中で相互理解を図りながらその特性を活かしつつ機能することである。「はじめに」で触れた「音楽メソッド」が実は社会化の方法論に他ならないとした理由はそこにある。

社会化を効率良く行うには、教育する対象（子ども）を常に Pb. に留め置き、懇切丁寧にローカルルールを刷り込み擦り込み、その浸透具合を常に評価しつつ、より効果的な馴致法を工夫すればよい。だが、そのやり方は、前章で考察した領域の往還や個のリズムを封じ、確実に子どもの精神の空洞化を招くであろう（→第3章第1節下線部）。だからモンテッソーリは、周到に準備された社会化のための方法論を構築する一方で、この危険を決して冒すまいとする強い意思、言い換えれば、人の生き物としての原点、つまりローカルルール以前のニュートラルな命のありようを正確に見極めようとする謙虚さを持っていた。その現れが、子どもの「きく」を「きく」すなわち、彼らの「音楽」に耳をすまそうとする姿勢である。

## 第5章：モンテッソーリの「音楽的」視点

### 第1節 動きを通して真理に出会う

西欧圏で今日「音楽」を意味する music musik musique musica などの語は、古代ギリシアの9人の女神「ムーサ」の司る神秘的な業「ムーシケ」に由来する。女神が扱うのは、詩・歴史・悲喜劇・歌・舞踏・物語・天体運行など「動き」（天体以外は全て身体活動）や言葉を伴うものであり、かつ、古代ギリシアでは、言葉は「テキスト＝意味」よりも身振り手振りをもって「語られ演じられる」ことが重んじられていたのである。声も動きも常に時間に支配されて起こり、痕跡を残さずに消える。そして「ムーサ」の神秘的な業とは、プラトンによれば「神の言葉を伝える」ことだったという。神の言葉とはすなわち普遍的な真理と解釈できる。

つまり、今日「音楽」と呼ばれる営みの本来の姿は、身体運動を通して自身を時空に投げ、言語（ローカルルール）を突き抜けて普遍的な真理との邂逅を欲する祈りのようなものである。そしてそれは、地面に頬を付け、体をねじ曲げて必死に蟻と話そうとしている子どもの姿と何の違いな

---

く、身体行動を経ずして知性の獲得はありえないとするモンテッソーリの考え方にも直接通じるものだと言えよう。

## 第2節 集中とフォーカス

アルティリオが紹介している円柱差しに集中する女兒の様子<sup>(1)</sup>には、「きく」の発動と解除が生き生きとした個のリズムとして描かれている。また、この紹介文にある「まるでその心は現実の環境から抜け出しているような」という観察は、「きく」における選択対象へのフォーカスそのものである。様々な教具に見られる「特徴の抽出」や、その提示における「困難の孤立化」も、このようなフォーカスに通じるものと考えられる。

## 第3節 時間への眼差し

音楽に不可欠な属性として時間の不可逆性がある。常に未来に向かうことや、「その時」の不再現性、時間軸上の前後関係すなわち順序は絶対的な秩序である。モンテッソーリが「敏感期」「発達の順序」などを提唱する根拠はそこにある。また、教具の提示法や名称の練習における厳格な順序性にも、音楽に通じるモンテッソーリの意識を窺うことができる。

## 第4節 自由と正しさ

モンテッソーリの言う「自由」は、内的な衝動と環境との関係性の中に正しく自身を定位するというミッションであろう。とすれば、その正しさは「規則」のような固定されたものではなく、Pb. と Ps. の注意深い往還、すなわち「きく」によって刻一刻吟味され、選ばれ続けなければならない。この時、人（子ども）は「それ」が「そう」あるべきことを直接悟るしかなく、他者が決めた「正しさ」や評価は意味をなさない。「自己訂正」は、この音楽的体験を前提とした仕組みであろう。（→第1章第2節）

## 第5節 静けさ

「静粛の練習」。これは、Pb. と Ps. の境界を意識する練習であろう。聴覚だけを研ぎ澄まして…と解釈するならば、それは間違いだ。問題となるのは音や聴覚に限らない。目を閉じていても視覚は働き（臉を透して明暗や色を感じる）、嗅覚も味覚も触覚も無になることはありえない。つまり

これは、切り取られた時間の中で、自ら故意に音や動きを発することをやめ、五感で環境（私という肉体も含む）を「きく」ということ…否、その間に何かを思い出したりすることもあるのだから、五感以外の感覚も動員して「きく」のである。この状態では「私」の内と外が明確に意識され、そこを往還する命のゆらぎさえ自覚できるかもしれない。

「静粛の練習」は、あらゆる活動の基本として位置づけられている。このことは、モンテッソーリが自身に課していたのと同様、子どもにも「きく」を重要なミッションとして促していた証左だと言えよう。きく＝音楽という生き方であることは、本稿で再三述べてきたとおりである。

### 終わりに

「音楽」の名のもとに、音によって「その子の今」を叩き潰すようなおぞましい場面を多くの保育現場で目にする。そして、それは一向に改まる気配がない。その元凶のひとつは「音楽＝音ありき」という考え方だと目星はついていて、だから筆者は「音楽」から「音」をはずすという考えを30年来ことある毎に訴え続けている。音楽は音ではなく、人の生き方の中に起こる「あのこと」なのだ。また昨今、なんとか教育、なんとか保育、と称して教師や保育者のコミュニティのためのローカルルールの策定が熱心に行われているのを見るにつけ、それより子どもの中の「あのこと」に耳を傾けてはどうですか？と思う。

モンテッソーリは「あのこと＝音楽」を核として子どもを見ている。これは筆者の直感にすぎない。ただ、「つまり音楽なんだ」と考えると、これまでに耳目に触れたモンテッソーリに関する言説のことごとくがストーンと腑に落ちる。日々子どもと遊ぶ音楽家としてはそれで十分なのだ。

本稿の論述はいかなる先行研究や類似の論考の成果をふまえたものでもない。それらと比較しての検討や、筆者が提示した視座が保育の充実やモンテッソーリ研究に役立ち得るか否かの評価は、研究者諸氏に委ねたい。

### 注

- (1) ヨハネ・アルティリョ「集中現象」クラウス・ルーメル監修『モンテッソーリ教育用語辞典』学苑社、2006年、121頁。

## モンテッソーリ教育を取り入れた介護の実践

和氣 伸吉

(株式会社メゾネット 代表)

### I. はじめに

日本が超高齢社会を迎えるにあたり、介護の社会化が急務となり平成12年に介護保険制度が創設された。その介護保険制度が開始から20年を迎える中、増え続ける介護給付費とそれを支える介護人材の不足など、高齢者介護を取り巻く課題が日増しに大きくなっている。

介護保険制度は利用者本位、利用者の選択の尊重、自立支援の3つを基本理念として、高齢者を社会全体で支えていく仕組みが作られ、時代に合わせて法改正を実施してきた。平成18年の改正では、介護保険法第1条で「尊厳の保持」が明記されるほど、現代の介護は「尊厳」が最も重要なキーワードになっている。

しかし、どうしたら尊厳を保持できるのか、具体的な内容は専門職も含め充分ではない。

私は、子どもが通う幼稚園のモンテッソーリ子どもの部屋で、何かに夢中になって取り組んでいる幼い子どもたちと、それを邪魔することなく飽きるまでそっと見守る先生たちの空間、教師と子どもの関係性を通じて流れる特別な空気と時間から、高齢者介護に応用できるのではないかと考えた。

モンテッソーリ教育を取り入れた認知症ケアをモンテッソーリケアと名付け、症状の安定や改善を目指し現場での実践に取り組んでいる。このケア方針が目指しているのは、認知症高齢者の主体性や尊厳を最大限に尊重することである。

日本では2002年に高齢者に対して、モンテッソーリ教育を取り入れた実践事例が翻訳され、出版されている<sup>(1)</sup>。しかし、作業療法を中心としたリハビリテーションの現場での実践や、教具を中心とした活用に限られる。

その他のモンテッソーリ教育を取り入れた実践活動としては、高齢者介護の現場での実践研究として「園芸療法の立場から見たモンテッソーリ教育」2006<sup>(2)</sup>、「特別養護老人ホームにおける高齢者とジャガイモ栽培の試み」

2010<sup>(3)</sup> がみられるが、モンテッソーリ教育の本質的な理論を用いて、介護現場で広く応用されるまでには至っていない。

介護は病気やケガ、加齢による悪循環を出来る限り好循環に変えていくことが重要である。子どものモンテッソーリ教育を取り入れることで、高齢者においても自立と主体性、自己肯定感を育むことにより、好循環を生み出すことにつながっていくのではないかと考えた。

特に認知症と診断された方は、多くのことができないと思われることで、家族だけでなく、介護に関わる周囲の人が、代わりに判断を行ってしまうことが多い。何もできなくなるという固定概念を持ってしまう人もいる。

モンテッソーリは、親や教師は子どもに対する全能感や固定概念を捨て観察することを「モンテッソーリの教師になるために取るべき第1歩は、万能感を脱ぎ捨て、喜んで観察する者になることです」<sup>(4)</sup>、また、子どもに対して「新しい存在のうちに人格を認め、そしてそれを尊敬することです」<sup>(5)</sup>と述べ、一人の人間として尊敬の念をもって接することの重要性を説いただけでなく、具体的な方法を示したことは注目に値する。

このことは、幼い子どもの立場だけでなく、高齢者であっても、生活に困難を感じ、言いたくても言葉が出にくい、弱い立場にある認知症の人にとっても、最後の日まで、その人らしく暮らすためには、尊厳を取り戻し、主体性が保たれるようにケアの質を高めていくことが求められている。

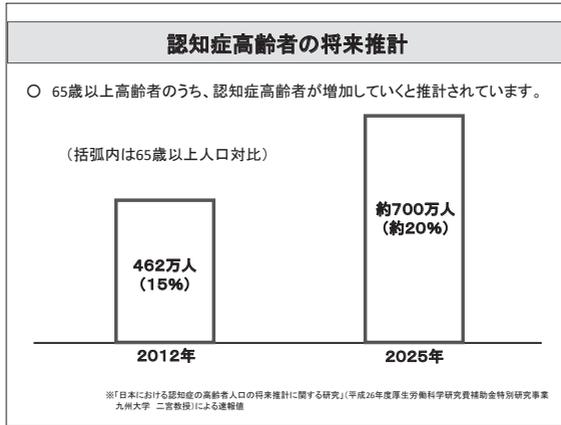
そのため、モンテッソーリ教育の理念を介護の現場に取り入れることは、今後の認知症ケアのあり方に一石を投じる実践の一つとなると考える。

## Ⅱ. 日本が抱える高齢者問題

なぜ認知症高齢者に対する課題が注目されているのか。これは団塊の世代、すなわち第二次世界大戦直後の昭和22年から昭和24年の第1次ベビーブームに生まれた戦後世代が大きなポイントになっている。年齢階層別の人口が最も多いこの世代が、2025年には全員75歳、いわゆる後期高齢者になる。またこの年には、65歳以上の約20%、5人に1人が認知症を有すると予測されている<sup>(6)</sup> (図1)。

そして認知症だけではなく、この2025年には団塊の世代が後期高齢者になることで、介護保険制度における要介護認定率が約5倍に跳ね上がり、介護保険を使う対象者が大幅に増える<sup>(7)</sup>。結果、介護保険財政やサービス

図 1



の確保など多くの課題を抱えることも予測されている。そのために国は介護保険制度だけでは賄いきれないサービスを地域包括ケアシステムという号令のもと、自助や互助を中心とした地域へ展開先を拡大した。

さらに2040年には、高齢者の人口がピークを迎えることが見込まれており、この2040年に対応できる社会にするため、制度の見直しが繰り返されている。そして2060年には、高齢者の人口は減少傾向であるが、認知症の診断を受けた高齢者がピークを迎えると試算されている<sup>(6)</sup>。認知症の方の支援は、一定の知識や疾病への理解、適切な対応、尊厳や権利を擁護する環境が必要になる。

高齢者介護の世界では、このような時代の進展を見込んで、時代に適応した介護の量と質を備えていかなければならない。介護人材不足で海外からの介護事業者もこれから増加していく状況のなか、介護にあたる人材が、適切な介護知識や技術を有すことが必要である。

これから迎える2040年問題。そしてその後の2060年問題を乗り越えるために、認知症介護の適切なアプローチを準備しておく必要がある。

### Ⅲ. サービスとしての介護保険

日本は急速な高齢社会の進展に伴い、平成12年に介護保険制度がスタートした。それまで介護制度は、行政における措置制度であり、利用者がサー

ビスを選択することはできなかった。

元来、医療から派生した介護というものは、それを提供する介護や看護を主とする専門職がハンディキャップを抱えた高齢者に対して援助するもので、専門職と利用者間に平等という自覚は少なかった。

介護保険制度がスタートした頃、これからは利用者が自由にサービスを選択できる、それにより介護は選ばれる時代に変化するとされ、専門職とサービス業の両輪が今後は必要になると表現された。

開始から20年。介護保険制度は社会に無くてはならないものとなり、様々なサービスが生まれ、多くの地域で競争原理が働くようになった。結果、サービスが良い事業所が好まれ、反してサービスが評価されなければ閉鎖する事業所もみられる。

しかし、この良いサービスは誰が評価するのか。勿論、評価の主体は利用者及び家族である。その結果、過剰サービスの事業所が見られるようになった。

つまり、高齢者自身が動かなくても、介護者が手取り足取り先回りして対応してくれる。座っていればお茶をいれてくれる。準備をしなくても美味しい食事を提供してくれる。お風呂に入ると座っていれば身体を洗ってくれる。洗濯も掃除も片付けも。趣味活動さえも、目の前に並べて促してくれる。

当然利用者は、何らかの疾病や障害、生活での困り事があるため介護保険の申請を行い、サービスを利用されている。しかし、提供されるサービスが過剰になってしまうことで、利用者自身の尊厳や機能の維持が図れなくなる可能性があることを、全ての関係者は理解する必要がある。特に認知症の方にとって活動や選択の機会が減少することは、認知症の進行を促進させてしまうことを忘れてはならない。つまり、介護者がサービスすればするほど、利用者の能力を盗んでいる、奪っていることになるのである。

#### IV. なぜモンテッソーリ教育なのか

ここで、モンテッソーリ教育が介護場面で有用な理由を述べたい。

まず1つは、利用者との関係性にある。モンテッソーリ教育では、子どもは自分で学ぶ力を持っているということを前提としており、そのうえで、教師（大人）は、一方的に教え込もうとするのではなく、子どもが

---

自分で取り組めるような環境や、その環境に関わるための方法を、教師が丁寧に伝えて、結びつけることが重要だとしている。そして、それに加え「待つ」ことの重要性を説いている。

まさに介護でも同様であり、先ほどの過剰なサービスは良いサービスとは言えない。

2つ目にモンテッソーリ教育は、子どもの主体性や尊厳を尊重する幼児教育である。介護保険制度は平成12年にスタートし、その後、何度も制度の改正を繰り返してきたが、平成18年には大幅な改正があった。介護保険法の第1条、制度の目的の中に「高齢者の尊厳を保持し」という文言が追加されたのである<sup>(82)</sup>。それまでの介護保険法の中には「尊厳を保持する」という文言はみられなかった。

しかし平成18年の改正では、高齢者における状態や目標は個々に異なる。ゆえに高齢者をひとくくりで論じるべきではなく、本人主体の尊厳が重要だと議論され、そのような文言が追加された。しかし、尊厳の真の意味を理解し具体的な支援を行うことは難しい。多くの介護者が尊厳の意味を十分に理解する必要がある。

モンテッソーリは「子どもを大人に依存し、大人に付随する存在としてではなく、子ども自身、一人の独立した存在として」<sup>(9)</sup> 考え、底知れぬ可

図2

介護保険法

(目的)

第一条 この法律は、加齢に伴って生ずる心身の変化に起因する疾病等により要介護状態となり、入浴、排せつ、食事等の介護、機能訓練並びに看護及び療養上の管理その他の医療を要する者等について、これらの者が**尊厳を保持し**、その有する能力に応じ自立した日常生活を営むことができるよう、必要な保健医療サービス及び福祉サービスに係る給付を行うため、国民の共同連帯の理念に基づき介護保険制度を設け、その行う保険給付等に関して必要な事項を定め、もって国民の保健医療の向上及び福祉の増進を図ることを目的とする。

能性を与えられた存在として大人が子どもと向き合うことを説いている。

子どもを高齢者に置き換えた時、一人の独立した存在として、まだ残っている可能性を信じ、これまでの長い人生へ敬意を払う介護者の在り方を考えると、モンテッソーリ教育における子どもの尊厳を尊重する考え方は大変有用である。

そして3つ目に、理論と方法が「わかりやすい」ことにある。モンテッソーリ教育の書籍を探せば、全国の書店にたくさん並んでいる。両親が家庭で子どもの教育に活かせるようなわかりやすい解説があり、その背景には明確な根拠と実践の歴史がある。介護する人は、そのほとんどは介護を受けたことも、介護をしたこともない。これまでの人生で初めての経験であり、すぐにはどのようにして良いか想像がつかない。

しかし、教育や子育ては、介護者自身も子どもの時代があり、自分や親族の子育てをしたことがある方が多いという経験を踏んでいる。このような経験を通して、見通しが立てやすいという利点がある。

また、介護の歴史は、医療や看護から派生した経緯があり、まだ歴史が浅いのが現状とも言える。私が介護の知識や技術を教わった時は、介護が必要な方に身体介護や生活援助、精神的な援助など、どのようにすれば良いかを学んだ。そこには「介護される人」と「介護する人」が存在している。約20年前に介護保険制度がスタートしたが、介護保険制度では、措置から契約になり、事業所間の競争原理が働く。競争の中で福祉の仕事はサービス業の側面も要求される時代を辿り、「介護する人」が先を読みながら手を出すことが「良い介護」と勘違いしている人も多いのが現状である。

そして、介護は教育と同様に専門職だけが行うものではない。介護は看護やリハビリ職などと共に、施設や在宅でサービスが提供される。その際、専門職が一生懸命、専門性を高めても、特に在宅介護の場面では、多くの時間を共にするのは家族である。家族の協力、そして認知症への理解なくして、在宅介護の継続は成立しない。しかもほとんどの家族介護者はそれまでに介護を行った経験がない。

以上のように、専門職はもとより、家族も基本的な理論を理解するための方策が豊富で、経験を通じて想像を深めることができる利点がモンテッソーリ教育にはある。

そして、モンテッソーリケアは、これまでの介護理論や介護技術と異な

---

るものではなく、否定するものでもない。普段行っている介護に、少しだけ、モンテッソーリケアのエッセンスや環境設定、関わり方を加えるだけで介護の質が大幅に向上する。

## V. モンテッソーリケアの実践

～主体性と尊厳・活動のサイクルによって向精神薬が減少した事例を通して～

対象者の A さんは、認知症対応型共同生活介護（認知症グループホーム ※ 9 名だけの高齢者が個室を中心に小集団での共同生活を営むもの。介護保険における地域密着型の入居施設。）へ入居されている 80 代の女性である。介護保険で要介護 3 の認定を受けていた。なお、A さんの既往歴や現病歴は、多発性脳梗塞、アルツハイマー型認知症、高血圧である。

入居から 3 年が経過し、頭痛の訴え、服薬の要望が強くなり、被害妄想によって大声を出すことや、暴力をふるおうとすることが増えていた。その他にも徘徊、興奮、夜間せん妄、奇声、昼夜逆転など、複数の周辺症状がみられていた。食事の調理や洗濯、掃除などの家事やガーデニングを一緒に行うように声をかけるが、体調不良を理由に A さんは拒否され、「できない」と言われることが多くなっていた。

モンテッソーリケアを始める以前から、様々な支援を行ってきたが、大きな変化は見られなかった。スタッフの多くは、どのように対応すれば良いのかと苦悩し、諦めとも取れる言葉も聞かれていた。主治医にも繰り返し相談していたが、内服薬の処方を調整するものの、変化は見られなかった。

このような状況の中、共同生活を行うリビングにレクリエーション用の収納棚を設置した<sup>(図 3)</sup>。

一般の方からすれば、この収納棚を設置することがどのような意味があるのか理解しづらいのではないかと考えるが、認知症グループホームのような施設の多くは、利用者が自由に手に取れるところに、趣味活動の道具を配置することは殆ど無かった。これは、認知症高齢者の方が、異食（口に食べられない異物を入れてしまう行為）や理解力の低下により適切な使用ができないなど、リスクマネジメントの観点から怪我をしては危ないと考えられていたからである。

そのため、高齢者が趣味活動できるのは、スタッフの手が空いて、スタッ

図 3



フが趣味活動を提供できるタイミングに限られる。そして、鍵のかかった部屋から、趣味活動の道具を取り出して提供していた。スタッフの多くは、これに疑問を抱かず、日常の支援を行っていた。

その上、スタッフの多くは次のように考えて介護していた。それは、高齢者が一人でするのは無理ではないか。ましては、怪我をしたり、口にいれたら危ない。壊したり、持って帰ってしまったり、散らかしたら困る。高齢者が自分で選んでも、介護者が勧めてもどうせ結果は同じだろう。もしくは、選んであげて、声をかけてあげて、手伝ってあげて、手取り足取りしてあげる方が親切だ、可能であればしてあげるべきだと。そのような考え方を転換できたのは、モンテッソーリ教育に触れ「活動のサイクル<sup>(図4)</sup>」を知ったからである。

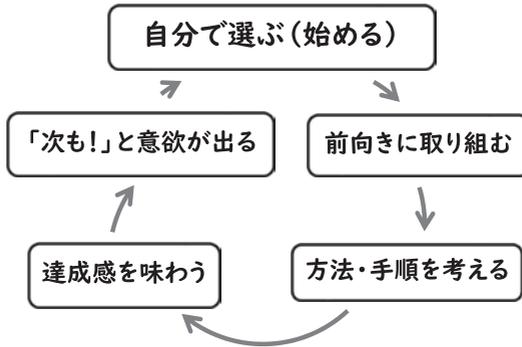
このような状況の中、リビングにレクリエーション用の収納棚を設置した。設置にあたっては、収納する用具など、どのような趣味活動の道具が良いのか利用者の生活歴や日々の様子、実際にヒアリングを行いながら準備を行った。

当初、対象者の中心は A さんではなかった。これまで体調不良等を理由に、活動には拒否的な反応を示されることが多かったため、別の利用者を対象の中心として考え、環境を整えていた。

しかし、収納棚を設置してから数日後、A さんの様子に変化がみられた。

図4

### 選択から生まれる好循環のイメージ



一人で収納棚に近づき、そこに置いてあるものを眺め、手に取り、何が置いてあるのかを確かめるような様子が見られた。

さらに数日後、収納棚に近づき、同じように眺めたり、手に取ったりしたのち、毛糸と編針を見つけそれを手に取って近くのソファに腰を掛けた。そこから約2時間、夢中で編み物を行った<sup>(図5)</sup>。利用者が自分自身で「何かをしたい」という気持ちが生まれたように感じた。

グループホームに入居して3年、編み物をした様子はみたことが無かった。色々な活動に声かけしても拒否することが多かった。体調が良い時に参加をしても、短時間で集中力や根気が続かず止めてしまうことが多かった。

そのため、それを見たスタッフは、

- ・毛糸と編針を自分で手に取ったこと
- ・編み物を自分で始めたこと
- ・約2時間も集中力が続いたこと

に驚かされた。しかし、その様子は1回だけではなかった。その後、4ヶ月に渡って編み物をする姿が見られた。

その頃から、スタッフの関わり方やAさんの反応も変わった。興奮や大声も極端に少なくなり、夜間不眠の日も少なくなった。編み物以外の活動にも前向きに参加されることが増えた。

図 5



そして、医師から処方されていた向精神薬の頓服薬と、本人が頭痛などの訴えがある時に提供していた偽薬（ラムネ等のお菓子で薬効の無いもの）の服用が減少した。

内服されていた向精神薬（頓服薬）は、多い時に月 11 錠服用していたが、活動が始まった翌月には月に 3 錠。2 ヶ月目には 2 錠。3 ヶ月目にはゼロになった。

偽薬についても、本人から頭痛などの訴えがある時に、1 ヶ月で 69 回提供していたが、活動が始まった翌月には月に 38 回。2 ヶ月目には 40 回。3 ヶ月目には 9 回。4 か月目には 8 回となった。

その後家事作業にも積極的に参加するようになり、家族も面会の際に「表情が柔らかくなった」と喜んでくれた。家族はそれまで施設の行事に殆ど参加されていなかったが、母親の状態が改善したことで参加されるなどの変化があった。

## Ⅵ. 考察

モンテッソーリケアにおいて、夢中になれるような道具を用意し、その方の時間の流れの中で、集中して取り組める環境設定を行っている。そして、活動のサイクルにあるように、自分で選ぶ、自分から始めることが、いかに大切か気付くことができた。

根底にあるのは、認知症の人にも自分で決める力があるということである。以前は、スタッフ側の思い込み、安全を守るため、リスクを避けるため、

---

スタッフとして守らなければならないという職員側の都合を最優先していた。

介護の場面で活動のサイクルを理解していないと、場合によってはご利用者の能力を奪う、生きがいを奪うことになりかねない。結果的にスタッフからの指示や勧めてくれるまで待っている受け身の状態が続いてしまう。

人は誰でも、人にお世話されると自分でしなくなってしまう。やがてできなくなり、日常的に人のお世話が必要になる。しかし、人は誰でも、自分のことは可能な限り自分でしたい。

自分から意欲的に活動に取り組める環境を作ることで、集中できる時間、満足感や達成感が味わえる時を、そして、次の活動への意欲や自分からやってみようとする主体性も生まれてくる。

モンテッソーリ教育の理念と方法には、自立した生活への支援の道筋が示されていることを実感している。

根本となる考え方は、「不必要な援助」<sup>(10)</sup> に関する内容で、実際に子どもが教師に言ったように「一人でできるように手伝って」という子どもからのメッセージであり「全ての不必要な援助は、発達の障害物になる」という教師や親への戒めである。介護サービスの在り方に対する示唆に富んだ実例が豊富であった。

現在の日本では、認知症に関わる情報があふれ、人々に不安を掻き立てている。私たちはこれまで認知症の人の中にある、自分で決める力を大切に介護に取り組んできた。興味のあることに集中できる環境が整うと、安心して穏やかな状況が生まれ、服用していた薬の量が減り、認知症の周辺症状が徐々に穏やかになることを経験した。

みずから選んだ活動による集中力が糸口となり、本人の気持ちを変え、介護にあたるスタッフの気付きを促し、家族の関わり方まで変化をもたらした。

認知症の方の尊厳を尊重するためには、できるだけ介護する人が先回りせず「待つ」ことが重要である。本当に最低限、必要なことだけ手を出す。その見極めが重要なのである。多くの方が「わかっている」と思われるに違いないと思う。しかし、介護する人とされる人の関係性の中では、本来の主体性は生まれてこない。モンテッソーリ教育を原則にした場合、介護

する人が導くのではなく、いつでも自由にできる環境と雰囲気を整えることで、介護される人が自分から行動を起こす可能性が広がるのである。そして、手を出さず、環境を整えることができた時に多くの介護者は気付くことができる。「介護される人」が思いの外、自分でできることが多いということ。

## Ⅶ. まとめ

介護は病気や怪我、加齢による悪循環で、生活の困りごとが増え支援が必要になっていく。この悪循環をできる限りの好循環に変えていくことが重要である。モンテッソーリ教育を介護の分野にも応用することによって、その人の尊厳を取り戻し、主体性が保たれ、生き生きとした表情に変化していく。そして、次第にできることが増え、介護者の支援の量が減少する。介護者も時間に追われ、余裕のない業務から解放される好循環へと変化していくのである。また、このような介護を展開させていくと、現場の介護者に様々な工夫が求められる。そして工夫したことによって、高齢者の好循環を目の当たりにしたとき、介護することが楽しくなるのである。それまでは、時間に追われ、食事介助、排泄介助、入浴介助を基本とした3大介護が大半の介護業務から、仕事の質が変わってくるのである。

「重度心身障害児者施設でのモンテッソーリ教育の応用」<sup>(11)</sup>に取り組んだ羽多野わか医師は、「障害や年齢にかかわらず、人間は自己選択の積み重ねや人間の傾向性が満たされる中で、自分を主人公として生き直し、自己構築への道を進もうとすることが示された。子どもの尊厳を大切にしたモンテッソーリ教育は、重症児者施設を含む医療福祉の世界で求められる観点を持っており、応用発展できる可能性がある。」と提言している。

これまで、モンテッソーリ教育は、子どものための教育と考えられてきたが、子どもだけでなく、高齢者や認知症の人に対しても、全世代に通じる援助者の理論としてこれからも大きな可能性を秘めている。

最後に、これまで約8年間、モンテッソーリケアの実践へ導いて下さった、元ノートルダム清心女子大学教授の奥山清子先生、ノートルダム清心女子大学准教授の福原史子先生、ご指導いただきました関係者の方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。

---

## 引用文献

- (1) Cameron J. Camp 編 Myers Research Institute 著 綿森淑子監訳 板倉香 平松克枝訳『モンテッソーリ法と間隔伸張法を用いた痴呆性老人の機能改善のための援助』三輪書店、2002年。
- (2) 森 愛「園芸療法の立場から見たモンテッソーリ教育」『モンテッソーリ教育』第38号、2005年、110-120頁。
- (3) 森 愛「コスミック教育と植物」『モンテッソーリ教育』第43号、2010年、102-112頁。
- (4) M.モンテッソーリ著 吉本二郎 林信二郎訳『モンテッソーリの教育〈六歳～十二歳まで〉』あすなろ書房、1971年、167頁。
- (5) M.モンテッソーリ著 鷹薮達衛訳『幼児と家庭』エンデルレ書店、昭和46年、39-46頁。
- (6) 二宮利治、九州大学大学院医学研究院教授、「日本における認知症の高齢者人口の将来推計に関する研究（平成26年度厚生労働科学研究費補助金特別研究事業）」。
- (7) 国立社会保障・人口問題研究所「将来人口推計及び介護給付費実態調査（平成24年11月審査分）」。
- (8) 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（全国）（平成29（2017）年4月推計）」。
- (9) マリア・モンテッソーリ著 AMI友の会NIPPON訳・監修『忘れられた市民子ども：モンテッソーリが訴える永遠の問題』風鳴舎、2018年、30頁。
- (10) マリア・モンテッソーリ著 AMI友の会NIPPON訳・監修『子どもから始まる新しい教育』風鳴舎、2018年、14頁。
- (11) 羽多野わか「重度心身障害児者施設でのモンテッソーリ教育の応用」『モンテッソーリ教育』第52号、2019年、101-112頁。

## 第6回・第7回「ルーマル賞」

江島 正子

(ルーマル賞選考委員会 委員長)

2021年7月30日、日本モンテッソーリ協会(学会)第53回全国大会・四国支部 高知大会における開会式の中で、「第6回ルーマル賞 佐々木景」会員と「第7回ルーマル賞 天野珠子」会員の授与式が挙行されました。

### 第6回「ルーマル賞」受賞者 佐々木景

#### 推薦理由

(1) 第6回ルーマル賞受賞者を選考する委員会は2019年8月2日(金)、福井会場で開かれ、『モンテッソーリ教育』(第51号)掲載の研究報告「発達に気になる子どものためのモンテッソーリ教育」の執筆者の佐々木景会員が選ばれ、2019年度第1回常任理事会に推薦することが決定した。

(2) 2020年1月25日(土)上智大学 SJハウス 応接間5号室において2019年度第1回常任理事会が開催された。ルーマル賞選考委員会から、佐々木景会員による『モンテッソーリ教育』(第51号)掲載の研究報告「発達に気になる子どものためのモンテッソーリ教育」がルーマル賞の受賞に推薦され、審議の結果、承認された。2019年度第2回常任・全国理事会は新型コロナウイルス感染拡大防止・予防のために書面議決の形式で行われ、本件は承認、議決された。

#### (3) 受賞者の紹介

佐々木景会員 北海道出身、東北福祉大学卒業。1985年、うめだ・あけぼの学園で、モンテッソーリ教育に出会う。障がい児を通してモンテッソーリ教育を学び、モンテッソーリ教育を通して子どもの内なる生命の奥深さを知る。

2004年、児童発達支援センターこじか「子どもの家」が開設。そこで障がい児にモンテッソーリ教育を積極的に取り入れ、実践を積み重ね、その有効性を確信する。一人ひとりの子どもに、モンテッソーリ理論をもとに具体的な配慮を試みる中で、子ども自身が自己を成長させていく姿や、

---

保護者が子育てを通して生き方の価値観が変わる事実を目の当たりにして、研修会でその事例を紹介する。このことから、現代の子どもや若者が抱えている問題を解決するためにも、モンテッソーリ教育が果たす役割は高いと結論づけた。一方で、目に見える教具や提示、系統図など、方法論に傾倒しやすいモンテッソーリ教育を見直し、まずは教師自身の価値観の変革と自己成長を目指して生きることが必要ではないかと示唆する。

## 第7回「ルーマル賞」受賞者 天野珠子

ルーマル賞選考委員会の第1回Zoomミーティング(2020年12月3日)において天野珠子氏が第7回「ルーマル賞」受賞者に推薦、決定された。

推薦理由

(1) 天野珠子氏は上智モンテッソーリ教員養成コースでモンテッソーリ・ディプロマを取得し、わが国において大学教員、また実践家として半世紀を超えてモンテッソーリ教育の普及と発展のために尽力された。現在、日本モンテッソーリ協会(学会)の副会長・副理事長、特定非営利活動法人東京モンテッソーリ教育研究所理事長として教員養成コースに携わっておられる。

(2) 単に功績があっただけではなく、それ以上に全国大会でモンテッソーリ教育の実践に基づく課題を研究テーマに研究発表を行い、その後、学会誌に投稿された。『モンテッソーリ教育』第52号掲載の実践報告・事例報告 天野珠子他「年長児の敏感期に適応した教育活動の研究」、日本モンテッソーリ協会、2020年3月31日発行、113～124頁を参照。

(3) 昨年(2020年)12月6日、わが国の小惑星探査機「はやぶさ2」がオーストラリアの砂漠に無事カプセルを放出し、約6年に及ぶ宇宙の旅を終えて地球に帰還した。小惑星リュウグウでサンプル採取や探査を行い、わたしたちと関係の深い太陽系や、生命誕生の秘密に迫る、日本科学者のミッションの達成に胸を熱くして、今も想起する人は多い。

「年長児の敏感期に適応した教育活動の研究」内容は、わたしたち大人さえも胸がわくわくする「はやぶさ2」と同じなのである。JAXAのある相模原から遠くない小田急線の経堂にある天野氏の「愛珠幼稚園」の年長児が、モンテッソーリ教育における敏感期と絡み合わせて、毎日の園生活で活動を繰り広げている姿が眼前に彷彿とさせられる。モンテッソーリ教

育界の最前線から保育界をリードしておられる天野珠子氏を高く評価し、第7回ルーメル賞に推薦する。

(ルーメル賞については日本モンテッソーリ協会(学会)のホームページでもご覧になれます。また、故ルーメル3代目会長のルーメル先生のホームページ：<https://luhmer-sj-klaus.jimdofree.com/>でもご覧になれます。)

## 海外におけるコロナ禍と保育・教育

三浦 勢津子

(東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンター代表 AMI 公認 3-6 トレーナー)

### モンテッソーリ教師養成コースにおける挑戦

2020年の新年が明けてから、東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンターでのコース運営もコロナ禍への対応に終始追われてきた。2020年3月の卒業試験はAMI(国際モンテッソーリ協会)に指名された試験官がオーストラリアから来日して試験をしたが、卒業式を待たずに早々に帰国することとなった。2020度は理論のZoom授業に始まり、全てのアルバムなど提出物のやりとりはオンライン上で行うなど、コース運営のデジタル化を一気に進めざるを得なかった。毎日、必死ではあったが、適応しようとするれば出来るもので、職員一丸となり、学生も社会状況に対応した変化によくついてきてくれたと思う。2020年6月より、新型コロナ感染状況の様子を見ながら、対面授業を分散登校、分散練習で始め、授業回数を増やし、一回に教室に入れる学生数を減らすことにより、どうにか、オンライン授業と対面授業の両輪によるハイブリッドの形でコース運営を行ってきた。

国際モンテッソーリ協会本部(アムステルダム)からの支援が得られたことや、欧米のトレーニングセンターの新型コロナ拡大防止のための対応策を見習うことで、当センターもいち早く、前代未聞の状況に対応することができた。ヨーロッパのみならず、アメリカ、オセアニア、インドをはじめとするアジア諸国では、日本の状況よりさらに厳しいロックダウンの措置が取られ、人々は食料品を買う以外は外出できなくなった。そうした中で、オンラインでの、本部を中心とするトレーナーズ・ミーティングが再三開かれ、AMIトレーナーたちが集まり、対処の方法などを話し合う機会が激増した。今までは飛行機に乗り、海外に行かないと会えなかった人たちとコンピューターを通じてすぐに一同集まれる、ということは恵まれていたが、必死の対応、危機を一丸となって乗り切ろうという雰囲気であった。トレーニングセンター存続の危機を全てのトレーナーが、感じていたと思う。そうした切羽詰まった状況の中、それぞれの国で教師養成をどう

続けていくことができるか、授業は、実習は観察はどうするか、という道を模索する上での情報共有のために繰り返し、オンライン会議が開かれた。ヨーロッパの午後に時間が設定されるので、日本から参加するのは、夜の10時から11時となる。これは、昼間に授業をし、夜間部を教えた後での参加であったので、体力的にはとても辛かったが、有効かつ重要な情報をもらえることや、日本のトレーニングセンターの存在を他国のトレーナーたちに認識してもらうためにも毎回、出席した。

そこで、海外のトレーニングセンターのコロナ禍への対応を知り、いち早く、Zoom授業に踏み切れたことはとても大きい収穫であった。日本の大学がまだ休校し、オンライン化の準備をしている2020年の4月には、すでに理論の授業をZoomで始めることができた。まだ観察ができない時はAMIのビデオをZoomで見て、全員で観察記録を書く練習をすることもした。そうして、私たちのセンターでは6月には対面授業を分散登校により、再開することができ、提供の部分は全て対面授業で今まで通り、学生に見せることができた。

海外のトレーニングセンターでは、ロックダウンの状態の中、トレーニングセンターからトレーナーが教具を持ち出し、自宅で家族に提供して録画、それを学生に見せる、あるいは、学生に家で自分で作れる日常生活の練習や言語の教具を練習しているところを録画してもらい、それをトレーナーが観るなどの、涙ぐましい努力が行われていた。全ての授業を対面で行うことを前提としていたAMIでも、オンラインによる授業を余儀なくされ、また、実習ができないことから、全ての課程を終えてから、実習のみ残し、実習が終わった後に、教師資格であるディプロマが授与されるケースも増えた。全世界のトレーナー達の必死の努力が感じられ、日本における自分たちの苦労もまだまだ楽な方であるという気持ちになってきた。

新型コロナ感染予防のためには人との接触を避けなければならない。講義・提供・練習・観察・実習・試験と人と人が出会い、そこで起こる学びの場でオンラインに全てを切り替えることはほとんど不可能に思えた。不可能なことをしている前提で、どうしても学びを止めてはいけない、という気持ちでできることは全て行ってきた。当トレーニングセンターでは、講義は今まで、講義室でパワーポイントをプロジェクターで見せて話していたものをZoom授業に切り替えた。これは学生にはとても好評であった。

---

それ以外の提供、練習は分散登校にすることで、部屋に入る人数を制限した。また、アルコール消毒を徹底することで、今まで通りの形式でトレーニングセンターで対面で行うことができた。また、観察と実習も、実習園の協力により、今まで通り行うことができていたのは本当にありがたいことである。教師トレーニングが行えるのは、実習園があつてのことで、子どもたちを観察することなしにはモンテッソーリ教師トレーニングは成り立たない。

海外においても、ワクチンが普及するにつれて、多くのトレーニングセンターが少しずつ対面授業を再開している。危機感を募らせていた頃のように、頻繁にトレーナーズ会議が行われることもなくなり、時間と心にゆとりが出てきた。それでも日本ではワクチンの普及が遅れ、2021年8月にはまた緊急事態宣言が発令され、緊張感をもって、新学期を迎えた。

AMIではオンラインと対面授業の2本立てのハイブリッド授業がこれからは主流になっていくのではないかと予想している。教具の提供の部分は教具の扱い方のみならず、子どもとの接し方、関わり方も含まれるので、定点で録画した動画ではわかりにくいところが多い。また、練習しないと結局のところは身につかないのが提供なので、やはりセンターに来て頑張ってくれている学生の姿を見ると、実際に教具を触って練習するしか上達の方法はないと思う。使用した後、その都度、アルコールで手を消毒し、なるべく一人で練習する姿は健気で、見ても気の毒ではあったが、それでも集中する姿は美しく、きっと素晴らしい教師になるのだろうという気持ちで見守っている。

### 保育現場で起きたこと。起きていること

ヨーロッパやアメリカの知り合いで、モンテッソーリ・スクールに勤めている教師たちからは3歳から6歳に「オンラインで保育している」という話も聞いた。通常であればあり得ないことで、不可能な状況でどうにか保育を続けようという涙ぐましい努力がうかがわれた。言語の提供を行い、オンラインで歌を歌い、ゲームをし、料理の仕方を提供し、という具合に今まででは考えられない保育が行われた。教師たちは家での、保護者の存在を感じながら、保育にならない保育、提供にならない提供を必死でコンピューター技術を駆使して行った。夏休みの間はどうかかなるが、8月の

終わりに幼稚園やプリスクールが再開し、どうしたらよいのか、ということ皆が苦しんでいた。今年に入って、保育が再開されたが、子どもたちが、集まったり、至近距離で話したりしないようにしたり、歌を歌わなくなったり、一人一人が離れて活動をしたり、また使った教具をその度に消毒したりと、感染防止対策に明け暮れている。

変異株が猛威をふるう様になり、子どもでも感染し、それが広がる可能性が出てきてからは保育現場はさらに緊張感を増した。幼稚園や保育園で感染してきた子どもが家庭内感染を引き起こす。小さい子どもを家庭内で隔離するのはほぼ不可能である。海外でも日本でもワクチン接種が進み、感染者数が減り、また重症化が避けられるようになってからも、保育現場では緊張感が続いている。小さい子どもはマスクをしたがらないし、感覚の敏感期にいる子どもたちはなんでも触りたがる。また、言語の敏感期にいる子どもたちにマスクをしたままで、口元を見せて話せないことに、特に3歳以下の子どもたちと接するモンテッソーリ教師たちの間では、コロナ禍の中で育った3歳以下の子ども達の言語発達を心配する声も上がっている。

3-6歳の子どもたちも、自分で給食をよそっていたのがそうできない、食物関係の活動はできないのはもちろんのこと、歌が歌えない。一人一人が離れるような席の配置、マスクをするように子どもたちに話したり、何度も手を洗ったり、教具を消毒したり、ととても大変だったと聞いている。

2021年秋頃から、新型コロナウイルスの新感染者数は激減し、少し安心できる状況となってきた。このまま、パンデミックが収束し、保育現場、教育現場で、人と人が触れ合い、コミュニケーションをとり合い、学び合いのできる状況が戻ってくることを祈るばかりである。

## 編集委員会から

江島 正子

(編集委員長・群馬医療福祉大学大学院教授)

### 1. 動機と経緯

『モンテッソーリ教育』第52号を日本モンテッソーリ協会(学会)会員の皆さまに、例年どおり5月に入ってお届けできるように編集作業の忙しい中、想像もつかないことが起こりました。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の世界的な大流行です。百年前のスペイン風邪は20世紀最大の感染症でした。21世紀になってからサース(SARS 2002年)が中国で、マース(MERS 2015年)が韓国で流行しましたが、そのときわが国には感染者は入らず、対岸の火事でした。ところが新型コロナウイルス感染症は、2020年2月4日、クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号が横浜港に入港し、それから感染症との厳しい戦いが始まりました。

4月7日、政府による「緊急事態宣言」発令後、自分が感染しない、他人にも感染させないためにマスク着用、手指消毒、飛沫感染防止シートのアクリル板による仕切り、三密回避の提言が出て、感染拡大防止のため70%、80%の外出自粛とか、県境をまたいだ移動の自粛なども発令され、『モンテッソーリ教育』第52号の仕事をしている幹事さんにも差しさわりが生じました。そのような中、印刷所のプリントボーイはいろいろな形で協力してくださり、富坂の日本モンテッソーリ協会の事務所に足を運んでくださったので、予定どおり発行、発送できました。編集委員長としてはプリントボーイに心から感謝しています。

しかしながら新型コロナウイルスの猛威は世界保健機構(WHO)テドロス事務局長の宣言、「パンデミック」の世界的流行(6月19日)は加速し、日本モンテッソーリ協会(学会)四国支部主催「第53回全国大会」事務局からは開催中止の連絡が来ました。

このような社会状況下、編集委員会としての活動はあるものの、『モンテッソーリ教育』第53号発行も高知大会開催を待つことになりました。こうしているうちに編集委員会に、「スペイン風邪が当時における保育や教育に、どのように影響したか」というような記録がないので、『モンテッ

『ソリー教育』では後世の人々に何か記録を残したらよいのではないかと  
いう意見が届けられました。こうして延期された全国大会の準備段階にお  
いて、原稿募集の広告や、チラシなどで原稿募集を出しました。

## 2. 新型コロナと実体験

私は大学教員ですので、勤務校の群馬医療福祉大学の体験を報告します。

入学式が新型コロナ感染症のため短縮されて行われた2020年4月4日  
の午後、全学教職員会議が開かれ、これからは「新型コロナ禍のため遠隔  
授業（オンライン）のZoomで行われる」と説明がありました。私が初めて  
聞くZoomという言葉、何も分かりませんでした。スクリーン上に大学の  
デジタル専任の先生によって、興味津々な新しい授業のやり方が展開さ  
れました。その直後Zoomの使用法がPptのスライドで添付送付され、そ  
の後すぐ自分のパソコン（PC）とスマートフォンを持参し、Zoomのア  
プリを設定してもらい、オンライン授業開始です。一方、大学側は遠隔授  
業の環境準備や整備費として学生さんにも一律7万円の支援、自宅外から  
の学生さんには家賃補助として3万円、また家計が急変した学生・保護者で  
条件を満たせば10万円の支給などが行われました。現在も、PCとスマ  
ートフォンは授業の必須道具です。

当時も、今もですが、校門の入り口やいろいろな所で赤外線サーモグラ  
フィを通過、検温測定、手指消毒液の設置とアルコール消毒、また日時、  
検温結果、体調などの「行動記録票」を記入。さらに教室と教室の壁とド  
アは突き抜けになって、二つの教室が1クラスに、座席は一つおきに×印  
が貼られて、空席にするような工夫もなされ、冷房・暖房のエアコンがオ  
ンでも窓は必ず開けて、十分な換気を行う。この原稿を書いている2021  
年9月末現在、9月15日～10月8日まで分散通学による対面および遠隔  
（オンライン）の併用型授業。群馬県では「緊急事態宣言」や「まん延防  
止等重点措置」の発令ごと、臨機応変に対面授業、Zoomによる遠隔授業  
や分散登校が実施されました。文部科学省の調査で、わが国の大学では「遠  
隔授業が8割超」で行われたと報告されています。

また、私の個人的な学生さんへの対応ですが、コロナが落ち着いていた  
頃の2020年後期に対面授業をしていたら、欠席の学生さんから「ぜひ

---

Zoomで授業を受けたい」という電話連絡があったので、研究室から自分のPCを教室に持って来て教壇上に置き、対面授業をしながら遠隔授業もしました。Zoomの次は、ハイブリッド方式！自ら自然に体験です。その際板書するとき、PCの向きを変えなければならない、という当たり前のことですが研究室や自宅でZoomの授業をするのとは違うことに改めて気づきました。Zoomのデジタル化という新しい、便利な、文明のスタートを身近に感じます。

### 3. 変異株と新スタートへ

スペイン風邪が落ち着くまで3年かかったとのこと。私が2回目のワクチン接種を2021年6月17日に終え、ずいぶん経ちました。コロナとの闘いは落ち着いてきたり、激しさを増したりと、世界中が翻弄され、先が見えません。中国の湖北省武漢からイギリス（アルファ）株、強力な感染力を持ち若い人へ感染するインド由来のデルタ株、と新しい変異株がさらに出現しています。この9月には、南米や欧州、わが国でも、WHOが目すべき変異株と位置づけた南米コロンビア由来の「ミュー株」や「カッパ株」や南アフリカからのコロナ新変異株の「オミクロン株」が出現しています。私たちはwith変異コロナ株と再出発し、未知の地球上を歩み始めました。

変異株と新スタートした私たちの社会変革への築きは、どのようなものでしょうか？新たにスタートした私たちの保育・教育はいかなる形でしょうか。モンテッソーリ教育という共通の教育理念のもとにそれぞれの園や学校、土地柄によって異なるでしょう。ここに寄稿された報告を読んでいただきたく思います。新型コロナウイルス感染症は医学、衛生学、経済、政治、哲学、倫理、世界観、人生観等、人間の存在そのものに至る問題でしょう。後世の人に記録として残し、今私たちが経験している悩み、痛み、苦しみ、希望、幸福についてが次世代の人の幸せな生活の築きに役立つように祈ります。

## コロナ禍での保育

森 円

(マリア幼稚園 光天使幼稚園・園長)

昨年3月、コロナウイルスによる突然にやってきた今までにない保育の現実。二つの幼稚園は山口県光市の東西の端にそれぞれ位置し、海や山などの自然に恵まれた環境にあり、都会とは比べものにならないほど少ない感染者数でしたが、それでも今後の保育はどのように変わっていくのか、これからの保育の現場はどのような対応をしていけばよいのか、今まで経験したことのない現実に大きな不安を抱えた毎日でした。

まず、2カ月の休園、4月の保育は一日のみでした。6月から保育が始まってからは手洗いの励行、マスクの着用、日々の検温など、今までになかったことが増えました。特にマスクの着用は、教師と子ども、子ども同士のコミュニケーションに困難さを増し、言語の習得にも大きなマイナス要因になるのではないかと思います。

昼食についても、今まで子どもたちが、自分で行っていた食事の準備や配膳など、お互いの接触や共有を避けるため、ほとんど職員が行うことになり、その他の生活体験が極端に減り、日常の中で子どもたちが手や体を使う機会や考えて行動するチャンスも減りました。発達段階にあった子ども本来の活動が妨げられた結果、今後の成長にどのような影響が出てくるのかも心配でした。

2学期からの様子で、少しずつ変化を感じたのは、運動面と感覚の育ちの低下でした。1学期に体験すべき日常生活の基礎ができていないので当然のことではありますが、2学期の始まりが、1学期の始まりに近いような印象を受けました。

また、環境の変化に戸惑ったのは、子どもたちだけではありません。職員も今までにない経験の中、昨年は特に過敏になり、例年の行事の見直しやコロナ対策をしながら、いかに円滑に行事を行っていくか、どの程度の対応をすればよいのか、本当に手探りの日々でした。

そのような中、本当に子どもたちに必要な行事は何か。何を大切にすべきか。子どもに残すべき体験は何かなど、改めて考える機会を与えられ

---

たことも事実です。

特に運動会に向けては、コロナウイルスの感染防止対策と同時に熱中症の予防対策、同時に子どもたちの体力や筋力の低下という現実を考えながら模索しての日々でした。

結果的に、子どもたちの成長を見ていただける種目に絞り、各学年 30分から 40 分で終わる内容で行いました。また、各学年を分けて開催時間を 1 時間ごとにずらし、プログラムの合間に休憩時間を取って水分補給を行いながら無事終わることができました。

保護者については、観覧者を同居の家族に絞り、全員に当日の検温の提出をお願いして、密にならないように協力をお願いしました。本当に保護者をはじめ幼稚園に関わる多くの方々のご協力が無い限りできなかったと思います。

今年度に入り、コロナの感染者は増加し、同時に増減を繰り返しましたが、子どもたちの様子で特に変化を感じたことは、集団になじみにくい子どもが増えたことでした。

考えてみれば、幼稚園に入る前の年齢で子ども同士の関わりが極端に減り、保護者からも公園に行っても知らない人と接触して、もし感染してしまったり、また、うつしてしまったりと思うと公園や地域の子育て施設にも遊びに行けないという声を聞けば、子どもが子どもに慣れていない状況が発生するのは当然かもしれません。

また、在園児も園から帰って友達同士でお互いの家庭を行き来することもほぼできない状況で家庭の中の活動が増えているせいか、以前にも増して体力や筋力の低下を感じました。家庭でユーチューブを見たり、スマホでゲームなどをする時間もコロナ以前に比べて増加傾向にあり、同時に低年齢化が進んでいるように感じました。

そこで、子どもたちの環境を守るためにも、親子でできる簡単な体操や、お手伝いなどを通して子どもたちも生活に参加できるよう保護者に発信したり、園では屋外での運動も全力で走ったり飛んだり、体がしっかり使える運動の環境を作るように例年以上に心がけました。

手洗い、うがい、アルコール消毒、マスクの着用など、もう慣れたもので、

子どもたちも当たり前のようにしています。これからも当分続くと思いますが、その中で子どもの自立ができる環境作りや、コミュニケーションができる環境を教師側が意識的に作っていく必要があると思いました。コロナ対策は大切だと思いますが、必要以上に過敏にならず、子どもたちの自由が守られ、自立できる環境を作っていけるように配慮していきたいと思っています。

コロナの状況に応じて今後も変化が求められると思いますが、職員が知恵を出し合い一致して、この環境を乗り越えていきたいと思っています。

---

# 東京モンテッソーリ教育研究所付属教員養成コース

コース長 前之園 幸一郎

本コースは、上智モンテッソーリ教員養成コースを引継ぎ、平成18年度より開設致しました。

令和3年3月には22名の修了生を送り出しました。4月現在、16期生31名、15期生25名、科目履修生2名が在籍しております。

一昨年より実習園担当者による研修生制度を発足させ、3月で2年間の研修を修了し、そのうち1名は現在、日常生活の領域で講師として研修を積んでいます。

コースではコロナウイルス感染防止の観点から、理論科目はリモートで、実践授業は原則対面で行い、欠席者にはやむをえずビデオにて提示を閲覧できるようにしております。

事務局及びコース教場

東京モンテッソーリ教育研究所

理事長 廣澤弓子

付属教員養成コース長 前之園幸一郎

コース主任 堀田和子

住所 〒 112 - 0012

東京都文京区小石川2丁目17番41号

富坂キリスト教センター 2号館

連絡先 TEL (03) 5805 - 6786

FAX (03) 5805 - 6787

E-mail info @ montessori.or.jp

ホームページ <https://montessori.or.jp/>

令和3年3月、天野珠子前理事長が逝去し、講師一同悲しみと驚きとともに、前日まで、コースのために心を砕いて奔走して下さったことに感謝して、ご冥福をお祈りいたしました。新理事長として、廣澤弓子が就任いたしました。

令和3年8月28日（土）第12回研修会の予定でしたが、コロナ感染予防のため昨年に引き続き、延期となりました。

令和3年9月15日（水）特別講義

講師 中川明美氏

世田谷聖母幼稚園教諭

テーマ 「生命への援助であるモンテッソーリ教育」

長い保育経験の中で、子供の魂に仕える保育者として、子供の内面を育てるモンテッソーリ教育の真髄が分りやすく語られ、共感をもって拝聴いたしました。

新理事長のもと、コースの刷新を図り、今までの歴史を引き継ぎこの教育を後輩に伝えてゆく使命を担っていく努力を重ねてまいりたいと思っております。

関係各位のご理解とご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

#### \*教員養成コースのコロナ対策についての現況報告

令和2年度入講式は新型コロナウイルス感染拡大防止のため健康・安全を第一に考えて、マスク着用、手指のアルコール消毒等を徹底し、十分なスペースを確保できる文京シビックセンターの会議室にて、修了式は文京シビックセンタースカイホールにて実施した。

令和3年度入講式は1号館会議室にて新型コロナウイルス感染拡大防止に十分留意し実施した。

#### 〈環境整備〉

- (1) 教室への入室時の検温・消毒・体調の連絡
- (2) 換気の徹底
- (3) 空気清浄機の設置
- (4) マスク着用
- (5) 教室内に消毒薬溶液を常備し、消毒・清掃につとめる
- (6) 授業を受ける椅子・場所の指定

#### 〈事務上の手続き〉

- (1) ウイルス検査をした学生は、陰性の場合でも最低2週間は自粛欠席

---

のこと。自粛欠席後、授業に出席する際に欠席届と陰性の結果の証明書を提出すること。

- (2) 職場や所属園の保護者や園児、家族など、身近な方が検査を受ける場合、結果が出るまで自粛欠席すること。そして、結果が陰性の場合、結果が出てから最低2日間は休むこと。自粛欠席後、授業に出席する際に欠席届（所属園の園長サイン・㊟が必要。所属園がない一般の学生は、家族や親族にサイン・㊟をもらう）を提出すること。
- (3) 自粛欠席している人は、落ち着いたらコース内で授業ビデオを視聴してもらう。ビデオを視聴した場合出席扱いとなる。
- (4) 東京都から自粛要請がでた場合は、休業となる。休業後、研究所の判断により授業を再開する。

#### 〈実践授業・特別講義・理論〉

\* 令和2年度実践授業については、各分野で考え、工夫し実施。令和3年度は更に行動範囲の把握を徹底して感染防止を強化しZoomなども利用し実施。

- (1) 2グループに分け、教場と1号館会議室で行う。
- (2) 教場にてレイアウトを工夫し、密にならないように行う。
- (3) 2グループに分け、午前と午後と同じ授業を行い、学生はいずれかの授業を受講。

\* 特別講義・理論については1号館会議室、Zoom利用で実施。

#### 〈実習〉

今年度も、本来昨年4月から7月頃までで終了するはずの2年生の実習が夏を越えて持ち越してしまいました。9月からは1年生の5回の教育実習と2年生の5回の見学実習に合わせ、1学期で終了しなかった2年生の教育実習の残りが重なり、実習生を受け入れる実習園も調整が大変です。緊急事態宣言や感染者数、何よりも各園の施設長の判断に頼りながら、ディプロマ取得のための大切なプログラムの一つである実習での学びを大切に考え行っております。

## コロナ禍からモンテッソーリ教育の提言

東北支部長 佐々木 信一郎

(こじか保育園 園長)

中国湖北省武漢で原因不明の肺炎が報告されたのは、2020年1月3日のことでした。この肺炎が、世界をパンデミックに追い込むことになりました。5月下旬、感染者数、564万人、死者数、35万人となり、世界史の中のペストの流行、スペイン風邪に匹敵する、大きな災害となったのです。

4月7日に、ようやく日本政府は、非常事態宣言を出しました。その際、三密（密閉、密集、密接）を避けることが強く推奨されました。また、それに付随して、不要不急の外出を自粛する自宅待機が勧められました。できるだけ自宅での仕事（テレワーク）が望ましいと判断されたのです。

また、学校も入学式の中止、休校を強いられることになりました。

5月25日には、全都道府県で非常事態宣言が解除になりました。しかし、終息したというわけではなく、一時的に収まったという方が現実的だと思われるます。

そのため、できるところはテレワークが続くことになりました。6月からは、学校が再開しました。それでも。少人数登校です。

\* \* \*

そのような状況の中で言われていたことは、これからの私たちの生活が大きく変わるだろうということです。世界史の中に現れるペスト、その流行後、社会が大きく変わったことはよく知られています。労働力の減少による賃金の上昇、それに伴う荘園制の崩壊、そしてキリスト教会の権威の失墜などです。多分、これは、現代社会にも起こりうることです。

このコロナ禍以前に、働き方改革と称してテレワークが盛んに取り上げられてきました。しかし実効性はなく、ほとんどの場合、通勤して会社で仕事をするスタイルが一般的でした。しかし実際にテレワークをやってみて、これならできるという実感につながった企業は沢山あると思います。

そうすると、コロナ終息後も働き方は、元には戻らない、いや、もっとテレワークの方向へ進んでいくことが予測されます。

---

そうしなければますます、私たちは自律を求められます。今までは、出勤し会社に行き、拘束された時間の中で、上司や周囲の社員の「目」に支えられ、他律的な仕事をしてきました。

しかし、それらがなく状況の中で仕事をするとなると、自己コントロール力、集中力、計画力、時間管理能力、コミュニケーション能力などが今以上に必要になってくることが推測されます。

また、学校においても、4月、5月が休校になり、行けない状況が続きました。その中で、与えられた大量の宿題をこなしている、あるいは塾の遠隔授業を受けたりしている子どももいる一方、ゲーム三昧の子ども、学ぶことは何もしていない子どもが多かったのです。

\* \* \*

このような状況の中でも、自分で学びを続けている子どもたちがいます。それは、モンテッソーリ教育で育った子どもたちです。この子たちは、受け身の教育を受けていません。やりたいものを自分で見つけ、選択し、それをとことん追求するという主体的な学びの土台を幼児期に積み重ねた子どもたちです。

私の知っている小学四年生は、たくさんの宿題を計画を立ててやりながら、自分の読書計画を立てて、本を読んでいます。モンテッソーリ幼稚園の時に、感想文ノートを作ってから、今もそれを継続しています。今では、17冊目になっているそうです。

もう一人の女の子は、ピアノが好きで、ピアノを弾く時間と勉強時間、お手伝いの時間について綿密なスケジュールを立てています。そうして、できるだけ、ピアノの時間が増えるように時間のやりくりをしているのです。コロナで休みなので、お母さんから食器洗いのお手伝いするように言われたそうです。そこで、彼女は、お父さんとお母さんに、「学校の給食時間は、20分ぐらいなので、夜の食事の時間もその時間で終わらせて」と頼んだそうです。つまり、だらだらされると自分のピアノを弾く時間が少なくなってしまうということです。

このように主体的に、目標を決めて、計画を立て集中して自分の学びを深めることができる鍵は、モンテッソーリ教育なのです。モンテッソーリ教育の様子を少しだけご紹介しましょう。

\* \* \*

モンテッソーリ教育のクラス環境の中には、子どもたちの発達にあったさまざまな教材・教具が配置されています。そのクラスで、子どもたちは自分の興味・関心 interest のある活動を自ら選んで取り組みます。

そうすると、クラスの中には、いろいろな活動が展開されることになります。モンテッソーリクラスは縦割り、つまり、三歳、四歳、五歳の子どもたちが一緒に共存していますから、年齢の幅によるバリエーション豊かな活動になります。

子どもは、そこで展開されている活動を見て、自分で学びのカリキュラムを立てていきます。三歳の悠翔くんは、「みつとくん（三歳）がやっている世界の大陸をやって、次に、日本地図をやるんだ。主人くん（五歳児）のやっているヘビ遊びは、難しそうなので、来年にしよう」などと言って、自分で自分のカリキュラムを立てていきます。ヘビ遊びとは、色ビーズを使った足し算、引き算の活動です。これが、後々自分の目標とか、計画につながってくるのです。

また、自分のやっている活動の終了の時間を予測して、「二時からは、クリスマス会の練習があるから、今日は（た）から（て）までできるかな」と言って、カルタ作りをする子どもがいます。これは、先の見通し、時間のやりくりなどにつながってくる要素です。

このように、子どもたちに自由を与え、子どもたちが自分で考え行動することができる環境では、子どもは目標を設定し、その計画を立てます。そして、時間を管理し、自己コントロールしながら、取り組むことができるようになっていきます。

教育にとって、自由はとても大切です。子どもに、いろいろな遊び、活動を見せること、紹介することは大切です。でも、何を選んで取り組むかは、子どもが決めなければなりません。

そのためには、待つことが必要です。おとなは、すぐに子どもにこれやってみたらといって押しつけます。おとなの感覚では、それは押しつけとは思わないことが多いのです。ごく自然に何気なく、「ほらこれ」といった具合に、その遊びを何か自然に与えてしまう。そうすると子どもは、考えるチャンスをなくしてしまうのです。極端な押しつけは、「いつも与えら

---

れることを待っている子ども」を育ててしまうこととなります。

目標の設定、計画を立てる、時間をやりくりして目標を達成することについては、一日の流れに決められたスケジュールがあって、なお且つ、一日の流れが子どもにあらかじめ伝えられていることが必要です。そして、そのスケジュールの中に、自由活動の時間が入っていることが必要なのです。なぜなら、制限があることによって、初めて自由は意味を持つからです。この時間の中で、ここまでできる、あるいは、この時間とこの時間の間にこれをしようと思えることが大切なのです。人は、自分の目標達成するための活動以外にやらなければならないことがあります。ですから、いつでも制約があるのです。その中で、どのように時間をやりくりしながら、目標を達成するかを考えていくことが必要です。

そして、失敗もたくさんすると思います。自分でできると思ってやった活動が意外と難しかったとか、時間がかかったとか、試行錯誤もたくさんするでしょう。それを許容することが必要です。

\*            \*            \*

これからコロナ禍で、社会や生活が今まで以上の自律を必要としています。目標を設定して、その目標を達成するために計画を立て、実行することが必要です。そして、そのプロセスでは、さまざまな誘惑がありますが、それを自分でコントロールすることが必要になります。

そのためには、今までのような受け身の教育だけではなく、主体的に自ら考える教育をする必要があるのです。今まで、主体性、自ら考えるなど、何度、教育改革の土俵に乗せられたでしょう。しかし、一向に変わろうとはしません。新型コロナが、教育におけるパラダイムシフトを押し進める原動力になるなら、それは、まさに災い転じて福となすということであるに違いないと思います。

## 純心大学コース

片岡 瑠美子

(長崎純心大学 学長)

2020年度のディプロマ授与は、新型コロナウイルス感染症対策のため、卒業式前日の学科アワーにおいて他の免許等と一緒に座席に置いての授与となりましたが、コース13期生5名が無事ディプロマを取得し、卒業いたしました。

まず、2年前に報告いたしました科目の変更に伴う状況について報告いたします。それまで、モンテッソーリ教育の基本的な理論について学ぶモンテッソーリ教育学特論Ⅰと、モンテッソーリ教育に関し著名な先生方をお迎えして授業が行われるモンテッソーリ教育学特論Ⅱは、モンテッソーリ実践科目や実習と同じく資格取得に関する自由科目という位置づけで免許取得希望者のみを対象とした科目でした。そのためモンテッソーリ教員免許と同時取得はできないようになっていた小学校教員免許取得希望者や、モンテッソーリ教育に興味があっても免許取得までは考えていない学生は履修できませんでした。しかし、少しでも多くの学生にモンテッソーリ教育の思想や子ども観などを学ぶ機会を与えることが望ましいとの考えから、この2科目を卒業要件単位となる基幹科目といたしました。その結果、小学校教員を目指す学生も熱心に受講する姿が見られたり、単位が取れるからと興味本位で理論科目だけでも履修した学生が、授業を受けるうちに免許取得希望に切り替えるということも出てきました。

また、ここ数年の卒業後の進路を見たときに、一旦モンテッソーリコースを履修したものの途中であきらめた学生が、結局モンテッソーリの幼稚園やこども園を就職先を選び、講習会などに行きながら保育にあたり、中には新たに免許取得を目指し、働きながら行くことができる養成コースに通って、免許を取得するという例が出てきました。

在学中に幼稚園教員・保育士と同時にモンテッソーリの教員免許も取得するには、それ相応の条件と努力が必要となるため、思ったほど免許取得者を世に送り出すことができないというもどかしさもありましたが、モンテッソーリ教育に触れる学生を増やすことで、その後の展開が期待できる

---

ということがわかってきました。今後も、免許取得を目指す目指さないにかかわらず、子どもたちの命の援助者であるモンテッソーリ教育を理解し、その子どもも観や教育観を持った教育者を一人でも多く養成していきたいと志を新たにしているところです。

次に、昨年から世界を揺るがしている新型コロナウイルス感染のパンデミックによる影響について報告いたします。大学の授業も対応を迫られました。大学の授業も対面で授業を行えた期間も、学外の講師によって集中講義で行われるモンテッソーリ教育学特論Ⅱは、講師が県外の方々なので呼び出すことが叶わずリモートとなりました。熱意溢れる先生方の講義は、学生たちにとってモンテッソーリ教育を学び続ける上での良い刺激となっていますので、先生方の生の声で直接お話しただけなかったのは残念でしたが、その豊かな内容で、学生たちは多くのことを学ぶことができましたようです。

地方にも感染が拡大されてくると、一時的に対面式授業ができない期間がありました。その間はリモートによる授業となったのですが、教具提供法を学ぶ実践科目は問題となりました。授業は、ただ提供をやってみせながら説明をするということではなく、学生が子ども役となって実際に提供を受けることで体験的に提供を理解していけるようにしています。学生たちは、日ごろ子どもたちと接しているわけではなく、特にまだ実習すら経験していない1年生に一番基本となる「日常生活の練習」の提供を映像のみで習得させるのは難しいと思われました。そこでリモートのみの期間は休講とし、対面ができるようになってから別の日に補講の形で行いました。補講も取れず、終講に間に合わない学年は、とりあえず課題を出すことで授業回数をこなし、提供内容は、終講後や新学年度に対面ができるようになってから教員と学生の空き時間を調整して時間を取り、行いました。長崎は都市部に比べて、キャンパス閉鎖の期間があまり長くはなかったため、なんとか対面式授業を中心にできたのは幸いでした。

一番影響を受けたのが、資格試験を受ける4年生でした。例年と同じ時期に予定していた8月初めは試験ができる状況ではなく、9月末の後期が始まる直前に、連休を使って行いました。その間2週間の保育所実習等もあり、なかなか練習に集中できる状態ではなかったと思うのですが、各自工夫して学校に通い、練習していたようです。そのかいあって全員合格す

ることができました。

このように新型コロナウイルス感染症に翻弄された2年間でした。依然として感染症の収束は見えませんが、できないことを嘆くより、できることに感謝して、学生の命を守ることを第一に、学びの質をできる限り落とさないようこれからも工夫していきたいと思っています。

---

## 東京国際モンテッソーリ 教師トレーニングセンター

三浦 勢津子

(東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンター代表・AMI 公認 3-6 トレーナー)

2021年1月の筆記試験に続き、3月の卒業口頭試験は、コロナ禍のため、オーストラリアのAMIトレーナー、エイミー・カーカム先生がZoomで、ウェブカメラで映す学生の教具の提供を見てくださり、そして口頭での試験という、今までにないオンライン方式で行われました。他の3人の国内試験官は、オンライン試験と同時進行で通常通りの対面での試験を行ってくださいました。コロナ禍の中、本部のAMIにも柔軟に対応していただき、滞りなく試験を終えることが出来たことに安堵いたしました。祝賀会はできなかったものの、卒業式は合格者にAMIからの国際ディプロマを授与する厳かな式典を行うことができました。この卒業式には、試験官のエイミー・カーカム先生もオンラインでご参列してくださいました。

2021年4月からの授業開始は、2020年度の経験値を活かし、理論の部分に限り、Zoomによるオンライン授業で対応してまいりました。理論の授業が進んできたところで、5月には昼間部、そして続いて夜間部も登校を始め、対面授業を行うことができました。観察実習・教育実習ともに滞りなく進めることができましたことは多くの実習園のご協力があってこそ感謝に堪えません。

オンラインの使用による、新たな希望や喜びも生まれています。2021年1月にはジュディ・オライオン先生の講演会、また8月にはキャロル・ポッツ先生を講師にお迎えしたワークショップ等、海外のトレーナーのお話や、復習の機会等、興味を持った方が気軽に移動もせずに参加できることは参加者の皆さまからもご好評をいただいております。

また昨年度から「偏見のない教育を目指して」というテーマで特別公開授業を一年に一度、企画しております。昨年度はキノタ・ブライスイェト先生をお迎え、人種問題についてご講義いただきました。今年度は11月23日に特別支援教育の専門家である星山麻木先生をお迎えし、オンラインでご講義いただく予定です。

2022年の3月に行われる今年度の卒業試験には国際試験官を海外からお迎えすることができることを祈っております。

これからもどのような状況になるのかは誰も予想もつきませんが、その場に適応できることはモンテッソーリアンの柔軟さのメリットと信じ、トレーニングを続けていきたいと考えております。

最後とはなりましたが、名誉センター長である松本静子先生はお元気でいらっしゃり、コロナの新規感染者数が減少しました9月にはトレーニングセンターにいらしてくださり、学生と交流してくださいましたことを喜びを持ってご報告申し上げます。

#### 入学者数

2021年度	昼間部	33名	夜間部	40名
--------	-----	-----	-----	-----

---

## コロナを理由にしない

野村 緑

(聖アンナこどもの家 園長)

2020年1月の時点では、ニュースによる中国の新型コロナウイルスが、まさか全世界を震撼とさせるとは、誰も思わなかったことでしょう。

瞬間に世界中に広がり、世界は静止したかのように一変しました。人の動きが止まっても、自然は一刻も歩みを止めることはありません。子どもたちの成長も同じです。

当園も3月に2週間の臨時休園の後、延期していた卒園式を何とか終えて安堵する間もなく、緊急事態宣言で4・5月と休園で、公共機関利用の職員は自宅待機、車通勤の職員が交代で出勤し園務を行っていました。

6月に再開は許されたものの、「三密」を避けるために登園人数を制限せざるを得ません。

今年最後の年長児を最優先し、年長週5・年中週4・年少週3と登園日を決めました。幸い、年長児数が少ない年度で実現しましたが、小学校でも6月は週2～3日の登校が一般的でした。

ランチタイムは晴れている限り、園庭に散らばって、各自のシートの上で食べ、子どもたちはピクニック気分で喜んでいました。

4・5月の休園の間の日数を数えると毎土曜日と夏休みも保育すれば、日数的にクリアできると分かり、実行しました。

早々に夏の甲子園は中止と発表され、TVには涙を流す球児たちの顔がアップされ、その悔しさが伝わってきました。コロナを理由にすべての行事は中止が当然の風潮と変わりました。確かに中止が一番安心・安全で心配もありません。しかし、行事は本来、子どもたちの成長のためにあるものです。コロナだから成長を止めて、とか、一年待って、は通じるでしょうか。特に私たちは、日々成長が目に見える幼い子どもたちが対象です。行事をやるという選択肢はないのか、やり方を工夫したり、時期を考えたりと可能な道が少しでもあるなら考える価値はあると挑みました。

当園の行事は、モンテッソーリの視点で一人一人の自己実現のチャンスと捉えています。子どもたちの大切な行事を守るために何ができるか考え

ることは、中止で安心・安全の真逆で大変な勇気と批判を受けて立つ覚悟が必要です。「人事を尽くして天命を待つ」覚悟で行事を一つ一つ行いました。

まず、入園式は6月末の土曜日に園庭で、幸い神様の祝福かと思うほどの好天でした。

夏のお泊まり保育も、どの園もお楽しみ会風で泊まりなしが一般的でした。やり方を工夫して、全室に分散して布団を敷いたら翌朝、「自分のクラスで寝られた」との声に、今までの子どもたちも自分の部屋で寝たかったのかもと、新たな気づきでした。

9月からは通常保育に戻しました。10月の運動会は時短と両親のみの入場と制限つきでしたが、子どもたちの輝く姿はコロナ禍で縮こまった大人たちの心に元気を届けてくれました。予定どおり運動会も終わり、予備日の翌週は、5月に行けなかった親子遠足に出かけました。広いこどもの国へ10月に行くのは初めてで、紅葉シーズンもいいね、と新たな発見でした。

12月のクリスマス会は、一年前から大ホールを外部で借りての催しで、コロナ禍でも昨年同様、子どもたちの伸びやかな発表の場となりました。客席も300人収容のところ、半分の入場でも十分足りて、リハーサルと当日の二回だけの会場と思えない、堂々とした姿を披露していました。

いよいよ3月の卒園式も「3密」を避けるには、園内では狭いので早々にホテルを予約しました。

ホテル側もいろいろな催しがキャンセル続きの中、予定どおり実施の当園のためにコロナ対策を細かく配慮して、さらに値引きもしてくださって大サービスでした。

年長児たちは、例年と変わらずすべての行事と保育日数を終え、胸を張って卒園して行きました。その姿に今までの努力が報われた思いでした。

コロナがあったから、子どもたちに本当に大切なことはと深く考えることもできました。子どもの成長は待ってくれない、今できるすべてを出し切る、その後は、「神様、お願い」と託す心、祈る心の大切さも学びました。

本当に子どものための保育がしたい、とあえて認可外を貫いて40年、今回も認可園だったら横並びの判断に従わなければならなかったかもしれません。独自の決断ができたのも認可外であったからこそ、と思います。

また、定員50名という小さな園であったからこそできたことかもしれ

---

ません。

年度が変わる頃にはコロナも終息して、との期待も空しく、今も、終息のメドがたちません。さすがに、行事は“安心・安全のための中止”の風潮は消えました。昨年よりコロナは深刻化しているのです。

昨年の球児たちの涙に代表されるすべてのイベント中止で泣いた子どもたちに、私たち大人は反省することは無かったでしょうか。

人知を越えた何かのために、このコロナがあるのか今は分かりません。きっと、後世の人々が、私たちが、かつてのペストやスペイン風邪を思う感覚で語るのでしょうか。まさに、歴史のただ中にいる私たちの精いっぱいの叡知が試されているように感じます。

## コロナ禍の保育について

後藤 洋美

(一般社団法人マリア・モンテッソーリ子どもの家 園長)

### おしらせ

#### 新型コロナウイルス感染症についてのガイドライン

『子どもの家』では日ごろより、手洗い・うがいなどの健康管理を指導しておりますが、冬に流行するインフルエンザも含め、この度世界を震撼させている新型コロナウイルス発症を防止するために、特にアルコール消毒、湿度の管理（加湿器）、換気などを心がけています。

どうぞ皆さまの家庭でも、今できることをできる範囲で最大限に行い、この病気で苦しんでいる人や困っている人が1日も早く減り、ご自分もかからないよう、気を付けてまいりましょう。

#### マリア・モンテッソーリこどものいえのみなさま

いま、せいかいでしんがたコロナウイルスという、びょうきがはやっています。したにかいてあることを、よんで（おはなしして）びょうきにならないようにしてください。

1. おうちにかえったら、せっけんでてをあらい、うがいをしましょう。  
日ごろも行っているかと思いますが、どこで感染をするかわからないような状況になっています。
2. そとにでるときは、マスクをつけましょう。  
ある程度の湿度の確保や、万が一のときも人にうつさないことにつながります。
3. しっかりねて、しっかりたべましょう。  
免疫力を高めておくことで、感染の発症を抑制することができます。  
健康管理がまだ自分ではできない小さい子どもには、保護者の観察と判断が重要です。

---

4. **ねつがある、あたまがいたい、せきがでるなどのときは、こどものいえをおやすみしてください。**

発熱が続いたり、風邪のような症状がみられて病院に行くときには、かかりつけ医に電話を入れてから受診をお勧めします。

※当面の間、毎朝登園前にはお子さまの熱を測って、出席簿にご記入ください。

※ウイルス感染者と濃厚接触のないよう当面の間、密室で大勢の方と長時間過ごすようなことは、なるべく避けましょう。

※残念ながら、お子さまやご家族が新型コロナウイルスと診断された場合は、すみやかに子どもの家にご連絡ください。

どうか平穏な生活が送れますよう感染拡大を抑制するためにも、一人一人が心がけてまいりましょう。

2020.02.24

2020年2月

保護者の皆さまに初めて新型コロナ感染症に関するガイダンスをお知らせしました。それと同時期に保護者会で、対面での話し合いをしました。

保護者の方へのお願いや園の具体的な取り組みや対応を周知していただく、それがコロナ禍での園生活の始まりです。

この頃は、誰もが驚異的でありながらもその内インフルエンザのように終息するだろう、日本はそれほど広がらないだろう、という期待もありました。

しかし、ニュースで日本でも新型コロナウイルス感染者が増え始めたのを受け、幼児は、マスク着用、手指消毒の徹底を始めました。それから1年8カ月がたつ現在も、何度かの政府からの緊急事態宣言、自治体の保育課からの情報指導を鑑み、どのように過ごしてきたのか時系列で記したいと思います。

2020年3月2日 臨時休園

2月27日政府から全国の小・中・高・特別支援学校の春休みまでの臨

時休校の要請があり、当園でも検討した結果、3月2日から春休みまで臨時休園としました。

市内でも感染者が確認されている状況を鑑み、社会的責任を担う保育施設として感染拡大防止のための苦渋の選択でありました。年度末の大切な時期を、ご一緒に過ごすことができないことは非常につらいものでした。

2020年3月15日 卒業式

食事やお楽しみ会を含む謝恩会を取りやめ、卒業式のみ、式の後プレゼントを渡したり、短いお話、写真撮影で終了しました。

2020年4月7日 緊急事態宣言発出

政府や神奈川県との通達により新年度の保育再開を延期、臨時休園を継続しました。

入園式の延期。

保護者会・懇談会は、すべてオンライン。

自粛中、稼働していなかったブログを再始動。

[m-montessori.jugem.jp/](http://m-montessori.jugem.jp/)

家庭訪問（各家庭の玄関あるいはお庭から）。野菜の種・折り紙のプレゼントを持って子どもたちのお顔を見ること、進級のお祝いと、保護者のケアのために1軒1軒訪問しました。

その後、子どもたちとのつながりの取り組みとして、オンラインで歌・手遊び・ダンス・折り紙、パネルシアターなど、画面を通じて楽しいことを計画しました。

2020年4月26日

第1回 Zoomで会いましょう。

2020年5月 臨時休園

2020年5月3日

第2回 Zoomで集まりましょう。

2020年5月4日

緊急事態宣言が5月31日まで延長。

2020年5月10日

---

第3回 Zoom で集まりましょう。

2020年5月17日

第4回 Zoom で集まりましょう。

2020年5月23日

第5回 Zoom で集まりましょう。

2020年6月分散登園

政府が5月31日に緊急事態宣言を解除したことを受け、保育児童を半数にしての分散登園をスタートしました。

2020年6月20日より土曜日保育の開始。

2020年7月

1学期の終業日を31日までに延長。

2020年8月1日～31日

夏季休業は中止。

夏休み中は、土曜日も含めて自由登園する。

4月・5月の臨時休園の代替保育として夏休み無し、土曜保育を加えて9月26日まで行いました。

夏休みに行っていたお泊まり会は、例年なら年長・年中児が園に泊まる場所、今年は年中児は夕食の後花火をして帰宅することにし、年長児のみ泊まりました。

2020年10月から通常保育。

運動会では、時間を短くして保護者の観戦を2名までとして開催しました。

2020年11月の七五三は、クラスごとに行いました。

2020年12月のクリスマス会。

年長の保護者のみの観覧で、ライブ配信とビデオを撮り、のちに観ていたできるようにしました。

2021年2月の卒園遠足。

小田原までの電車で行く地球博物館を避け、麻溝公園へ。  
2021年3月の卒園式。

在園児さんの参加を取りやめ、卒園児のみの卒園式になりました。

2021年4月

新年度がスタート。

今年度も新型コロナウイルス感染症は終息が見られず、保護者会はオンラインで行いました。

しかし、徐々に自粛より自衛という新しい生活の仕方を、私たちはどうしたらこのコロナ禍で日常の生活ができるかを学びました。子どもの家でも最善の感染防止をしながら、子どもたちの園生活も守ることで、できるだけ通常の保育を進めることにいたしました。

そして、昨年ではできなかった懇談会も、今年は対面で行いました。

今年の夏に向けてコロナ感染者は、爆発的に拡大し、職員の緊張はまだ続きます。教具、室内外の設備の消毒・換気に配慮しながらこのまま感染者がでないようにと願うばかりです。子どもたちも控えていたクッキングをセットすると、食器を使用するたびに洗い、次のお友達に戻すことが当たり前になりました。

丁寧な手洗い、手指消毒、マスク（戸外以外）をすることは当分続くでしょう。でも with コロナの子どもたちは、今日もたっぴりとモンテッソーリのお仕事を笑顔で楽しんでいます。

---

## コロナ禍と保育・教育

上田 真由美

(学校法人信望愛学園・山口天使幼稚園・園長)

山口天使幼稚園は山口県山口市の県庁・市役所に挟まれていながら自然豊かな小高い山の中腹に建ち、サビエル記念聖堂に隣接しています。9月現在で園児 232 名、8 クラス、全職員 38 名です。

2020 年、春、これからいよいよ新学期という時、「新型コロナウイルス」という得体の知れない、そのころはまだ聞き慣れない言葉に恐怖を感じたのを覚えています。そして次から次へと事態が変わっていく中、その都度選択を迫られ、対応していく毎日でした。

今、振り返ると子どもの園生活に大きく影響していることの一つに給食があります。

給食の準備はほとんど子どもたちでできていたのに、させられなくなったことが残念でなりません。牛乳をコップに注ぐ、自分の食べる量を食器につぐ、トレーにのせて運ぶ、使ったトレーを次の人のために拭くなど、日常生活の練習を即、生活に生かすことができるのが給食の時間でした。今は、職員が給食を運び、すべてを配膳し、子どもたちは食べるだけです。子どもが考えて判断し、動くという日常的活動の場を奪っている、体を使う機会を奪っていると思うと心が痛みます。しかし、そんな中でも食後にテーブルを拭くこと、使ったものを給食室に返すことは子どもたちがしています。どんな小さなことでも子どもにできることを意識させたい、手を使わせたい、運動させたいと思っています。

密を避けるための行事の見直しは、とても大変でした。行事はすべて人数制限、時間短縮を考えなければなりません。できる限り工夫して、その中でも最大限の経験をさせてあげられるよう時間をかけて話し合いました。

例えば、マリア祭は全園児と保護者総勢約 400 人で行っていた行事です。それを一日かけて親子で分散して登園し、お祈りをして帰ることにした結果、休園中に一生懸命親子で手作りした花や飾り、お祈りを書いた手紙をささげる姿があり、感動しました。保護者からは「祭壇の前でこんなにゆっ

くり子どもと一緒に祈りしたのは初めてです。とても良い時間になりました」との感想があり、行事本来の目的を教えられたようで、行事の在り方を見つめ直すきっかけになりました。

お泊まり保育は特別な一日となるように「スペシャル保育」とし、地域のお祭りが中止になっていることから子どもたちで天使幼稚園のお祭りを作り上げ、楽しめるように企画しました。手をしっかり使う活動ができるように、また、友達とアイデアを出し合い、話し合う時間を十分とりました。お面屋さん、金魚すくい、輪投げ屋さん、わたがし屋さんなどをしようという意見が出て、協力しながら作っていきました。家族にお土産を買う姿もありました。夜になって盆踊りをし、花火をして神父さまと感謝の祈りをして解散しました。泊まることはかかないませんでした、コロナ禍の中でも満足いく活動ができたと感じています。

当園では、いつもオリンピックの年の運動会は「エンジェルスオリンピック」としています。学年ごとの開催、参加者は保護者2名までとしたところ、1時間ごとの入れ替わりもスムーズにでき、ゆったりとした雰囲気の中で行うことができました。他の年齢児が競技する間に休憩するという時間がないため、熱中症の心配もありましたが、子どもたちの頑張る力に感心しました。また、当日は他の年齢児の競技を見ることができなかつたため来年につながるようにと、後日みんなで他の年齢児の競技を見合う時間をとりました。外遊びの時間には年齢にとらわれず、何にでも挑戦できるようにしました。その姿を見ていると他の年齢児の練習している様子を通りがかりにでも見て吸収していると感じました。子どもの力のすごさを感じた瞬間でした。

コロナ禍で、体を動かす機会が減り、人と会うことも少なくなっていることが、子どもたちの体力、コミュニケーション能力にどれだけマイナスになっているのか心配しています。これまで以上に意識して体全部を動かして強い体づくりを心掛ける必要があると感じています。外出をできるだけ控え、家の中で過ごす時間が増えていることで、気持ちを発散させる場が少なくなり、集中力にも影響しているのではないかと、ということも心配です。だからこそ規制があるにしても子どもたちにとって園生活を少しでも有意義なものにしないといけないと強く思います。子どもにできることを先に先に手出ししていないか、私たちが改めて自分の行動を見つめ直

---

す機会にもなりました。少し待てば子どもができるのに、口を出したり、手伝ったりしていることはないか。あたりまえだけれど、コロナ禍の今、私たちがしっかりとそこを今まで以上に意識して行動する必要があることを教えられた気がしています。

コロナ禍でできないことを嘆くばかりでなく見つめ直す良い機会と捉え、子どもたちの成長のため、皆で協力しながら進んでいきたいと思えます。

## 感染症コロナ禍におけるモンテッソーリ教育の実践

坂田 久美子

(学校法人佐賀マリア学園・幼保連携型認定こども園・鳥栖カトリック幼稚園 園長)

### ——子どもの歓声上がる行事 その1——

#### モンテッソーリ Zoom 発表より——子どもの歓声

#### 2021年7月日本モンテッソーリの全国大会に参加した園児たち

今年高知県で行われた日本モンテッソーリ協会（学会）主催の第53回WEB全国大会 byZoom でコロナ禍における『行事 秋季運動会』の実践発表をさせていただきました。

今まで何回も研究発表の機会を頂いたのですが、Zoom 発表は初めての経験でした。

発表者である私と先生2名はパソコン室に。研修会参加者と職員は2階リズム室に集合し、Zoom で聴講しました。

その日は夏休み中でしたが、保育園部の子どもたちは登園日でしたので、リズム室の入り口のドアの窓（円型の窓が2つあります）から、Zoom 発表の光景を見て、「えんちょうせんせいがテレビにでてる!!」といううわさがたちまち広がり、廊下にはその子どもたちの群集が……。中にいる先生がドアを開けると、子どもたちは皆、床に座り、最後まで見ていたそうです。

Zoom 発表のほとんどが、秋季運動会のスライドショーでしたので、子どもたちにも分かりやすかったのでしょうか……。終了後しばらくして、年長組の数人が折り紙で作った金メダルを手に持って、「えんちょうせんせい、はっぴょうおじょうずでした」と言って、喜んで私の首にその金メダルを掛けてくれました。そして拍手を送る子どもたちは皆、笑顔でした。モンテッソーリ学会に子どもが参加しました。子どもたちにほめてもらいました。

この発表を子どもが理解したのに感動しました。研究発表に子どもたちが参加したこと、そして研究発表を子どもたちにほめてもらったことは、私にとりましても初めての経験でした。



写真：「えんちょうせんせい、おじょうずでした！」と、折り紙の金メダルをプレゼントする園児たち



写真：Zoom 発表を聴講する子どもたち

## ——子どもの歓声上がる行事 その2——

### 大きなプールが幼稚園に届きました！

1学期の6月「新しいプールがきた！」と、子どもたちは大歓声！あまりの喜びようで、まだプール開きもしていないのに、次の日からさっそく、プールバッグに水着セットを入れて、登園する子どももいるほどでした。

お母さま曰く、「新しいプールが来たから、どうしても水着を持って行くときかなくて……、よほどうれしかったのでしょうか。すみません……」と、水着を持って来た経緯をお話してくださいました。

例年どおりでしたら、7月からのプール開始でしたが、今年は子どもたちが、「はやく！ はやく！ 入りたい！」と、皆で楽しみにしているものですから、いつもより1カ月早いプール開きとなりました。7月に入っても、ほぼ毎日のようにプール活動を行いました。

この毎日のプール活動の経験によって、水によく慣れ親しむことができ、水を怖がったり、嫌がる子どもは乳児をはじめ、3・4・5歳児も誰もいませんでした。

また、プールに入るまでに、子どもたちがどれだけの順序で着脱をし、準備をしてプールに入るのかを保護者の方々にも理解していただけるよう、イラストでお伝えさせていただきました。

## ——子どもの歓声上がる行事 その3——

## 夏まつり会 ——A組 年長児参加行事——

2021年8月4日（水）、年長組の夏まつり会を行いました。コロナ禍の前まで（一昨年）は、幼稚園に泊まるお泊まり保育を行っていましたが、昨年に引き続き日常生活の一環として、夏季保育～夏まつり会～として、開催致しました。

この夏まつり会のプログラムは子どもたちがさまざまな経験ができるように組まれており、中でも夜店～露店～の体験は、子どもたちが自分の考えで選んで、そこに喜んで自主的に活動する姿がありました。子どもたちは自分の内面に自分で育つ力を持っています。その力を発揮できるよう、環境を整えることによって、子どもたちが生き生きと、そして友達と仲良く平和に活動している姿が大変印象に残りました。まさしく、モンテッソーリの自由選択活動であることを痛感しました。

暗くなって行った手持ち花火大会は、とても良い体験となりました。

## ——子どもの歓声上がる行事 その4——

## 「敬老の日」のお祝い（9月20日）

## ——「園児たちから 祖父母さま方へのプレゼント」——

いのちを受け継がせていただいている祖父母さま方に園児たち一人一人が、「ありがとうのこころ」で「おじいさま おばあさま いつまでもおげんきでながいきしてください」と、感謝と祈りを込めて、プレゼントを作成し、各ご家庭に持ち帰ってもらいました。

例年、祖父母さま方を園にお招きし、遠くは韓国や中国などの外国から、また、沖縄や東北からもお孫さんたちに会うのを楽しみにして、ご来園くださっていました。

会場のお遊戯室は、400名近くの祖父母さま方がご来場くださり、全園児でお祈りや、聖歌、お遊戯、プレゼント渡し等々を催して、盛大な祝い会を行っていました。

昨年、今年と、コロナ禍のためにご招待ができませんでしたが、子どもたちは大好きな祖父母さまのために、お祈りをしたり、プレゼントを作っ

---

たり、「お歌もプレゼントする！」と言って、童謡『おじいちゃま おばあちゃま』も一生懸命練習していました。

園児たち全員、9月21日にプレゼントを持ち帰りました。ご健在でしたら、父方母方で祖父母さまが4人いらっしゃいます。保護者の皆さまには園児たちが近くの祖父母さまに直接、「ありがとう」のころでお手渡しできるようにご配慮をお願いしました。

あるお子さんは、童謡『おじいちゃま おばあちゃま』の歌を祖父母さまの前で歌い、「おじいさま おばあさま、けいろうのひ、おめでとうございませう！ これはわたしからのプレゼントです。どうぞ、おうけとりください」と、きちんとご挨拶してプレゼントをお渡ししたそうです。

祖父母さまは大変感動されて、お孫さんが、心優しく成長している姿に感心された、と保護者の方よりお伝えがありました。遠方の祖父母さま方には、郵送で送っていただくなど、お祝いを伝えたお子さんもいました。

#### ——子どもの歓声上がる行事 その5——

#### 野外ステージ『風の音楽堂』の建築

——子どもたちが楽しく元気に、喜んで表現活動ができる野外ステージ——

2021年、春。幼稚園の園庭に野外ステージ『風の音楽堂』ができました。

このステージは、コロナ禍のさまざまな制限（三密の回避など）の中でも、子どもたちが伸びやかに歌やお遊戯など、楽しく表現活動ができるように考え、木造で建築しました。

子どもたちは、日常生活の中で、学年別にステージに上がって、お遊戯や体操、合唱等々、みんな喜んで活動しています。

3月の卒園式では、年中組全員で卒園する年長組のために、この『風の音楽堂』でお別れ演奏会「ほたるの光」の演奏を披露してくれました。卒園証書授与式の終了後、年長組とその保護者の方々が、園庭に集まり、年中組の演奏を聴いて、「卒園のすてきな思い出になりました」と、たくさんの拍手を送ってくださいました。

## コロナ禍における富坂子どもの家の 発達支援の実践報告

勝間田 万喜

(児童発達支援 富坂子どもの家)

「コロナ禍の発達支援においてモンテッソーリ教育の果たした役割」について「富坂子どもの家」から実践報告をいたします。

### 富坂子どもの家の紹介

「富坂子どもの家」は東京都認可の児童発達支援事業で、ダウン症候群、自閉症スペクトラム、発達障害などの0歳から就学前の乳幼児が通う通所施設です。一日10名の定員で約40名が在籍し、一カ月に、延べ200人が利用しています。キリスト教精神とモンテッソーリ教育・インクルーシブ保育の充実を柱にしています。0～2歳対象の週1回の親子グループ、お弁当持参の幼児単独通園グループ、週1回午後グループのいずれかと個別発達支援での利用です。親子グループの45%が保育園併用、幼児グループの95%が幼稚園・保育園を併用しています。幼児縦割りグループで、常勤2人と非常勤1人で10人の子どもたちの発達支援をしています。

### 新型コロナウイルス発生以後の支援体制

2020年2月末に全国学校休校要請が発出される中、厚生労働省より介護・社会福祉関連の施設・事業に「開業要請」が発出されました。利用者にとって日常生活の継続が安定に欠かせないためです。子どもの家も開業要請対象施設ですので、スタッフでまず、感染したら重症化しやすく、治療や療養が困難な子どもたちの発達支援を継続するために大事なこと、必要な支援は何かをよく話し合いました。「発達支援を途切れさせない」「保護者の不安や困った状況に個別的に対応する」という方針を決め、通所での支援の継続と保護者支援を軸にしました。この一年半の間、1回目の緊急事態宣言中だけは行政から「家庭療育への協力」指示があり、通園形式を休止し代替オンライン支援形式をとりました。宣言解除後の2020年6月以降1日も休園することなく、コロナ前と同様の通園形式での開所を継続でき

---

て、誰も感染せず現在に至ります。

### オンライン代替支援におけるモンテッソーリ教育の果たした役割

初回の緊急事態宣言中に保護者になじみのLINEを使用しオンライン代替支援を実施しました。通園スケジュール日に各家庭に園とオンラインでつなぎ、各自の発達や興味に合わせた内容でビデオ通話で配信しました。本物の体験や感覚の実体験を大事にするモンテッソーリ教育の活動の紹介を2次元の映像で子どもが視聴することに戸惑いはありました。しかし、自粛生活で孤立しないよう支援を途切れさせないために始めました。家庭で気軽に実施できる活動と食材・道具を選択し、身近な野菜や果物を触る、皮をむく、味わう、断面を見るなどを紹介すると、画面の向こうで提示を集中して子どもが視聴し、その姿に保護者が驚いていました。そしてさっそく家庭で子どもと取り組んでくださいました。小松菜の葉をちぎる、ペットボトルからコップにお茶を注ぐ、手を洗うなどの日常の中にある動作が、わが子にとって魅力のある活動であることや、子どもが目で追える「ゆっくりさ」、「言葉でなく動きで示す」ことの重要性に多くの父母が気づきました。在宅ワーク、自粛生活で親が子どもと過ごす時間も多く取れ、わが子の興味や手指を使う作業が好きなことに気づく時間的なゆとりがあったこともコロナ禍で得たものでした。家庭で満足した表情で取り組む子どもの姿を動画で送ってくださり、モンテッソーリ教育で大事にしていることを園と家庭で共通理解している実感を得ました。通園を再開して以降、個



別支援計画に基づく保護者との連携がより具体的になりました。また、ビデオ通話では困りごとやうれしいエピソードもタイムリーに気軽に話せました。スタッフも家庭の様子が見られて、個々のニーズに合った具体的な支援につながり、孤立を防げました。所定の時間に画面の前に着席し、視聴が難しいお子さんには録画映像を配信し、子どものタイミングに合わせて視聴できるようにし、「座ってられないわが子」ではなく「環境の工夫で集中するわが子」にリフレーミングできました。映像にスタッフが直接出演することで自粛明けの6月に子どもたちも久しぶりや初めての感覚がなく、新学期を穏やかに安定して過ごし、園でもビデオで紹介した日常生活活動を実体験して楽しみました。オンライン代替支援提供により、家族の子ども理解、モンテッソーリ教育への理解が深まり、保護者との信頼関係の構築につながりました。スタッフも今まで以上に実体験や日常生活活動の大切さを再認識して保育環境に取り入れました。

#### 小規模園の強みを活かした保護者支援

保護者支援としては、コロナ感染拡大する中でもキリスト教精神に基づく保護者の集いは対面開催を決断しました。命の尊さを再認識したり、自粛の中の子育ての大変さや世間の理解不足でのつらい経験などを分かち合ったり、同じ立場の親ならではの人と人との直接的な対話の必要性を皆が実感しました。その後もオンラインでの保護者の集い、対面でのモンテッソーリ講座を開催し、出席率はどの会も80%を越えました。



---

## コロナ禍で得たもの・再確認したこと

オンライン代替支援を個別プログラムで実施でき、対面で集いを開催し、タイムリーに面談や家庭訪問が可能なことも、小規模園ゆえです。手洗い、スプレー噴霧での消毒、マスク装用の定着には、モンテッソーリ法の提示の方法で家庭でも園でも命を守るために真剣に一貫して示すことで感覚に敏感さのある子どもも状況理解の難しい子どもも習慣化してきています。

家庭で子どもたちが日常生活活動を繰り返し取り組み、満足感からの自信を得る姿は子どもから親や支援者たちへのメッセージに感じます。

「障がいがあるから無理だろうと決めつけないでほしい。理解したい、やってみたいという気持ちを知って向き合ってほしい」。

「なんでもやってあげなければできないわが子」から、「やり方や環境を工夫すれば、したいことが自分でできるわが子」に捉え方が変化する、そうした保護者が増えたことがコロナ禍での大きな収穫です。

## まとめ

人と人とを分断したかのように見える新型コロナウイルスですが、乗り越えるために結果的にさまざまな形での連携が強化し拡大されて、大きな力を生み出しています。まだ感染の終息は先になりますが、モンテッソーリ教育・キリスト教精神はコロナウイルスに振り回されることはないでしょう。今まで以上に子どもを中心に、家庭と園・関連機関で連携してまいりたいと思います。

## コロナ禍の保育—京都コース

長谷川 美枝子

(深草こどもの家 主任)

2020年2月27日(木)、政府が全国の学校に3月2日(月)から臨時休校要請することを発表しました。例年では、年長児の卒園に向けて大切に過ごす時期です。大変なことが世界中で起こり、しかも詳細がわからず不安でした。私たちが京都市の他の学校・幼稚園同様に対応しなければならないと感じましたが、3学期の最後の時を宙ぶらりんで終わらせず、大切に過ごすためにはどうすればよいのか、職員皆で考えました。3月生まれの子どもたちのそれぞれの誕生日会を終了日までに行うこと、年長児最後のオペレッタ(小歌劇)を3月2日に、3月4日にお別れ会をしてその日を終了日としました。卒園式は21日に年長児と年長児保護者のみで行いました。2021年度の始まりは、年中・年長児も初日のみ登園。年少児は入園日だけ登園し、緊急事態宣言が発令の間はしばらく臨時休園が続きましたが、後半はグループ分けをし、少人数の子どもたちが登園できるようにして、5月6日の宣言解除までに少しずつ全園児登園ができるよう準備をして過ごしました。現在(2021年9月、緊急事態宣言発令中)は感染対策に十分に気を付けながら、毎日子どもたちが登園しています。

### 普段の保育が生かされたと思うこと

#### ・手洗い

モンテッソーリ教育を実践されているところであれば、どこでもそうだと思いますが、常日ごろから「手を洗う」ことをとても丁寧にしていますので、コロナ禍にあっても特別な指導をせずとも皆、上手に洗えています。

#### ・発表会でない活動

発表会ではなく、子どもが活動を楽しむように、特に子どもたちの日常生活が守られるよう気を付けて、行事を行っています。年長児が年間2回行う劇活動は良い題材を選び、毎年同じ劇をしています。年少、年中の時に観劇しているので、年長児になる頃にはどんな内容の話なのか、自分は

---

何の役をやりたいのか、深く理解して参加します。役を決める前にも自身で良い選びができるよう、好きな役での練習もするので、役を決めてからは、セリフをほとんど覚えています。そのため、一週間早まった劇の日程ではありましたが、本番を迎えることができました。

・卒園式の練習は一度だけ

厳粛な卒園式を行います、毎年練習は一度だけです。一度で理解するだけの力を子どもたちがちゃんと持っていることを信じ、伝える側が整理して秩序立てて説明すると、子どもたちは一度の練習で十分にできます。(発達障害のお子さんには、絵や文字を使った説明書を用意)。今回は終了日から少し時間が空きましたが、卒園式も無事に行うことができました。

・自然の中で遊ぶ

コロナ禍で、改めて自然の恩恵を感じました。木々や草花、春に生えてくる筍、現れる昆虫など、園庭では気持ちの良い空気の中、いつもと変わらない遊びができました。

### コロナ禍で変更を余儀なくされた保育内容

・マスクとフェイスシールドを使い分けて

感染対策として大人のマスク着用は基本ですが、子どもたちが話す人の口元を見ることができないため、集まりをする者はフェイスシールドを着用することにしました。

・日常生活の練習の「お茶を注ぐ、お盆で運ぶ」「お茶碗を洗って、布巾でふく」活動を当面の間取りやめ、水筒を持参することになりました。「お茶を飲む」ことだけでも、急須から湯飲み茶わんにお茶を注ぎ、お盆にのせて自分の席まで運ぶ、お茶碗を洗って布巾で拭くといった手指、全身のバランスのコントロールの練習ができる、子どもたちの大好きな活動ただけに非常に残念です。

・お弁当を食べる座席の変更

これまではテーブルを囲んで食べていましたが、対面で食事することの

ないように、皆が同じ方向を向いて食べるスタイルに変更しました。子どもたちは誰と一緒に弁当を食べるかとても大切にしている、その日に遊んでいた仲間とその仕上げのように「一緒に食べよう」と約束をして食べています。しかし、その「一緒に」が難しくなりました。お弁当を食べる際にも、「○人で食べたいから、○人席を探そう」とか、適当に誰とでも約束してしまうと、いざ座るときに困ったりするので、約束の意味や大切さなど、子どもたちが考える、とても良い機会になっていたのですが、これも残念です。

#### ・料理活動の内容変更

深草こどもの家の料理活動の献立は、年中・年長児でその日の昼食を作るため、栄養バランスを考え、旬の食材を使用したものですが、やはり、火を通さないもの（サンドイッチやおにぎりなど）は取りやめ、自分が調理したものを食べるなど制限ができました。もちろん緊急事態宣言下では中止となります。料理活動は日常生活の練習の総合的な活動として、こどもたちが喜んで参加し、成長する機会ですので、with コロナの時代にあってもできるように工夫していきたいと考えています。これからの課題だと思っています。

世の中が急激に変化したり、想定外のことが起こったりしても、屈しない心、自分で考え、自分で学び、成長する力を持つ人間になるために、幼児期の教育環境が大きく影響を及ぼすことは間違いありません。そしてモンテッソーリ教育が子どもたちの大きな助けとなることを強く実感しています。大切な責務を負う保育者の一人として、これからもモンテッソーリ教育を学び続け、実践していきたいと思っています。

---

## コロナ禍と教員の養成—九州コース

コース長 藤原 江理子

当コースは今年、本科新入生の募集は行わず、本科二年生の授業を除く対外的活動（SS コース、園内研修、ワークショップなど）はすべてリモートで行うことにしました。

本科生の募集を行わないのは私たちが1974年にトレーニングコースと名称を改めて以来、初めてのこととなりました。

### 【Saturday and Sunday (SS) コースの実施】

SS コースは昨年に新設した短期学習コースで、隔月一度の週末を利用して実施されています。基本的な理論と実践の一部を紹介しつつ、3歳から6歳のモンテッソーリ教育法の概要をお伝えするもので、今年度は全授業リモートながら、順調に進んでいます。

### 【ワークショップ】

春期：令和3年4月24・25日 モンテッソーリ教育入門

夏期：令和3年7月22・23日 日常生活課程

実践をリモートで分かり易くお伝えするためにはさまざまな工夫が必要でした。対面授業の時にこれほど実践を見る人の気持ちに寄り添う努力をしていたかを省みる良い機会になりました。

### 【リモート研修】

園に出向いて現場指導ができない代わりに、センターと保育現場をつないで研修を行っています。平日の保育園の昼寝時間を利用して、一時間未満の短い研修を行ったり、普段は数人しか研修に出せない園の職員全員が参加して考え方を共有したり、保育をビデオ撮影したものを皆で見て意見交換したりと、園側のさまざまな要望に応えられる柔軟性が、リモート形式の研修にはあることを発見できました。

リモートによる授業は、今後学び方の選択肢の一端になることでしょう。

利点と課題を見極めて適切な使用が大切だと思います。

### 『コロナ禍と教員の養成』

コロナ禍は、教育の根幹である「人と人が関わりあって生きるために」という部分に多大な影響をもたらしました。人と直接会わない工夫、人同士が触れあうことで生じる危険など、社会生活で当たり前に行ってきた行為に否応なく制限が加えられる日々です。社会生活の激変は子どもたちにも多大なストレスを与え、保育現場の先生方の苦闘はいかばかりかを思うとただただ頭の下がる思いです。

一方、大人を相手にする教員養成の場に目を転じると、当コースではリモートという新しい学習形態を選択肢に加えしました。本来、国際コースをはじめとする多くの教員養成の場は対面を重視しています。特に実践授業になると、画面越しでは教具の質感や提供者の動きの間合いや呼吸などを実感しにくいですし、何より子どもと直接かかわることの大切さを再認識するためにも人と相対しつつ学ぶことの意味は少なくないからです。しかし、感染抑制の観点から対面授業の継続には限界があります。リモート授業への切り替えは養成する側の私たちにとっては苦渋の選択でした。

当コースの受講生の多くはZ世代もしくはデジタルネイティブと呼ばれる1990年代以降に誕生した人々です。生まれた時からインターネット環境に親しみ、スマートフォンで世界中と瞬時につながって気軽に情報交換しあうことに長けています。ただし、手間暇のかかる実体験は敬遠する傾向も見られます。彼らは、ネット上であふれるモンテッソーリ教育法の実践動画にも気軽にアクセスして、教具の提供法などをチェックしています。ですから、授業がリモートに移行しても大した違和感を抱くことなく、むしろ移動や学びの際の細かい決まりごとに縛られないことを利と捉えたようでした。

リモート授業の開始に当たって、私たちスタッフは専門の方にリモートでの伝達の仕組みや工夫すべき点、伝え方など指導を受けました。徹底していたのは見る側がどう受け取るかを発信者として常に意識することでした。対面時でもそれは意識していたつもりですが、つもりで終わっていた部分も多かったと反省しました。レンズを一枚隔てただけの感情を伴わない客観的視線は、見にくいもの、見えないものは肉眼の時よりいら立ちを

---

生み出し、提供する側への寛容や忍耐が段々と薄れていくことに気が付きました。

結果として私たちは、どこをどう伝えたらわかりやすいかという、原点に立ち戻っていました。リモートでは受講者の反応を拾いにくいいため、授業後の取り組みにも工夫を加え、双方向のコミュニケーションを模索しました。

伝えるべきことを相手の立場・視線で丁寧に組み立てることは、リモートか対面かといった手段の問題ではないように思えます。人と人が関わりあうことの意味を、直接対面している安心感で見失ってはいけないのだと自戒させてもらった日々でした。

## コロナ禍における保育の現状と今後の懸念

大原 青子

(国際モンテッソーリトレーニングセンター福岡センター長・エミールこども園 園長)

### コロナ禍の保育状況

昨年からの新型コロナウイルス感染の拡大に伴い、保育の現場でも子どもたちや保育士の安全確保のために、さまざまな対応を求められることとなった。特に自治体との連携が必須の全国多くの認可保育園やこども園では、小学校などが一斉休校をする中でも開園し続けることを余儀なくされ、コロナ禍仕様の環境づくりや保護者対応などで多くの時間が費やされた。

私の勤務する園においても、園内での感染を少しでも減らすため、また万が一コロナの感染者が出た場合にもその周囲の子どもたちが濃厚接触者へ指定されることがないように各クラスへの空気清浄機の設置や、1時間ごとに窓を開けるなどの換気の徹底、クラスを越えての子どもとの交わりをなくすなどの対策を施した。

また、職員に関しても、マスク着用・手洗いの徹底、園内会議・研修などはすべてオンラインで（各クラスのパソコンからオンラインで全体会議に参加）など、さまざまな感染予防対策を立てながらの勤務を余儀なくされている。

### 幸いしたモンテッソーリの教育形態

そうした中、福岡市でも二度目の緊急事態宣言が出され、じわじわと近隣での感染者の数が増加していった今年の1月には、私たちの園でも保育士から数人感染者が出て、園を1週間休園しなければならないような事態が起きた。その結果、複数の職員や園児たちが濃厚接触者に指定され、指定者たちは2週間の自宅隔離を余儀なくされた。また、それまでの対策では不十分だということで、各クラスの机にもアクリル板を設置、給食時やお集まり時にも子どもを一堂に集めない、クラスをまたいでの交流をなくす、延長保育は各クラスで行うなどの追加の対策を講じた。また職員に関しても、休憩時間をずらす、休憩場所を複数確保する、職員間で飲食を共にしないなど、より厳しい条件のもとで勤務に当たらなければならな

---

なった。

しかし不幸中の幸いにも、感染者が出た直後の保健所の指導では、モンテッソーリ教育の形態が濃厚接触者の指定を大いに減らすことに寄与してくれることがわかった。派遣された保健師によると、「一斉保育の形態で保育を行っている園では、皆が集まって一緒に活動するので、クラスで感染者が出た場合には、もっと多くの濃厚接触者が指定される」ということであった。そして実際に当園ではその濃厚接触者の指定は最低限の数にとどまり、胸を撫でおろした。

## 今後の子どもの発達に関する懸念

さて次に、私が新型コロナ発生当初から懸念していた二つのことについて述べたい。

### 1. 言語発達の遅延

その一つめは、乳児の言語発達についてである。感染者の増加とともに、保育従事者もマスク着用が必須となった状況下で、周りの大人の話している口元を熱心に観察することによって自らの話す機能を確立させる子どもたちが、その発達のための環境を失ってしまうのではないかと懸念だ。幸い WHO（世界保健機構）から発せられた提言により、呼吸困難など発育上の問題、また世界的に子どもが感染した場合でも重症化にいたるケースがほとんどないなどの理由から、「5歳以下の子どもはマスクの着用を必要としない」としたことで、園の子どもたちへマスクの着用を強いることは免れた。しかしながら、一日の大半を共に過ごす大人の口元を子どもが長い期間にわたって一切見ることができなくなると、言語発達の途上にある特に3歳以下の「話し言葉」の発達の時期にある子どもたちにとっては大きな障害となる。園では、このことを非常に重く受け止め、口を隠してしまうマスクではなく透明マスクをするなど初期段階から工夫をしていたが、感染拡大がひどくなってくるとともに、やはり不織布マスクをせざるを得なくなった。乳児の言語発達、特に0歳児のクラスの子どもたちのことを思うと心が痛んだが、感染防止を考えるとどうしようもなく、現在に至っている。来年以降の子どもたちの言語発達に影響がないことを祈るばかりである。

## 2. 潔癖を促すことによる心理的影響

二つめは、ウイルスの感染予防に伴い、大人側が強迫的に消毒する姿を見せたり、子どもたちに必要以上に手の消毒をさせたりすることによって、また自分たちの恐怖心からウイルスのことを大げさに伝えるなどによって、子どもたちへ潔癖を生じさせてしまうのではないか、という懸念だ。コロナ禍という今の状況を考えると、皆で必死に除菌のための消毒・手洗いを奨励しなければならないのはわかるが、そのことによる子どもたちへの心理的影響、つまり潔癖症など強迫観念的なものの発症を促してしまうことになりはしないかということに危惧せずにはいられない。コロナの発生当初より職員たちには、消毒・換気をする際には大げさに騒ぐことなく、常に「さりげなく」徹底することを伝えはしていたが、それぞれの思いや性格にも差があることから、そのメッセージを職員がどの程度受け止め、実施したのかは把握し難い。もともと潔癖の気があるわが国において、このことにおける子どもたちへの心理的影響が最小限にとどまることを願いたい。

以上、コロナ禍における保育現場の状況やそれに伴う今後への懸念などを書いてみた。マリア・モンテッソーリは常に「心と身体の両面から子どもの発達や環境を考える」ことを示唆しているが、突然に訪れたパンデミックという状況下においても、この教訓は大いに役に立った。子どもたちの育ちの環境が後回しされがちなのような事態にこそ、心身両面における健やかな育ちをいかに援助していくかを常に念頭においた上で、さまざまな対応を考えることの重要性を再確認した。

---

## コロナ禍における保育・教育 ～「新しい人間」に期して～

和野 ともね

(富坂まきば保育園 園長)

コロナウイルス感染症の世界的パンデミックが起これ、コロナ禍という言葉が社会に急速に定着しました。保育園でも当初は登園自粛・休園がされるなど前代未聞の措置が実施され、現場は大きな混乱に陥りました。

毎朝の検温や頻繁な換気の上に、乳児保育という場で不可能であっても無視はできないソーシャルディスタンスという課題。また、思いつく限りの消毒作業はコロナ禍以前と同じ人員で続いています。また、保育士の中心世代は20～40代前で最も感染者数の多い世代ですが、テレワークとは無縁の仕事です。当園は都心にあるため行政の家賃補助を受けても園近辺に部屋を借りることは難しく、大多数が公共機関を利用し電車を乗り継ぎ、感染の危険を冒して通勤しています。

保育園は子どもの命を預かり守ることが最優先ですが、保護者の方たちの就労（社会的責任）を支えることも重要な使命です。この二つを同時に果たすことの難しさが常にあります。感染症対策で臨時休園中も、地域的に基幹病院が多いため医療従事者家庭中心に2割ほどの園児は毎日登園していました。しかし大多数の自粛をしている子どもたちのために園から絵本を贈ったり、担任からの手紙を折り紙を添えて送ったり、自宅でできる遊びのおすすめWEBサイトをご案内したり、誕生日を迎えた子どもには当日にお祝いの電話を入れるなど、休園中に心の距離が開かぬような配慮をしていました。

コロナ禍における施設運営の難しさとして園の行事の中止・縮小・変更を余儀なくされることもあげられます。直前まで判断がつかないことが多いことや、行事によっては保護者の方との間に感染症対策に対する温度差が生じることもありました。行事のご案内文には末尾に「尚、感染状況によっては大幅な変更・縮小及び中止も想定されますことをご了承いただき、その際は園の方針にご理解くださるようお願いいたします」という一文を添えています。しかし、大多数の保護者の方々の深いご理解とご協力に支

えられて今日まで来ているのは確かなことで感謝に堪えません。

正解の分からないままに感染症対策を迫られ、その時に最善と思われる判断・決断を重ねてきました。子どもへのマスク問題も、当初は表情や口元が見えないことによる特に乳児クラスの子どもたちの発達に及ぼす影響が懸念されていました。しかし感染が収まるどころか予想を超えて急増していくと、だんだん聞かれなくなっていきました。そして先日 WEB ニュースで【保育園で大規模クラスター「表情見せたい」と職員がマスク徹底せず】という題で配信がありました。メディアは一方的に断罪のような報じ方をしますが、その園の感染症対策の真相は分からないということが正直な感想です。

私たちはこの世界的パンデミック下で正しい沈静化の方向性を探り続けているのですが、保育（教育）するにあたり、子どもたちはこれからも先が読めない難しい時代を生きていくであろうと考えざるを得ません。今や社会の変化が穏やかな時代ではなくなっています。子どもたちが大人になった頃、また世界的パンデミックが起こるかもしれません。世界規模の紛争や大きな気候変動の影響を受けるかもしれません。私たちは子どもたちにどのような未来を期待するでしょうか。子どもたちにどのような知恵と力を持ってほしいでしょうか。

その問いの答えとして、私たちの個人的な価値観や個人の恣意によらず導いてくれるものとして、100年以上前のモンテッソーリが世に示した教育方法は灯台の光のようです。モンテッソーリが掲げた育ち方をした子どもたちに希望を見いだします。モンテッソーリは「新しい人間」の誕生として、「新しい人間は出来事の犠牲にはならないでしょう。明確に見通すことのできるその能力のおかげで、人間社会の未来を管理し建設することができるようになっているでしょう」と語っています。神に由来する力（ホルメ）により「弓を離れた矢のように真っすぐに、しっかりと力強く前進」していく子どもたちが未来を担ってくれたら頼もしいです。

ハリール・ジブラーンという詩人が「こどもについて」という詩の中で語っています。

「あなたは弓のようなもの、  
その弓からあなた方の子どもたちは  
生きた矢のように射られて前へ放たれる。

---

射る者は永遠の道の上の的をみさだめて  
力いっぱいあなたがたの身をしなわせ  
その矢が速く遠く飛び行くように力を尽す  
射る者の手によって  
身をしなわせられるのをよろこびなさい。  
射る者はとび行く矢を愛すると同じように  
じっとしている弓をも愛しているのだから。』

身をしなわせる大人たち、飛び行くこどもたち、そしてどちらも愛して  
くださる射る者がいてくださいます。

#### 参考文献

『子供の精神』

マリア・モンテッソーリ著 中村勇訳

日本モンテッソーリ教育総合研究所発行

2020年第7刷 (2004年初版)

『ハリール・ジブラーンの詩』角川文庫

神谷美恵子訳

角川書店発行

2003年初版

## コロナ禍での保育の取り組み

柳澤 ナオミ

(つづきルーテル保育園 園長)

園の立地する都筑区は、東京に隣接しており、都内勤務の保護者も多く、緊急事態宣言下では、自粛して下さるご家庭も多く、子どもたちの出席状況は約半数にとどまっていました。しかし、園児が自宅にいる間でも何か園としてできることはないかと職員と検討を重ね、いくつかの活動を実施しました。5歳児の課題としては、「日本地図作り」、また、「じぶんでつくる6さいまでのアルバム」を考えました。「じぶんでつくる6さいまでのアルバム」は、おうち時間を過ごすツールとして、自分がどう育ってきたのかをお父さんお母さんに聞きながら書き込んでいき、当時の写真を貼ったりして本を完成させる課題でした。

本稿では、「日本地図製作」活動を紹介したいと思います。

また、コロナ禍での卒園児からのお便りも紹介しておきたいと思います。在園中の保育がその後の成長にしっかりと根付いていると確信でき、心強い励ましとなりました。これからの成長を祈る園長の返信も添えておきます。

### 1. 5歳児の家庭で取り組む課題「日本地図製作」

①各家庭に配布する封筒には、以下の保護者への説明とともに具体的な資料を同封しました。日本地図全県のコピー（塗り絵ができるように白い紙に縁取りをしたものです）。手順と説明に関しては、具体的に以下のような内容を記しました。

- ・どの県は何色で塗るという見本（例えば、鹿児島県は赤色など）
- ・各県の名産品塗り絵。その他、親戚・祖父母の住む地の名産など自由に書き込む。
- ・県名を書き込む。
- ・色塗りが終わったら、地方ごとに切り抜く。例) 関東地方、東北地方など

②保護者が関わる内容について説明文を添えました。活動に対する保護

---

者の援助は重要です。この活動を促す際には、子どもが興味を持って取り組めるように、子どもへのインタビューを試みてくださることが大切です。具体的なインタビューとしては、次のような事柄です。

- ・自分の生まれた地、両親の出身地・祖父母の出身地・いとこの出身地

- ・どのような場所か、出身地の名産、有名なご当地グルメ

子ども自身が気づいた事柄から学ぶこともあるかもしれません。子どもからその他いろいろ教えてもらうかもしれません。子どもが家族との親しみを抱くような会話を交わしながら、一緒に楽しんでみてください。インタビューの事柄を受けとめ、自由に地図に書き込んでいけば完成です。

③園での公開を視野に入れた活動となります。各自の作品が他の園児との作品と合体することによって、さらに広く内容の深い日本地図が完成します。家庭での個々の活動を園で共有できる機会になると考えました。

具体的には、次のような活動を実施しました。

登園の際に水色の模造紙に日本地図を貼り、それぞれの名産品を県ごとに貼る。完成した地図はホールに貼りだし、それぞれが工夫した点、一番の見どころ、インタビューしていて面白かった点、発見したことなどを子どもと先生とでフィードバックしてみる。

色を塗ることに積極的でなかった子どもも、ご両親がテレワークでお仕事をしているのを見て、自分もお仕事をするのだと頑張った、また、ご両親はコロナ禍で会えない離れている親戚、祖父母と懐かしい昔話を交えて会話ができたことがとても楽しく、それをきっかけにフェイスタイムで電話することが増え、祖父母も喜んでいと聞きました。友達と会えない日々でしたが、地図を通してお友達同士の会話ははずみました。

## 2. 卒園児からのメール

高校1年生から夏休みにアルバイトに来てくれていた現在大学1年生の卒園児からメールが届きました。今年も来てくれると思っていた矢先にコロナの騒動が始まり、来られなくなってしまいました。そんな彼が不意にくれたメールです。(一部抜粋)

今日連絡しているのは、先生にお聞きしたいことがあるからです。つづきルーテル保育園では、3～5歳さんは朝の礼拝を行い、そこで、朝のお祈りをすると思うのですが、その中に、「お花のお心」という言葉が使われていたと思います。全文をきちんと覚えていないのですが、一昨年夏休みに行ったとき、子どもたちと一緒に祈りをしている、とてもすてきな言葉だな、と素直に思いました。柳澤先生には、朝のお祈りの全文、この「お花のお心」という言葉の意味、を教えてくださいたいです。

何故このことが気になっているかというと、先日読んだ本に、自分の中の原則、いわば憲法を持ちなさい、ということが書かれていました。そして、それは常に、自分の行動、発言、思想の中心に置くもので、自分の軸になるものである、とも書かれていました。そこで、僕も自分の原則を考えているのですが、ルーテルの「お花のお心」という言葉を思い出し、これを自分の価値観の中心に置きたいと考えました。そこで、引用元のルーテル保育園の園長先生にこの言葉の意味、込められた思いをお伺いしたいと思います。

私の返信として、以下のような内容を書きました。

#### 【朝のお祈り】

天のお父様 夕べもお守りくださいまして ありがとうございます。  
今日も一日お花のお心でイエス様をお喜ばせたいと思います。  
お父様やお母様やみんなを幸せに そうして世界中のお友達をイエス様の 良い子になれますように お恵みください。  
大好きなイエス様のお名前を通して お祈りいたします アーメン

このお祈りは、本園である大船ルーテル保育園からのお祈りです。(故松川理事長によると私が卒園した戸塚ルーテル幼稚園の園長が考えられたようです)。

大船ルーテル保育園は創立50年以上たっていますが、このお祈りはずっと変わらずに祈り継がれています。前理事長先生は亡くなられたのですが、通院したり、入院されてからの数カ月間はいろいろな話をしました。その際に朝のお祈りについて話をしたことがありました。

---

私も「お花のお心という言葉がすごく好きだな」と言ったことがありました。前理事長先生は「花はどんな心持ちの人にも優しさをもたらすんだ。その花を作ったのは神さまだから。花を見て憎しみを抱く人はいないだろう?」と言いました。

本園で過ごした月日の分だけ子どもたちの心に種が植わって、それがどんな花を咲かせるのかはその子次第。けれど、みんな違ってみんな良い、お花のお心を身体の片隅に置いて忘れずにいてくれたら、きっと世の中捨てたもんじゃなくなると私は思っている。

大きな地震が起きたり、コロナ禍になったり、大変な世の中でも、きっと大丈夫。そう確信しています。あなたがそう思ってくれたように。

さらに卒園児さんからの以下のような返信がありました。(一部抜粋)

僕は卒園式でろうそく当番を務め、ナオミ先生から壇上で卒園証書を受け取った時のことをよく覚えていますし、そのあとの卒園パーティーのような会でSMAPの「世界に一つだけの花」を歌った記憶があります。そして、卒園してから、小学生、中学生、高校生活を過ごし、一昨年、昨年と、夏にルーテル保育園に帰ってくると、子どもたち、先生方、建物、机、椅子など、すべてのものが温かく感じられました。やはり、「お花のお心」がしっかりと心の中にあるからなのだと思います。僕も「お花のお心」、大事にしていこうと思います。

## まとめ

コロナ禍で「できない事を考えるよりも、できる事を考えていこう」をテーマにしていきました。保育園をお休みしていても、自分は何かにつながっていることを意識できるようなもの、無理なくできるもの、そしてテレワークをしているご両親と一緒にお仕事をしているんだと子どもが励みに思うようなものを考えました。

会えない祖父母、親戚の皆さんともお話をして、自分なりの日本地図に仕上げていく工程が、家族、親族とのつながりを再確認できる良い機会となるであろうと想像をめぐらせ、子どもたちの笑顔を思いました。

卒園児から届いたメールはコロナ禍でありながらも、温かい心の交流が

できたことの喜びを皆さんにお伝えしたくて書かせていただきました。

こうした心の感性や情緒の安定は、やはり土台のモンテッソーリ教育の成せるものだと信じています。そして、このような時だからこそ、私たちも「お花のお心」を忘れずに、子どもたちと共に一日一日を、一人ひとりを大切にして過ごしていかなければいけないと改めて認識した次第です。

---

## コロナ禍と保育教育

森 純子

(認定こども園 聖ヨゼフ幼稚園 園長)

新型コロナウイルス感染症は、世界的なパンデミックとなり、私たちの生活を一変させる事態となった。その影響は、子どもたちと過ごす日々の保育にも及んだことは、言うまでもない。まだまだ予断を許さない状況が継続している中ではあるが、今回こういう機会を頂き、なんとかコロナ禍を乗り越えてきたこれまでの保育を振り返ってみることにした。

三密を避け、手洗い・消毒・マスクの着用など世間で言われる感染防止対策をどこまで保育現場で生かせるのか、また保育現場において感染拡大につながる要因がどこにあるか……など、当時、まだ得体の知れないウイルスにおびえながら感染防止に暗中模索していた本園が、まず一番に手掛けたことは環境の見直しであった。

子どもたちの接触をなるべく避けるために行った具体的なことは、机の配置換えや座席の固定化などに加え、持ち物の共有を少なくすること、つまり個人持ちの道具を増やしたことである。ピンクタワーや鉄製はめこみなどの教具は、どうしても共有しないといけませんが、例えば鉄製はめこみで使用する色鉛筆などの文房具については、個人持ちとすることとした。何種類もあった色鉛筆の瓶が鉄製はめこみの棚から無くなった時は、環境設定の変化により子どもの準備や片付けが変わったり増えたりすることで、特に幼い子どもにとっては、複雑な作業になるのではないかと心配もした。しかし、それが杞憂だったことが子どもたちの変わらない姿……むしろ前よりも生き生きとお仕事に向かう姿を通して理解することができた。子どもたちは、手元に置いたペンケースの中から好きな色をその場で選ぶことができることで、喜んで何度も色を変え、繰り返しの活動を楽しむようになった。また“私の鉛筆”という意識が生まれ、一層大事に道具を取り扱うようにもなった。その後も鉄製はめこみだけでなく、鉛筆を使うお仕事を積極的に行い、その度に引き出しからうれしそうにペンケースを持ち出す子どもの姿が多く見られた。鉛筆の芯が短くなれば備え付けの鉛筆削りで芯を削ることを喜んだ。これまでは教師によってなされていた

鉛筆準備だったが、子ども自身が『整える』ことに参加できるようになり、教師は週に一度の確認くらいで済むようになったことは、うれしい誤算となった。二年目となった今では笑い話にもなるが、当時は鉛筆を削る音がどの保育室からも盛んに聞こえてくるほどだった。このことはほんの一例にしかならないが、子どもはどんな状況に置かれても“一人でできるようになりたい”と願い、目的のために自分を喜んで使っていける存在であることを改めて感じる事ができた。

新しく取り入れざるを得ない生活様式の中でもまったく変えなくてよかったこと、むしろコロナウイルスに罹患しないための手段をすでに子どもたちが身に付けていたことに気づけたことがあった。感染防止に大いに役立ったこと……それは、日常生活の練習で獲得する『手を洗う』ことだった。入園間もない新入園児には丁寧に提供を行ったが、在園児については、感染防止のためという手洗いの目的を再度意識させるだけで、どの子もいつも以上に時間をかけて手を洗った。ここでもまた目的に向かう子どもの姿は、見事だった。

コロナ禍に感染防止のため示された手洗いの手順や方法が、女医であったモンテッソーリ女史が100年前に提供されたものと寸分変わらぬことは、モンテッソーリアンなら一目瞭然である。清潔感を身に付け、自己自身への配慮を目的とした手洗いは、100年前のパンデミック時にも多くの子どもの命を救ったことだろうと、当時の子どもの姿と重なった。

再び襲ってきたコロナウイルスというパンデミックにおいて、子どもたちが自身で自分の命を守る手段を持ち備えていられることは、モンテッソーリ教育の施設に通う子どもたちの大きな財産とも言えるだろう。改めて普遍的なモンテッソーリ教育の素晴らしさを感じる事となった。

コロナ感染拡大第5波による緊急事態宣言期間もようやく終わりを告げる現在、変わらず保育は行われているが、これからもしばらくは、食事中の子どもたちの会話や元気な歌声は取り上げられたままだろう。もう以前の生活様式には戻れないことは、誰もが分かっている。それを思うと大人はつい気持ちが暗くなりがちだが、不思議なことに子どもたちの表情は、コロナ以前とまったく変わらないように感じている。たとえ状況が変わっても、心の秩序が保たれる環境の下では、便利・不便など関係なく子どもたちは、いつもと変わらず“自分をつくるおしごと”に勤しむことができるたくましい存在なのだ、パワーをもらいながら実感している。

---

# COVID-19 に関する埼玉県からの通知と モンテッソーリ園の対応

高橋 修人

(学校法人小百合モンテッソーリ学園 理事長)

## COVID-19 に対しての埼玉県の評価とその対策

2019年12月13日、埼玉県総務部学事課は埼玉県内全域の私立幼稚園に対して、「インフルエンザ流行注意報に係る報道発表について」という事務連絡を出し、県保健医療部保健医療政策課からのインフルエンザ流行情報を基に県内各私立幼稚園に対しインフルエンザ感染予防対策を求めた。こうした感染症流行情報は毎年出されており、私立幼稚園側でも特段の危機感を持って捉えてはいなかった。

その後2020年1月24日に、文部科学省は各都道府県を通じて、「新型コロナウイルスに関連した感染症対策に関する対応について」という事務連絡を出し、必要に応じ新型コロナウイルス感染対策を講じ、園児、保護者および教職員にこうした情報を周知するとともに安全確保に細心の注意を払うよう求めた。しかしその内容は、「新型コロナウイルス関連肺炎に関するWHOや国立感染症研究所のリスク評価によると、現時点では本疾患は、持続的なヒトからヒトへの感染の明らかな証拠はありません。風邪やインフルエンザへの対策と同様に、咳エチケットや手洗い等、通常の感染対策を行うことが重要です」とあり、例年とは異なる感染予防感染対策を私立幼稚園に求める内容ではなく、前述の事務連絡にあるように通常の風邪やインフルエンザ対策と同等のものであった。

この時期埼玉県総務部学事課から通知されていたのは、「中国湖北省武漢市における新型コロナウイルスの肺炎の発生に関する注意喚起について」で「法人及び学校の教職員等が、海外に渡航している場合又は新たに渡航を予定している場合は、緊急時に備え必ず外務省が実施している『たびレジ』(滞在が3カ月以上の場合は在留届)への登録をお願いいたします」とした学校教職員らに対する注意喚起または、同年1月27日重要至急依頼にある「中国湖北省に在留している留学生等への帰国希望調査についての連絡について」とした大人に対する通知が多く発信されていた。翌28

日には、「重要 中国湖北省及び中国国内に在留している留学生等の状況について」という通知が出され、私立幼稚園に在籍している日本人園児、教職員らについて中国に滞在していることが判明している場合は、県総務部学事課まで至急電話で連絡するよう求めている。これは、当日政府による帰国希望者のチャーター機が準備されていたことに関連していたと思われる。

2020年1月31日、世界保健機関（WHO）は「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」を宣言し、翌2月1日より新型コロナウイルス感染症は、学校保健安全法（昭和33年法律第56号）に定める第一種感染症となった。この頃から万が一園児に新型コロナウイルス感染症が発生した場合の私立幼稚園の対応について事務連絡が出されるようになる。

2020年2月18日には、文部科学省私学行政課から各都道府県、私立学校主管部課、各文部科学大臣所轄学校法人担当課、大学を設置する学校設置会社担当課に対して、国内での新型コロナウイルスの感染をできる限り抑えるため、園児、児童、生徒たちに感染が発生した場合の出席停止及び臨時休業についての考え方が示されている。（文部科学省私学行政課、2020.2.18、重要事務連絡 学校における新型コロナウイルスに関連した感染症対策について）

2020年2月26日「学校の卒業式、入学式等の開催に関する考え方」、同年2月27日「各種スポーツイベントの開催に関する考え方について」、同年3月2日「新型コロナウイルス感染症防止のための学校の臨時休業に関連しての幼稚園の対応について」、同年3月19日「新型コロナウイルス感染症への対応を踏まえた学校法人の運営に関する取り扱いについて」が埼玉県総務部学事課からの事務連絡として出され、園運営についても感染防止対策が求められるようになった。その後も新型コロナウイルス感染症対策の基本的対処方針が文部科学省、スポーツ庁、埼玉県総務部学事課、埼玉県県民生活部から複数出されている。

2021年に入り埼玉県内の私立幼稚園に対する埼玉県総務部学事課からの通知は、そのほとんどが埼玉県教育委員会教育長からの市町村立学校に対して通知されたもの（教高指第1358号、2021年9月10日、埼玉県教育長緊急事態宣言期間延長後の県立学校の対応について）（教義指第706号、2021年9月10日、埼玉県教育委員会教育長に伴う市町村立学校

---

の対応について) に呼応して公立学校と同様の対応を私立幼稚園に広めるものになった。そして、それら通知内容のほとんどは埼玉県新型コロナウイルス対策本部会議で決定されたものであり、私立幼稚園が臨時休業する際の目安もこの時から示されるようになった。(学事第787号、2021年9月10日、埼玉県知事大野元裕、緊急事態宣言の期間延長に伴う私立幼稚園の対応について)

### モンテッソーリ園の運営上の変化と子どもへの影響

こうした行政からの事務連絡、通知に応じるかたちで幼稚園運営も変化した。2020年4月初旬から5月下旬は、本園も含め埼玉県内ほとんどの私立幼稚園は感染拡大防止のため、休園を余儀なくされた。

2020年6月に入り午前保育で運営を再開したが、バスでの登降園を実施していない本園では園児および保護者の密集を避けるため、年長児から年少児まで登降園に時間差をつけた学年別登降園システムに変更することとなった。その結果本来であれば正門から園舎、園庭まで180メートル程度あるアプローチを、年長児が保護者と朝離れられずにいる年少児の手を取って一緒に登園する姿が自然に見られたが、時間差登園で保護者が園舎まで連れてくるケースが多く見られ、年少児の受け入れに時間を今まで以上に要するようになった。一方でクラスでは先に年長児がモンテッソーリ教具を使用した活動を始めており、その環境の中に年中、年少児が入ってくるため、静けさの中でより多くの子どもたちが自己集中することができるようになった。

行動面では、手を石けんで洗うことがウイルス感染防止に有効であると知った子どもたちが、今まで以上に積極的にいろいろな場面で手を洗うようになり、子どもたちの中にモンテッソーリマインドが育っていることを感じた。たとえば手をよく洗う子どもたちの姿が見られる中、ひとりが費やす時間が長くなる場面が多くなったが、誰も文句を言わず順番が守られる。また特に教師が指示をしたわけではないが、3つある蛇口のうち、高いところにも手が届くようにと用意していたステップのある蛇口は年少の子どもたちのために、他の蛇口は年中と年長の子どもたちのためにと、子どもたち自身で小さなルールを作り、年長児は年少児に対して「あなたは小さいからそこにならんだほうがいいよ」と促すようになった。

モンテッソーリ教育の日常生活の練習「手を洗う」(Practical life exercise/Hand washing) ということに関して当初私たちは医療教育現場で使われている手洗いチェッカーやブラックライトなどの手洗い教育ツールを導入して、手洗いの効果を可視化することを考えた。しかし実際にはそのような科学的アプローチよりも、今まで行ってきた日常生活の練習における「手を洗う」という提供を丁寧に行っていくことの方が結果的に有効であることがわかった。なぜならば子どもたちは「手を洗う」という行為を、自己の自信に結びつく一つの大切な仕事として捉え、集中して時間をかけ喜びをもって手を洗っている姿に事あるたびに出会ったからである。

手を洗うということ以外には、検温、アルコール消毒、マスク着用など、それまでになかったことを日常的に行う必要が生まれたが、このことによって子どもたちの中に他への気遣いが強く見られるようになった。クラス担任が忘れていると、「今日は消毒がまだですよ」「検温はしないのですか」と誰かが気づく。また本園はカトリック園であるため、いろいろな場面で子どもたちは祈る。そうした祈りの中でも、「お休みしている子が、早く幼稚園に来ることができるよう」というような他者に対する祈りもパンデミック以降多く見られるようになった。

モンテッソーリ教育における教具の位置づけが、「教師を助ける教具」ではなく、「自己教育のための教具」であることをパンデミックを通して再認識された。

---

## コロナ禍において

力丸 敏光

(社会福祉法人 JOY 明日への息吹・子ども発達支援施設 joy ひこばえ)

昨年より新型コロナウイルスが猛威をふるい、現在、デルタ株による第5波が押し寄せている状況です。このような状況において、それぞれの園や施設・ご家庭などで、毎日、安全・安心に過ごすためにご苦労されていると思います。また、外出の制限や、密の状態にならないようにと行事や活動も多く中止や変更・制限されるという状況が続いているのではないのでしょうか？ そのような中でも子どもたちは、一人ひとりの成長に合わせて整えられた環境の中で活動して過ごしながら確実に成長し、自立に向かっていることでしょう。

私が勤務している施設では、子どもたちと過ごす生活の中で、マスクをつけていますので、顔の表情が分からなかったり、言語で話すときの口の形が分からない子どもたちへの影響はかなりあると思われます。また、活動するときに横に座り、子どもとの距離が近い状態にあるときには不安が大きく、感染のリスクも大きく、日々の支援者の苦勞と努力に感謝の気持ちでいっぱいです。さらに、給食の時には、唾液の飛沫などに対して席の配置や食事の介助など、かなりの配慮が必要でした。教具・教材・扉・イス・机の消毒についてもかなりの負担がかかっています。しかし、毎日登園してくる子どもの成長・発達を止めてはいけません。感染のリスクや恐怖心があっても、子どもたちと向き合い、支援していく強い覚悟で職員一同毎日を過ごしています。そして、緊急事態宣言が発出されている期間は、保護者が来園する行事をやめなければならなかったり、行事の内容も変更せざるを得ませんでした。そのような対策により、新型コロナウイルスが流行しはじめてから、現在まで感染者が出ていないのは、支援者だけの力だけでなく、保護者や地域の方々のご理解とご協力があったのおかげだと深く感謝しています。

大人の世界に目を向けますと、私たちの研修や会議はリモートやWEBなどで行われ、大会も同様に行われています。さらに各モンテッソーリ教員養成コースの実践提示においてもリモートで行わなければならない状況

と聞いています。新しい方法ではあると思いますが、その現場に集まって感じる雰囲気などはうまく伝わるのが難しいかもしれません。私はZoomやSNSの操作になかなかうまくついていけず、参加するのがやっとです。時代の進歩に遅れないようにしたいと思い、まだまだ学びは続きます。デジタル化が進む中ではありますが、子どもと共に過ごすときは、子どもとしっかり向き合い、観察し、動きや心情を読んで今の敏感期を感じ取り、援助・支援をする必要があると思います。AIや動画の技術が進んで3Dが高度に発展しても、人が共にいることの重要性を大切にしていきたいものです。そう考えて、子どもたちの環境を設定し支援するために、コロナ禍においては、気を付けなければならないことはたくさんありますが、この状況が落ち着くまでは頑張っていきたいと思います。

今年は、コロナ禍ではありましたが東京オリンピック・パラリンピックが開催され、世界各国のアスリートやそれを指導する人や応援する方々からたくさんの感動を受けました。その一人ひとりが持っている力を信じ、自己肯定感や自尊心をしっかりと育み努力していく姿は、幼児期から育まれるものであり、その意味においては、モンテッソーリアンとして子どもたちを育てていくことの重要性と重なるものを感じます。そして、オリンピック・パラリンピックは、世界の人々がいろいろなバリアを取り払って集い、それぞれの持てる力を出し合う平和の祭典でもあります。真の平和を望むモンテッソーリ教育に携わる私たちが子どもに「真の平和とは」ということを分かりやすい言葉や日々の生活の中で伝えていかなければならないと思います。そう信じて、このコロナ禍の困難を乗り越えていければと思っています。

---

## コロナ禍での保育についての報告

川満 すわ子

(社会福祉法人聖公会沖縄福祉会・聖マルコ保育園 園長)

2020年3月初旬、新型コロナウイルス感染症が拡大し始め、4～5月には国の緊急事態宣言が出され、園児の半数が登園自粛となった。目に見えない初めて遭遇するウイルスから子どもたちを守りながら行う保育は、三密（密閉・密集・密接）を避ける新しい生活様式の実践を徹底し、感染状況や園の実情に応じてさまざまな工夫が求められた。「行事はどうする?」「遊びは?」「お仕事は?」「食事は?」、日々、感染状況をチェックし感染対応マニュアルに対応する保育に追われることとなった。

まず始めに、対応を求められたのが卒園式。行事の自粛要請が出されたため、姉妹園や近隣の保育・教育関係機関の情報を収集しながら、卒園児を送り出し、年度の保育をなんとか締めくくった。その流れの中で迎えた新年度も、入園式を取りやめ、子どもたちの安全・安心を最優先に保育をスタートさせたが、何が正解なのか、確かな手立てのない不安や戸惑いの中で、創意工夫して保育することが求められた。

まず、三密を避ける保育を取り入れる中で、モンテッソーリ教育園として一番に考えさせられたのが、「教具による作業」の時間であった。その頃は情報も乏しく、マスクや消毒のための物品も不足して手に入れるのが難しく、教具を介して感染することの無いよう安心・安全を優先するため、やむなく「教具による作業」の時間を取りやめた。代わりにコーナー活動や戸外活動を中心に保育環境を整備し、子どもたちのやってみたいことを観察することに重点を置いて保育にあたった。その中で、子どもたちは遊びを工夫して自発的に生き生きと活動し、保育士たちへ取り組みの効果を感じさせてくれた。

自粛生活を余儀なくされた家庭からも、昆虫採集やベランダキャンプ、クッキング、制作など、実にさまざまな工夫で子どもたちを楽しませている様子が報告され、それをさらに園の活動に活かして子どもたちの「やってみたい!」気持ちを応援する取り組みを展開していった。中でも家庭で手作りした虫かごや虫取り網、採集した昆虫を持参して楽しむ子が増えて

いき、その流れは「夏の自然遊び」を企画・実行するまでに発展した。ついには採取した昆虫で昆虫図鑑を作るまでに至った子もいて、それがまた、子どもたちの遊びを展開させていった。その他にも、段ボールでの秘密基地づくり、水遊び、栽培活動、運動遊びと、いろいろ工夫し想像性豊かに遊ぶ子どもたちの姿が観察された。

また、マスクなどの不足に対応すべく手作りマスクを園から配布する取り組みを行うと、賛同した父母より手づくりマスクなどの寄付、続いて父母の会からマスク、ペーパータオル、消毒石けんなど感染防止のための物品が寄せられた。保護者の園内への立ち入りを制限せざるを得ない状況では、子どもたちの活動の様子の映像を玄関先で放映し、保護者との共有の場を作るよう工夫した。保育園と家庭の連携は、緊急事態の中、子どもの成長を支えようとする双方の願いが合わさって、よりスムーズに運ばれたと思う。

そうこうしているうちに、消毒のための機材や人的な配置も整備され始め、行政からの新型コロナウイルス感染症対応マニュアルも出され、感染防止の環境が少しずつ整ってきた。そこで「教具による作業」の時間を再開し、登園自粛中の園児へは教材の配布を行うなどの支援を行った。子どもたちは、コーナー活動や戸外活動、家庭での活動の経験を活かして、それぞれが「教具による作業」に喜んで取り組み、以前にも増して集中する姿が観察された。

その後、幾度も緊急事態宣言が出され、緊張した場面にも遭遇したが、その度ごとに子どもを注意深く観察しながら保育環境を作り、保護者と連携して取り組みを続け、感染対策を講じた。社会が目に見えないウイルスに混乱する中であっても、自らを成長・発達させる成長のプログラムで育つ子どもの本質は何ら変わらず、大人は動揺することなく子どものために環境を準備することを求められていると強く感じる。

改めて、「子どもを客観的に観察することによって、子どもを理解し、その生命を援助すること」に信念を持ち、平和を希求したモンテッソーリ教育法の真理によって導かれていることを実感する。また、コロナ禍で保育園の社会的意義もより重要視されることになり、保育環境の作り方や行事の在り方など、子どもたちの育つ環境について考える転換期になっているようにも思う。大きな環境の変化の中で、目の前の子どもたちに真摯に

---

向き合い、その手助けのために何ができるのか、モンテッソーリ教育園として問い続けていきたい。

何よりもまずは、一日も早い感染の終息を願いながら。

# コロナ禍での保育についての報告

末宗 希望

(学校法人村上学園 あさひ幼稚園)

## はじめに

新型コロナウイルス感染症の広がりや感染予防対策により、医療や経済だけでなく、多方面で影響が懸念されている。それは、幼児教育界においても例外ではないと感じる。いわゆる「3密」の回避、さまざまな行動の制限と管理が求められ、身体的接触はもちろん、時間や空間および体験の共有が難しくなった。この二年足らずの間に、幼稚園での活動にも多くの変更や見直しを求められることとなった。マスクの着用、手洗いや消毒、検温など、厳しい健康管理が必要になった。また、人との接触の機会を減らすため、多くの行事が変更や中止を余儀なくされた。日々の保育においても、戸外遊びや体操で密接を避けたり、歌や楽器の演奏に制限をしたりすることが必要になった。これまでの常識や前例が通用しない中で、今も悩みながら試行錯誤している。本園での取り組みの中から、いくつかを分かち合いたいと思う。

## 1. 子どもたちとの関わりの中で

### ①マスクの着用

飛沫感染防止のため、教師はマスクを着用し、子どもたちも、戸外遊びや運動的活動以外は、基本的にマスクを着用している。常時マスクをするようになって早くも二年近くになるが、鼻から下が隠れて目しか見えないのは違和感が拭えない。子どもたちと話をしている、互いの表情を顔全体で捉えることができず、心を通わせられているのだろうかかと不安になる。特に、相手の細かな表情の変化を理解することが難しい子にとっては、大きな不安となっているのではないだろうか。また、教師の話を聞く時に口の動きで読み取ることができないため、聞くことへの困難性が高まっているように感じる。

### ②食事

昼食では「黙食」を勧め、友達と会話を楽しみながら食事を味わう時間

---

ではなくなった。また、せっかく野菜を栽培しても、収穫後に「一緒に味わう」という活動が難しくなった。令和2年度の年長児の栽培活動では、自分の植木鉢(牛乳パックやオープン粘土で各自が作成したもの)で小松菜などを育て、家に持ち帰った。園でできないことがある分、保護者の協力を得るよう工夫することの大切さも感じた。

### ③作業

作業では、特に言語領域で口の動きが重要な作業に気を使う。お世話になっている先生からの助言もあり、通気の良い廊下に出て、教師が透明なマウスシールドに付け替えて作業をすることにした。しっかり伝わるように提供したいという思いの一方で、これでもし、何かあったらという不安と闘っている。また、クッキングやごますりの作業も、感染予防対策が十分にできないために現在も休止している。再開しようと計画するが、その頃にまた緊急事態宣言や県独自の集中対策などが始まり、再開が延期されるという状態が続いている。

## 2. 保護者や地域との関わりの中で

保護者や未就園児、卒園児など、外部の人を招く運動会や参観などは中止や規模の縮小をした。開催の際は、検温を徹底し、密集を避けるために各家庭からの参加人数を制限している。

行事の中止によって、保護者が園での子どもの様子を見る機会が減った。また、各家庭からの参加人数を制限したことで、両親・祖父母・兄弟姉妹といった家族でその子の成長を知ってもらう機会が持てなくなっている。

さらに、幼・保・小連携推進事業においても、幼稚園と小学校の子どもたちの交流が難しくなり、地域との交流に制限が出ている。

実施した行事については、ただ例年どおりの実施方法にするのではなく、年齢ごとに時間差を設けて分散したり、内容を厳選して実施する項目を絞ったりすることにより、子どもたちが今までよりも落ち着いて参加することができたものもある。何が子どもたちのためなのかを考える良いきっかけになったと思う。

## おわりに

本来、人は互いに関わり合って生きる性質をもっている社会的な存在である。それにもかかわらず、人と離れるように言わなくてはならない現実、「子どもたちの発達にとってこれで良いのだろうか」と自問する日々が続いている。生命への畏敬や宇宙の秩序に反し、排他的で自己中心的な思考を伝えているのではないかと不安になることもある。しかし、このような時だからこそ、「新しい教師」としての私たちの在り方が問われ、モンテッソーリ教育の良さが示される時なのではないだろうか。子どもたちが生命の法則に従って成長する自由を保障すること、それをかなえることができるのが、普遍的な生命の秩序に基づくモンテッソーリ教育の良さである。「新しい教師」としての私たちの使命は、今できる最善の環境を整え、生命に仕えることにあると考える。

作業を通して自己を確立し、他と調和して生きることを知った子どもたちは、きっとこれからの時代にあって、一人一人の内側から平和を体現してくれることだろう。先の見えない今の時にあっても、たくましく育っていく子どもたちの姿を前にし、明るい未来を期待している。

---

# 保育 with コロナ

田村 澄子

(学校法人小百合学園 小百合幼稚園 園長)

2019年末にニュースでコロナという病名を初めて耳にした。その時はまだ遠い存在と受け止めていたが、その後急速に身近に迫ってきたことに戸惑いながら、まずは発信している情報を集めることにした。2020年4月から1カ月間の休園の後、新しい生活様式を基にマスクの着用、検温、消毒、手洗いの徹底、常時換気を行った。

新たな取り組みの中でさまざまな子どもたちの姿が見られ、その姿から私たちが気付かされたことを挙げる。

## 1. 黙食

コロナ禍で日常生活に取り入れた新しい取り組みに「黙食」がある。園では以下のことを行った。

- ・食事中は会話をしない
- ・パーティションの設置
- ・食事中に音楽を流す

今までは子ども同士で思い思いに会話をしており、お互いの顔を見て楽しみながら食事をしていた。しかし、黙食を取り入れることで会話も減り、パーティションを置いたためお互いの顔も見れない。健康に過ごすために必要なことだが、子どもに黙って食べることを強制するのではなく自然に取り入れることができるよう職員で話し合った。

黙食を取り入れたことで落ち着いて食べることができるようになり、食べこぼしが減ったり、完食までの時間が短くなったりと良い影響が見られた。また、「キャベツが甘い!」「(噛んだ時の) 野菜の音が面白い!」と目をキラキラさせて発見している子どももいた。

今までは周囲に向いていた感覚が、黙食がきっかけで自分の内面に向き、味覚や触覚が敏感になったのだと思う。コロナウイルス感染症で不安や心配の声がよく挙がるが、どのような状況でもお恵みがあることを感じ、そ

のきっかけを拾うのも見過ごすのも教師次第なのだと改めて教師の役割に気付かされた。

## 2. 横割り活動（音楽）

現在、体操や音楽などの横割り活動は密にならないように分散して行っている。ある日の音楽活動で職員が学んだことがあった。

### 〈事例〉

最初のグループの子どもたちが、楽器（サイロフォン）でリズムの違うところに難しさを感じ行き詰まった。そこで、関わっていた教師は次のグループの時にリズムの違う箇所だけを孤立化し練習をした。それぞれのリズムを練習した後、できるようになったところを合わせると無理なく演奏することができた。子どもたち自身も難しいリズムをできるようになったことで喜びを感じ、自信につながったようだった。

この出来事を通して、難しい部分だけを取り上げ「孤立化」すること、できるようになったことを合わせて増やしていくことなど、モンテッソーリ教育は提供法だけでなく日常生活やさまざまな活動で活かされることを改めて感じた。分散で活動していたからこそ、気付いたことをすぐ次のグループで実践することができ、教師の学びとなった。

## 3. パラリンピック

今年行われたオリンピック、パラリンピックではさまざまな感動があった。子どもたちも家庭でよく見ていたようで、開会式で見たさまざまな国名を両親に聞いたり、国の場所を自分で調べたことを教えてくれた。世界に興味を持った子どもたちは、園で地図や国旗のお仕事を選択して活動を続けている。

年長組の子どもたちとオリンピック・パラリンピックについて感じたことを分かち合った。子どもたちからは以下のような言葉が出てきた。

- ・車椅子で転んでもすぐ起き上がる人がいてすごかった。
- ・足がなくても最後まで一生懸命泳ぐ人たちがいた。
- ・心が強いから苦しいことがあっても頑張れたのではないか。

---

・口でラケットをくわえて試合をしている人がいて驚いた。

テレビでパラリンピックを観るまで、障害のある方に実際に会ったことがない子どもたちが多く、初めて知った時には「かわいそう」と思う子どもいたようだ。しかし、その力強い姿や諦めない心に触れることで尊敬の気持ちへと変化し、子どもたちも「もっと頑張りたい」と勇気をもらっていた。また、自分たちが五体満足で生まれてきたことへの感謝の気持ちも芽生えるなど、生き方の素晴らしさを視覚・聴覚を通して感じることができ、周囲への関心も変化したように感じる。

ここまで子どもたちが刺激を受けたのも「四年に一度のパラリンピックが日本で行われた」ことが大きいのではないか。

今回、コロナウイルスやオリンピック・パラリンピックという大きなきっかけがあり子どもたちと分かち合うことができたが、日々の中にも子どもの心を育む種がたくさんあると気づかされた。その種を見逃さず、生きた教材とすることで私たち教師も子どもたちも共に成長することができるのではないか。

コロナはいつ終息を迎えるのか不安に思う日々だが、必ず解決できる日を信じていきたい。コロナ世代の子どもと呼ばれているが、今だからこそできることを経験し、小さな出来事にも感動し、やり遂げる達成感を感じてほしいと願っている。喪失感だけの世代にならないように、私たち大人は努めてくことを投げかけられている。

## コロナ禍での保育についての報告 ～コロナ禍 2020<sup>+1</sup> in NAGASAKI ～

池田 洋子

(長崎純心大学附属純心幼稚園 園長)

2020年3月14日、長崎県内で初めての新型コロナウイルスの感染者が確認され報道されました。ここから県内の専門機関は目に見えて大きく動き出し、国や長崎大学・関係機関・事業者などが連携して感染対策に本格的に取り組み始めました。

本園でも感染防止のために施設内外の衛生管理の検討を行い、会議を繰り返しました。目前だった2019年度の卒園式も式全体の内容の変更を余儀なくされ、職員はもちろん、保護者の中にも言葉にならない大きな緊張が走りました。式はこれまで経験したことのない緊張の中で行われ、時間短縮のため短くした園長挨拶も途中言葉が詰まってしまったほどでした。

2020年度の始園式は全体集合を避けて放送で行い、入園式も時間差で2グループに分けて行いました。子どもの生命(いのち)の安全を第一に考え、新学期のクラス懇談会は保護者会とも検討を重ねて中止。保育室でお預かりしていた未満児のお子さまもすべて玄関で保育者が受け入れる体制に切り替えました。

そして4月17日、全国に「緊急事態宣言」が発令。長崎市では三菱重工長崎造船所香焼工場に停泊中のクルーズ船「コスタ・アトランチカ号」から新型コロナウイルス感染者が確認され、市内への感染防止をするために専門機関の支援が続きました。未知の世界の中でさまざまな情報が行き交いましたが、自粛して家庭で過ごす子どもたちとつながりを絶たないようにと連絡アプリを使い、「お家時間」を使って楽しめる教材を先生たちで準備し提供を続けました。アプリではお祈りや制作物の制作方法、体操などを配信し、クラス担任からのメッセージも伝えました。

5月6日までの「緊急事態宣言」の期間中は、スクールバスを運休。保育の必要性のあるお子さまを対象にうがい、手洗い、換気など、安心安全の観点に十分配慮しながらお預かりし、教職員は交代で勤務に当たりました。

---

5月11日からは分散登園の午前保育を実施し、スクールバスを運行。同月21日から全園児を通常に受け入れる体制を整えました。食事の時間の三密を避けるために1号認定のお子さまには各家庭からのお弁当持参を保護者に依頼しました。子どもたちにとって楽しい昼食の時間も、やむをえずできるだけ「黙食」を促しました。この頃には幸い低年齢の園児への感染はほとんどないとの情報を信じ、同月末からは状況を見て、通常保育を開始しました。

また、翌6月からは、園庭開放を人数制限の予約制で再開。予約は1時間もしないうちに定員オーバーし、緊急事態宣言の間、行き場を失った子育て中の保護者とその子どもたちがどれだけ多かったことかと、認識させられました。

夏のお泊まり保育は宿泊施設の閉鎖に伴い急きょ「Aさんスペシャルデー」と企画変更。いつもと違う年長さんだけの時間を特別なものにしてようと職員で準備をし、当日を迎えました。隠されたカードを探しながら園内を隈なく周り、十人十一脚など、クラス対抗のゲームで盛り上がった後は、冷たいアイスのおやつ。夕食には高級ホテルのディナー曲を流し、ウェイトレス役の保育者に、座席案内やメニューの説明、接待を受けた子どもたちは満面の笑顔を見せてくれました。日が暮れての花火で終了。お帰りの時間は帰りたくないと言き出す子どもたちもいるほどで、「最高に楽しませて帰そう！」と職員で一致団結した企画は想像以上の反響でした

運動会の練習が始まると、1学期の長い自粛生活のためか園児の体幹の弱さが目立ちました。体力的にも暑い中での練習は、短時間でも集中することが難しく、新入園児を迎えてクラス単位での整列を経験することなく自粛期間に入ったことも、子どもたちに困難点を与えることになりました。例年ない配慮や工夫を必要とする練習となりましたが、このような時だからこそ、体を動かすことの少なかった子どもたちにとって意味のある活動になったのではないかと思います。9月末の運動会当日は観客の制限を行い、学年別に時間差を設けて実施することができました。

感染拡大の第2波が訪れ始めた秋のバザーは中止となりましたが、12月のクリスマス会は感染防止のために働く医療従事者のためのメッセージを子どもたちと職員が作成し、大学生のボランティアグループを通して医療機関に届けていただいて、コロナ禍で苦しむ世界中の人々と心をつなぎ

献金をおささげしました。会の閉幕後は保護者会の協力で登場したサンタクロースに子どもたちは大喜び。思い出深いクリスマス会となりました。

年が明けた1月26日、園関係に陽性者が確認されました。会議を開き、1月28日は自主的に、29日・30日は長崎市行政の指示に従い臨時休園としました。幸い園内関係者は全員陰性で2月は通常保育には戻りました。

そして、コロナ禍で緊張の2回目の卒園式を迎えた3月。通常の教育・保育に戻ってからも継続して「感染防止のため自粛」として通常保育に登園できないまま卒園した園児がいたことも事実です。コロナ感染症の対応に追われた一年でしたが、少し立ち止まり振り返ると、いつの間にか人間の心を育てる大切な言葉を意識化することなく、挨拶も形だけのお辞儀だけになることもあったことに気付きました。そこで、目を合わせ心からの挨拶を交わすことの喜びを子どもたちと一緒に思い出し、見直す時を持つことができました。今年度は行事などへの対応以上に、笑顔を忘れず子どもたちの日常の生活を大切にしていきたいという思いで保育をしています。

---

## コロナ禍での保育

前田 瑞枝

(洋光幼稚園 園長)

卒園式を目前にした2020年2月末、新型コロナウイルス感染症予防対策として、春休みまで一斉休校の要請が出た。幼稚園はこの対象外ではあったが、多くの子どもと教職員が室内で長時間過ごすことによる感染リスクを考えて自由登園とし、卒園前の行事の中止、変更はやむを得ない状況であった。お別れ遠足や、年長組最後の参観日、懇談会、お別れ会などはすべて中止とした。直前まで広島県の感染状況を見ながら決定を延ばしていた卒園式だけは、式場の窓を全開すること、一家庭2名まで、短時間で済ませるなどの工夫をした上で何とか挙行することができた。

4月例年は、園庭の桜が満開になる頃、進級の喜びいっぱいの子どもたちと共に新入園児を迎え、明るい気持ちで始める新学期も、感染予防に精いっぱい心を配ることを知らせるプリントを配布することで始まった。登園前の検温、園舎に入る前の手の消毒、必ずマスク着用、予備のマスクをカバンに入れておくことなど。また換気のため保育室園バスなどの窓は常に開けていること、お弁当は気候のよい時期なので晴れている日は園庭で食べることにし、室内で食べる場合は対面ではなく横並びにする、クラスの集会も今までのように教師のまわりに集まるのではなく、保育室全体に広がることとし、子どもたちがとても楽しんでいたお当番活動や配膳は、机の消毒をすることを始めとし、すべて教師の手ですることにした。しかし、細心の注意を払って始園したにもかかわらず、4月20日から5月31日まで事実上休園、預かり保育のみということになった。この期間仕事を持つ母親も協力的で、数名の子どもを預かるだけで、密を避けることはできた。

休園中は、子どもたちや保護者との心のつながりを大切にするため、教師からの一言や、自粛中でも家庭でできる活動を絵入りで具体的に書いて子どもたちに送った。親子で楽しくお散歩できるよう「おさんぽビンゴ」を作ったり、家事の中で子どもができる部分が考えられるようヒントを書いて、生活の中で随意筋、五感を使うことを促した。

5月末まで休園の予定だったが広島県の感染状況を見て、5月18日から分

散登園を試み、6月1日から登園を再開することができた。

モンテッソーリ教育は幸い、ほとんどが個別活動なのでおしごとの点ではあまり問題なく活動がすすめられた。ただ日常生活練習の中で子どもたちが喜んでしていた「野菜を切る」やお友達と一緒に活動して楽しんでいたカレー作りやポトフ作りはやめた。また気温が上がってきたので年長組の昼食は級から抜けて、ホールで一方方向に並んで食べることにした。縦割りクラスなので、年長組だけホールに移動して全体の密を防ぐという方法はスムーズにできた。黙食にも慣れてきて、「お弁当いっしょに食べようね」「うん、離れていっしょに食べようね」。昼食の用意をしている年少組の子どもからもこんなかわいい会話が聞こえてくるようになった。

子どもたちの活動の中で難しかったのは、言葉の聞きとりであった。マスク越しなので発音ははっきり聞きとれないということが起こってきた。新しい言葉、はじめて聞く国名、数詞など、「うん？」と聞き返す言葉が目立った。もちろん歌を歌う機会も減った。また何となく例年と比べて低迷していた木琴も、一度マスクをはずして階名唱をしてみると、何の迷いもなく演奏できるようになった。

もう一つ困難を感じたのは保護者とのコミュニケーションである。顔を合わせる機会も減った上、表情がわかりにくく、特に新入園児の保護者とは例年になく距離感を感じた。また感染が広がり始めた一学期は、職員の間にも不安が強く、何もかも中止にしたいという空気が強かった。毎年一学期末に行うお泊まり保育もやめる方向に流れそうだった。確かにやめてしまえば安全で、考える必要もない。しかし体験をすることで自分を育てていく子どものことを思うと園長としてできるかたちを探りたかった。バスの台数を増やす、宿泊施設の協力で全館貸し切り、宿泊の分散、食事も横並びとし、自由参加にした。一人の欠席者もなく、川遊び、キャンプファイヤーなどの自然体験を楽しむことができた。また、この年は園の創立70周年の年でもあった。式典など何もできないでいる私たちに代わり、「保護者から見た洋光幼稚園記念誌作り」の提案が卒園した保護者からあり、企画・原稿集め・編集などをすべてをお任せしてすばらしい記念誌ができ上がった。園と共に歩んでくださった卒園生の方に深謝した年でもあった。行事の見直しもできた。このような状況の中でも、私たちは希望を失わず、コロナだからできないではなくコロナの中でもできることを考え、子どもを守りたい。仲間と知恵を出し合い、力を合わせて乗り越えたいと願っている。

## コロナ禍を振りかえって——九州支部——

関 聡

(九州支部長)

令和3年9月25日付での九州の新型コロナウイルス感染者は以下のとおりです。

県名	感染者数	死者	県名	感染者数	死者
福岡	73,648	606	佐賀	5,709	29
長崎	5,949	71	熊本	14,202	134
大分	8,020	81	宮崎	6,104	41
鹿児島	9,037	64	沖縄	49,321	297

新型コロナウイルス感染症は COVID-19 が正式名称ですから、始まりは 2019 年でした。九州で感染が拡大したのは 2020 (令和 2) 年の春でした。4 月 7 日に緊急事態宣言が発出され福岡県もこれに含まれました。緊急事態宣言の対象は 4 月 16 日には全国に拡大されました。これが最初の緊急事態宣言です。そして今、2021 (令和 3) 年の 9 月の福岡と沖縄には 4 回目の緊急事態宣言が発出され、熊本・宮崎・鹿児島には、まん延防止等重点措置がとられています。いまだに with コロナ なのか without コロナ なのか予測が付きません。

今回の第 5 派と呼ばれる感染拡大は私たち保育の場に大きな脅威となりました。「デルタ株」の猛威です。デルタ株の特徴の一つは感染力の強さで、もう一つは若年層への感染です。福岡県では、10 歳未満の子どもの感染者数が第 4 派 (アルファ株) の 4 倍を超え、3 千人をすでに超えています。学童保育や保育園は子どもの成長を支えると同時に家庭の福祉を守るという使命があります。しかし、福岡県において臨時休園した保育園は、令和 2 年度の一年間で 95 施設だったのに対し、令和 3 年 4 月～8 月だけで 229 施設、8 月は 131 施設でした。九州支部の会員の幼稚園や保育所の具体的な被害——例えばクラスター——を九州支部長が把握しているわけではありませんが、園内の感染防止・保育時間の短縮・行事の縮小など、そ

それぞれの園で多大なご苦労が今もあると思います。

私の所属する養成校の幼稚園においても、①園児および保育者のマスクの着用、②教室の換気、③密を避ける、④健康管理の徹底、などに努めています。毎日緊張の連続だと思います。養成校においても、授業期間の短縮・リモート講義・実習の中止・行事の縮小などの措置をとっています。とくに実習の中止や延期は保育者養成にとって大きな痛手となっています。コロナは人と人を分断する感染症と言われてはいますが、教員と学生、学生同士のコミュニケーションを図る上で大きな障害であると感じます。このことは保育の場でも同様で、笑顔やアタッチメントの制限された保育は、保育者にとって大きな壁のように感じていることでしょう。

明るい情報もあります。ワクチンの接種です。全体の接種率も上がってきていますし、九州でも保育士や幼稚園教諭の接種はほとんど行きわたっているようです。子どもの感染源はほとんどが家庭ですから、これから子どもの保護者の世代（20代・30代）のワクチン接種が進むと子どもたちの感染拡大は防げるのではないのでしょうか。家庭内にウイルスを侵入させないこと、これが感染症から子どもを守る第一の方策だと思います。

保育者の笑顔が子どもに伝わり、保育者や子どもたちの歌声が教室に響き、園庭に子どもたちの歓声上がる日が、一日も早くやってくることを祈ります。また新型コロナウイルス感染症でお亡くなりになった方のご冥福と後遺症に悩む方のご回復をお祈りいたします。

そして新型コロナウイルス感染症が私たちに教えてくれたもの——人々の絆・自制心の大切さ・差別をゆるさない心・科学的な目——などは私たちが子どもに伝えなくてはならないものだと思います。

最後に、コロナ禍のため1年順延となり、さらに大会史上初めてとなるZoom ウェビナーによる大会を感動的に成功させていただきました四国支部の皆さま——乾実行委員長様、久万副実行委員長様、岡村事務局長様、吉村事務局員様、そして実行委員の皆さまとお手伝いくださった先生方——にあつくお礼を申し上げます。ありがとうございました。

---

# コロナ禍の中での中部支部研究会について

村田 尚子

(中部支部長 愛知保育園)

2020年度の中部支部の年4回の定例研究会は、コロナ禍の中で対面研究会を実施していくのは難しい状況でしたが、コロナ感染予防を図りながら、学びの手は決して休めてはいけないとの思いから、書面発表を2回、リモート研究会を2回行い、会員の皆さまとの学びの機会を継続して参りました。

## 1. 2020年9月 書面発表交流

「保育者は、この間新型コロナウイルス感染拡大とどう闘ってきたか。今後ウイルスと闘いながら、保護者の労働権、子どもの発達権をどう保障して行くべきか？」 新型コロナウイルス感染症について学び、野並保育園・瑞穂子どもの家、しおみが丘保育園、聖心幼稚園、たきこ幼児園の3～8月の取り組みとその中で学んだこと、これからの構えを出し合い、互いに学び合いました。

- ・「コロナ禍中で明らかになった命とくらしの実態と、改善への提言・行動についてのいくつかの報告・紹介」と問題提起 野原由利子先生
  - ・「新型コロナウイルスおよび世界の識者の提言についてのまとめ」  
「野並保育園での3月から8月の取り組みとその中で学んだこと、これからの構え」 野並保育園 田中かおり先生
  - ・「コロナ禍に於ける、瑞穂子どもの家での対応」  
瑞穂子どもの家 森下京子先生
  - ・「新型コロナウイルス感染下における保育園の役割について学んだことと、これからの課題」 しおみが丘保育園 酒井教子先生
  - ・「聖心幼稚園のコロナ禍の取り組み」 聖心幼稚園 水野英子先生
  - ・「汐見稔幸先生保育セミナー コロナ禍、前と後～これからの保育のありかた～」 たきこ幼児園 小林奈々先生 村田尚子
- \*モンテッソーリに学ぶ園では、感染予防対策を十二分にしながらも、子どもたち、保護者たちのために最善の努力をしてくれていることを確

認し、具体的な工夫を学び合うことができました。

## 2. 2020年11月14日(土) 午後1時半～4時半 リモート研究会 モンテッソーリ教育の全体像について

瑞穂子どもの家 森下京子先生

モンテッソーリ教育の全体像の講義の中で、発達観・児童観について具体的に瑞穂子どもの家での活動の様子を聞かせていただきました。

- ・自然の中で色を学ぶ ・植物の根っこ、葉っぱを学ぶ ・フウセンカズラの種を数える ・ジャガイモの収穫と大きさ分け ・みかんの数から全体数を知り、割り算をしていくなど、子どもたちが直接体験を通して認識・理解を深め自分のものにしていく様子を紹介していただきました。

〈参加者の学び・感想〉

- ・実体験がなくなってきたが、体験の中で子どもたちが興味をもって活動できたらよいと感じている。まずは、園庭にお花を植え、自然を感じられるようにしていきたい。
- ・子どもの活動の中に含まれている目的を理解して、子どもたちに何をどう援助していくべきか適切な判断をするのが難しい。

## 3. 2021年1月 書面発表交流

「縦割り保育の導入にあたっての今までの取り組み、そして今後の課題や方向性をさぐっていく」

瑞穂子どもの家、聖心幼稚園、野並保育園、たきこ幼児園、の縦割り保育実践報告および武石協子先生によるアドバイスとまとめ

- ・「3歳以上のクラスへの移行」 瑞穂子どもの家 森下京子先生
- ・「縦割りでの伝承の重要性の気づき」 聖心幼稚園 水野英子先生
- ・「令和2年度 野並保育園の4、5歳児の実践報告：縦割り保育を見据えた今までの取り組みと今年度の実践と課題」

野並保育園 田中かおり先生

- ・「令和2年度 本園たきこ幼児園たてわり保育実践報告」

たきこ幼児園本園 松岡あい先生・山中梓先生・村田尚子

「令和2年度 分園たきこ幼児園たてわり保育実践報告」

たきこ幼児園分園 小林奈々先生

- 
- ・まとめ 「縦割り、異年齢保育で育つ力」たきこ幼児園 武石協子先生
  - ・資料提供 「国連子どもの権利委員会新型コロナウイルス感染症に関する声明」
  - \* コロナ禍の中で保育、行事の取り組み方などの実践を共有し学び合う中で、異年齢児の関わりを通して子どもたち同士で育ち合う環境の重要性を確認することができました。

#### 4. 2021年6月12日(土) 午後1時半～4時 リモート研究会

「モンテッソーリの「コスミック教育」の理解と私たちが受け継ぐべき使命について」

副題：第一次大戦、第二次大戦下のモンテッソーリとガンジー、そして1942年ガンジーからの「すべての日本人への手紙」の背景にあった日本の歴史的事実を振り返る 講師 野原由利子

二つの大戦の経験とインドの東洋哲学との出会いにより、モンテッソーリはコスミック思想に到達、コスミック教育の重要性を提唱しました。モンテッソーリとガンジーには、深い相互理解と協力関係がありました。1942年ガンジーによって「すべての日本人への手紙」が寄せられた時代、日本はどのような状況にあったのか、1931年から1945年の15年間、日本の指導者たちが犯した他国民への加害と自国民に強いた犠牲の事実を再確認することで、多くの犠牲者への贖罪と平和への誓いによって産み出された「日本国憲法」の意義も鮮明になってきます。年表に沿いながら、歴史の事実を確認し、改めて私たち日本人が受け継ぐべき「コスミック教育の内実」を再確認することを試みます。

〈学び・感想〉

- ・ 今回の研究会では、マリア・モンテッソーリの時代背景にある世界と日本の歴史を振り返りながら、現在私たちはどういう立ち位置にいるのかを考えさせられた。「真の教育は、平和武器である」という言葉が心に響いた。そこには、世界の真の平和を守りたいという思いが感じられた。平和を心から願う日本国憲法と第9条の大切さがよくわかりました。これからの世界を生きていく子どもたちの生活、心が豊かになるように、平和を愛する子どもになるために、平和を愛する大人が側にいることが大切なのだと思いました。

\* 今後も、中部支部研究会の活動がより充実したものとなりますように、

会員の皆さまのご意見、要望をお聞きしながら運営、計画、広報に努め、  
学びの灯を絶やすことなく継続してまいりたいと思っています。  
2023年の全国大会は中部支部担当となります。三重、岐阜、長野、  
静岡、山梨の会員の皆さまのご活躍とご協力を期待しています。

---

# コロナ禍と保育・教育で 変わらないこと——変わること

高根 澄子

(横浜モンテッソーリ幼稚園 園長)

## 1. 変わらないこと：「観察」から「集中現象」へ導く

自分の子育てを通して、幼い子どもの人間形成に関心が芽生え、モンテッソーリ教育に惹かれました。上智モンテッソーリ教員養成コースで学びました。その後町田の国際コースで学び、さらにイタリアのペルージアやローマやベルガモのコースでモンテッソーリ教育の真髄を探求し続けてきました。

この2、3年、世界中で人類の生存を脅かしている新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、私にとって、いろいろと考えさせられる機会になり、1896年にモンテッソーリが医師としてのキャリアをスタートさせた頃を思い出させてくれたように思います。「ああ～、マリア・モンテッソーリが医学者としてキャリアをスタートさせた頃、医学で何が基本なのか？」を今、再認識させられたのです。

どういことでしょうか？ 医師は患者を「診察」します。診察は医師としての課題を果たすための出発点。モンテッソーリは1907年にローマの終着駅近くの via dei Marsi で小さい子どもに接するようになった時、診察してたようにまず「観察」をしました。観察はモンテッソーリ教育の基本です。保育・教育では「子どもの観察」が大切だ、そして「子どもから学ぶ」という基本中の大基本を、新型コロナ感染症で保育の現場が右往左往していても、確認させてくれたように思います。そして私たちはモンテッソーリの教育原理である「集中現象」へ導かれ、子どもの命に援助できる幸せにあずかれるのです。

この原稿を書いている今、横浜モンテッソーリ幼稚園に「田園調布学園大学 子ども未来学部 子ども未来学科」の望月隆之先生が見学実習生を連れて来られました。先生はご挨拶後に帰られましたが、見学実習の学生さんはモンテッソーリクラス編成の3歳児、4歳児、5歳児の縦割りクラスを熱心に観察しています。

## 2. コロナで変わったこと：保育の形式

横浜モンテッソーリ幼稚園では、2020年3月の卒園式を午前と午後の2回に分けて行いました。保護者も、卒園式の行われた会場には卒園児とお母さんが、お父さんは2階のバルコニーに椅子を置いて出席していただき、3密回避の工夫を図りました。もちろん、部屋の換気をよくして、マスク着用と手指消毒も。

4月8日から、幼い子どもの成長を妨げないよう、また、新たに園に入ってきた小さい子どもの命を守るため、努力・工夫しながら、保育を実施する予定でしたが、9日と10日の2日間は平常保育を行いましたが、休園せざるを得ませんでした。しかし4月20日～5月末までの4回、ご両親のご協力をいただき、保育内容をドライブスルーで取りに来てもらい、子どもの夢を壊さないように教材を送りました。3歳児のため、4歳児のため、5歳児のためと、それぞれの子どものお家でできる教具や教材です。配布された各々の教具・教材の資料で子どもは自宅でお仕事をしたり、制作物を作ったりしました。お母さんは、わが子の制作物を写真に撮って、幼稚園のメールアドレスに送信しました。そこには、「わが子と共にいろいろなことができ、とても勉強になりました」という言葉が添えられていたりしました。コロナ感染症はお母さんにとって、学びというチャンスを与えることになったのです。

6月1日からは、半日保育を行い、午前と午後に分けて、実践しました。13日には、入園式を午前と午後に分けて実施しました。15日以降は、半日保育から通常保育へ徐々に戻し、1学期を無事に終えることができ、そしてその後、年度内に平常保育を行うことができました。

## 3. ドライブスルーの配布資料の事例

「5歳児 あおぐみ」の配布資料 第1頁は次のとおりです。

・4月9日

はさみ切り	うずまき	あひる	おんなのこ
クロスステッチ	とんぼ	じぶんでかく	
かずあそび	かずのりょうだけ	いろをぬる	
	かずのりょうだけ	しるしをかく	

・4月20日

---

はさみ切り      ワカメ  
クロスステッチ      こいのぼり  
おりがみ  
てんもじ      つ・く・し・こ・い  
あぶらねんど

・5月20日

おりがみ      こいのぼり      カーネーション      メダル  
きか      かたちのしょうかい  
                 えんけい      せい三かけい      せいほうけい      ちょうほうけい  
てんもじ      ひ・る・く・ま・こ・う  
こうさく      ふんぶんどま

・5月27日

きか      三かけいのしょうかい  
                 三かけい (みず色のかみ) をきり      ぶるいしてはる  
こんちゅう      すこしそとにでて      さがしてみましよう  
                 ちょう      あり      だんごむしのしょうかい      かんさつして  
                 みましよう  
てんもじ      あ・り・と・ま・く・つ・し・の  
こうさく      けんだま  
かいが      おかあさんのかお  
たいそう      がんばりカード  
                 バランス      ふっきん      はいきん      たいけんしたらシール  
                 をはる  
きょうざいをうけとりにきて      えんていにおいたフープにスルー  
おんがくにあわせて?      みんなとからだをうごかしましたか?

## 新型コロナウイルス感染症での保育

板東 光子

(亀田平和の園保育園 園長)

幸いにも、園児も保護者も職員も感染することなく、今日まで無事に過ごしています。緊急事態宣言が出された昨年の5月の時も、保育園は一日も休むことなく、子どもたちはいつものとおりの生活を送りました。やむなく取り止めたのは、親子遠足・全園児そろっての「お楽しみかい」、3・4・5歳児での料理活動・保育参観と懇談会。年長児の心の成長に欠かせない行事は形を変えても実践しました。例えば「お泊まり保育」。さすがにお泊まりは中止にして、夕方5時～8時まで『宝さがし』『ちょうちん行列』『キャンプファイヤー』『食事会』『花火』等々……目いっぱい楽しみました。2学期からは、参観・懇談会は再開しました。ただし、保育室に入れる人数は4～5人とし、時間も例年の半分ぐらいにしました。運動会は例年近くの小学校の体育館を借りてしていましたが、今年は3歳未満児と全保護者の参観なしで行いました。子どもたちの活動を見たいという保護者は大勢おられましたが、専門の業者にビデオを撮っていただくことで、了解してもらいました。クリスマス会は、当園では一番大切な行事です。特に年長さんは聖劇をつくりあげていく過程で、素晴らしい心の成長を遂げていきます。はじめは先生の後について、どの役を何回してもいいよ、からスタートし、11月の末には一人ひとり自分としっかり向き合って、自分のやりたい役を発表します。ここからが本番です。先生は子どもたちに、なぜその役を選んだのか、聞いていきます。このために4～5日かかります。でもこの間に子どもたちの素晴らしい心の動きを毎年見ることができません。今まで引込み思案だった子がキチンと自分を主張するようになったり、他人に譲るという体験を初めて自分からした子、救い主イエス・キリストがこの世に生まれてくるためには、どの役も大切。皆で聖劇をつくりあげようと、子どもの心は高められていきます。このひと月の間に、担当の先生は子どもの心の動きを7～8回にわたって保護者にお知らせしていきます。今年は3歳児以下の簡単な出し物と、4・5歳児の「光の式」と「聖劇」に分けて、前半は3歳児以下の保護者、後半は4・5歳児の保護者に

---

見てもらいました。3学期になり参観と懇談会は年長だけにし、「私のアルバムづくり」と、保護者には「歴史の中心にいるキリスト」をいたしました。卒園式は卒園生とその家族2名に限定して行います。会食を伴う謝恩会はいたしません。

新型コロナウイルスはなかなか手ごわいですが、一日も早い終息を願って、当園の実情を書きました。

## コロナ禍での保育

木村 悦子

(愛珠幼稚園 園長)

令和2年2月27日退勤時間間近、「全国一斉小中高休校」の知らせを聞いた。徐々に感染拡大のニュースが入り、2日後の保護者会を中止にし、代替りの文書を大急ぎで用意していた時であった。

卒園まで2週間余り、このまま年度末を終わらせるわけにはいかないと、急遽卒園式までの保育をどのようにするかの話し合いを行った。年長児にとって卒園前の2週間は大事な総仕上げの時間である。お別れ遠足は泣く泣く中止の対応はとってはいたが、やはり卒園式は何としても行いたい、という思いだった。そのため翌週2日間は預かり保育を含め、通常どおり行い、その後、年長を中心に卒園式の準備と年中少児との簡単なお別れの日を数日作り、卒園式は年長児と保護者1名のみ参加、時間も短縮で行った。人生最初の卒業、きちんと区切りを付けることの重要性は、延期を余儀なくされた東日本大震災の時にも強く感じたことである。

4月、緊急事態宣言、出勤7割削減など世の中も自粛の流れとなっていく。学校同様、幼稚園も引き続き休園が決まった。新年度に向けて教職員で何度も話し合いを行った。職員室での話し合いは、分散、リモートなど形を変えていった。いつ再開できるか不明な中、まずは休園中に、マスクやフェースシールド、消毒液、サーキュレーター、パーテーションなど、再開にあたり必要となるものを用意できるかが当面の課題だった。手作りできる物は作り、各自薬屋を何軒も探し、ネットで少しでも安い物を探した。

区役所や卒園生、取引業者から、少しですがと消毒液やマスクを分けて頂けた時は、本当にありがたかった。掃除、消毒の方法も細かく確認した。

休園中、全家庭に電話をかけ、園児や家庭の様子を聞いた。ほとんどは家で時間を持て余している様子であった。日程を分散して、書類配布・提出などの日を設け、書類とともに家でできる教材を年齢別に用意し渡した。園庭に机を出し、マスク越しだが子どもたちの顔を見ることができて、教師も安堵した。例年より遅い朝顔の種も個別に植えることができた。

4月の入園式が、5月の連休明け、さらに5月いっぱいまで延期、とう

---

とう冬服を一度も着ることなく、6月夏服での入園式となった。

入園式は、午前と午後の2回に分け、保護者1名のみ参加で行った。それ以降、保育も基本縦割り4クラスを学年でも分け、他のクラスと接触が無いように、机も距離を取り、子どもが触った教具は一つずつ、教師が消毒をしてから、棚に戻す、という方法にした。そのため各時間、消毒選任の教師を配置した。

その時は、何が正解か分からず、ただ恐怖だけがあり、文科省や区から次々と送られてくる資料を読みながら石鹸や消毒液など必要な物を探し、資料を参考にしながら、換気と掃除の仕方を確認していた。以前、インフルエンザが猛威を振るい、二度めの休園になった時から、門前で手の消毒を行っており、園児たちにも習慣づいていたこと、2カ月分ほどの消毒液が手元にあったことは幸いだった。

リスク回避のための検討もさまざま試した。4人掛けの机を一人で使用、机に名札を置き、席は固定。本来じゅうたんで活動するものも、極力机上で行った。水を使用する活動も当面中止した。

大人の緊張が子どもにも伝わるのか、子どもたちは、マスクをきちんと付け、会話もほとんどせず、異様なほど静かな新年度のスタートだった。個別に、静かに自分の選んだ物を行うモンテッソーリの活動は、このような状況下においては通常の活動の仕方と大差なく、影響は少ないようにも思えるが、実際は大きく異なった。子ども同士はもちろん、大人への問いかけにもためらいがある。人との距離を保つことは、心の距離も隔てていくように感じた。新入の3歳児1クラス8名ほどに、簡単な体操をしようと教師が見本で前に立って行った。教師が一生懸命動いても、ほとんどの子どもたちが棒立ちとなっていた。さながら、先生のワンマンショーである。そこで、別の部屋で活動していた年長児2名ほどに来てもらい、教師と一緒に見本をしてもらった。すると、年少児たちも同じように体を動かし始めた。小さなお手本の重要性を実感した。そこから、やはり入園直後の年少児には、しばらくやめていたお世話を再開することにした。子どもたちが、マスクの着用の徹底や騒がずに動くことができていることが大きい。そこから、年少児の表情も和らぎ、園内での自然な交流が見られると同時に、年少児が本当に園に慣れていく姿が見られた。

「新しい生活様式」となって一年半。東京は常に感染者数全国1位が続く。

現在は保育時間を通常に戻し、物の消毒より、手の消毒に重点を置いた。お食事当番や手作りの料理など、いまだに再開できない活動はある。お泊まり保育は二年連続で中止となった。ワクチン接種のできない幼児の集団。令和3年9月現在も、東京は緊急事態宣言中だが、すべての保育が自由に伸び伸びとできる日が来ることを願うばかりである。

---

## 「コロナ禍での保育」以前とはどう違うのか ～沖縄と離島での保育について～

照屋 勝枝

(学校法人カトリック学園みつば幼稚園 園長)

思い起こせば2020年2月1日に沖縄に寄港したクルーズ船ダイヤモンドプリンセス号がその後「横浜港停泊中で船内感染拡大」のニュースが届き緊張が走ったのを覚えている。多分その頃はまだ、宮古島の多くの人が遠い横浜での話としか受け止めていなかったであろう。この小さな島に感染の波が広まるのに時間はかからなかった。介護施設でクラスターが発生し、全国で初めて自衛隊の医療班が派遣され事態の收拾が行われ、県内で最悪な状態に最初になったと報道されることとなった。もう、遠いところでの話ではなくなった。すぐさま、本園でも文科省のガイドラインに則り、感染予防の手洗い、手指の消毒、家族全員の検温、マスク着用、消毒の徹底と換気環境見直しを行った。それから二年近くの月日がたとうとしている。机の側で山積みになったコロナ関連の文書を見ると、誰に聞いても答えの見えなかったその頃の状況を思い出す。

本園は沖縄本島から南に300キロ離れた離島にある私立のカトリック幼稚園で、保護者はどちらかといえば他県からの移住者が多い。ワクチン接種やPCR検査がまだ十分実施できていなかった去年は、保護者の中には島外県外への渡航が頻繁にあるため、仕事または島外来客を迎えたご家族には幼稚園を二週間休んでもらう対応を行った。その結果、二週間の家庭保育児が日ましに増え、登園する園児数も常に一定ではなくなった。それまで保護者に「子どもにとって生活リズムの安定が大切です。見通しができるようになると安定しますよ」などと伝えてきたが、コロナ禍では、三度の急な臨時休園、家族や本人が体調不良になれば園を休む子が増えて、「安定した日常の保育が見通せない」のは大人だったと思う。ともかく子どもの命の安全を守ることを考えていた。

このコロナ禍では、子どもたちがこの時期に行われるであろうと心待ちにしていた行事も急に取りやめになってしまったことも多くあった。

保育室の環境も大きく変わった。クラスの人数は密集を避けるために

35名から20名程度に減らすためにホールと空き部屋での分散保育を行った。その部屋には教具はなく、(子どもたちはワクワクし感情が動けば声は自然に出てしまうのに) 大声を出さないように気をつけながらの運動、絵画制作、リズム活動に変わった。モンテッソーリ教具を使ってのお仕事の時間が減り、「野菜を切る」「お茶を入れる」「クッキング」など、飲食に関する作業もお休みになった。食事は分散で行い、お集まりはスペースの確保のため教具棚を毎日移動させ、時間差で行うことにした。

運動会は取りやめ、少人数での体育参観を三週間の期間を設けて行った。参加する保護者は検温と体調管理のカードを提出し、手指の消毒、ご両親のみの参加でそれぞれが離れて参観。「応援は無言で大きな拍手を」と呼びかけた。最初は緊張感が漂い堅い雰囲気だった保護者も、子どもたちのどんな時でも自分自身への挑戦を続け、今を精いっぱい生きている姿を見ているうちに、次第に応援の拍手があふれ、会場全体が温かい雰囲気に包まれた。その体育参観では毎回最初に年長児が保護者を太鼓演奏で歓迎した。沖縄の伝統芸能であるパーランクーという太鼓で踊るエイサー『ミルクムナリ』は、平和の世の中がやってくるようお願いをこめて自然の神様と信じられているミルクに祈り踊るという意味がある。子どもたちの舞いには『コロナがなくなるように願って、お父さんお母さんに元気をプレゼントしたい』という気持ちがあふれていて、今振り返ると、その時会場全体が切実な「平和」への願いで一つになっていた。

卒園前になると年長児は、お母様をお招きしてお茶会を行う。例年は一席に約13名のお母さま方が同席するのだが、昨年は「一人ずつでのお茶のおもてなし」に変更した。(コロナ前にお茶を入れるお仕事を十分にしていた子どもたち。個室、個別で抹茶を点てることをしていたので、この挑戦は可能だと判断し実施した) 目の前で抹茶を点てるわが子の姿に心から喜び、ゆったりとした時間を楽しむお母さま方の姿があり、子どもたちも「私のためにお母さんが来てくれてうれしい」という気持ちをこめ、真剣な表情でお茶を点て、お母さんとの時間を楽しんだ。また茶会終了後は、一人ひとりの保護者と担任が子どもの成長を分かち合い喜びあえた。ところでこの茶会では、コロナ対策の分散保育実施で部屋数が足りず、階段下の小さなコーナー(畳二畳ほど)を即席茶室に見立て行うことにした。そこは入り口のドアもなく、他の園児にも、そこで行われている様子がよく

---

見えるコーナーで、年中・年少児は興味津々な様子だったが、茶室での親子の特別な雰囲気を感じて、誰一人として邪魔することなく、そっと覗きに来ただけだった。この「見たいのに邪魔してはいけない」という良き協力者たちのおかげで、親子の大切な時間が守られたことに感心した。そしてこの小さなお茶会は「一人ひとりを大切にする」という具体的な形を私たちに教えてくれた。

コロナ禍だからこそできたことも多くあった。以前から願っていた少人数保育ができたこともその一つだ。これまで変えられないと思っていたことも、変えざるを得ない状況になり実際行ってみると、工夫次第で実現できることを体験した。限られたスペースと職員数の中、コロナへの対応策をできる限り行い、常に職員で話し合い、一つのチームで乗り越えてきたと思う。保護者にも理解をしていただくために、電話での声かけや、家庭訪問を行って子どもの安心のために保護者と職員が連携を取りながら、互いに励まし合って、コロナ以前よりも意識して相手を思いやる声かけをしていた一年だったと思う。

4月は急な休園になり、がっかりしている子どもたちを励まそうと職員が手作りして届けた製作キットで子どもたちが作ってきた沢山のこいのぼりを6月の幼稚園再開のしるしに園庭で泳がせた瞬間に、「ここは子どもの庭。戻って来てくれてありがとう」という思いがあふれてきた。

## コロナ禍での保育・教育

米山 美智子

(聖イリナ・モンテッソーリスクールこどもの家 園長)

2021年4月、皆さまの温かな赤誠のもとに創立40周年を無事迎えることができました。2020年頃から突如として世界中に蔓延したコロナウイルス感染症により、保育環境はさまざまな行動および活動の制限を余儀なくされました。当園におきましては、特に以下のような変更を行っており、大半のものは現在に至るまでその実行に尽力しております。

- (1) 第一回緊急事態宣言の発令に伴って当園は2カ月の休園措置を行い、その間子どもたちには在宅でできるモンテッソーリ教育活動の発送を行いました。
- (2) 2カ月の休園日数は、その後、数カ月に渡り土曜・祝日を開園にして完全に補てんしました。
- (3) 個人使用できる机や椅子の数を増やし、なるべく密を作らない保育を心がけました。
- (4) 職員間はもちろん、子どもたち間、子どもと教師の間においても、三密とソーシャルディスタンスを常に念頭に置き、可能な限り実践しました。
- (5) 手洗い・うがいの強化・教具および環境の除菌消毒の徹底・清掃の強化に努めました。
- (6) 昼食時は1つのテーブルに1人子どもが着席し、黙食を促しました。
- (7) 保護者の方へは子どもたちの毎日の検温を依頼し、子どもたちには可能な限りのマスク着用をお願いしました。

### 1. 職員に関して

私たち職員はそれぞれに、外出することができないコロナ禍のこの現状を天から頂いた貴重な時間と捉え、例えば、子どもたちの作品整理や新たな教材作り、海外のモンテッソーリアンと保育状況を共有し合うなど、子どもたちのために在宅時間を費やしました。

特に最初行った2カ月の休園期間において、カンブリア紀から新生代の

---

中で生命の年表に登場する生物の特徴について、園にある既存の説明文を作成し直しました。それに加えて5つの脊椎動物の特徴と説明文、さらに現在園で飼育している魚・エビ・植物などの生物の説明文や、身近な生き物の説明文などを新たに作成しました。それらの活動は今もなお、子どもたちが自己選択の中で毎日コツコツと活動し集中することができる、園の重要な環境の一部になっています。

## 2. 行事について

当園の諸行事については、以下のような変更を余儀なくされました。

- (1) 2020年度の年長児について、コロナウイルスの蔓延によって、2月に行われるはずであった国立科学博物館への卒園遠足は実行できず中止となりました。
- (2) 2020年と2021年の夏、集団感染の観点から年長児お泊まり保育も実行できませんでした。——子どもたちが楽しみにしていたお泊まり保育が中止、食事作りも中止、高尾山への遠足も中止。その代案として、“夕涼み会”と題して近くの川まで子どもたちを連れ出して生き物を採集したり、簡易なレクリエーションゲームを行ったり、夜に花火をしたりして子どもたちは尊い時間を満喫しました。
- (3) 2020年の運動会については、保護者が観覧にいらっしやることによる集団感染のリスク軽減のため、完全換気のもとで子どもたちを横割りにして室内で体操教室を行いました。開催にあたり保護者からの賛同の声も少なからずあったのですが、全体を通してあまり芳しくない反応でした。それを受けて、今年度2021年の運動会はさまざまな対策を講じつつ公園で行いました。例えば、緊急事態宣言発出中の折であったこともあり、特に音響は常に最小にして近隣住民への配慮を行い、保護者の観覧も自粛して頂いた上で無観客開催で行いました。緊急事態宣言解除後に運動会を延期する案もあったのですが保護者からはあまり望まれず、緊急事態宣言中に開催することによる近隣の方々への徹底した配慮も求められる中、実行に移すまでの意見交換は苛烈を極め、保護者間でも亀裂が生じてしまうこともありました。テレビや新聞などで報道される感染情報と現実環境のはざままで物事を決定することの難しさ。何が大切なのか、

どこに基準を置くのか、今まで“当たり前”に行われていたことを改めて決め直すことの難しさなどを痛感しました。しかし、運動会の写真や動画を保護者の方に発信したり、緊急事態宣言解除後に降園時間を一部用いて小運動会を行ったりして、保護者の方が子どもたちの成長をご覧になれる機会を適宜設けたことで、皆さまから非常に喜ばれましたことが印象的でした。

### 3. 子どもたちについて

コロナ禍における、当園の子どもたちはどうだったのでしょうか。

世の中がどのような状況下にあっても、朝しっかりと登園し、身支度を整え、環境の中から自分のやりたいお仕事をを選び、特別な不安も動揺もなく、平常心のままにコロナ禍の保育を理解し、新しい清潔管理の方法はすぐに習慣づきました。

しかし今年度である2021年の新学期保育開始当初は、年少児童が非常に多い状態でのスタートとなりました。新規の子どもたちはもちろん各々入園前に吸収してきていることをそれぞれに持っておりますが、それが園で顕著に表面化してしまう子どもも少なからずおり、自分のイメージで教具を扱ってしまうという場面が多々見られました。事例として、特に“円柱さし”や“赤い棒”、“数の棒”などを電車に見立てて部屋中で「ガタンゴトン！」と大騒ぎをすることがあり、また、一人の子どもの行動が全体に伝播してしまい歯止めの効かない大声や動作となってしまうなど、この傾向からはなかなか抜け出すことができず、私たち保育者を悩ませました。

そのような折、たくさんの方の教具に触れて月日を重ねるうちに、少しずつ子どもたちの中に変化・変容が生じ始めました。地図や数活動、生物の説明文や、塗り絵などのお仕事に夢中になり始めたのです。先述しましたが“生物の説明文”の活動においては、まだ文字が書けない小さな子どもたちはライトボックスを使ってなぞり写しをし、自由に文字が書ける子どもたちは自分の力で説明文を書くなど、子どもたちは自分なりのやり方でお仕事に臨み集中していました。子どもたちは「アメンバーのお仕事をやる！」と言っていますが、このお仕事に関しては、私たち教師が特に勧めたりすることもなく完全に子どもたちの自主性に任せています。

集中することを知った子どもたちは、半年くらいかけて“教具”や“お

---

仕事”と真剣に向き合うことを知り、いつの間にか“赤い棒”や“数の棒”もそれぞれの目的に沿って用いるようになっていきました。コロナ禍に在る制限の多い保育の中にも、子どもたち一人ひとりの大きな成長を垣間見ることができました。

## 新型コロナウイルス感染症とモンテッソーリ教育

佐々木 和美

(群馬県富岡市 NPO 法人かぞくサポート)

2019 年末から新型コロナウイルスが広がり始め、現在も混乱が続いている。

一週間に二日塾の講師として、日曜日に働く保護者の方のニーズに応えるため保育士としてこども園に勤務している。モンテッソーリこども園に通う子ども、また、平日は他の園に通園されている 0 歳から 5 歳までの子どもを保育している。活動は 0 歳から 5 歳までの子どものクラス分けなく一斉保育である。保護者の方もシングル・マザー、看護師、食事を提供する店を営業者と果樹園を営む家庭とさまざまだ。

### 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 流行の中で

日本は「子供の相対的貧困率」14.9%で、31 カ国中 22 位（下から 10 番目）となった。貧困率は高いと言える。(UNICEF “Report Card 10” 2012) 現状では 7.2 人に 1 人の子どもが相対的な貧困の中で生活をしている。「相対的貧困率」とは、世帯所得が中央値の 50% 未満の世帯で暮らす子どもの割合で、相対的な所得の貧困を示す。養育者は、貧困や低所得に起因するさまざまなストレスで児童虐待の件数が増加している。

2015 年の等価処分所得の中央値は 224 万円その半分の 122 万円未満（親子 3 人で約 211 万円未満）が相対的貧困に相当する。1980 年代半ばから少しずつ増加し、2015 年には日本の人口の 15.6% が相対的貧困に相当する。(人並の生活が困難なレベルである)

新型コロナウイルスの影響は、単家庭の貧困率は 5 割以上である。シングル・マザーの家庭は貧困に陥るリスクが高い。子どもを持つ女性の就業率は上昇しているが、年齢に関係なく正規雇用率は低くパート・アルバイト率が高い。コロナ禍で仕事を失う女性が多い。

子どもの問題として学校では、子どもたちは大声を出すことは禁止されている。新型コロナウイルス感染症流行の前は給食のときに向き合って楽しく会話をしながら食事をしたが、黙食と黙って食事をする。

---

早稲田大学の外山紀子によると、家庭では孤食（ひとり食べる）の増加、乳幼児栄養調査結果では、生活にゆとりがない家庭は、摂取頻度の高い食べ物菓子パン・菓子、インスタントラーメン・カップ麺である。健康面でも問題である。<sup>(1)</sup>

こども園では、保育士はマスクを着けているので声の聞き取りにくさ、表情が分かりにくい乳幼児の成長にどのように影響していくのだろうか。例としては、叱っていても分かりにくい、伝わらない。（喜怒哀楽）おしゃべりを始める子どもは保育士の口の動きも見えないので言葉の発達にも影響があるのではないか。

保護者は、パート・アルバイトの就業時間の減少、コロナ離婚という言葉もある。

医療費や食費の削減を余儀なくされている。事例では出産を控えた女性がおむつや粉ミルクを買うお金もないということで子ども食堂に来た。子ども食堂ではおむつや粉ミルクを用意した。

リモートワークによって都市と田舎の学習できる環境の差はなくなりつつあるが、経済の二極化は起きている。田舎では人口の減少、フランチャイズの塾が閉鎖している。貧困家庭では、家庭でインターネット環境も経済的に整えることが困難である。また、多くの親、子どもたちが学び、楽しみ、外の世界とつながるためにデジタル技術に頼っている。オンライン授業や、ソーシャルゲームやオンラインゲームなどでコミュニケーションをネット上でとっている。乳幼児にもスマートフォンやタブレットを与え子守をさせている。ネット依存。NHK 番組ディレクターの大石寛人によると子どもの眼球などが伸びてしまう「軸性近視」が増加しているという。新型コロナウイルス感染症流行をしてからでは悪化している。<sup>(2)</sup>

## 貧困を防ぐために

女性の自殺、子どもの自殺が増加している。（非正規雇用の雇止めなど）

子どもが置かれた社会的な状況がさまざまな経路を経て子どもの心身の機能に影響を及ぼし、その累積によって発達に影響する。

将来、就労し生計が立てられる基礎学力（学力、社会性、技術の修得など）を子どもが身に付けるようにする（貧困環境に陥らないために）。

低所得者世帯への児童手当、補助金を支給する。貧困世帯への現物支給

食糧給付、住宅、医療、衣料などの調達。子ども食堂や、無料学習支援、住宅、医療、食料、粉ミルク、衣料、おむつ、良質な保育・教育環境の提供が大切である。無料の学習支援。生理用品の支給。

空き時間を利用し野菜作りをしている。今年からたくさん収穫をできたものは地域の子ども食堂に無償で提供している（貧困環境に渦中の子どもへの影響緩和）。

子どもへの影響につながる親への支援も大切である。例えば、ひとり親家庭限定で地域を超えて知り合いをつくる、親同士の会。子ども食堂にシングル・マザーも参加し、生活の困りごとにも相談できるようにする。

子どもの場合は、大学生などに学習支援など勉強を教えてもらい、その悩みを聴いてもらえるようにする。

令和2年度の相談数は205,029件で過去最多を更新。虐待死事例は78名（0歳児が49.8%）。

加害動機は、保護者自身の精神疾患、精神不安、経済的困窮などである。子どもの面前DVの警察通報事例が増加の一因となる。

G県T市は中核都市である。2025年度に市独自で児童虐待増加を受け、虐待事案発生時に駆けつけやすい場所に、判断や責任、権限を一元化することでより機動的、迅速に対応、行動できるとみて市独自の児童相談所を開設する方針を決めた。2020年に虐待を受けたとみられる男児が死亡した事件があった。

## まとめ

COVID-19は私たちの社会に大きな影響をもたらした。そしてこれからも、もたらしてゆくであろう。人は環境をいかに体験するか、から学ぶ。

京都大学の宮孝之によるとこれからも新しいウイルスが控えていることを覚悟しなければならない。新型コロナウイルスをめぐって世論が割れているが、動物も植物も細菌もウイルスも地球上の生き物で相互作用しながら生きている。ウイルスがなければ人も動物も進化しなかった。地球環境の中で変化し続けていくのである。<sup>(3)</sup>

モンテッソーリは、生命が決して淀むものではなく常に成長し変化するものであるという前提だった。新型コロナも人間の進化の過程の体験である。

新型コロナ時こそモンテッソーリ教育が大切である。モンテッソーリ教育

---

は生命の教育である。子どもたちがいかに多くの知識を身に付けるかが重要なのではなく、生命そのものをいかに見るかという見方が大切なのである。

モンテッソーリ教育は、生命そのものに対する畏敬と尊敬の念を持つことが重要である。生活、文化、社会のあらゆる面において、幼いうちから学習されるべきである。大人の仕事は人間的価値観を発達させる機会を創り出すのである。その環境で子どもは、子どもの性格、感情、心、知識などが一体となって結び付けられる。モンテッソーリは、弟子の方たちほど、仕事と遊びとかを区別して強調せずに、淡々とした姿勢で、仕事・作業が子どもたちに持つ意味を端的に説いており、子どもは自発的に喜びをもってその仕事に取り組み、環境に準備されたさまざまな声を聞き、自らの力で自分自身を育てていく。子どもを取り巻く世界から意識的に調整することに気づける。彼らのパーソナリティーを適応・形成・具現化していく可能性をもって生活できる。

小さいうちから、貧富の差に関係なくお仕事・作業が安心して集中できる場が重要である。

作業の中で環境を変えることは、次の活動を選択し、自律することだが、ゆずり合い協調することもできるようになる。環境から自らの力で自分を育てていくに違いない。<sup>(4)</sup>

乳幼児の頃から貧困の連鎖を断ち切るためには心を落ち着けて取り組む習慣を身に付けることが大切である。良質な保育・教育環境の提供である。

養育者には、ストレスを軽減できる場や話を聞いてくれる人が必要である。

新型コロナウイルス感染症流行の中、東京オリンピック・パラリンピックでの陸上のガイドランナーのように、親や子どもの周りの人が地域で子どもを見守り支え、将来に向かい寄り添うことができる保育士の一人として共に進化してゆきたい。

## 参考文献

- (1) 外山紀子 (2008) 『発達としての共食』新曜社。
- (2) 大石寛人 (2021) 『子どもの目が危ない』NHK 出版。
- (3) 宮崎孝之 (2021) 『京大おどろきのウイルス学講義』PHP 研究所。
- (4) マリア・モンテッソーリ (2001) 『モンテッソーリの教育』あすなろ書房。

## コロナ禍における現場の記録 ～子どもたちの幸せのために～

田中 ポール

(学校法人聖華学園 マリア・モンテッソーリ幼稚園 園長)

この度、令和2年2月頃より始まった新型コロナウイルスの感染拡大に伴って、現場の幼稚園としてどのような教育活動を行っていたかの記録の提供をご依頼いただきましたので、私の幼稚園での事例を参考までにお知らせいたします。

はじめに当園の置かれている環境や概要をご説明いたします。

当園は、1962年にカトリック桑名教会の主任司祭であるメリノール宣教会の故マーク・テニアン神父様によって、宗教法人立の私立幼稚園として設立されました。一時は260名の園児が在園しておりましたが、ここ数年は70～80名で推移しております。したがって、園庭や園舎には相当の余裕があります。幼稚園が立地する三重県桑名市は三重県の最北部に位置し、愛知県名古屋市のベッドタウンとして多くの通勤客が日々桑名市と名古屋市を行き交っております。新型コロナウイルスの感染状況は、感染者が多く発生していた名古屋市のベッドタウンであるにもかかわらず、老人介護施設などでクラスターは発生したものの少数であり、桑名市全体としてはそこまで大変な状況にはなりませんでした。

とはいえ、全国的な感染拡大を受け、令和2年3月1日からは当時の安倍首相の要請もあり、5月中旬まで休園することになりました。7月下旬には当園で体育指導をいただいている体操の先生が感染者となりましたが、幸いにも軽症で済み、また桑名保健所の配慮で全園児と全職員にPCR検査を実施していただき、全員の陰性を証明することができました。その後、小さな波は繰り返すものの当園園児には1人の感染者も出すことなく過ごしていただくことができました。

そのような中で実際に子どもたちの日常がどのように変わったのか、具体的にどのような教育活動が行うことができたのかを順を追ってお話し

---

てまいります。

令和2年2月25日の夕方、首相から感染拡大を防止するために全国の学校に休校を要請する発言がありました。幼稚園への言及がありませんでしたので、桑名市教育委員会に問い合わせますと公立幼稚園は休園措置を取る旨のお返事をいただきました。当園も公立園に準拠する形で週が明けた3月1日（月）より休園といたしました。その時点では、新型コロナウイルスについての知見が乏しく、インフルエンザウイルスの感染拡大防止策に準拠するしかないとのことでした。その時点での最大の問題は、卒園を控えた年長児への対応でした。3年間、子どもによっては満3歳児からの4年間を過ごしたことを顕彰する卒園式を挙行できるかどうか。全国の大学や高校などが卒業式を取りやめる判断をする中で、当園も卒園式を挙行するのかどうかを話し合いました。当園では、卒園する子どもたちを全在園児と全保護者参加のもとで行ってまいりました。それは在園児やその保護者にとっても、大きな目標や子育ての指標になるという思いがあるからです。しかし、その願いはかなわず、卒園児とその保護者のみの参加となりました。

令和2年度の入園式と始業式は2日間に分け大幅に時間を短縮した上で執り行いましたが、またしても休園要請が出たために幼稚園での活動が全くできない状況となりました。ただ、このままいたずらに子どもたちの成長の機会を奪ってはいけなく考え、Zoomを利用してオンライン保育を行うことにしました。園児の家庭だけではなく保育者にとってもオンライン保育は初めての経験で、初めは戸惑う場面も見られましたが、マスクをせずに相手の顔が見える、友達の顔が全て正面から見えるなど、オンラインならではの利点もありました。同時に、幼稚園に登園できない子どもたちのために、家庭でできるモンテッソーリ活動を紹介したビデオをYouTubeに公開して、各家庭で活用してもらいました。

ゴールデンウィークを越えたあたりで感染者数が落ち着いてきたこともあり、5月中旬から幼稚園を再開しました。まずは午前中保育、様子を見ながら6月から平常保育を再開しました。これまでも毎日の検温は行ってきましたが、コロナ禍においてはそれに加え今まで以上に手洗いを励行しました。毎月の水道代が顕著に上がり、水漏れを心配した水道局がわざわざ

ご確認しにいらっしゃったほどでした。桑名市も2カ月間ほど水道料金の負担軽減を行ってくださいました。

1学期は実質的に6月と7月の2カ月間となり、行事は全てキャンセルにしました。7月後半には前述のとおり体育指導の先生がコロナに感染しましたが、幸いにも他には感染は広がりませんでした。夏休みは8月1日から23日までと短く、初めて8月中に2学期が開始になりました。

2学期は行事が多いので、それぞれ中止にするのか延期にするのか、入場制限をどうするのか、大変悩みました。敬老会は中止、運動会とバザーは入場制限をして開催、芋掘りやミカン狩りなど子どもたちだけの行事は通常どおり開催しました。そこまで来て保育参観をしていないことに気づきました。保育参観は、子どもたちがどのように生活をし、どのように成長を遂げていくのかを感じていただく大切な機会です。何としてでも開催したい思いで、入場制限をして開催しました。ただ、全員の保護者の方にご覧いただくことが大切ですので、YouTubeのライブ機能を利用して初めて生中継を実施して幼稚園に来られない方にも見ていただくことができました。

令和2年度の冬季は、新型コロナウイルスへの感染対策が功を奏したのか、インフルエンザの患者も劇的に減り、桑名市全体においても0人でした。令和3年度は一年前の経験から、卒園式や入園式、その他の行事等においてもほとんど問題なく過ぎてきました。

一方、日常的に子どもたちの日常はどのように変化したでしょうか。実は子どもたち自身にはあまり大きな変化は見られませんでした。もちろん、マスクの着用や頻繁な手洗いは今までにはなかったことでした。しかし、子どもたちの適応力は大人が考える以上のものがあり、子どもたちは「そうであった」ように過ごしてくれています。一部、プール活動や身体を触れ合う「組体操」のような運動、大きな声を出す活動などが制限されましたが、感染状況が改善するごとに徐々に緩和されるようになってきています。

「子どもは具体的な運動・活動によってのみ成長する」ことは間違いのない事実です。頭で抽象的に考えようとしても、まずは具体的な活動を行わないことには思考は抽象化されません。その意味で、一部であっても子どもたちの活動を制限することには大変な躊躇がありました。しかしそれ

---

は何事をするにも、健康であることが大切であるからです。それでは、われわれは「健康」という真の意味を理解しているでしょうか。

「健康」を意味する英語“health”はもともと「完全な」を意味する古英語“hal”が語源だそうです。その他の派生語として“holy (神聖な)”“whole (完全な)”“hale (達者な)”などがあります。また、日本語の健康という言葉も「健体康心」、つまり、「体が健やかで心が安らかな状態」という四字熟語からきているそうです。

私たち保育に携わる者は子どもたちによく「運動しなさい」「食事は残さず食べなさい」「うがい、手洗いをしなさい」と言います。それは子どもたちの身体が健やかであってほしいからに他なりません。と同時に「神様にお祈りしましょう」とも言います。それは子どもたちに「独りぼっちじゃないんだよ、神様はちゃんと一緒に居てくださるんだよ」というメッセージを伝えるとともに、子どもたちの心が安らかになってほしいからです。

ここで自問します。果たして私は今まで「体が健やかである」とことと「心が安らかである」ことを一つのこととして捉えていたであろうか、と。頭では理解していても、両者が実は表裏一体のことであるということが「実になって」いるかと。子どもたちに指導しつつ自らは謙虚な姿勢で実行しているのかと。

残念ながら病氣やけがで体が健やかではない人もいます。また一方で、病氣一つしたことがなく、立派な身体を持ち主であっても悪い心に支配されている人もいます。神様はその姿に似せて私たちをお造りになられました。「完全である」神様に少しでも近づけるように、私達は日々を生きなければなりません。完全でない私たちが完全に近づけるように謙虚さを忘れずに。

わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。

ヨハネによる福音書 15 章

極東の島国の片田舎にある幼稚園のコロナ禍の記録が、少しでも後世の子どもたちの幸せのためになれば、という思いを抱きつつ筆をおきます。

## コロナ禍での保育・教育—京都コース

岡山 真理子

(委員長)

2020年3月、4月開講を6月に延期することを決定しました。しかし、4月に入りコロナウイルスの感染状況が一変し、6月開講をも危ぶまれる事態となりました。一カ所に多人数が集まることや学生の多くが京都まで公共交通機関を利用しなければならず、その経路での感染など、その他さまざまなリスクを伴うことに鑑み、2020年度の開講を断念せざるを得ませんでした。これは苦渋の決断でした。

2年生には従来どおり毎月のレポート提出と、少しでも学びの意識が途切れぬことを考慮し、1年生で修得したところまでのアルバムの仕上げを課題としました。

1年生は、一年間開講待ちとなりました。

8月よりコーススタッフの先生方と月1回のオンライン会議を開き、2021年度コロナ禍での授業の進め方について話し合いを重ね、徐々に方向性が具体化していきました。

- ・地域ごとに拠点となる園を決める
- ・学生は各学年人数を2分し（Aグループ、Bグループ）、Aグループが京都で受講の時、Bグループは拠点園でオンラインでの受講（京都と拠点園同時進行）
- ・A、B、ひと月ずつ交代で行う

その他、感染対策のガイドラインの作成や実習に参加する前の2週間の行動記録用紙の作成など、事細かく準備をして4月開講を待ちました。

（2021年度コロナ禍での開講を案ずる学生の休学・退学も若干ありました）。

4月に入り、開講に時を合わせたかのように感染者が急増し、第4波が起きました。7月の1年生の授業以外はほとんどオンライン授業に替えざるを得ませんでした。

---

オンライン授業に多くの懸念を抱いておりましたが、学生からは「手元がよく見えてわかりやすい」「提示する先生と同じ方向から見られる」、コースの先生たちは「自分以外の先生の講義が全て見られ勉強になる」と、オンライン授業での利点を知ることができました。担当の先生はスクリーンで拠点圏の練習風景を見ながらいつでも質問に回答できる体制をとっておりました。しかし、スーパーバイザーの元での練習ができないことや、授業中直ちに質疑応答がしにくいこと、学生同士が互いに関わり合いながら学びを深めていくことなど、対面授業での良さも再認識させられました。

後期最後には進級テスト・卒業テストがあり、まだ課題が山積しております。

○ 2021年3月12日（土）

2019年度卒業生の「卒業式」を執り行いました。

京都市内在住の数名の学生が出席し、他の学生はオンラインでの式となりました。先生方からは画面での祝辞をいただきました。

○ 2021年度の基礎コースは全会場オンライン授業となりました。

## コロナ禍で考えたこと

友井 桂子

(高田カトリック幼稚園 園長)

2020年の初め、私たちは誰一人、新型コロナウイルス感染症への対応にこんなに追われることになるとは、夢にも思っていませんでした。

この一年は皆さまと同様に「新しい生活様式」3密を避けるための環境を、密集・密接の多い幼児たちの生活の中でどのようにしたらよいかと、話し合い探り続ける連続でした。

最初は、卒園式をどうするのか。次いで入園式。自粛後の分散登園。春の親子遠足や参観などは中止になりました。給食のバイキング形式も取りやめ、対面ではなく同じ方向を向くように机の並びを変えました。プール遊びやお泊まり保育はできるのだろうか、どこまで制限したらよいかと考える1学期、子どもたちの経験が狭められるばかりの1学期でした。

しかし、振り返ると悪いことばかりではなかったように思えます。卒園式や入園式の簡素化や形態を変えての実施は、子どもたちにとって望ましいものだったと思います。緊急事態宣言解除後の分散登園は、登園して来る子どもの数がいつもより少ないことで、新入園児が落ち着いたスタートを切れました。また、先生たちも少ない人数の子どもとゆったりと関わり、子ども理解を深めることができました。

2学期、運動会をどのようにしたらよいかを話し合う中で、感染拡大の予防が濾過装置のような働きをして、「子どもにとって大切なものは何か」が研ぎ澄まされたように感じました。小さい時から大きい人を見て、次はあんな風に私もやってみたいと憧れを持って迎える運動会です。皆で力を合わせる中で、子どもたちの成長を大きく感じる行事です。その体験をなくしてしまうことは子どもの育ちにとってどうなのだろうか。子どもたちの体験を通しての育ちを大事にしたい。そのために大人ができる感染リスクを減らす方法を考えようと、保護者への協力と理解を求めました。入場数の制限、競技数を厳選しました。その結果、練習時間が減り、子どもの負担も減りました。いずれは入場制限をしなくてもよくなる時が来るのでしょうか、内容はこれでいい。今まで随分子どもたちに無理をさせていた

---

のだと皆が感じた運動会でした。なかなか今まである行事を見直すことができなかつたのですが、コロナ禍によって否応なしに変える、変わるきっかけとなりました。

反面、参観の中止や保護者の園の出入りを制限した結果、特に新入園児の保護者にとっては、園での様子がよくわからず不安に思っておられることが多かったようです。実際に子どもの姿を見ることでしか感じることでできないようなことがたくさんあり、今後の課題の一つとなりました。

一年もすれば終息するであろうと、誰もがどこかで思いながら、もう少しと頑張ってきた一年が過ぎても、終息どころかますます状況が悪化している2021年。昨年とは違った様子がうかがえるように思います。

感染から子どもたちを守るためにと、保護者の方々に、工夫と丁寧な説明をしながら協力をお願いしてきましたが、「私の意見も聞いてほしい」「私の思いもかなえてほしい」という気持ちが、協力してくださっている姿の後ろに見え隠れしているように感じるようになりました。意見も人によって様々です。感染リスクを考えると園で昼食を食べさせたくない。できるだけ接触を避けたいので欠席させたい。マスクを子どもたちには着けさせたくない。ワクチンの接種にも不安はある、など。もうこれ以上の我慢や辛抱に耐えられるのだろうかという不安に、皆が耐えられなくなっているように感じています。

それに対して、絶対にこのようにしたら大丈夫ですからと言えない、手探りの中での保育が今も続けられています。しかし、子どもにとっては、毎日が特別なかけがえのない一日です。子どもたちとの生活の中で、同じ場であって、子どもの姿、光景を共有している保護者同士が、心を込めて子どもに向き合い、助け合い、協力し合うチームとしてつながり、ただひたすらに目の前の子どもたちの「いま、ここ」の姿を大切に見守りながら一人ひとりにふさわしい保育を目指し続けること、そしてその姿を保護者に丁寧に伝え、皆が共に喜び合える歩みこそが、コロナに限らず、何かが起きた時の一番の対策であると改めて感じています。

## コロナと保育

前鼻 百合江

(北海道支部長 宮の沢さくら保育園)

コロナ禍の中での日常生活から日常性が失われ、生活に大きな影を落としました。「取り合えず」や「〇〇月〇〇日までの制限」などの蔓延防止、警戒ステージ4、5、と毎日上がる感染者数、緊急事態宣言による行動制限、感染予防対策のちぐはぐさに振り回された1年半でした。令和2年4月に厚生労働省から出された緊急事態措置に始まり保育所等の対応の周知書等の書類はファイル2冊になりました。その度に保護者様へのお願い文書を作成し掲示、配布に忙殺されました。

このような社会全体の緊急事態（災害も含め）のさ中でも保育所は「閉めてはいけない所」に指定されます。「保育を必要としている」お子さんをお預かりする立場としてその解釈の曖昧さ（一人でお留守番ができないとする解釈も含めて）に何度も疑問を抱きます。

本格的なコロナ対応が保育計画に組み込むことを余儀なくされた新学期は令和3年4月からスタートしました。職員と新園児へのご挨拶はマスク顔となりアイコンタクトが取れてるかしら？私を覚えてくれるかしら？心配ごとが次々と増えました。それでも子どもたちと通常通りの生活をしていくことに神経を注ぐ毎日を心がけています。そんな中での発見もありました。

### 発見その1

新園児も保育園生活によりやく馴染んできた5月末、0歳児のぐずっている子を担任の先生の代わりに私がピンチヒッターとしてあやしていました。機嫌がよくなってきたようね、と思い始めた頃、「うーん！この声はだあれ？」というように考えている間があり振り向かれ、泣かれてしまいました。いつもの先生ではない声を改めて確認したようです。視覚での情報収集不十分を聴覚で補うことを子どもは自然としていることに、なるほどと驚きました。まさに体の法則に従った発達をこの子は粛々と行ったわけです。

---

## 発見その2

なるべく通常の保育をと心がける一つに「歌を唄うこと」をしました。デスタンスをとりながら声を出す解放感と体へ伝えるリズム感を考えて毎日その時間を取りました。歌はメロディーはもちろん歌詞も大切です。けれど、教える保育士の口元も見えない、声もくぐもるマスク顔です。考えた末、歌詞を書きだし、見えるところに張り出しました。詩を読むように声を出す年長さん、それを見て、聞いていた字の読めない子へ伝わり、今まで以上に言葉の明瞭な歌声となりました。その明らかな違いは明るいはずつたる声にありました。その声は目を見張るほどでした。歌はメロディー、リズム、そして歌詞がいかに大切な要素であるかを確信しました。子どもの持っている表現力への刺激はほんのわずかでしたが大きな輪になったようです。

## 発見その3

緊急事態宣言が出ますと市から保護者へ「登園自粛要請」が出されます。しかし保護者の職場がテレワークも、在宅勤務も取り入れていないこの地域にはあまり馴染まない働き方のためか朝の7時から午後の6時過ぎまで登降園が続きます。なるべく保育室への出入りがないようにとその登降園は玄関ホールで済むようにしています。結果、保護者側から子どもの遊んでいる姿も保育士のかかわっている姿も目にする機会が少なくなっています。ましてや、運動会、発表会、参観日などの内部の行事だけではなく外部からの見学者がなくなり「見られている」緊張感が薄れていることが目に見えてきました。保育士自身の緊張感のなさは立ち居振る舞い、子どもたちへの関わり方、環境整備の熱心さなど細やかな気配り、配慮が非積極的となり結果、お部屋全体がざわついた雰囲気になりました。環境の中の人的要素の重大さを実感しているところです。

コロナ禍はまだまだ続き、というよりこれが当たり前の日常となるような気がしています。病気に対する緊張感は勿論ですが、「命を預かる」ことの基本に基づき、デジタル化の方法論を見据えながら子どもたちの成長発達を見守りたいと思っています。

下條善子 著  
たんぽぽにかこまれて

濱崎 久美  
(長崎純心大学 講師)

1. はじめに

著者、下條善子先生は現在、学校法人小百合学園 広島モンテッソーリ教師養成コース コース長を務めておられる。下條先生は20年余り一斉保育の幼稚園で勤務し、1978年に東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンターにて3歳～6歳モンテッソーリ教師ディプロマを取得し、九州幼児トレーニングセンター・トレーニングコース、信望愛学園モンテッソーリ教師養成コース、純心モンテッソーリ教員養成コースの3つの養成コースの創設に携わられるとともに、モンテッソーリ教師の養成のために40数年の間尽力された。

先生は、信望愛学園モンテッソーリ教員養成コースにおいて26期生までを迎え、養成し1,027名の卒業生を送り出している。さらにこの26期生が2年目の年に小百合学園 広島モンテッソーリ教師養成コースとして歩み始め、207名の卒業生を送り出し、現在はコロナ感染拡大の中ではあるが7期、8期生の養成を担っておられる。

先生はコース生だけではなく卒業生の更なる養成にも尽力された。卒業生を対象とした「中堅者研修会」を1995年に発足し、10年間で24回の研修会を開催され、2005年には「卒業生研修会」と改称し年1回の研修会を開催された。また、2018年からは「提供内容を深める勉強会」も始められるなど、現場でさまざまな問題に出会う卒業生に対しても心を配られている。そのため、先生は常に現場における卒業生の必要性を見据え、10年ごとにテーマを決めて、卒業生がモンテッソーリ教師としてより良く子どもたちに尽くすことができるようにこれらの研修会を開催し、参加した卒業生一人一人を愛情深く迎え、学び合い、高め合う場を提供してくださっている。

総数1,234名の卒業生(2021年9月現在)がたんぽぽの綿毛となって

---

各地に飛び立ち根付いた後も、その成長を見守り、学び合うこと、学び続けることの大切さを示しながらその花の開花を促し続けておられる。

ご高齢にもかかわらず、その瞳には凛とした力強さ、包み込む温かさがあり、モンテッソーリ教師養成に対する使命感を抱いて生き抜いておられる先生である。

## 2. 目次

この本は下條先生の言葉を6つのテーマにまとめたものとなっている。テーマに集められた一つ一つの言葉の中にはコース生、卒業生がモンテッソーリ教師として成長していくために必要な養分が詰まっている。

目次は以下のとおりである。

はじめに

私自身のこと

- ・見えない`恵、の大切さ
- ・私は`鍛、で使われている
- ・神様からのプレゼント
- ・私いつも思っているんです
- ・一緒に育つこと
- ・モンテッソーリ教師の前に 一人の人間
- ・自分を整えながら育ち合う
- ・練習は意志を使って
- ・心の準備
- ・子どもの心のごはん
- ・拾う心
- ・協力

子どもの心

- ・愛されて育つ子ども達
- ・`へー、から始まる心
- ・勇気は自分で作るもの
- ・子どもは未熟 一援け手が必要一
- ・模倣時代
- ・内面の声
- ・子どもからのメッセージ
- ・あなたは何が…?
- ・心を見つけてあげること
- ・子どもは必ず答えてくれる
- ・自分の学び方
- ・`一人で 出来た!、

子どものお仕事 提供

- ・子どもの心を読み取る 一子どもから教わり わかった程度でやってみる一
- ・その子どもをずっと見ていたら わかること

- ・ チャレンジ—興味点を使いながら—
- ・ 覚えようと思わないこと      ・ 知らせること   引き出すこと   認めること
- ・ 人間形成 —子どもは出来るようになりたい   わかるようになりたい—
- ・ 子どもは模倣時代   ちょっとした努力を認めてあげて
- ・ 子どもをそのまま受け止める      ・ 子どもと数の世界
- ・ 子どもの建気さから学ぶ

#### 援助者として

- ・ 教師を選んだ使命      ・ 教師としての育ち方      ・ 心   意志   運動
- ・ 大人の役目      ・ 子どもを知ること   —ストレートに言える先生—
- ・ 子どもの好きな先生      ・ 勉強の意味   —子どもと共に育つこと—
- ・ 性格との闘い      ・ いただいたもの      ・ “学ぶ、”ということ
- ・ 子どもに仕える人      ・ 時を活かす
- ・ 人間づくりのお手伝い      ・ 実行するのみが証し      ・ 私たちの役目
- ・ 心の向きをちょっと変えて      ・ 本当の自由さ
- ・ お金がかからない教材      ・ 失敗することは学ぶことの第一歩
- ・ 失敗は進歩の時      ・ 誰かがあなたの苦しみを共有しています
- ・ 先生の空気      ・ 心の中をそおっと覗いてあげて      ・ 感情と理性

#### 一人一人のいただいた役割   置かれた立場

- ・ 共に歩くこと      ・ 自分で出来た！      ・ あっ   そっかあ
- ・ 共に歩く先輩   —総練習に来ていた卒業生へ—
- ・ 先輩の役目   —総練習に来ていた卒業生へ—
- ・ 企画について話し合い      ・ 信頼

#### 祈りと共に

- ・ 私の標語      ・ 分数      ・ 恵みを信じて

#### おわりに

以上が目次であるが、この本はスタッフの先生が下條先生の言葉をコツコツと10年間書き残してきたものを編集し、イラストを添えるなどスタッフの協力のもと作り上げられている。この本の作成にあたり下條先生が「おわりに」において次のように記している。「私にとってはもう一つの家族同様にいただいた仲間が大きな働きをしてくださいました。」と。下條先

---

生を中心とするスタッフの絆の強さを感じさせられる一冊である。

### 3. 内容

「私自身のこと」は「私ね、引っ込み思案の善子ちゃん だったの 神様から育てていただきました」という言葉から始まる。ここには、人としての生き方や教師としての在り方、命の尊さや生かされていることへの感謝などが記されている。また全体を通して感じることではあるが、「どの子を見ても愛おしい」という先生の思いが言葉の一つ一つにあふれている。同時にすべてのことを神様からのプレゼントとしてしっかりと受け止めて過ごされていたことが伺える。人としてどのように育つ必要があるのか考えさせられる言葉の数々である。

「子どもの心」では先生の観察眼の深さや真剣に子どもに向き合い、寄り添いながら心を動かし続けている姿が伝わってくる。記されている一つ一つ言葉を読んでいくと、子どもとの関わりにおいて忘れかけていたとても大切なことに気づかされる。「子どもをしっかり見ることで 自分を忘れます 自分が強いと 子どもを忘れます」。これらの言葉はコース生として学んでいた時とはまた違った響きをもって迫ってくるようである。

「子どものお仕事 提供」では「お仕事は心の成長 提供は人間形成のお手伝い」という言葉から始まっているように、モンテッソーリ教師として子どもと関わるうえでのポイントがギュッと詰められている。子どもの心の成長に必要なことは何か、提供とはどうあるべきか、また提供を通しての人格形成とはどのようなことかなど、そのヒントがちりばめられている。先生の経験に基づいた力強い中にも温かい言葉に触れることができる。

「援助者として」においては援助者としての教師の役割について、また心構え、使命について考えさせられる言葉が集められている。援助者としての自分を見つめ直すために必要な言葉に出会えるのではないだろうか。また、日ごろの保育の中で大きな壁にぶつかってしまった時、失望感にさいなまれている時、目標を見失った時などに励まし、勇気、希望、慰めの言葉を見いだせる。「必要などころに置かれていることを信頼して」「全て無駄なことはありません 苦しくても 自分で宝に変えていく方法を 覚えましょう」「響いた言葉は 神様からあなたへの ノックです」など、

下條先生の鼓舞してくださる声や温かいまなざしが伝わってくる。

「一人一人のいただいた役割 置かれた立場」では教員間の協働について、現場における後輩の養成の在り方について語られた言葉が集められている。「先輩の役割は 偉くなくていいの 一緒に空気を味わいながら伝えていく先生」など、共に歩くことや互いに認め合うこと、信頼について論ずる内容が込められている。「子どもの心に いつも平和と喜びを伝えられる 教師になりましょう」との思いが心に染み入るようである。

「祈りと共に」では項目として示されているのは3つと少ないが、先生が日々の歩みの中でいかに神様とのつながりを大切にしていたかが感じられる言葉が記されている。`神様って あたたかーい!、というその温かさをコース生や卒業生に分ち合ってくださいっていると感じるのは私だけだろうか。

#### 4. おわりに

「たんぼぼの会」と命名された同窓会名には「コースを飛び立った 卒業生ひとりひとりが たんぼぼの花のように 幼児と共に 喜びを増やし実を結ぶことを願いながら卒業生同窓会の名称に選びました」とあるように先生の思いが込められている。たんぼぼの綿毛のように全国に散らばって育ちあい、花を咲かせてほしい。たんぼぼのようにしっかりと地に根を張り、太陽に向かって開花し、喜びを与える存在になってほしいとの下條先生の思いを全卒業生がしっかりと受け取ってこの名をいただいた。

こうして活動を始めた「たんぼぼの会」の総会は研修会に合わせて開催されている。卒業生研修会の参加者は毎年増え、多くの卒業生が学びと癒やし、活力を得るとともに、「たんぼぼの会」総会にも出席し、先生方を囲んで絆を結び現場に帰っていくのである。

しかし、この二年、コロナ禍により研修会が開催できない状態になっていた。そんな折、下條先生から思いがけないプレゼントが届いた。それがこの『たんぼぼにかこまれて』という1冊の本である。この本に添えられたメッセージに90歳を迎えた年の節目として、また卒業生へのメッセージとして書かれた本であることが記されている。「九十才を一つのけじめとして、私の歩んだ道の心をお知らせしたくて、大切な卒業生やコース生といつまでも心の絆を結びたく……（中略）心に喜び、発見、勇気が欲し

---

い時、心の迷い、落ち込みに沈む時など、時に応じて見出しを見てページを開けてみてください。……」と。先生の思いの大きさに感銘を受けるとともに、見守られ支えられていることへの感謝があふれてきた卒業生は多いのではないだろうか。

制作 教友社（〒 275-0017 千葉県習志野市藤崎 6-15-14）

2020年8月22日初版、2刷、151頁

学校法人小百合学園広島モンテッソーリ教師養成コース

Tel.082-509-0980 Fax.082-237-0979

堀田和子 著  
子どものサインに気がついて

岡田 耕一  
(聖徳大学短期大学部 教授)

堀田和子氏は本著の「はじめに」において、次のように述べている。

ある日、父母会が終わった後にひとりの母親に呼びとめられました。「先生の子育てのアドバイスをまとめて本にしてください。『子どもの家』に子どもを通わせることができない郷里の友人たちに聞かせたいです。」と。

本著は、一人の母親の願いをきっかけに、さらには堀田氏の子供の家に子どもを通わせている熱心な母親たちに後押しされる形で、堀田氏がこれまでさまざまに書きためていたものを、あらためて一冊の本にまとめたものである。

## 1. 内容構成

本著は以下のとおり、4つの章で構成されている。

- 第1章 親子ともイライラしない極意
- 第2章 第一子、第二子、ひとりっ子の育て方
- 第3章 子どもの能力を最高に引き出す方法
- 第4章 迷わないための子育ての哲学

さらに、第1章は22、第2章は10、第3章は24、第4章は10の細かなテーマで構成されている。合計46のテーマについては、どのテーマから読んでも構わない。私も実際に最も関心のある2、3のテーマを読み、その面白さにつられて、最初からじっくり読むようになった。全編を読み終えて、以下のような本著のご紹介をぜひお伝えしたい。

---

## 2. 『子どものサインに気がついて』というタイトルについて

私自身が本著の紹介を書くにあたり、最初に注目したのは『子どものサインに気がついて』というタイトルである。私は短期大学で保育者養成に当たっているが、学生に「保育」について幾つかの定義を伝えている。もっとも基本的な定義は、保育とは子どもの送り出すサインに対して保育者が的確に応答することだと思う。そして子どもが送り出すサインには明確なものもあれば、何げないサインもある。保育者は普段から子どもの送り出す何げないサインを見逃さないように配慮しなければならない。

堀田氏の『子どものサインに気がついて』は、まさに子どもの何げないサインをどのように捉え、応答したらよいかについて、親にも保育者にもわかりやすく伝えているのである。

## 3. 現代の育児・保育ニーズに応える書である

本著は、堀田氏が日ごろの保育実践を通じて書かれたものであるため、現実的な育児問題を取り上げている。そしてそれぞれの問題に対して的確な助言を与えており、有益な育児方法を伝えている。

例えば、「第2章 第一子、第二子、ひとりっ子の育て方」においては、少子化時代における子育てについて、極めて具体的な育児方法について述べている。一人っ子の育て方については、幼い子どもが「家庭の中での自分の役割に責任を持って行動をすることの大切さ」について自らの体験を通じて理解し、家族の一員としての存在感を獲得することの重要性について述べている。これはまさに自己肯定感の形成につながるものである。

また、第二子が生まれてからの子育ての方法として、例えば「赤ちゃんが泣いてもすぐに第一子との今の関係を切らないことが大事です」と指摘し、第一子への関わり方について詳細に説明している。さらに第二子が成長する過程において、第一子、第二子との関係の取り方についてもわかりやすく説明している。第一子も第二子もそれぞれの成長過程において送り出す細かなサインはとても興味深いものである。

## 4. 貴重な幼児理解の書である

最近幼稚園や保育所の保育においても家庭の育児においても、「気になる子ども」の保育、育児が話題になっている。気になる子どもには、“大

変気になる子ども”もいれば、“少し気になる子ども”もいる。本著はどちらかと言うと“少し気になる子ども”への関わり方について詳しく説明している。ただし、著者が最も訴えようとしていることは、子どもが何げなく親や保育者に送る“サイン”の意味を的確に把握し、どのように応答すればよいかということである。

本著の特徴は、子どもからのサインへの応答だけでなく、サインに潜む子どもの心の内面について詳しく鋭い分析をしていることである。心の内面がよく理解できるからこそ、著者のアドバイスを素直に受け入れることができるのである。

## 5. モンテッソーリ教育の基本原則を的確に伝える育児書である

私が上智大学の学生時代に、モンテッソーリ教育についての授業を受けたとき、今でも印象に残っていることは、モンテッソーリ教育の理想は“モンテッソーリ教育の原則を日常生活の中で活かす”ということである。本著はまさにモンテッソーリ教育を日常化し、普及させるためのテキストとも言える。

本著の「はじめに」で、堀田氏は次のように述べられている。

コース終了後、モンテッソーリ原宿子供の家を開設し46年が経ちました。27年前にはモンテッソーリすみれが丘子供の家を開設し、現在も現役で保育の現場に立っています。子どもの教育法はモンテッソーリ初め、シュタイナー、フレナなどいろいろありますが、あなたの子どもはあなたの子らしく育ててほしいと思います。それぞれの家庭のオリジナルな子育てとして、自分を見つめながら、自分が育てたからこそ育った子どもだと思えるようになってほしいと思います。

本著は、堀田氏が長年にわたってモンテッソーリ教育を実践された成果と言える。しかしながら、堀田氏の言葉にあるように、最初に大切なことはそれぞれの家庭のオリジナルな子育てである。そして、子育てをする上で、モンテッソーリ教育を取り入れてほしいという願いが込められている。堀田氏は育児にあたる親に共感をしながら、“優しく”そして“易しく”

---

モンテッソーリ教育を伝えているのである。

## 6. 保育者にとって、自己評価の指針となる書である

本著は育児書に留まらず、保育者にとっても、保育の参考書として読んでいただきたい。

最近幼稚園や保育所において、“カンファランス”形式の話し合いがもたれることが多い。カンファランスを通じての話し合いにより、保育者は自分にはそれまで見えていなかった子どもの姿や育ちに気づくことができたり、子どもを捉える多様な視点に触れることで自分の保育観を広げることができる。

本著はまさにカンファランス的な役割を果たすものである。保育者が本著を読むことで、保育者自身が気づかなかった子どもの心に触れることができる。堀田氏自身が長年にわたる保育経験から得た子どもの心理についての指摘は大変貴重である。保育者が本著を読むことにより、子どもについての“新たな発見”をすることができ、自己の保育を振り返り、保育の質の向上にもつながることと思う。

## 7. わかりやすい保育・育児の哲学の書である

本著は全編を通じて、親や保育者が子どもの心のサインを読み取り、どのように対応（保育）すればよいかについてわかりやすく述べている。簡単に言えば、育児・保育のハウ・ツウ本とも言える。しかしながら、それにとどまらず、親として、保育者として、子どもをどのように見つめ、関わるべきか、ということについて、根本的な原理についても触れられており、親や保育者の思考を揺さぶるような哲学の書でもある。このことは、「第4章 迷わないための子育ての哲学」をじっくり読むとよくわかる。

保護者は第1章から順に読みながら、子育ての方法が理解できたところで、第4章を読み終えたとき、子どもの願い、親の在り方、そして自分にふさわしい子育てについて気づくことができる。また、保育者にとっては、第4章を読むだけでも、これまでの“保育者としての自分”の在り方について振り返るきっかけを与えてくれるのである。

### ○最後に

私は学生時代に、ある授業で教授から次のような言葉をいただいたことを今でも大切にしている。

「これからは質の高い読書をしなさい。」

良い書物に出会いなさい、良い書物を大切にしなさい、と解釈している。この言葉は、短大の教員になった今も大切にしている言葉である。堀田氏のこの著書は、親にとっても、保育者にとっても、大変有用な助言にあふれている。その助言も、すぐに受け入れることができる、わかりやすい内容である。さらに、繰り返して読むことで、明確になる内容もある。つまり、新たな発見を与えてくれる書である。

私にとっては、「図書紹介」の執筆者としてこの著書とたまたま出会ったが、この出会いがきっかけになり、これからも大切にしたい著書と巡り会えたことを、大変幸福に感じている。

瀬谷出版（〒 102-0083 東京都千代田区麹町 5-4）  
2020年3月3日、206頁、定価 1,400円 + 税

---

江島正子 著

# モンテッソーリ教育と子どもの幸せ

鈴木 弘美  
(日本モンテッソーリ協会 (学会))

## はじめに

「この度、モンテッソーリ教育についての分かりやすく、興味深い図書が江島正子氏の手によって出版されることになり、とてもうれしく思います」という前之園会長の「推薦の言葉」から始まる本書は、日本中の「江島ファン」はもちろん、多くの方々の手に取られ、大変喜ばれることと思う。

著者は常に研究の手を休めることなく活動的で、国内外のあらゆる所へ足を延ばす。恐らくこれほどにモンテッソーリ教育について守備範囲の広いモンテッソーリ教育学の研究者はいないのではないかと思われる。本書にはまさにそのような「江島先生」そのものが投影されている。

本書は、『家庭の友』誌 (サンパウロ) で2017年1月号～2020年5月号まで、江島先生が執筆を担当したモンテッソーリ教育についての掲載記事が加筆修正され、書籍化されたものである。

## 本書の内容

まず、本書の「目次」を紹介させていただくこととする。そして、目次に沿って、各章において筆者が注目した点を紹介させていただきたい。

## 目次

推薦の言葉

はじめに

- 1 日本におけるモンテッソーリ教育の導入
- 2 0～6歳児の教育
- 3 インクルーシブ教育
- 4 モンテッソーリ・ケア
- 5 宗教教育

おわりに

## 1 日本におけるモンテッソーリ教育の導入

明治 45 (1912) 年 1 月 11 日 (木)、モンテッソーリ教育が日刊紙「萬朝報」の第 1 面で、日本で初めて紹介された。これは、1907 年にローマで「子どもの家」が開設されて 5 年後のことであり、さらに、同年 5 月の京阪神連合保育会で倉橋惣三がモンテッソーリ教育について講演をし、これを契機として我が国の幼児教育界で、モンテッソーリ教育が注目されるようになったという。

その後モンテッソーリ教育は大正デモクラシーの自由な社会風潮の中で積極的な言及対象になっていたが、日本の軍国主義化とともに子どもの自由を尊ぶモンテッソーリ教育は次第に衰え、消滅し衰退した。

そして、日本におけるモンテッソーリ教育運動は、第二次世界大戦後にリバイバルした。これを牽引したのはカトリック教会と女性パワーに関係があるようだと言及する著者は述べる。昭和 33 年、聖心愛子会のシスターがケルンへ赴き、ドイツの子どもたちのために幼稚園を開いた。ケルンではモンテッソーリ教育の知識が必要だったので、同会のシスター・オイゲニア石本は日本人で最初にモンテッソーリ教育の実践を学んだ。同会のシスター・イグナシアは昭和 34 年に渡欧した際、モンテッソーリ教具を持ち帰り、カトリック教育協議会の保育研究会などで教具を紹介した。ケルンでモンテッソーリ教育を知った赤羽恵子は、日本人で初めてのディプロマ取得者になった等、世界に羽ばたいた女性たちの活躍が輝かしい。

カトリックの関係者は、昭和 42 年、佐久間、塚本両神父が「カトリック新聞」にモンテッソーリ教育について寄稿し、上智大学文学部教育学科の教授たちは定期的に「モンテッソーリ研究会」を開き、ここではモンテッソーリ教育の教育学的評価など理論研究が重ねられた。

この研究会が、昭和 43 (1968) 年の日本モンテッソーリ協会設立の礎となった。昭和 45 (1970) 年には、上智モンテッソーリ教員養成コースが開設された。同コースは、平成 19 (2007) 年に閉じられ、現在では東京モンテッソーリ教育研究所付属教員養成コースとしてプロテスタントの富坂キリスト教センター 2 号館内で活動している。現在日本における教員養成コースは国際モンテッソーリ協会公認の 1 コースと、日本モンテッ

---

ソーリ協会(学会)公認の5コースがある。

ローマの「子どもの家」開設100年を経て、「日本におけるモンテッソーリ教育の最新の特徴は、モンテッソーリ教育のよりグローバル化とエキュメニカル化を挙げることが出来るだろう。」(20頁)と著者は述べる。

## 2 0～6歳の教育

「0～6歳児の教育」として、「幼保無償化」「幼児の非認知能力」「モンテッソーリの発達観」「インクルーシブ教育」「藤井聡太九段」「江島先生の妹さんの愛すべきお孫さんたち」など多様な内容が含まれている。さらに、江島先生が訪問された8園がいきいきと紹介されている。

筆者としては、以下の点について注目した。

①著者によれば、近頃よく指摘される子どもの「非認知能力」の育成は、モンテッソーリ教育が大きな助けになる。最新のモンテッソーリアンによる研究は、これをエビデンスとして示している。

②モンテッソーリの発達観について、著者は、コメニウスがモンテッソーリの先達であると捉える。コメニウスも発達段階ごとに教育の4段階(それぞれ6年間)を構想した、と指摘する。

③著者によれば、「モンテッソーリは1950年、イタリアのペルージャの教員養成コースで『いのちのリズム』と言われる逆三角形。1951年にローマのコースで『球根』。この2種類の絵図で子どもの発達を解説しました」(64・65頁)。

これはあまり知られていないと思われるが、筆者がモンテッソーリ関係の出版物でみるところでは、この図は、松本静子先生のご著書『よろこびの中に生きるモンテッソーリ教育』(学苑社 2019年)の巻頭の口絵に掲載されている。それぞれ人間の発達の特徴を表している。

## 3 インクルーシブ教育

2017年11月24日～25日、ドイツのミュンヘン大学附属病院で開催された「発達障害とモンテッソーリ教育」についてのシンポジウムに出席するために、江島先生は他の治療教育を専門とする先生方とドイツを訪れた。ここではそのことを発端に、ドイツでのインクルーシブ教育、日本でのインクルーシブ教育の実践と理念が語られている。

①シンポジウムの主催者は、「アクチオン・ゾンネンシャイン」という財団であった。この財団は、ドイツの小児科医であり、ミュンヘン大学教授であったヘルブルッゲ教授（1919～2014）によって設立された。うめだ「子供の家」の姉妹園である「あけぼの学園」は、この財団から多大なアドバイスを得て、発達障がい児の支援のために1977年に設立された。著者は、日本からの同行の先生方と「アクチオン・ゾンネンシャイン」系列下のモンテッソーリ・スクールの見学もされた。

②2018年8月2日～4日、日本モンテッソーリ協会（学会）第51回全国大会が福島で開催されたが、この大会のテーマが、「インクルーシブ教育とモンテッソーリ教育」であった。ミュンヘン国際モンテッソーリ教育・特別支援コースからローレ・アンデリック（Lore Anderlik）先生が派遣された。彼女はヘルブルッゲ教授の発達障害のグループで活躍しておられて、すでに67年のモンテッソーリ・セラピーの実績をもつという。ミュンヘンのセラピーの出発点は、「弱い人を強くするメソッドは、強い人をより完全に作るメソッド」というモンテッソーリのことばだという。アンデリック先生は、非常に有益な、心温まる講演を残してくださった。

③最後は、51回大会の実行委員長であった日本モンテッソーリ協会（学会）東北支部長佐々木信一郎先生が園長として運営されている「こじか子どもの家」（福島市）の話題である。こじか「子どもの家」ではモンテッソーリ教育によるインクルーシブ教育が実践されている。

佐々木先生は前年のドイツへの旅にも同行されているが、彼はかつてミュンヘンに留学をされ、前述の「アクチオン・ゾンネン・シャイン」でAMIディプロマを取得した。

④こじか「こどもの家」と佐々木先生の母上が設立されたこじか保育園、この2施設が姉妹園としてインテグレーションが実施されている。

⑤こじか「子どもの家」の教室の前に、出席シールを貼る小さい机と椅子とともに、「今日一日の流れの時間割」や、月間カレンダーなどの予定表、掲示のすべてには絵や写真が貼ってあって、目で見て、視覚で理解できるように特別に配慮されている、と著者は指摘する。こうすれば発達障害のある子どもでもするべきことが分かり、安心して活動ができるのだ。

⑥インテグレーションとは、健常児と障がい児を同じ場所で教育することである。この2施設のインテグレーションは、子どもたちに不安を与え

---

ないよう一歩一歩順序だてて行われているが、ここでは紙幅の関係で詳しく申し上げられないので、本書をお読みいただきたい。両園ともモンテッソーリ教育を行っているので、保育園の子どもたちも環境的に似ていることから、安心して活動することができる。

⑦年間を通じた交流によって、どの子どもにも、人は異なっているという事実が認識され、「その異なっているということについて、良い悪いなどの価値判断はできないという根源的な人間観が培われます」と佐々木園長は説明する。

⑧佐々木夫人である佐々木景先生（心理士）は、「こじかキッズサポート（相談支援事業所）」の立役者である。乳幼児健診でチェックされた子どもの二次検診の後、保護者はこちらを紹介される。保護者はここで様々な施設を紹介される。こじか「子どもの家」に通う子どもたちも、紹介された様々な施設から、保護者が選択をして入園してきたそうである。

⑨佐々木園長は、「幼児に刺激を与えると、いろいろと身についていく。したがって、「気になるお子さん」に早期に対応していくことはとても大切ではないか」と、早い時期からの専門的な対応の必要性を説く。

#### 4 モンテッソーリ・ケア

2018年7月に、立川市の至誠第二保育園と岡山ノートルダム清心女子大学において、オーストラリア・タスマニア在住のアン・ケリー（Anne Kelly）さんを講師とした研修会が行われた。内容はモンテッソーリ・メソッドによる高齢者、特に認知症患者のケアについてであった。アンさんは、30年間看護師として医療現場で働き、13年間モンテッソーリ教育に携わった経歴を持ち、国際モンテッソーリ協会から認知症プログラムのワーカー養成を委ねられている。以下に筆者の注目点を述べる。

①モンテッソーリ教育による介護で重要なことは、幼児や小学生のためのモンテッソーリ教育原理と同様に、「環境構成」であると著者は指摘する。では、どのような「環境構成」か。まずは、「子どもの家」で子どもを援助するために「観察」が基本であったと同様、介護施設の利用者さんをよく観察することだ。文字を読める認知症患者さんであれば、いろいろな指示標識を書いておくと、安心して毎日を過ごすことができる。また、介護施設のスタッフも、利用者さんも、名札を付けるべきだ。認知機能に障害

が出てきても、可能な限りの精神的・身体的な自立を援助するのがモンテッソーリ・メソッドにおける介護であって、いのちへの援助は、幼児でも、高齢者でも同じであると著者は述べる。

②この実践例として、岡山の「星の家」という認知症高齢者を中心としたデイサービスセンターが紹介される。岡山ノートルダム清心女子大学付属幼稚園に愛娘を通わせていたお父さんがこのデイサービスセンターの社長さんだ。彼は、保護者の参観日に幼稚園の教室でモンテッソーリ教具の空気と子どもの変化に感動し、自らが経営するデイケアの方針を「これで行こう！」と決めたそうだ。岡山市在住の奥山清子先生を中心としたモンテッソーリアンが、モンテッソーリ教育を説明し、それを基に施設の職員の方々が、高齢者にどこが使えるかを検討しあったという。

③「星の家」では、利用者に施設が作成したスケジュールに合わせてもらうのではなく、自分のやりたいことを自分で選び、自分で決めてもらうことにした。つまり、「自己選択」「自己決定」が「星の家」の方針になっているのである。そして、自分で選んだ活動に集中できるように机は一人机である。それまでは荒々しい言動をされていた利用者さんが、集中現象を重ねるごとにその荒々しさが消え、心が平和を楽しまれている様子が見て取れるという。

④2017年8月、チェコのプラハで国際モンテッソーリ協会世界大会が開かれ、「高齢者のモンテッソーリ教育」のテーマでシンポジウムが行われた。奥山先生をはじめ「星の家」のスタッフの方々が参加され、初めは受け身的に聞いていたものの、途中からは自分たちもやっている、自分たちの方が進んでいるのではないかと知って、感動したそうである。

「聖アンナこどもの家」の「お泊り保育」に参加された江島先生は、「幼児という発達段階の最初にいる人間と、記憶という機能に障がいが見え始めた発達段階の最後にいる人間とが、それぞれの理性・知性、自由意志、判断力、良心を秘めた普通の人間として」活動している、という共通点を見いだしている。

## 5 宗教教育

本書の最後の章にたどり着いた。ここに至ってさらに面白くなってきて

---

いる。どうやら江島先生の真骨頂は、「宗教教育」を語ることにありそうだ。

①モンテッソーリ教育の宗教教育は、次のように説明される。

「幼児の中には生まれた時から、超越的存在に憧れる何かが秘められています。この憧れが開花するのを援助するのが、モンテッソーリの宗教教育です」(224頁)。

②「モンテッソーリの宗教応用人類学によると、すべての人間には言語を発達させる傾向があるように、宗教を発達させる傾向が先天的にあるのです。もう存在しているのです。大人がしなければならぬのは芽生えるように心を配ってあげること。それが欠けたら、人間としての発達上、基本的な部分が欠けてしまうからです」(243頁)。

③「宗教応用人類学」とは、言語と同じレベルで宗教を捉えたモンテッソーリの宗教観を表現した言葉である。言葉と同様に、場所が違えば言葉も宗教も異なる。モンテッソーリ教育という、とかくキリスト教と結び付けられるが、このような観点から、この教育は宗教や宗派にとらわれることなく、現在はいろいろな場所や地域で実践され、高い評価を受けていると著者は述べる。

モンテッソーリ教育における、「宗教教育」、「宇宙的教育」、「平和教育」はそれぞれ関連し合っていて、「宗教教育」について考えているうちに、「宇宙的教育」「平和教育」へと展開してゆく。この辺りがモンテッソーリ教育の核になる部分ではないだろうか。

ここでは2園の訪問記が掲載されている。

## おわりに

さて、江島先生が本書で強調したかったことを確認したい。モンテッソーリ教育の原点に戻ろう。よく知られた話ではあるが、あの「円柱さし」の幼女の話である。周囲からのどんな誘惑があっても、自分で選び、自分で決めた(身体を使う)活動を楽しみ集中したあと、幼児は夢から覚めたように幸せな表情をした。モンテッソーリ教育は、子どもを幸せにするのだ。そして、老人も同様な活動によって幸せになれるということが実証されている。幼児期にこのような教育を受けられるということは、幸せな人生へのスタートになるだろう。

分かりやすい語り口で、モンテッソーリ教育の核の部分と新たな可能

性が凝縮された本書を読んでいると、最初に申し上げたとおり、著者江島先生その人と向き合っているのではないかという錯覚にしばしば襲われる。江島先生の真骨頂は学者としての「ひたむきさ」であることを付け加えたい。モンテッソーリ教育というと、教具や教具の使い方を思い浮かべる人が多いが、それは、モンテッソーリの科学的な哲学が基盤になっていると江島先生は主張する。幼稚園や「子どもの家」の家の訪問記は、紙幅の関係で言及できなかったが、きっと楽しくお読みいただけることと思う。

サンパウロ（〒160-0011 東京都新宿区若葉1-16-12）

2020年8月20日、278頁、定価1,600円＋税

---

佐々木信一郎 著

## 発達障害児のためのモンテッソーリ教育

早田 由美子  
(千里金蘭大学)

本書は、発達障害児のためのモンテッソーリ教育をライフワークとして、障害児教育の研究と教育に携わってきた著者の、長年の経験の積み重ねの中で得られた貴重な知見の集積である。「発達障害のある子どもを、子どもの側、子どもの視点で理解し、持っている個性や力を最大限発揮できるようになることを願って」書かれている。

発達障害児教育に携わる人々にとって待望の本であるだけでなく、教育保育に関わる多くの人々に、そして、現在、それを学びつつある学生の方々にも必読の書と言える。

### 〈著者について〉

著者は、1989年にミュンヘン小児センターに留学し、国際モンテッソーリ協会による3～6歳児のディプロマと特殊教育のためのモンテッソーリ教師資格を取得した。帰国後もこじか「子どもの家」発達支援センターなどでモンテッソーリ教育を通して、障害を持った子どもたちと長年関わりを続けてきた。

「今、実際におこなわれている科学的手法に基づく発達障害児の教育や支援」が「問題行動だけを解決すればそれでよしという風潮があり」、「どう育てていけば、この子たちは自己教育をしていくことができるのか。そして、個性や人格を自ら創造し、自己実現をしていけるのかは、あまり大切にされていないように感じる」と現在の発達障害児の教育に懸念を示している。そして、その、問題意識の下、モンテッソーリ教育の理念を生かし、現代科学の知見も取り入れ、子どもの側に立って発達障害児の教育を組み立てている。子どもが抱える困難さを解決し、さらに、子どもの自己教育・自己実現を支援することを大切にする教育が構築されている。

### 〈本書の構成〉

本書は次の章から成る。

- 第一章 発達障害はみんな違う
- 第二章 錯覚の世界から真実の世界へ
- 第三章 モンテッソーリ・マフィア現象と発達障害
- 第四章 認知・非認知能力を育てる
- 第五章 発達障害児のためのモンテッソーリ教育
- 第六章 家庭環境を整える
- 第七章 こだわりへの対処
- 第八章 発達障害児の遊びを促す簡単レシピ
- 第九章 興味・関心への支援
- 第十章 日常生活の練習

### 〈本書の内容〉

発達障害者支援法では発達障害児（自閉症スペクトラム、注意欠陥多動性、限局性学習症）が支援の対象となっている。これらの発達障害児には、対人関係の障害、言語・コミュニケーションの障害、想像性の障害（パターン化した行動、こだわり行動）の3つの基本的な障害特性がある。

しかし、著者は概念で子どもをくくって、分かったつもりになることに警鐘を鳴らしている。それにより、「子どものほうは、傷を負ったり、二次障害を被ったり、伸びる芽を摘まれてしまったりしている」と指摘し、「このような概念から子どもを見るのではなく、一人ひとり異なる子どもを見て、たった一人のその子を理解することをしていかなければ、結果的に子どもを不幸にしてしまいます」と問題意識を明らかにしている。（第1章）

子どもは、興味関心、意欲、経験、速さ、理解度、取り組む回数などが一人ひとり異なっている。「他と違う自分を成長・発達させたいと願って」と著者は捉える。

定型発達児の集団の基準に少数の発達障害児が合わせるといふより、すべての子どもを一人ひとり異なる存在として、ありのままのその子を受け止めることが必要である。それが、インクルーシブ教育であり、モンテッソーリ教育は、最初からインクルーシブ教育であったと位置づける。モン

---

テッソーリが最初に取り組んだ対象が障害児であり、子ども一人ひとりが異なることを前提とした教育システムであったからである。(第2章)

近年、〈インターネット業界の有力者たち〉、例えば、マイクロソフト、グーグル、ウィキペディア、アマゾン、フェイスブックの創始者たちがモンテッソーリ教育を受けていたことが注目されている。本書では、この点に関しても丁寧な分析がなされている。

これらの人々へのインタビューや調査から、彼らの多くが「モンテッソーリ・スクールに通ったことが創造的な仕事での成功のために重要であった」と考えていることが分かる。彼らは、「モンテッソーリ教育の自由と環境」によって「一人ひとり異なる好奇心や興味・関心に基づいて自発的に学ぶ」ことで創造性が育てられ、強い個性が潰されずに済んだと考えていることが明らかにされている。

また、彼らは、創造性以外にも大切な力として「好奇心、興味・関心、意欲、自主性、集中力、自制心、自信など」を挙げている。それは、現代の心理学で「非認知能力」と言われている能力である。長年、能力とは、「頭の良さ、知能、成績の良さなどの認知能力」を指していたが、「彼らを世界のリーダーにしたのは、非認知能力である」と捉えられている。(第3章)

この「非認知能力」の重要性は、経済学者のジェームズ・ヘックマンも指摘している。彼は、40年にわたる研究から、「非認知能力を育てることは、すべての子どもが生涯幸せに生きるための大切な土台を作る」と主張した。

著者は、この認知能力・非認知能力の両方をモンテッソーリ教育が長年バランスよく育ててきたとし、それは、モンテッソーリ教育の以下の「学びの法則」と関係すると位置づけている。

モンテッソーリは、子どもの発達の中で見られる運動、感覚、秩序、言語、数、文化への敏感期を発見した。敏感期が来ると子どもは環境に主体的に働きかけ、どんな子どもでも発達していく。主体的な自己選択⇒集中⇒満足感・達成感⇒能力の獲得という流れである。これが学びの法則である。興味関心から出発するので、意欲の他、自己選択力、集中力、自己コントロール力などの非認知能力なども生まれ、認知能力も一連のプロセスの結果得られる。

この法則はモンテッソーリ教育の特徴として広く知られるようになってきたが、発達障害児にも十分効果を発揮する。楽しく、面白いことがあれば、待つ、我慢する、一生懸命取り組む、いろいろなことができるようになるという原則（流れ）ができる。（第4・5章）

しかし、発達障害児は、さまざまな問題を抱えているため、そこへ到達できないことも多々ある。現代科学では障害児の特性に関する理解も進んでおり、著者はその理解に即してさまざまな支援を工夫してきた。

その特性とは、想像性の障害、同一性保持（こだわり）、時間という具体的な形のない概念に対する理解の困難さといった特性や、視覚優位、視覚的情報処理優位（聴覚優位の場合もある）といったプラスの特性もある。

その一部を紹介すると、例えば、時間の概念の理解が困難な子どもには、視覚優位の特性を生かし、「今日の予定」カレンダーを作成・配布し、前夜に家庭での確認などにより当日の混乱を防ぐという支援がされている。従来モンテッソーリ教育で提供されてきたものを障害特性に合わせてアレンジされている。また、同じ場所で同じようにすることにこだわる子どもには、比較・分類・分析・対応という方法によって概念が形成できるように支援する。さらに、ひたすら水道から水を出して感触を楽しむ子どもには、色水注ぎ、スポンジ絞りを提示し、子どもが自ら選ぶのを待つなどである。これらによって、混乱が防げたり、強いこだわりが緩和されたり、達成感を得られたり、様々な効果が生まれている。（第5・6・7章）

さらに日常生活で子どもが経験するさまざまな手を用いた活動が遊びの中で自然にできるような工夫もある。入れる、あけ移す、切る、摺る、注ぐ、通す、挟む、塗る、引く、はめる、貼る、縫う、挽く、磨くなどの動作である。これらは従来から行われてきたモンテッソーリ教育の基本でもあるが、発達障害児にとっても活動の土台を形成するために大きな役割を持つ。

さらに、聴覚過敏の場合や視野の特性から必要なものに焦点を合わせにくい場合、記憶が弱い場合などにおける実践的工夫も紹介されており、これらの障害特性の支援にも大きなヒントになるであろう。

いずれも、押しつけややらせようとする意図がある行為は禁物であり、「とにかく待つことです。我慢してください。子どもを信じてください」とモンテッソーリのように佐々木氏も言う。（第8・9章）

---

いずれも、シンプルで、自ら誤りに気が付き、自ら訂正できる環境を準備し、同じ流れ、同じ手順で分かりやすく進める。あくまで自己訂正の原理の下で、である。

著者は、「モンテッソーリ教育では、子どもを秀才にしようとか、有能な人間にしようとか、有名大学に入学できる人にしようとかそんなことは目標にしていません。それらはあくまで結果」であるとする。興味関心を持って自分で選んだものは、活動の楽しさと結びつき、楽しい活動は記憶と結びつく。結果と結びつくということである。

著者は、モンテッソーリの「子どもは本来進歩しようという思いに駆り立てられている人間」（モンテッソーリ著『創造する子ども』）という人間観を学び、自身の長年の実践を通して「子どもは、成長しよう、発達しよう、自律・自立しよう、良いものになろう、自分を高めようと願っています」という確固たる人間観を築いた。そして、どの子どもも支援してきた。

「一人ひとり違うことが当たり前前の教育であるモンテッソーリ教育で育つならば、たとえ、発達障害を持っていて、偏りがあり、人と違っていても、その違いを生き抜くことができるのです」として希望にあふれる境地を示した。(10章)

「おわりに」で紹介されている、発達支援センターの卒園式での子どもの姿も感動的である。入園当初は、いろいろなものにこだわり、パニックを起こし、暴力、暴言を振るい、少しも落ち着いて席に座っていることがなかった子どもたちが1時間座っている。「座って話を聞いているのはモンテッソーリの子もだけ」とSNS上で話題になるほど心が安定した姿を見せた。

子ども一人ひとりの理解の下、落ち着いた安定した生活への土台が築かれ、学びの法則を通して、認知・非認知能力が育ち、自己教育できることが多くの実践例とともに明らかにされている。

モンテッソーリ教育と現代科学に基づく実践による経験知の集積として広く普及することを願う。

講談社（〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21）

2021年4月15日、239頁、定価1,500円＋税

## 松本良子先生ご逝去を悼む

日本モンテッソーリ協会（学会）会長・理事長 前之園幸一郎

私どもが敬愛する松本良子先生が2022年1月26日にご逝去されました。つねに当協会の発展を願い終生ご尽力下さった先生のお旅立ちに心からお悔やみを申し上げたいと思います。先生は1992（平成4）年に日本モンテッソーリ協会の事務局長に就任されクラウス・ルーメル先生を支えながら2010（平成22）年まで14年間にわたってご活躍され、現在の当協会の発展の基礎を固めて下さいました。



松本良子先生がご苦心下さった当協会にとっての大きな成果の一つは、現在の全国大会開催のスタイルの確立です。当初、東京を中心に開催されていた全国大会が北海道から九州まで全国十か所に存在する各地方支部によって順番に開催されるようになり今日に至っております。それぞれの地域の特性に密着した独自の活動の展開と会員相互の学習ならびに情報交換を基本とする今日の各地方支部の充実が、現在、全国大会の開催を可能にしております。松本良子先生は、各支部の主体的な活動と全国大会開催が持つ意味の両者を同時に視野に収めておられました。

今日、私どもが毎年全国大会を格調高い「学会」として開催できるのも松本良子先生のご苦勞とお骨折りによるものです。保育者による全国的な学び合いを主体とする団体であった当協会は1996（平成8）年に日本学術会議に学術研究団体として登録されました。その後の省庁改革により、現在、当協会は「独立行政法人 日本学術振興会」の協力学術研究団体となっています。当協会が「学会」としての要件を満たす団体となるために条件の整備に努められ、日本学術会議との交渉にあたられたのも松本良子先生でした。

当協会の発展のために多くの足跡を残された松本良子先生のご逝去を深く悼み心からお礼を申し上げます

## 第 53 回全国大会報告 初となる Zoom 大会を終えて

JAM 第 53 回全国大会 by Zoom 実行委員会 事務局長 岡村 次朗  
(認定こども園 潮幼稚学園 代表)

思い起こせば 2017 年の東京での全国大会が終わった後、2020 年開催予定であった四国支部内での全国大会開催への準備を始めるメンバーとしての協力要請を受けてはや 4 年が経ちました。その時には想像もしなかった世界的なウイルス流行という状況を経て、当初予定とは随分と形は変わりましたが、2021 年 7 月 30 日、31 日に当学会では初となる Zoom（インターネット上）での全国大会を開催することができました。大会には全国から 751 名にご参加いただき、予定されていた演目をすべて無事終了することができましたのも、沢山の人の支えがあったからこそと感じております。

前例のない大会形式を事務局長として準備していく中で、さまざまな課題や問題点をクリアすることは大変ではありましたが、初めての取り組みを形にするというやりがいのある仕事であったと感じております。中でも自分の頭の中にある構成とイメージをどうやって伝えていくのかが一番大変な作業で、従来の会場開催であればイメージは相手に伝えやすいのですが、なにせネット上でのこと。物理的に近くにはいない人たちをどうやってつないでいくのか、そのための操作や練習プロセス。ネット上のセキュリティー対策、参加者がスムーズにログインできる配慮、臨場感、質疑応答、トラブル対応など。従来の会場開催のように経験に基づくその場での臨機応変な対応が難しいため、あらかじめデザインされた環境下で行うことが必要でした。

そのための準備には多くの時間をかけましたし、近くでは優秀な仲間である吉村のみ子事務局長が大きな支えとなり、実行委員長である乾盛夫先生や副実行委員長の久万美子先生も、私の考えを理解しようとしてくださいましたし、私を信じてたくさんの仕事を任せてくださいました。特に大会 1 カ月前からのテスト配信やコントロールスタッフとの操作練習は緊張感をもって進めていきました。ここに至り JAM 会長をはじめ、理事の皆

さま、講演者、発表者も慣れないPC操作を一から準備、練習していただき、最終的にZoom大会は成功したのだと思います。本当に心から感謝です。閉会式で自然とこみ上げてきた涙は、準備の苦労よりも、皆さまへの感謝と御礼の気持ちからでした。

今回の大会は、コロナ禍を踏まえ「安心安全な開催」「学びの機会を止めない」という2点を優先して、やむを得ずZoomでの開催となりました。特に1年の延期となったものを2年延期できないという思いは強かったです。コロナ禍であってもできることの最大限を駆使して学びの機会を止めないといけないという責任感が形になった大会でもあります。

今なおコロナ禍で社会は混乱しています。人と人との交流が制限され、マスクを外せない日々が続き、人命 or 経済といった議論が横行し、出口の見えない状況で秩序が乱れ始めています。こうした、これまでの日常とは一変した環境で、私たち教育・保育に関わる者たちは立ち止まって良いものか。できることの最大値を使って、前に進まなければならないのではないか。こうした思いがZoom大会開催に至る二つ目の理由に込められています。私は戦争を知らない世代ですが、いかなる状況下でもその時のできることの最大値で日常の歩みを進めてきた人たちがいるからこそ今があるはずです。

今大会のテーマでもありましたが、私たちは子どもたちとの日々を通じて、平和と地球環境保護を実現する責任があります。本大会に参加して、何かを感じ、思いを行動に変換し、動き始めた人が一人でもいれば幸いです。私は根源的にこうした思いに動かされたのだと思います。大変だったけれど、自分の今持てる力のすべてを注ぎ込めた大会でした。この機会をくださった皆さまに感謝です。

次の北海道大会も、その次の中部大会も楽しみです。いかなる形式でも学びの機会を止めてはならないしモンテッソーリ教育の魅力を伝え、昇華させることも一会員の仕事だと思います。どこかで皆さまとお会いできることを楽しみにしております。

---

## 第 53 回全国大会を準備して

全国大会事務局員 吉村 るみ子  
(子育て支援センター カンガルーのおなか)

2019 年 12 月、中国武漢で新型コロナウイルス発生ニュースが流れた頃、高知大会事務局は例年の流れに沿い事務作業を進めていました。

2020 年 3 月、申込書の発送の時期です。コロナは世界で広がり、日本も緊急事態宣言発令、各学校は一斉休校になり、東京オリンピック・パラリンピックも迷走状態でした。それでも、夏にはワクチンができ、何とかなるかもしれないと、開催を祈りつつ、皆さまに大会案内および申込書を発送しました。

6 月、さらにコロナは広がり、オリンピックは延期され、本大会も延期が決定し、全会員と関係各所に通知しました。この頃世間では、「With コロナ」生活のリモート会議・テレワークが広がっていました。

10 月、「With コロナ」の大会開催はどうなるのか、講演・発表の先生方はオンラインでの登壇を引き受けてくださるのか不安の中でした。そこで、大会事務局としてアンケートを取り、結果を理事会へ報告し協議していただきました。

2021 年 2 月、さまざまな意見の中、最終的に Zoom による開催決定となり前例の無い初 Zoom 大会への挑戦が始まりました。しかも、担当する高知大会の事務局 2 名は大会運営初心者です。それでも「高知から新しい風を吹かせてみよう」「やるしかない」と、ドキドキ、少しわくわく、そんな気持ちでした。

大会事務局長は Zoom の運営研究に専念、私は「大会のために必要な物を集める。必要な事を伝え通知する」ことに専念しました。大会事務局長が Zoom 大会のスケジュール・システム・台本を考案し、具体的日程を話し合い、それに合わせて、講演・発表・理事の先生方への連絡、原稿収集、協賛依頼（四国支部実行委員のご協力もありました）、業者と連絡、メールや電話の対応など、専用電話（スマホ）を準備し精いっぱい励みました。全国からさまざまな問い合わせがあり、答えに困る時は JAM 理事の江島先生や鈴木 JAM 事務局長にご相談し助言をいただきました。

コロナ禍において大会事務局長と頻繁に LINE 連絡を取りつつ、スケジュールの節目ごとに直接会い、確認や修正をし、実行委員長の承認を得ながら進めました。記念品は、四国の紹介と郵送可能な物を考えました。

7月、連日集合し、Zoom の利用方法を学習しつつ、関係する先生方へ、いつ、どの URL を送ると良いのか、パズルのように組み合わせながら伝えていきました。ICT 業者さんとチームワークは良好でした。

どの先生方もコロナ禍にあって予定変更など大変な思いをされているのに、事務局へ労りと激励の言葉をくださいました。励みになりました。モンテッソーリ教育を学ぶ方は、相手を思いやる豊かな心と未来を見つめる広い視野を持つ地球人という表現が実感できました。参加者の皆さんが「この状態だからこそ、モンテッソーリ教育が必要です」と熱く話され、Zoom の良し悪しは承知の上で「コロナ後の世界で子どもの援助者として学びたい」と願っていました。地球の十全さを保つために、まさに答えは子どもにあると改めて教えていただきました。

北海道支部

支部長 前鼻 百合江  
(宮の沢さくら保育園)

1. 支部活動報告

「人として」の素直な喜怒哀楽がマスクに覆われたままの毎日を過ごし  
ながら緊急事態宣言、蔓延防止などの措置を乗り越えてきましたが、長い  
間の緊張感はとて大きくて強い疲労感を生むだけとなりました。さらに  
マスクを通してのコミュニケーションは様々な変化を（子どもも大人も）  
もたらしているようです。そこから起こる良い点、問題点はモンテッソー  
リ教育への課題でもあると考えます。

○令和2年7月28日—基調講演者推薦などの文書を送付

○令和3年6月——日程決定、基調講演者紹介文書送付

2. 2020年度 会計報告（令和2年7月1日～令和3年6月30日）

	月日	適用	収入	支出	備考
収 入	2020年4月1日	前年度繰越金	651,595		
	10月1日	利息	3		
	2021年4月1日	利息	3		
	小 計		651,601		
支 出	2021年6月21日	切手代		11,224	9712・1512
	2021年6月18日	パンフレット		60,000	
	小 計			71,224	
当期合計				580,377	
次年度繰越金				580,377	

令和3年6月30日

上記のとおり相違ありません。

会計責任者 近藤よしみ

東北支部

支部長 佐々木 信一郎

(こじか「子どもの家」)

昨年度の報告は以下の通りです。コロナ禍で、幼稚園、保育園の教育・保育内容に大きな影響が出ている現状です。できるだけ子どもたちの発達が阻害されないよう、それぞれの園が努力を重ねています。

これから、ワクチン接種が行われ、集団免疫が獲得されれば、もう少し動けるようになり、良い方向へ向かうのではないかと期待しています。

I. 活動報告

〈支部活動〉

コロナにより、全く活動が行えない状況でした。東北は、広いので、感染状況にも各県、差があり、集まることができない状況がありました。そのため、支部研修会も中止を余儀なくされました。今後、長引くようであれば、Zoomによる研修なども考えていく必要があると考えています。

II. 会計報告 (2020年8月1日～2021年7月31日)

2,678,383 (2019年度末残高) + 24 (2020年度収入) - 504 (2020年度支出)  
= 2,677,903 円 (次年度への繰越金)

内訳 現金……0円 郵便貯……2,677,903円

収入の部		
科目	金額	内訳
受取利息配当金	24	郵便貯金
合計	24	

支出の部		
科目	金額	内訳
通信費	504	切手
合計	504	

2021年6月18日

2020年度の会計処理状況を監査しましたところ適正に処理されていることを報告します。

会計監査 森本 幸子

## 関東支部

支部長 甲斐 仁子

(東洋英和女学院大学名誉教授)

### I. 活動報告

昨年度に引き続き COVID-19 によってもたらされる様々な諸問題に取り組まれている会員皆様にお見舞い申しあげると共に、希望をもち共に前進することを祈念している。前年度に引き続き本年度の支部活動に関しても、特筆すべき事柄がないことを報告し、お詫び申しあげなければならない。継続支部研修課題として、大船ルーテル保育園系列で考案され実践されている保育園でのモンテッソーリ教育実践に関する情報提供を含む研修会、モンテッソーリ教育理論を深める必要性に着眼し会長前之園先生に講話を依頼する件などがある。今回の WEB 全国大会にも見いだせるように、社会的状況に対応した支部連絡網構築・支部活動の可能性を探る試みをしたい。基本的には、本協会（学会）のホームページを活用し、支部開催の活動を開示する方法をとっていきたい。

支部長甲斐は本年3月末日をもって所属大学の定年退職を果たしたが、引き続き、松本良子前支部長のご支援を賜りつつ、また、支部の会計担当（預金通帳および印鑑を保管）をご快諾いただいた柳澤ナオミ会員（つづきルーテル保育園園長）に活力を得て、支部に有効な活動を展開していきたい。ご協力、ご支援をお願いしたい。

### II. 会計報告

前年度よりの繰越金		503,642 円
収入	受け取り利息	4 円
収入合計		503,646 円
支出		0 円
次年度への繰越金		503,646 円
	内訳	
	ゆうちょ銀行口座	471,927 円
	手持ち現金	31,719 円

令和3年7月15日

上記のとおり相違ありません。

会計担当 柳澤 ナオミ  
(つづきルーテル保育園)

東京支部

支部長 江島 正子

(群馬医療福祉大学大学院)

I. 活動報告

日本モンテッソーリ協会東京支部では、幼児期の4年間を「聖アンナこどもの家」で過ごし、現在は北海道三笠市立博物館で主任研究員として活躍しておられる相場大佑博士（学術）をお招きして、Zoomでお話をしていただけることになりました。

全く偶然に私は2021年2月2日、13時7分、NHKチャンネル1で「相場研究員が新しいアンモナイトを発見した」というテレビニュースを見ました。さらに、研修会直前の2021年4月16日付朝日新聞（朝刊）にアンモナイトについての記事が掲載され、相場氏についても詳しく報道されました。

彼は来年の日本モンテッソーリ協会の北海道全国大会で基調講演をなさるようです。大変楽しみです。研修会は以下のとおりでした。

1. 日時 2021年4月25日（日）10：00～11：30
2. 研修テーマ 「幼児期の思い出と古生物学者の現在」
3. 申し込み先 Eメール jam-tokyo-shibu@outlook.jp（無料）

II. 会計報告(令和2年7月1日から令和3年6月30日まで) (単位:円)

前年度繰越金 494,881円 (内訳: 郵貯 494,881円)

研修会費用 25,000円を差し引き 利子4円を加えて

現在 469,565円 (内訳: 郵貯 469,565円)

以上

令和3年6月30日 上記のとおり相違ありません。

会計担当 窪谷麻理

## 北陸支部

支部長 板東 光子  
(亀田平和の園保育園)

### I. 活動報告

北陸支部は地域が広いために、新潟と福井に分けて活動を行っています。今年度は新型コロナウイルスのために、福井方面だけの活動になりました。

#### 〈福井方面の活動〉

\* 公開保育・講演会…毎年、会員園が交代で公開保育を行い、実践を通して学びあう機会を設けたり、又講師を招いて講演会を行ってきましたが、今年は集合形式の活動はできませんでした。その代わりに、「生活領域に関する勉強会」を各園で取り組み、結果をメールで報告しあうかたちとなりました。

#### 各園の取り組み

玉の江こども園： 夏祭り、プール活動、料理活動、運動会、発表会の取り組みについて

いちひめこども園： 年齢別保育と異年齢保育の時間のもちかた

しろきこども園： 洋服の扱い方について（洋服の表裏の直し方、前後の見分け方、たたみ方…）

つぼみ保育園： 海道洋子氏を講師に迎えて、一日研修『モンテッソーリ教育の基礎』

はぎのこども園： 手洗いの仕方～ペーパータオルの使い方

伊井こども園： 新型コロナの感染対策

まつぶんこども園： 食事のマナーとだしについて

清水台こども園： 月1回の保育アドバイザー訪問時に0歳から5歳児の年齢別での集まりの指導に学び、保育に生かした。

II. 会計報告（令和元年7月1日から令和2年6月30日まで）

収入の部	前期繰越金	3,777 円
	第 52 全国大会より	1,000,000 円
	本部より活動資金	30,000 円
	利息	6 円
支出の部	福井での活動支援金	240,624 円
	福井への送金手数料	1,540 円
	第 53 全国大会広告料	30,660 円
次期繰越金		760,959 円

令和3年7月6日 上記のとおり相違ありません。

会計担当 牧野莉沙

## 1. 活動報告

2020年度の中部支部の年4回の定例研究会は、コロナ禍の中で対面研究会を実施していくのは難しい状況でしたが、新型コロナ感染症感染予防を図る為、リモート研究会2回、そして書面発表を2回行い、会員の皆様との学びの場を継続して参りました。

### ① 2020年9月 書面発表

「保育者は、この間新型コロナウイルス感染拡大とどう闘ってきたか、今後ウイルスと闘いながら、保護者の労働権、子どもの発達権をどう保障して行くべきか？」

新型コロナウイルス感染症について学び、たきこ幼児園・野並保育園・瑞穂こどもの家・しおみが丘こども園、聖心幼稚園の3～8月の取り組みとその中で学んだこと、これからの構えを出し合い、互いに学び合いました。

### ② 2020年11月14日(土) 午後1時半～4時半 リモート研究会

「モンテッソーリ教育の全体像について」

講師 瑞穂こどもの家 森下京子先生

### ③ 2021年1月 書面発表

「縦割り保育の導入にあたっての今まで取り組み、そして今後の課題や方向性をさぐっていく」

瑞穂こどもの家、野並保育園、たきこ幼児園、聖心幼稚園の縦割り保育実践報告

### ④ 2021年6月12日(土) 午後1時半～4時 リモート研究会

モンテッソーリの「コスミック教育」の理解と私たちが受け継ぐべき使命について

講師 野原由利子先生

今後も、中部支部研究会の活動がより充実したものとなりますように、皆様の貴重なご意見、要望をお聞きしながら、運営、計画、広報に努めてまいりたいと思います。

2. 会計報告（2020年7月1日から2021年6月30日まで）

（単位：円）

	科目	金額	摘要
収入の部	前年度繰越金	1,453,836	
	利息	299	
	支部支援金	30,000	JAMより支援金として
	資料代	2,000	6月リモート資料代
	合計	1,486,135	
支出の部	会場費（印刷代含む）	3,000	
	講師謝礼	30,000	リモート研究会講師謝礼
	原稿作成謝礼	13,000	書面発表原稿作成謝礼
	事務費	8,853	
	通信費	8,806	研究会案内、資料の送料
	諸会費	22,352	子どもネット、Zoom会費
	次年度繰越金	1,400,124	
	合計	1,486,135	

上記のとおり2020年度会計報告をいたします。

2021年7月1日 村田 尚子

会計報告を監査いたしました結果、間違いありません。

2021年7月2日 酒井 教子

## 近畿支部

支部長 瀧野 正三郎

(カトリック京都司教区)

### I. 活動報告

2021年1月11日に、オンライン研修会を開催しました。

講義：新しい時代にこそ求められるモンテッソーリ教育  
～親育ちを援助するチャンス～

内容：時代を超えたモンテッソーリの普遍的な理念を確認し、考え、子育てで支援をしていくために大切なポイント

講師：田中昌子先生（エンジェルズハウス研究所所長）

参加者：124名

変化が激しく予測が困難な事が多い現代、子ども達が求められている教育は、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら判断して行動するアクティブラーニングであり、それこそまさにモンテッソーリ教育であることを改めて実感しました。

講話の中で、故相良敦子先生のメッセージも、たくさん伝えていただきました。中でも、「ありのままのあなたでいい」「自分も大切、相手も大切」という言葉をいつも心に置きながら、私たち自身謙虚な気持ち、奇跡的に生きている存在であることを改めて認識し、子ども達の為に力を注ぎたいと思いました。子ども達に対して肯定的な見方、援け方をすることを大切にし、子どもが一人で解決することを手伝って生きようになりたいと思いました。

また、親育ちの援助として、保護者の方の話をしつかりと傾聴し、共感し、答えを出すのではなくヒントを伝え、保護者自身が気づいていけるようなかわりをしていきたいと思いました。

### II. 会計報告（2020年7月1日から2021年6月30日まで）

収入		支出	
協会より支部活動費	30,000	講師謝礼	20,000
利子	6	研修会雑費	440
前期繰越金（郵貯）	703,463	印刷代	2,600
		通信費	4,200
		次期繰越金（郵貯）	706,229
合計	733,469	合計	733,469

2021年7月1日 上記のとおり相違ありません。

会計担当 東 裕子

中国支部

支部長 島田 美城  
(エリザベト音楽大学)

I. 中国支部では、昨年に引き続き、コロナウイルスの感染拡大に伴い、支部活動を怠っておりましたことを支部の会員の皆様に謝罪いたします。オンラインを媒体とした新しい方法を模索すべきでしたが、実施できませんでした。

各幼稚園、保育園、認定こども園の皆さまも、臨時休園の措置や日常的な分散保育、遠隔保育、など日々薄氷を踏む思いで工夫を重ねてこられたと思います。状況が良くなりましたら皆様が集え、語り合える場をぜひ考えたいと思います。

II. 会計報告 (令和2年7月1日から令和3年6月30日まで)

収入	
前期繰越金	569,947 円
利子	4 円
合計	569,951 円

支出	
次年度への繰越金	569,951 円
合計	569,951 円

令和3年7月12日 上記のとおり相違ありません。

会計担当 藤尾かの子

## 四国支部

支部長 乾 盛夫  
(鳴門聖母幼稚園)

### I. 活動報告

今年度の四国支部の活動は、高知の大会事務局岡村次朗先生と事務局員の吉村るみ子先生、そして実行委員を中心とした「日本モンテッソーリ協会（学会）第53回WEB全国大会 by Zoom」の準備に終始しました。WEB全国大会は、日本モンテッソーリ協会（学会）大会での初めての試みなので、常に多くの課題を抱えながら、努力をして参りました。今月末には当日を迎えますが、参加者の皆様に楽しんでいただけるよう心を尽くしたいと思います。皆様には引き続きご協力をお願い申し上げます。

これからの全国大会で、もし、Zoomで行おうという場合には、一つのたたき台にしていいただければ幸いです。将来は未知数ですので、どんな事態が発生するかわかりません。従来通りの大会の在り方と、時代に即応したZoomなどの方法のそれぞれのプラス面を生かしながら、毎年有意義な大会が行われてゆくことを祈念いたします。

### II. 会計報告（2020年7月1日から2021年6月30日迄）

収入		支出	
前年度繰越金	670,745	次年度繰越金	670,751
利子	6		
合計	670,751	合計	670,751

令和3年7月1日 上記のとおり相違ありません。

会計担当 吉村るみ子

**九州支部**

支部長 関 聡  
(久留米信愛短期大学)

I. 活動報告

本年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため支部活動は行いませんでした。

II. 会計報告 (令和2年7月1日から令和3年6月30日まで)

(単位 円)

収入		支出	
前年度繰越金	1,236,248	次年度繰越金	1,236,260
利子	12		
合計	1,236,260	合計	1,236,260

以上

令和3年7月1日 上記のとおり相違ありません。

会計担当 北里隆介

大会スケジュール（2021年）

1日目（7.30 金）		2日目（7.31 土）	
Zoom ウェビナー会場①		Zoom ウェビナー会場⑥	
9:00～9:30	【開会式】オリエンテーション	8:45～10:00	【特別講演Ⅰ】松居 友 「生きるかって何だろう」～ミンダナオから 見えてくる日本の子どもの明るい未来～
9:30～11:30	【基調講演】石田秀輝 「未来の子どもたちに素敵なバトンを渡 したい!!」	10:40～11:55	【特別講演Ⅱ】深津 高子 人生の四季に寄り添うモンテッソーリ 教育
13:00～14:30	【基礎講座】前之園幸一郎 「モンテッソーリのコスミック教育にお ける平和と子どもの使命について」	13:00～14:30	【応用講座Ⅱ】野村 緑 「具体から抽象へ」 幼児期のモンテッ ソーリ教育は児童期への直接準備？
15:15～16:45	【応用講座Ⅰ】大原青子 「3歳までに育む人格の基礎～正常化への 予備段階として整えるべき環境とは～」	15:00～16:30	【投稿型シンポジウム】 シンポジスト 堀田和子/福原史子/ 田中昌子/乾盛夫
Zoom ウェビナー会場②		Zoom ウェビナー会場⑦	
12:00～12:40	昼食時間内【JAM事務局からのお知らせ】 JAM事務局（録画映像）	12:00～12:40	昼食時間内【JAM事務局からのお知らせ】 JAM事務局（録画映像）
13:00～13:45	【研究発表①】安藝 雅美 モンテッソーリ教育理念を一斉保育に 生かす試み ～環境構成を中心に～	13:00～13:45	【研究発表⑫】藤崎 達宏 超高齢化社会におけるモンテッソーリ 教育の新しい役割
14:00～14:45	【研究発表④】板倉 健介/竹川 茉莉 日本における初等教育からみたモンテッソーリ 教育の有効性～都市部のモンテッソーリ教育実 施園運営を手掛かりに～	シンポジウム投稿時間 15:00より「ウェビナー会場⑥」にてシンポジウムが開催されます。 それまでの間p5を参照にご意見の投稿をお願いいたします。	
15:15～16:00	【研究発表⑦】和氣 伸吉/奥山 清子 主体性と尊厳・活動サイクルによる向精神薬が 減少した事例を通して～	※投稿型シンポジウムでは、以下の3つのテーマに沿って参加者 からの投稿を基盤に、シンポジストのご経験や知見に基づいて ご意見をいただきます。テーマ①あなたは大会を通じてテーマ である「子どもとともに育つ」とはどういうことだとらえま したか。テーマ②あなたがモンテッソーリ教育現場で感じるこ とテーマ③モンテッソーリ教育と関わるものとして、あなたが 思うこと。	
16:15～17:00	【研究発表⑨】大久保 心 教育社会学から見る修学前教育と社会性 ～統計と観察から～		

	Zoom ウェビナー会場③		Zoom ウェビナー会場⑧
12:00~12:40	【プレゼン販売】ホソカワシュピール バーレン（録画映像）	12:00~12:40	【プレゼン販売】ホソカワシュピール バーレン（録画映像）
13:00~13:45	【研究発表②】 町田育弥/町田 愛 「音楽のように生きる」～子どもの活動における「時間の質」についての考察～	13:00~13:45	【研究発表③】 福本佳蓉/田村澄子/市原富弓 作品展・子どもたちとつくった生命の歴史
14:00~14:45	【研究発表⑤】 増田 京子 発達支援の必要な子どもにとっての環境を考える ～視覚支援と関わり関係から～	シンポジウム投稿時間 15:00より「ウェビナー会場⑥」にてシンポジウムが開催されます。 それまでの間p5を参照にご意見の投稿をお願いいたします。	
15:15~16:00	【研究発表⑧】 坂田久美子/高濱 敦子 秋季運動会-モンテッソーリ教育実践との つながり-		
16:15~17:00	【研究発表⑩】 久万美子/菅藤由期 子どもの観察から学ぶ自園研修		
	Zoom ウェビナー会場④		Zoom ウェビナー会場⑨
13:00~13:45	【研究発表③】 吉村 美紀子 子どもの心	13:00~13:45	【研究発表⑭】 櫻井 茂美 モンテッソーリの「逸脱した子ども観」 ～「子どもの精神」より～
14:00~14:45	【研究発表⑥】 保田 恵莉 子どもとともに歩む道-0歳からの教育の尊さ-	シンポジウム投稿時間 15:00より「ウェビナー会場⑥」にてシンポジウムが開催されます。 それまでの間p5を参照にご意見の投稿をお願いいたします。	
16:15~17:00	【研究発表⑪】 百枝 義雄 いのちのつながりを伝える -SDG s 時代の平和教育-		
	Zoom ウェビナー会場⑤		Zoom ウェビナー会場⑩
13:00~14:50	【特別映画上映①】 モンテッソーリ子どもの家	8:45~10:35	【特別映画上映②】 モンテッソーリ子どもの家

第 53 回大会 by Zoom 講演者・研究発表者・司会者

講演者・司会者一覧表		
	講演者	司会
基調講演	石田 秀揮	前之園幸一郎
特別講座Ⅰ	松居 友	乾 盛夫
特別講座Ⅱ	深津 高子	瀧野正三郎
基礎講座	前之園幸一郎	下條 善子
応用講座Ⅰ	大原 青子	鈴木 弘美
応用講座Ⅱ	野村 緑	早田由美子
シンポジウム	堀田 和子	石田 憲一
	福原 史子	
	乾 盛夫	
	田中 昌子	
研究発表者・司会者一覧表		
研究発表	発表者氏名	司会者
1	安藝 雅美	甲斐 仁子
2	町田 育弥／町田 愛	島田 美城
3	吉村美紀子	村田 尚子
4	板倉 健介／竹川 茉莉	藤原江理子
5	増田 京子	佐々木信一郎
6	保田 恵莉	岡山真理子
7	和氣 伸吉／奥山 清子	江島 正子
8	坂田久美子／高濱 敦子	板東 光子
9	大久保 心	関 聡
10	久万 美子／菅藤 由期	綿貫 真理
11	百枝 義雄	阿部真美子
12	藤崎 達宏	森 愛
13	福本 佳蓉／田村 澄子／ 市原 富弓	前鼻百合江
14	櫻井 茂美	長谷川美枝子

日本モンテッソーリ協会（学会）第52回全国大会決算報告書

収入の部

（単位＝円）

科 目	予算額	決算額	備 考	
参加費	会員	3,000,000	3,110,000	10,000 × 311
	非会員	3,000,000	3,936,000	12,000 × 328
	第3日のみ		10,000	1,000 × 10
	ワークショップ	150,000	261,000	1,500 × 174
	懇親会	1,760,000	1,445,000	8,500 × 170
	弁当代	1,210,000	1,101,100	
旅行社委託費	275,000	319,500	500 × 639	
賛助金	広告料	300,000	880,000	
	出店展示料	150,000	400,000	
	福井コンベンション		1,565,295	
利息・その他		1,204	普通預金利息4円+ 発表要旨録販売1,200円	
借入金	500,000	500,000	日本モンテッソーリ協会より	
合 計	10,345,000	13,529,099		

支出の部

（単位＝円）

科 目	予算額	決算額	備 考
講 師	500,000	590,000	
ワークショップ	150,000	598,783	シャトルバス 182,590 京都コース 150,000 会場費 100,000 その他 166,193
大会当日運営費	100,000	453,000	
会場費	4,000,000	2,833,696	
懇親会費用	1,760,000	1,614,290	
弁当代	1,210,000	1,070,000	
旅費交通費	125,000	858,367	講師交通費、宿泊代、実行委員交通費
通信費	300,000	297,865	
印刷費	600,000	429,678	
会議費	100,000	1,062,190	つばみ会場費、実行委員会会議費
渉外費	100,000	84,348	粗品、景品、手作りコスモス
消耗品費	180,000	740,250	お土産バック、Tシャツ、名札、紐、 生駒様お礼
手数料		19,672	振込手数料
借入金返済	500,000	500,000	
JAMへの支援金	200,000	1,000,000	
旅行社委託費	275,000	319,500	500 × 639
支部活動費	145,000	1,000,000	
予備費（事務局費）	100,000	57,460	
合 計	10,345,000	13,529,099	

令和1年11月10日 上記のとおり、ご報告申し上げます。

第52回全国大会実行委員長  
第52回全国大会事務局長

板東 光子 ㊟  
桑野 博子 ㊟

令和1年12月23日 監査の結果、上記のとおり相違ありません。

日本モンテッソーリ協会（学会）監事  
日本モンテッソーリ協会（学会）監事

赤松 廣政 ㊟  
山本 雅子 ㊟

年間事業（事務局）報告並びに次年度計画書（案）

令和3年6月30日

令和2（2020）年度事業報告書	令和3（2021）年度計画・予定（案）
令和2年	令和3年
8月9日 定期総会に代わる全国理事会（書面議決）の書類を全理事・監事に発送	8月1日 第54回全国大会準備開始（実行委員会） 「モンテッソーリ教育」（第53号）作成開始（編集委員会）
9月1日 上記全国理事会の書面議決の結果を全役員に通知	8月中旬 7月29日開催全国理事会の議事録を全役員に発送
9月4日 「事務局だより」№15作成開始	9月5日 「事務局だより」№16作成開始 理事選挙の準備開始（団体会員の有権者の確定等）
10月下旬 「事務局だより」№15発行並びに会費請求書を全会員宛発送	10月下旬 「事務局だより」№16並びに会費請求書を全会員宛発送
11月上旬～ 上記請求に対して納入された会費の整理	11月上旬 上記請求に対して納入された会費の整理
11月11日 第I回常任理事会（1月23日開催予定）の在り方を問う「お伺い」を常任理事、監事、第53・54・55回大会実行委員長に発送	
11月27日 上記常任理事会を書面議決で行うことを決定し、常任理事、監事、第53・54・55回大会実行委員長に通知	
12月3日 Zoomによる編集委員会を開催	
12月中旬 令和2（2020）年度中間決算報告書並びに会計監査資料を作成し監査を受ける。	12月中旬 令和3（2021）年度中間決算報告書並びに会計監査資料を作成し監査を受ける。第I回常任理事会の開催通知を常任理事、監事、第53回、54回、55回、56回各大会の実行委員長に通知（メールまたは郵送）
令和3年	令和4年
1月8日 Zoomによるルーメル・モンテッソーリ奨励基金受賞者選考委員会を開催	1月中旬 理事選挙関係書類作成・印刷
1月20日 第I回常任理事会の資料および表決書を全理事・監事に発送。当該常任理事会は、全理事参加の拡大常任理事会とする。	1月22日 第I回常任理事会（会場未定） 選挙管理委員長委嘱・選挙管理委員会発足 第56回大会提案
2月4日 第I回常任理事会の表決結果を全理事・監事宛発送。当該理事会の表決結果により、理事会は第53回全国大会をWEBで行うことを承認した。	2月中旬 上記理事会の議事録を全役員宛に発送（メールまたは郵送） 理事選挙関係文書・投票用紙等有権者宛発送
3月1日 第II回常任理事会をZoomと書面議決を並行して行うことを理事に通知し、それぞれの当該理事会への出席のあり方を問う文書を発送（メールまたは郵送）	3月1日 理事選挙投票開始
	3月中旬 第II回常任理事会開催通知を常任理事・監事、第54・55・56回大会実行委員長宛発送（メールまたは郵送）
	3月31日 理事選挙投票締め切り
4月14日 第II回常任理事会の開催通知（議案・資料・回答書を含む）を全理事に発送	4月上旬 理事選挙開票作業・結果を会長に報告 当選理事宛承諾書発送
4月24日 第II回常任理事会（Zoom）開催	4月23日 第II回常任理事会開催（会場未定）
5月4日 上記議事録を全理事・監事宛発送（メールまたは郵送）	5月中旬 上記議事録を全役員宛発送 全国理事会開催通知発送（メールまたは郵送）
5月中旬 全国理事会をZoomと書面議決を並行して行うことを全理事・監事に通知（メールまたは郵送）	「モンテッソーリ教育」（第53号）発行・発送
7月中旬 令和2（2020）年度決算報告書並びに会計監査資料を作成し監査を受ける。 「全国理事会資料」を作成し、全理事・監事に発送	7月中旬 令和3（2021）年度決算報告書並びに会計監査資料を作成し監査を受ける。
7月29日 「全国理事会」（Zoom、総会開催を代行）・「ルーメル・モンテッソーリ奨励基金受賞者選考委員会」開催	7月30日 「第17回支部長会議」・「第21回コース責任者会議」・「全国理事会」・「ルーメル・モンテッソーリ奨励基金受賞者選考委員会」開催
7月30・31日 第53回WEB全国大会 by Zoom（担当：四国支部）開催	7月31日～8月1日 第54回全国大会開催 於：札幌プリンスホテル・パミール館 定期総会開催
7月31日 編集委員会開催	8月1日 編集委員会開催

\*上記の予定は、新型コロナウイルス感染症の蔓延状況により変更される可能性があります。

\*他に、編集委員会、L・M奨励基金受賞者選考委員会は適宜開催の予定

2020年度 日本モンテッソーリ協会（学会）編集委員会 年間収支決算書

(単位=円)

収 入		支 出	
科 目	金 額	科 目	金 額
活動費	153,503	①人件費（委員長手当）	50,000
		② 〃（アルバイト）	49,200
		③会場費	0
		④印刷費	0
		⑤通信費	31,278
		⑥交通費	14,478
		⑦接待費	0
		⑧宿泊費	0
		⑨消耗品費	8,547
		⑩委員会費	0
		⑪渉外費	0
合 計	153,503	合 計	153,503

上記のとおり相違ありません。

2021年6月2日 編集委員長 江島 正子 ㊞

令和2年度決算報告書／令和3年度予算（案）

日本モンテッソーリ協会（学会）

(収入の部)

自：令和2年7月1日 至：令和3年6月30日

自：令和3年7月1日  
至：令和4年6月30日

科目	令和2年度予算	令和2年度決算	摘要	令和3年度予算案
会費（個人）	3,000,000	3,245,000	649口	3,000,000
会費（団体）	1,200,000	1,130,000	226口	1,200,000
会費（維持）	500,000	470,000	47口	500,000
入会金	150,000	222,000	111口	200,000
会費計	4,850,000	5,067,000		4,900,000
寄付金	0	0		0
ディプロマ代	300,000	174,000	58名	300,000
書籍代金	20,000	1,388	『モンテッソーリ教育』（52号）	20,000
学会誌広告料	200,000	320,000	各コース、出版社より	200,000
大会準備金の返金	500,000	0		500,000
利子・利息	3,000	2,308	定期預金、普通預金の利子の合計	2,500
雑収入	0	0		0
JAM支援金	800,000	0		800,000
寄付金～支援金 までの小計	1,823,000	497,696		1,822,500
前年度繰越金	14,906,093	14,906,093	現金・普通預金・振替口座	17,128,652
	33,558,418	33,558,418	定期預金	33,560,326
合計	55,137,511	54,029,207		57,114,478

## (支出の部)

科目	令和2年度予算	令和2年度決算	摘要	令和3年度予算案
消耗品費	30,000	1,299		30,000
通信運搬費	500,000	382,624	NTT (158,296) ヤマト (182,154) JP (42,174)	500,000
H P 費	200,000	141,900	nifty、サンライズアイ (主としてHPの管理)	150,000
交通・宿泊費	1,800,000	25,600	事務局員、理事交通・宿泊費	1,500,000
ルーメル・モンテッ ソーリ奨励金	150,000	100,000	佐々木景氏、天野珠子氏 (各 50,000)	150,000
印刷製本費	300,000	184,960	事務局だより&封筒 (122650)、 コピー代 (理事会資料他)	350,000
人件費	1,800,000	1,095,250	事務局員、監事	1,800,000
賃貸料 (含む管理費)	543,084	543,084	富坂キリスト教センター	543,084
会議費	60,000	4,000		60,000
支部活動費	200,000	60,000	中部支部、近畿支部	200,000
学会誌関連費	300,000	157,503	委員会活動費	2,000,000
渉外費	120,000	85,470	中元、歳暮、天野先生香典等	120,000
会費	150,000	50,000	日本学術協力財団 (50,000)	50,000
書籍支払金	10,000	0		10,000
手数料	13,000	4,230	三井住友銀行・ゆうちょ銀行	10,000
税金	100	12		100
雑費	0	0		0
大会準備金	500,000	500,000	四国支部	500,000
ルーメル・モンテッ ソーリ奨励基金 運営費	150,000	4,297	会議費、のし袋	150,000
予備費	500,000	0		500,000
支出小計	7,326,184	3,340,229		8,623,184
次期繰越金	14,252,909	17,128,652	現金・普通預金・振替口座	14,930,968
	33,558,418	33,560,326	定期預金 (含ルーメル・モンテッ ソーリ奨励基金 10000000)	33,560,326
合計	55,137,511	54,029,207		57,114,478

(単位=円)

令和3年7月2日 上記のとおり報告いたします。

事務局長 鈴木 弘美 ㊞

令和3年7月12日 監査の結果、上記報告とおり相違ありません。

監事 赤松 廣政 ㊞  
監事 山本 雅子 ㊞

## 日本モンテッソーリ協会（学会）役員

○印は常任理事（50音順）（役員の任期は令和元年8月4日～令和3年度総会の日）

役職	常任理事	氏名	勤務先
理事長（会長）	○	前之園 幸一郎	日本モンテッソーリ協会（学会）
副理事長（副会長）	○	ヴィタリ・ドメニコ	カトリック鎌町教会
副理事長（副会長）	○	佐々木 信一郎	（社福）聖母愛真会 こじか保育園
事務局長		鈴木 弘美	日本モンテッソーリ協会（学会）
理事	○	阿部 真美子	聖徳大学
理事		石田 憲一	長崎純心大学
理事		乾 盛夫	鳴門聖母幼稚園
理事	○	江島 正子	群馬医療福祉大学大学院
理事	○	岡山 眞理子	京都モンテッソーリ教師養成コース
理事	○	甲斐 仁子	東洋英和女学院大学名誉教授
理事	○	島田 美城	エリザベト音楽大学
理事	○	下條 善子	（学）小百合学園 広島モンテッソーリ教師養成コース
理事		関 聡	久留米信愛短期大学
理事	○	瀧野 正三郎	カトリック京都司教区
理事		谷田 佳育	
理事		野村 緑	聖アンナこどもの家
理事	○	長谷川 美枝子	深草こどもの家
理事	○	早田 由美子	千里金蘭大学
理事		板東 光子	亀田平和の園保育園
理事		藤原 江理子	九州幼児教育研究所・トレーニングコース
理事		前鼻 百合江	宮の沢さくら保育園
理事	○	松本 巖	フランシスコ会
理事	○	三浦 勢津子	東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンター
理事	○	松本 良子	プレーメン教育研究所
理事		村田 尚子	愛知保育園
理事		綿貫 真理	大濠聖母幼稚園
監事		赤松 廣政	カトリックイエズス会
監事		山本 雅子	元上智大学

## 支部関係

支部	支部長氏名 (所属)	郵便番号	住所	上段 電話番号 下段 FAX番号
□北海道	前鼻 百合江 (宮の沢さくら保育園)	063 - 0034	札幌市西区西野 4 条 6 丁目 11-12	011 - 663 - 8118 011 - 663 - 8146
□東北	佐々木 信一郎 (こじか保育園)	960 - 8068	福島市太田町 14-38-905	024 - 544 - 7135 024 - 544 - 7136
□関東	甲斐 仁子 (東洋英和女学院大学名誉教授)	227 - 0062	横浜市青葉区青葉台 2-28-4 リパティヒル A-306	045 - 530 - 5357 (電話と同様)
□東京	江島 正子 (群馬医療福祉大学大学院)	162 - 0845	新宿区市谷本村町 2-15-308	03 - 3260 - 3079 (電話と同様)
□北陸	板東 光子 (亀田平和の園保育園)	951 - 8121	新潟市中央区水道町 2-808-105	025 - 381 - 2051 (保) 025 - 381 - 8425
□中部	村田 尚子 (愛知保育園)	457 - 0026	名古屋市南区見晴町 1-1 エスポア見晴台 401	052 - 821 - 8048 (電話と同様)
□近畿	瀧野 正三郎 (カトリック京都司教区)	639 - 1016	京都市中京区河原町通三条上る カトリック京都司教区	090 - 8207 - 1831
□中国	島田 美城 (エリザベト音楽大学)	730 - 0015	広島市中区橋本町 2 - 31 - 401	090 - 3478 - 4008
□四国	乾 盛夫 (鳴門聖母幼稚園)	772 - 0001	鳴門市撫養町黒崎字松島 208	088 - 685 - 0079 088 - 684 - 1530
□九州	関 聡 (久留米信愛短期大学)	839 - 0863	久留米市国分町 1309-1 H-102	0942 - 21 - 2169 (電話と同様)

## 入・退会者数の動き

	2019（令和元）年度 2019.8.1～2020.7.31		2020（令和2）年度 2020.8.1～2021.7.31	
	入会者	退会者	入会者	退会者
北海道	1	0	0	0
東北	1	0	1	1
関東	16	8	25	4
東京	13	3	10	7
北陸	1	0	0	0
中部	1	1	2	2
近畿	5	3	4	1
中国	6	11	33	9
四国	1	0	3	0
九州	4	7	30	12
合計	49	33	108	36
団体	4	1	5	1
維持	0	0	0	0

ご逝去の方（令和元年7月1日～同3年6月30日）

令和元年8月14日	町田 初恵
同元年9月24日	高根 文雄
同2年1月20日	川村 洋子
同3年2月28日	白谷トキ子
同3年3月16日	天野 珠子
同3年5月16日	星島 明光

☆お世話になりました。心から哀悼の意を表します。

---

**第54回全国大会 in さっぽろ**  
**『共生』 ～ともに生き、ともに育つ～**

■基調講演 博士(学術) 相場 大佑 (三笠市立博物館 主任研究員・学芸員)

■基礎講座 ■特別講座 ■研究発表 ■ワークショップ ■シンポジウム

期日：2022年7月31日(日)～8月1日(月)

会場：札幌プリンスホテル パミール館

大会事務局：社会福祉法人宮の沢福祉会 宮の沢さくら保育園

TEL：011-663-8118 FAX：011-663-8146

e-mail：m-sakura@bz01.plala.or.jp

大会実行委員長 前鼻百合江 (宮の沢さくら保育園)

## I want to hand a wonderful baton to future children!

Emile H. Ishida

(Prof. Emeritus at the Tohoku Univ.)

It can be said that the present condition of society is in an advanced state of maturity. The deterioration of the global environment has begun to have a direct influence on life. The present form of capitalism, which can be called “Global” or “Current,” has already reached its limits. I hardly think that there will be growth.

It is now necessary to find a solution to the problems posed by these limits, a solution rooted in a different intellectual perspective that simultaneously is informed by knowledge of the past. This will allow us to design spiritually rich lifestyles under the severe constraints imposed by the global environment. Technology and service are necessary for filling the gaps in the M A.

Can we really shift to such a society? The coronavirus catastrophe has clarified the possibility. It became clear that we can cause behavior modification by our own will (individual design). It required patience and tolerance this time, but if it can be changed into something that will give a sense of accomplishment and fulfillment, the world can be changed drastically. And it will become quite clear that we will be able to hand future children the wonderful baton called a spiritually rich life.

---

# Report of the Symposium, 53rd National Convention of Japan Association Montessori

Coordinator of the Symposium Kenichi Ishida  
(Professor of Nagasaki Junshin University)

During the 53rd National Convention of the Japan Association Montessori, the first post-type symposium was planned on 31 July, 2021. For this symposium, three themes were selected by the secretariat of the convention: (1) What is your impression of Montessori's "growing up with children"? (2) At your workplace, what aspects of the method do you feel are the most important? and (3) What concepts are important to follow as a teacher? Members of the association first posted their experience and opinions according to the three themes. Then, at the symposium, based on the posts from the members of the association, three panelists provided further information, based on their own experience and knowledge.

The three panelists were Ms. Kazuko Hotta, head teacher of Montessori Harajyuku Children's House, Ms. Fumiko Fukuhara, an associate professor of Notre Dame Seishin University, and Ms. Masako Tanaka, head of Angel's House Labo. Members provided a total of 78 posts. There were 27 posts for theme (1), 26 posts for theme (2), and 25 posts for theme (3). For the first theme, some members posted their impression of "growing up with children" as "growing up with children means to be more in tune with their world, to understand their view of the world better", and some other members posted it as "developing with children". Based on these posts, panelists discussed and each of them presented their own views and ideas. For the second theme, many members posted the aspects as "the importance of setting environment appropriately for children". Some other members posted "the importance of being patient", and others posted "the importance of providing children time and space so that they can feel safe". For

the third theme, many participants posted their thoughts as the teacher cherishing the ideals, for example saying “the teachers should incorporate the Montessori method more, such as character building, as well as the spiritual component”, and “we should remember that children form an integral part of nature.”

In this symposium, we were able to gain a better understanding of the Montessori method in light of the posts from the participants and the three panelists’ discussion. I would like to convey my gratitude to the secretariat of the convention for the first post-type symposium.

---

## La pace e la missione del bambino nell'educazione cosmica del pensiero di M. Montessori

Koichiro Maenosono

(Professor Emeritus Aoyama Gakuin Women's Junior College, Ph.D.)

Il tema del questo saggio è la visione cosmica che è il punto di vista caratteristico del pensiero di Maria Montessori. *La visione cosmica* è il fondamento principale che attraversa tutto il pensiero di Montessori. Montessori ha chiarito concretamente il significato di questa visione nel Congresso Internazionale Montessori a San Remo del 1949 che si è tenuto per la prima volta dopo la seconda guerra mondiale. Lei ha analizzato esplicitamente la situazione attuale della società immediatamente dopo la guerra e ha fatto una proposta persuasiva per lo sviluppo originale del bambino e per la realizzazione della pace del mondo. La sua teoria dell'*educazione cosmica* è stata spiegata nella conferenza del corso della formazione insegnanti montessoriani del 1943 a Kodaikanal in India. Per la realizzazione della pace del mondo Montessori ha preso in considerazione in maniera esauriente il bambino come il cittadino dimenticato. Comunque *la visione cosmica* di Montessori ha potuto presentarci chiaramente i fenomeni che non potevamo vedere con gli occhi, o dei quali eravamo quotidianamente inconsci.

## Sensitivity as a Catholic in Maria Montessori's View of Children: Discovery of Intelligence and Love

Etsuko Hayashi

(Professor of Nagasaki Junshin University)

Montessori's view of children is important in understanding her educational thoughts.

Montessori seems to have deepened her Catholic faith in her later years. Therefore, the purpose of this study is to determine the influence of her religion on her views and perceptions about children. From her writings, I investigated this with the keywords “intelligence” and “love”.

What Montessori discovered was that there was a demand for intelligence in the child. Montessori found the original human figure created as “Imago Dei” in the child. In addition, it was also found that Montessori, who had interacted with children throughout her lifetime, began to consider that children were love itself rather than what they loved.

---

## The Sixth & the Seventh Luhmer Prizes

(Chair of the Screening Committee, Masako Ejima, Ph.D.)

On July 30, 2021, at the opening ceremony of the 53<sup>rd</sup> National Convention of the Japan Association Montessori's Shikoku Branch Kochi Convention, the 6<sup>th</sup> Luhmer Award was given to Kei Sasaki and the 7<sup>th</sup> Luhmer Prize was given to Tamako Amano.

6<sup>th</sup> Luhmer Award Winner: Kei Sasaki

In 1985, she encountered Montessori education at Umeda Akebono Gakuen. She learned about Montessori education through her work with children with disabilities, experiencing the depths of the child's inner life through Montessori education. In 2004, the Child Development Support Center, Kojika "Children's House" was opened. She actively adopts Montessori educational practices for children with special needs and accumulates knowledge of good practices.

7<sup>th</sup> Luhmer Award Winner: Tamako Amano

Tamako Amano obtained the Montessori Diploma through the Sophia Montessori Teacher Training Course and has been working as a university teacher and practitioner in Japan for more than half a century to popularize and develop Montessori education. She is currently involved in a teacher-training course as a vice chairperson of the Japan Montessori Association and a chairperson of the Tokyo Montessori Education Research Institute, a specified non-profit organization.

(Information on the Luhmer Award can also be found on the website of the Japan Montessori Association and at the website of the late Professor Luhmer: <https://luhmer-sj-klaus.jimdofree.com> )

## Overseas Report: Education in the Covid-19 Time

Setsuko Miura

(Director of Training Montessori Institute of Tokyo)

It has been almost two years since we started to adjust the style of training Montessori teachers facing challenges of the pandemic. In March 2020, an AMI-appointed examiner came from Australia for our oral exam, but had to go back home before the graduation, being worried that her flight may be canceled because of Covid-19. In April 2021, we began to change all the lectures to online, using Zoom and going paperless, checking the albums online. All of us, the staff and students, worked together to make changes so that we could continue training and learning. The students came back to the training center in June 2020 and we separated each class into halves so that there are fewer bodies at one time in our classroom.

AMI's continuous support and network made it possible for us to continue with our training. Trainer's meetings were held once or twice a month. All of us try to figure out the ways to lecture, show presentations, supervise practice, help the students to observe and practice teaching. It was great to have discussions to overcome the crisis and share the support.

Some AMI trainers had to take the materials home from the training center and present them on Zoom or on video during the lockdown. There were some cases where the observations and teaching practices were postponed until after the exams.

All the aspects of training such as lectures, presentations, practice, observation, teaching practice, and exams take place among people, and it seemed impossible to do them all online. We knew that we were challenging impossible tasks, but we did everything we could. We are very grateful to all the Montessori schools which let our students come in to do observations and teaching practices.

---

It seems like what will be the mainstream ways of training going forward is the combination of having both online and on-site courses. Presenting the materials will be onsite and psychology lectures and introductions to each area will be online.

During this time I also heard from teachers in Europe and the United States, that they are working with children from 3 to 6 “online.” This had never been heard of before. They were singing, playing games and cooking online. It sounded like desperate attempts using every possible technology trying to do whatever they could do. Some of them said that it was difficult to do all this while being watched by parents behind the screen. When the schools opened, it sounded so hard to disinfect every material the children touched, making the children wear masks, separating children so that they don’t touch one another. It made me feel so sad imagining each child being separated to eat their lunch alone away from his/her friends.

The situation had been better, but now many variants are fighting back at human effort to come up with vaccinations. Living with Covid-19 has become a new reality for us. I am sure that we can overcome this difficulty together. We learned how to be patient, how to be innovative, and how to protect one another. Let us learn from every experience and let the children come first, not our needs or efficiency. They need to use their hands, use their senses, to be in the environment where they feel safe and can be themselves.

## Special Focus: Corona Crisis and Childcare / Education

From the Editorial Board: Editorial Chairperson Masako Ejima  
(Gunma Medical and Welfare University Graduate School Professor, Ph.D.)

In late 2019, I learned through SNS that a strange cold-like disease was prevalent in mainland China. The year changed, and in the spring of 2020, the cruise ship *Diamond Princess* arrived in Japan, and it was then that the fierce battle against COVID-19 infections in Japan began. Both SARS (2002) and MERS (2015) were infectious diseases spreading outside Japan.

However, COVID-19 had a great impact on Japan in fields such as medical care, the economy, and education. Under such difficult circumstances and with the great cooperation of Print Boy, we were able to deliver *Montessori Education, No. 52* to the members of the Japan Montessori Association in May as usual. After the government issued the “State of Emergency,” a number of recommendations were made: the wearing of face masks, disinfection of hands, partitioning with acrylic plates, and restriction of movement across prefectural borders, all to prevent the spread of infection.

For this reason, the committee in charge of the “53rd National Convention” sponsored by the Shikoku Branch of the Japan Montessori Association announced that it would cancel its convention. The publication of *Montessori Education, No. 53* is contingent upon the holding of the Kochi convention.

The Editorial Board noted that during the Spanish flu epidemic of 1918, no record was made with respect to its impact on childcare and education; therefore, it was agreed that this time it would be better to leave some record for future generations in the journal *Montessori Education* of the Japan Montessori Association. After soliciting manuscripts, a “special edition” was created. The valuable reports

---

contained herein differ depending on region, institution, and word-processing software employed in their production, but all are rooted in Montessori educational philosophy. We pray that the worries, pains and sufferings we are experiencing now will help build a happy life for the next generation.

## Nagasaki Junshin University Nagasaki Junshin Montessori Teacher Training Course

Rumiko Kataoka

(President of Nagasaki Junshin University)

During the period when the university itself was able to offer face-to-face classes, the intensive lectures by off-campus lecturers were remote because the lecturers lived outside of the prefecture. It was unfortunate that the students were not able to attend the lectures face-to-face, as the enthusiastic lecturers provided a good stimulus for them to continue learning about Montessori education. However, the students still seemed to have learned a lot from the rich content.

As the infection spread to the rural areas, there was a period of time when face-to-face classes could not be held altogether. During that time, classes were taught remotely, but the practical subject of learning how to present educational materials became a problem. The students were not in daily contact with children, and especially for first-year students who had not even experienced practical training yet, it seemed difficult to learn to present the most basic “practical life activities” only through video. Therefore, the class was cancelled during the remote-only period, and make-up classes were held on different days after the students were able to meet face-to-face. For those students who were unable to take a make-up class and could not make it in time for the end of the class, the number of classes was filled by giving assignments for the time being, and the content of presenting activities was provided after the end of the class or after the new school year when face-to-face classes became available. It was fortunate that Nagasaki did not have a very long period of campus closure compared to urban areas.

The most affected were the fourth-year students who were taking the certification exam. The exam was postponed for two months longer

---

than usual, and with two weeks of nursery school practice in between, they were not in a position to concentrate on practicing. However, each student devised a way to go to school and practice, and all of them were able to pass the exam.

Rather than lamenting over what we could not do, we should be grateful for what we were able to do. We would like to continue to devise ways to keep the quality of learning high while placing priority on protecting the lives of students.

## モンテッソーリ教員養成コース

### I. 日本モンテッソーリ協会（学会）公認モンテッソーリ教員養成コース

- ・ NPO 法人東京モンテッソーリ教育研究所・付属教員養成コース  
コース長 前之園 幸一郎

〒 112-0002 東京都文京区小石川 2 丁目 17 番 41 号

富坂キリスト教センター 2 号館内

☎ 03-5805-6786 / fax 03-5805-6787

<http://www.ti-montessori-e.main.jp/>

- ・九州幼児教育センター・トレーニングコース  
(モンテッソーリ教員養成コース)

所長 藤原 江理子

〒 811-3425 福岡県宗像市日の里 7-21-4

☎ 0940-36-7008 E-mail: [ktcourse@nifty.ne.jp](mailto:ktcourse@nifty.ne.jp)

<http://homepage4.nifty.com/ktcourse/>

<http://hpm3.nifty.com/ktcourse/> (携帯サイト)

- ・(学) 小百合学園 広島モンテッソーリ教師養成コース  
コース長 下條 善子

〒 733-0002 広島県広島市西区楠木町 4-16-33

☎ 082-509-0980 / fax 082-237-0979

- ・京都モンテッソーリ教師養成コース

委員長 岡山 真理子

〒 612-0817 京都府京都市伏見区深草向ヶ原町 17

☎ 075-641-8410 (8280) E-mail: [mc.Kyoto@theia.ocn.ne.jp](mailto:mc.Kyoto@theia.ocn.ne.jp)

- ・純心モンテッソーリ教員養成コース

長崎純心大学人文学部 子ども教育保育学科 学科長 石田 憲一

〒 852-8558 長崎県長崎市三ツ山町 235

☎ 095-846-0084 (代)

## II. 国際モンテッソーリ協会公認モンテッソーリ教員養成コース

東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンター

代表, AMI 公認 3-6 トレーナー 三浦勢津子

〒 252-0301 神奈川県相模原市南区鶴野森 2-20-2

☎ 042-746-7933 E-mail: ami\_tokyojp@ybb.ne.jp

<http://www.montessori.g3.xrea.com>

## III. 日本モンテッソーリ教育総合研究所教師養成通信教育講座

〒 146-0083 東京都大田区千鳥 3-25-5 千鳥町ビル

☎ 03-5741-2270 E-mail: montessori@gakken.co.jp

<http://www.sainou.or.jp/montessori/>

# 日本モンテッソーリ協会（学会）会則

## 第1条（名 称）

本会は、日本モンテッソーリ協会（学会）という。

## 第2条（事務局）

本会は事務局を〒 112-0002 東京都文京区小石川 2 - 17 - 41  
富坂キリスト教センター 2 号館に置く。

## 第3条（目 的）

本会は、日本におけるモンテッソーリ教育研究者間の連携協同により、モンテッソーリ教育原理と実践を研究し、その普及を図ることを目的とする。

## 第4条（事 業）

本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) モンテッソーリ教育法の実践及び普及。
- (2) モンテッソーリ教育法の指導者の養成及びモンテッソーリ教員養成コースの認定。
- (3) 日本モンテッソーリ協会（学会）全国大会の開催。
- (4) モンテッソーリ教育の普及・発展を目的とする奨励金制度の設定。
- (5) モンテッソーリ教育教材の研究作成及び普及。
- (6) 講演会、研修会及び研究発表会の開催。
- (7) モンテッソーリ教育に関する印刷物の発行。
- (8) 海外諸国のモンテッソーリ協会との交流及び情報の交換。
- (9) その他、必要な事項。

## 第5条（会 員）

1. 本会の会員は、本会の目的に賛同して所定の入会手続きを経た個人及び団体とする。
2. 会員は本会則第 19 条に定める会費を納入しなければならない。
3. 会員には本会発行の印刷物を配布する。
4. 第 1 項に定める会員以外に、本会の運営水準を保つ賛助金出資者を、維持会員という。  
ただし、維持会員は、理事選挙の選挙権、被選挙権を持たない。
5. 会員が次の各号の一に該当する場合には、その資格を失う。
  - (1) 会員である個人が死亡、又は一身上の事由によるとき。
  - (2) 会員である団体が消滅したとき。
  - (3) 1 年以上会費を納めないとき。

## 第6条（支 部）

1. 本会は、会員の希望により、一定地域の中で、支部を設置すること

ができる。

2. 支部の設置及び運営に関しては、理事会に申請し、理事会及び総会の承認を得るものとする。
3. 支部は、本会の理事選挙規定に則って理事及び支部長の選出を行う。

#### 第7条 (役員)

本会に次の役員を置く。

名誉会長	1名
会長(理事長)	1名
副会長(副理事長)	2名
常任理事	若干名
理事	若干名
監事	2名
顧問	若干名

#### 第8条 (役員職務)

役員職務は次のとおりとする。

- (1) 名誉会長は、本会の活動理念に基づき、会長(理事長)に対して意見を述べ、若しくはその諮問に答え、又は報告に徴することができる。
- (2) 会長は、本会を代表し理事長となり、本会を総督する。
- (3) 副会長(副理事長)は、会長(理事長)を補佐し、会長(理事長)に事故ある時にその職務を代行する。
- (4) 常任理事は常任理事会を構成し、本会の常務を審議し、職務を行う。
- (5) 理事は、理事会を構成し、本会の重要な事項を審議し、職務を行う。
- (6) 監事は本会の会計及び業務の執行状況を監査し、その結果を総会に報告する。
- (7) 顧問は、会長(理事長)が委嘱し本会の諮問に応ずる。

#### 第9条 (役員選出)

1. 理事の選任は次のとおりとする。
  - (1) 本会の定める選挙規定に従って各支部ごとに選出された者14名。
  - (2) 各モンテッソーリ教員養成コースの代表者又はこれに代る者、並びに事務局長。
  - (3) 上記1、2号の理事によって推薦され、会長(理事長)の任命による者、若干名。
2. 会長(理事長)、副会長(副理事長)、常任理事は、理事の互選とする。
3. 監事は、理事又は本会の職員以外の会員から会長(理事長)が推薦し、委嘱する。理事又は本会職員をかねてはならない。

#### 第10条 (役員任期)

役員任期は3年とし再任を妨げない。

#### 第11条 (機 関)

1. 本会は次の機関を置く。
  - (1) 総 会
  - (2) 理 事 会
  - (3) 常任理事会
2. 必要に応じて、各種委員会をおくことができる。

#### 第12条 (総 会)

1. 総会は、本会の最高の議決機関であって全会員をもって構成する。
2. 総会は、年一回以上会長（理事長）が招集する。
3. 総会に議長を置き次の事項を議決する。
  - (1) 事業計画及び予算
  - (2) 事業報告及び決算
  - (3) 会則の改正
  - (4) その他、本会が必要と認めた事項

#### 第13条 (理事会)

1. 理事会は、理事をもって構成する。監事は、理事会に出席するものとする。
2. 理事会は、総会に属する議事決定事項以外でこの会が必要とする重要な事項を議決する。  
ただし総会を開くいとまがない時は、総会に代わって議決することができる。
3. 理事会は会長（理事長）が招集する。

#### 第14条 (常任理事会)

1. 常任理事会は理事の互選によって選ばれた者で構成する。監事は、常任理事会に出席するものとする。
2. 総会又は理事会を開くいとまのない時は、総会又は理事会に代わって議決することができる。
3. 常任理事会は会長（理事長）が招集する。

#### 第15条 (各種委員会)

1. 本会は必要に応じて委員会を設置することができる。
2. 委員会は理事2名以上が委員となり、当委員会の課題によって会員の協力を求めて委員会を組織する。
3. 委員会は経過、結論を理事会に報告するとともに、その目的を達成したときは、これをすみやかに解散する。

#### 第16条 (表 決)

総会及び理事会と常任理事会の決議は出席者過半数の同意をもって決し、可否同数のときは議長又は会長（理事長）の決するところによる。

#### 第 17 条（事務局）

本会の事務を処理するために事務局を置く。

2. 事務局には次の職員を置く
  - (1) 事務局長 1 名
  - (2) 書記 若干名
  - (3) 会計 1 名
3. 前項第 2 号及び 3 号の事務局職員は常任理事会が委嘱する。

#### 第 18 条（会計年度、帳簿等の保存および廃棄）

1. 本会の会計年度は、毎年 7 月 1 日に始まり、翌年 6 月 30 日に終る。
2. 本会の会計帳簿、伝票類は 7 年間保存する。
3. 第 2 項の保存期間経過後の会計帳簿、伝票類は事務局長の決裁を得て廃棄するものとする。

#### 第 19 条（経費）

- (1) 本会の経費は、入会金 2,000 円、個人・団体年額 5,000 円。入会金不要の維持会費年額一口 10,000 円、寄付金、その他の収入による。
- (2) 維持会費は、個人・施設とも一口以上、上限は定めない。

#### 第 20 条（規定）

- (1) この会則に定めない事項で、本会の運営のために必要と考えられる規定（別表参照）は、理事会の議を経て総会で定めることができる。

この会則に定めない事項で本会の運営のために必要と考えられる規定（別表参考）は以下のとおり。

[別表]

- (1) 選挙管理委員会規定
- (2) 理事選挙規定（投票要領は別にあり）
- (3) 編集委員会規定（投稿・査読に関する規定・要領は別にあり）
- (4) 支部規定
- (5) モンテッソーリ教員免許取得証明書規定
- (6) 役員費用弁償内規
- (7) 日本モンテッソーリ協会の収支報告書における勘定科目について  
日本モンテッソーリ協会の収支報告書における勘定科目は、平成 21 年度当協会収支報告書を基準に下表のように確定する。（表は別にあり）
- (8) 役員旅費規定

(9) 日本モンテッソーリ協会（学会）ルーメル・モンテッソーリ奨励基金規定

(10) 全国大会 経費運用規定

[創 立] 日本モンテッソーリ協会の創立年月日

昭和 43 年（1968 年）7 月 21 日

附 則

1. この会則は、昭和 43 年 4 月 1 日から施行する。
1. この会則は、平成 7 年 8 月 1 日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成 10 年 1 月 10 日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成 16 年 7 月 30 日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成 17 年 8 月 1 日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成 19 年 1 月 27 日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成 20 年 8 月 1 日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成 21 年 8 月 1 日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成 23 年 8 月 7 日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成 24 年 8 月 4 日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成 25 年 7 月 30 日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成 26 年 8 月 6 日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成 28 年 8 月 9 日から一部改正し、施行する。

以上

# 日本モンテッソーリ協会（学会） ルーメル・モンテッソーリ奨励基金規定

（主旨）

第1条 日本モンテッソーリ協会（学会）（以下「本協会」という。）は、昭和52（1977）年から平成19（2007）年まで本協会の会長（理事長）としてモンテッソーリ教育の普及・発展に寄与されたクラウス・ルーメル師の多大な功績を記念し、本協会会則第4条、第4号に基づき、「ルーメル・モンテッソーリ奨励基金」（以下、「本基金」という。）を設け、これに関する必要な事項を定める。

（目的）

第2条 モンテッソーリ教育の発展を期して、本基金の果実収入によってモンテッソーリ教育の研究を奨励する。

2 毎年度若干名の対象者に「ルーメル・モンテッソーリ奨励金」（以下「本奨励金」という。）を給付する。

（本基金の財源）

第3条 本基金は、寄付者（本協会）が寄付金1千万円を財源として設定する。

（本基金の保有及び増加）

第4条 本基金は、銀行預金・金銭信託・その他安全確実な保有方法によりこれを保有する。

2 本基金の財源は、寄付金品・給付されない果実収入等をもって増加させる。

（本基金の管理運営）

第5条 本基金の保有管理運用は、本協会の常任理事会の指導により事務局が行う。

2 本基金の管理運営のための必要経費は、本協会の予算によって負担する。

3 本基金の目的変更については、本協会の理事総数3分の2で議決する。

（本奨励金の給付額）

第6条 本奨励金を給付する額は、原則として、本基金の果実収入範囲内とする。

2 本奨励金給付額を本協会の予算によって増額することは妨げない。

（選考委員会）

第7条 本協会は、本奨励金の対象者を選ぶため、選考委員会を設置する。

2 選考業務に要する経費は、年度毎に予算化し、本協会の常任理事会の承認を経るものとする。

（選考委員会の構成）

第8条 本協会の理事会の互選による5名以内の委員をもって、選考委員会を

構成する。

2 本協会の機関誌編集委員長は、職務上委員となる。

3 選考委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

4 選考委員長は選考委員の互選による。

(本規定の改廃)

第9条 この規定の改廃は、本協会が解散、その他の理由で目的の遂行が不可能になった場合に、本協会の理事会により決定される。

(付則)

この規定は、平成24(2012)年8月4日より施行する。

## 『モンテッソーリ教育』 第 54 号原稿募集

### <論文、実践報告・事例報告>

内容……自由、分量……原稿用紙（400 字詰）25 枚以内（ヨコ書き）

### <書評・海外情報>

分量……原稿用紙（400 字詰）10 枚程度（ヨコ書き）

### <執筆要領>（論文、実践報告・事例報告）

『モンテッソーリ教育』への投稿は、次の規定に従うものとする。

1. 論文のテーマは、モンテッソーリ教育に関する理論と実践についての研究、およびモンテッソーリ研究に関連したものであること（未刊行のものに限る）。
2. 論文原稿は、ヨコ書きとし、次の点を厳守すること。
  - ①本文は、図、表、注を合わせ、400 字詰原稿用紙 25 枚以内とすること。（ただし、注および引用文献は、1 字 1 ますとする。算用数字と欧文は 2 字 1 ますとする）。パソコン使用の場合は 33 字 32 行の書式で 10,000 字以内。
  - ②図、表は文中に挿入せず、別の用紙に貼付し、論文原稿には挿入すべき箇所を指定しておくこと。
  - ③制限枚数をこえた場合は、書き直しを求められることがある。
3. 原則として常用漢字、新かなづかいを使う。
4. 注および引用文献は、原則として文中の該当箇所の右肩に (1) (2) として表記しておいて、論文原稿の末尾にまとめる。
5. 引用文献の記述の形式は、次のとおりである。
  - (1) 紀尾一郎『モンテッソーリ教育学』エンデルレ書店、1995 年、30～35 頁。
  - (2) 藤井 勝『モンテッソーリ教育学の性格』、東京太郎編『モンテッソーリ教育の理論』新教育学全集第 3 巻、西風社、1994 年、230～236 頁。
  - (3) 太田さゆり「モンテッソーリと新教育」『ペスタロッチ学会紀要』第 5 巻、1995 年、50 頁。
  - (4) Montessori, M., *Das Spannungsfeld* (Wien: Herder. 1979), pp. 33-40.
  - (5) Moller, A., “Models in a New Education”, in Merton, R. K. (ed.), *Sociology Today* (New York: Paulist Press, 1959), p. 145.
  - (6) Newman S., “On the Montessori Tomorrow”. *German Review* 24 (1959), p. 750.
  - (7) Ibid., p. 779.
6. 欧文摘要（200 語程度）およびその邦訳（400 字程度）を添付すること。

7. 原稿は3部(コピーでよい)提出すること。パソコン使用の場合は完成原稿のほかにそのファイルを入れたCD-ROMを添付し、ディスクの表に使用機種名および氏名、ファイル名を記入すること。なお、和文の句読点はテン(、)およびマル(。)を使用のこと。

<原稿締切>

2022年9月末日(期日厳守)

<原稿提出先>

〒112-0002

東京都文京区小石川2-17-41

富坂キリスト教センター2号館内

日本モンテッソーリ協会

『モンテッソーリ教育』編集委員会

編集委員長 江島正子

- \*原稿には勤務先、氏名(フリガナ付記)を記入してください。
- \*函版等で多額の出費を要する場合、執筆者に負担を求めることがあります。
- \*連続投稿はご遠慮ください。
- \*ディスクと一緒にハードコピー(出力紙)を添えてご提出ください。文字化けが生じても、復元することができます。
- \*ソフトは、Word(ウインドウズ、マッキントッシュ)やExcelをご使用ください。その他のソフトをご使用の場合には、テキストファイルで保存したデータをご用意ください。
- \*ディスクはケースに入れる等、破損を防ぐ工夫をお願いします。

## 『モンテッソーリ教育』論文投稿規定

『モンテッソーリ教育』における「論文・実践報告」については、以下の投稿規定に従うものとする。

- 投稿資格**
- 1) 本学会会員
  - 2) 本学会会員と共同研究を行う者
  - 3) 特に編集委員会が認めた者
- 投稿原稿**
- 1) 投稿原稿は未発表のものに限る。また、他の学術雑誌に投稿予定の論文は投稿することができない。
  - 2) 分量および書き方は、別に定める執筆要領による。
- 採否**
- 1) 投稿原稿は編集委員会で査読する。
  - 2) 査読結果により、所定期間内に旧原稿と修正箇所を明記した文書を添えて再提出する。旧原稿の返却後、期限内に再提出されない場合は、期限切れにより原稿の撤回と見なされる。著者の都合により撤回する場合は、その旨を編集委員会に書面で連絡する。撤回された原稿が再度提出された場合は、新投稿論文として扱う。
  - 3) 投稿者は査読結果に異議があるとき、編集委員会に書面により反論を申し述べることができる。それに対して編集委員会は書面により回答する。
- 著作権**
- 本誌の掲載文に関する著作権は原則として日本モンテッソーリ協会に帰属する。したがって、本学会が必要とする場合は転載し、第三者から本学会著作物等の複製あるいは転載に関する承諾の要請があり、本学会において必要と認めた場合は、著作者に代わって承諾することができるものとする。また、編集委員会が本業務を代行する。

## 日本モンテッソーリ協会編集委員会規定

(目的・定義)

第1条 日本モンテッソーリ協会編集委員会（以下「委員会」という）は、会則第4条第5号に則り設置され、学会誌『モンテッソーリ教育』の刊行を目的とし、年1回発行する。

(使命)

第2条 本誌はモンテッソーリ教育の理論と実践に関する研究、論文、実践、書評、学会通信等、会員のモンテッソーリ教育研究活動に関連する記事を記載する。

(構成)

第3条 本誌の編集には、理事会の委嘱を受けた委員から構成される委員会があたるものとする。

(任期)

第4条 編集委員の任期は3年とする。但し、再任を妨げない。

(委員長)

第5条 委員会には委員長1名をおく。委員長は委員の互選によって選出するものとする。

(幹事)

第6条 委員会の事務を円滑に行うため幹事若干名をおく。

(業務)

第7条 本誌各号の内容および投稿論文の掲載採否については、委員会の合議によって決定する。

第8条 掲載を予定される原稿内容およびその他について、委員会が再考を求めることができる。

第9条 図版等で多額の出費を要する場合、執筆者の負担を求めることがある。

第10条 執筆者による校正時の大幅な修正は、原則としてこれを認めないものとする。

付則 2006年8月9日 施行

## JAPAN ASSOCIATION MONTESSORI

### **Board**

Koichiro Maenosono Ph. D.* (President)	Ryoko Matsumoto*
Domenico Vitali SJ* (Vice President)	Setuko Miura*
Shinichiro Sasaki*	Naoko Murata
Hiromi Suzuki (General Secretary)	Mariko Okayama*
Mamiko Abe*	Satoshi Seki
Mitsuko Bando	Miki Shimada*
Masako Ejima Ph.D.*	Yoshiko Shimojo*
Eriko Fujiwara	Shozaburo Takino*
Mieko Hasegawa*	Yoshiyasu Tanida
Yumiko Hayata*	Mari Watanuki
Morio Inui	
Kenichi Ishida	
Kimiko Kai*	
Yurie Maehana	
Iwao Matsumoto*	

### **Auditors**

Hiromasa Akamatsu SJ  
Masako Yamamoto

*\*member of the Executive Board*

## MONTESSORI EDUCATION

### **Editors**

Masako Ejima Ph.D.* (Chief Editor)	Satoshi Seki
Mamiko Abe*	Hiromi Suzuki*
Kumi Hamazaki	Domenico Vitali SJ*
Yumiko Hayata	
Shinjiro Hayashi*	
Kimiko Kai*	
Ikuya Machida	
Koichiro Maenosono Ph. D.*	
Setuko Miura*	
Yuriko Nohara	
Koichi Okada*	
Kiyoko Okuyama	
Miki Shimada	

### **Proofreader (English)**

Franz-Josef Mohr SJ

### **Secretaries**

Toshiyuki Kosegaki  
Kaori Hirotsu  
Yoshiko Tanaka  
Yoshiko Kono  
Mari Kubonoya

*\*Executive Editors*

## 編集後記

新型コロナウイルス感染症に対する闘いは3年目に突入しました。中国で原因不明の肺炎が発生して以来、変異が繰り返されています。現在、変異株「オミクロン型」が新たに登場し、主流がデルタ株から新変異株「オミクロン型」に取って代わり、世界はその対応を急いでいます。世界中がこのコロナ大流行（パンデミック）の最中、わが国においても2022年初頭頃からオミクロン株の市中感染が報告され始めました。そのような状況であっても『モンテッソーリ教育』第53号の編集幹事さんたちは、たえず協力的でした。都県の境を越え、公共交通機関を使って文京区小石川の日本モンテッソーリ協会の事務所に足を運んで編集の仕事をしてくださいました。編集委員長として私は心から感謝します。

こうして今回、会員の皆さまに『モンテッソーリ教育』第53号をお届けできることをうれしく思います。本誌の内容は、四国支部主催の第53回全国大会 by Zoom ウェビナーによる全国大会が土台になっています。大会テーマは「子どもとともに育つ～地球の十全さを保たせるために～」、それに「特集 コロナ禍と保育・教育」を加えました。そこには北海道から沖縄までの会員の方々がそれぞれ働いている保育園や、幼稚園、こども園での歴史的な感染症との体験や経験をお互いに分かち合っておられます。

新型コロナウイルス感染症禍の幼児教育界の状況を後世の方々に記録を残せて幸いです。感染症と人類との闘いは地球の歴史上繰り返されましたが、令和の時代に登場したコロナ感染症への教育的対応の様子を掲載できて、この第53号は歴史的な意義を含む内容となりました。

優しいメッセージの乾盛夫神父の巻頭言「子どもとともに育つ」に始まって、石田秀輝氏の基調講演「未来の子供たちに素敵なバトンを手渡したい!」は、今私たちが人間形成で真に求められている教育の本質を論及しています。コロナ感染を防ぐため、対面ではなくオンライン形式での、全国大会は学ぶことが多く、そこにあずかれなかった会員は本誌で分かち合いの機会を得られたと思います。シンポジウムは本来、投稿型シンポジウムでした。ここでも熱気あふれる論議の展開が紙面から感じられます。

(江島正子)

## 『モンテッソーリ教育』編集委員会

委員長 江島正子\* (群馬医療福祉大学大学院)  
委員 前之園幸一郎\* (日本モンテッソーリ協会) ドメニコ・ヴィタ  
リ\* (カトリック幟町教会) 三浦勢津子\* (東京国際モンテッ  
ソーリ教師トレーニングセンター) 阿部真美子\* (聖徳大学) 岡  
田耕一\* (聖徳大学短期大学部) 奥山清子 (元ノートルダム清  
心女子大学) 甲斐仁子\* (東洋英和女学院大学名誉教授) 島田  
美城 (エリザベト音楽大学) 鈴木弘美\* (HYS 教育研究所)  
関聡 (久留米信愛女学院短期大学) 野原由利子 (名古屋芸術  
大学) 林信二郎\* (元埼玉大学) 早田由美子 (千里金蘭大学)  
濱崎久美 (長崎純心大学) 町田育弥 (上田女子短期大学)  
欧文校閲 フランツ・ヨゼフ・モール (元上智大学)  
幹事 小瀬垣利幸 廣津香織 田中代志子 河野佳子 窪谷麻理

\*常任編集委員

---

2022年3月31日 発行

発行所 日本モンテッソーリ協会編集委員会

URL: <https://japan-montessori.org/>

〒112-0002 東京都文京区小石川 2-17-41

富坂キリスト教センター 2号館内

TEL・FAX 03-3814-8308

郵便振替口座 00110-7-71777

会長 前之園幸一郎

『モンテッソーリ教育』編集委員会 江島正子

montessorikyoiku@yahoo.co.jp

印刷 (株) プリントボーイ

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山 6丁目 24番 13号

TEL: 03-3309-1861 FAX: 03-3309-1160

---

© 日本モンテッソーリ協会 (学会)



## モンテッソーリ教育と 子どもの幸せ

江島 正子／著

子どもには自分自身で個性的な人間を建設する能力が与えられている。子どもの内部に備わっている自らのエネルギーによる発達を見守り、優しく援助するモンテッソーリ教育が注目されている。また、高齢者の介護にも活用されるモンテッソーリ・ケアについても紹介する。

定価 1,760 円 (税込) B6 判 280 頁



## アトリウムの子どもたち

—モンテッソーリの宗教教育—

長谷川 京子／著

モンテッソーリ宗教教育には、子どもたちが五感を使い、神さまに心を開ける部屋、アトリウムがある。子どもたちは、アトリウムが大好き。本書では、子どもの祈りの言葉や教具の使い方について紹介する。

定価 1,980 円 (税込) B6 判 248 頁



## おかあさんのモンテッソーリ

野村 緑／著

「聖アンナ子どもの家」でモンテッソーリ教育を実践する著者が、さまざまな教具による感覚・言語・数学教育、そして園の行事までを具体的に分かりやすく解説する。今、注目のモンテッソーリ教育の貴重な実践記録集。

定価 1,815 円 (税込) A5 判 252 頁



## 世界のモンテッソーリ教育

江島 正子／著

日本におけるモンテッソーリ教育の第一人者が、バルセロナ、ローマ、ベルリン、ロンドン、コルカタなどで、世界で最も普及している教育メソッド、モンテッソーリ教育を通して出会った人びとや、教育方法などについてまとめたものである。

定価 1,650 円 (税込) B6 判 288 頁



## たのしく育て子どもたち

—モンテッソーリ教育—

江島 正子／著

世界中で注目されているモンテッソーリ教育は、幼児教育や家庭現場で教育改革の模範となっている。また、難民の子どもへの教育や高齢者のリハビリにも応用されている。本書は、世界におけるモンテッソーリ教育の最新レポートである。

定価 1,540 円 (税込) B6 判 248 頁



## モンテッソーリ教育の実践理論

—カリフォルニア・レクチャー—

マリア・モンテッソーリ／著

クラウス・ルーメル、江島 正子／共訳

本書は、モンテッソーリ教育の創始者マリア・モンテッソーリが、その円熟期に行った講義をまとめたものである。

定価 2,970 円 (税込) B6 判 472 頁



サンパウロ

Tel. 03-3359-0451 Fax 03-3351-9534 suishin@sanpaolo.or.jp

〒160-0011 東京都新宿区若葉 1-16-12 www.paulus.jp (オンラインショップ)

月刊

# 家庭の友

1部330円(税込)送料140円  
年間購読料1部(〒税込)4,400円

好評連載中

## ミラノから見た

## モンテッソーリ教育

マリアーニ綿貫愛香 (ミラノ在住)



2000年に、横浜でモンタナーロ博士にモンテッソーリ教育を学び、その後、ロンドンでリン・ローレンス教授に学ぶ。2004年にローマへ移住し、現在は、北イタリアのミラノでバイリンガル・モンテッソーリ・スクールに勤務。イタリア人の夫と十七歳の息子と三人でミラノで生活している。モンテッソーリ教育ともゆかりの深いミラノから、モンテッソーリ教育の魅力を伝えている。



サンパウロ 家庭の友業務部 〒160-0011 東京都新宿区若葉1-16-12 家庭の友  
Tel. 03-3357-6499 / Fax. 03-3357-6408 郵便振替 00120-0-101420

・モンテッソーリ宗教教育・

### 子どもが 祈りはじめるとき

新装版



ソフィア・カヴァレットティ 他著  
クラウス・ルーメル / 江島正子 共訳

神さまが共におられる豊かさを  
楽しむよう手助けする教育——

子どもの魂に潜んでいる「宗教心」、神へのあこがれを満たすモンテッソーリ宗教教育の具体的な理論と実践を紹介。福音、生命、クリスマス、復活祭、洗礼、聖体、祈りなどについて伝えるヒントも充実。

A5判並製 221頁 定価1,650円(税込)

### モンテッソーリ教育法 子ども— 社会— 世界



マリア・モンテッソーリ 著  
クラウス・ルーメル / 江島正子 共訳

子どもはわたしたち大人以上に  
深い理解力をもっています——

深く集中し、自発性を伸ばす子ども。他者への忍耐と尊敬をもち、社会の秩序を学ぶ子ども。親・教育者がもつべき子どもとの向き合い方とは。優れた幼児教育法を確立したモンテッソーリ自身による珠玉の講演集。

B6判並製 198頁 定価1,650円(税込)

いつもよいものを——

## ドン・ボスコ社

〒160-0004 東京都新宿区四谷1-9-7 TEL. 03-3351-7041 FAX. 03-3351-5430

ドン・ボスコ社オンラインショップ [www.donboscosha.com](http://www.donboscosha.com)

## 相良敦子先生の本

〔増補新版〕

### モンテッソーリ教育を受けた子どもたち

—— 幼児の経験と脳 ——

子どもたちがどう育ったか、豊富な事例とともに紹介し、経験がどう脳に働きかけているか、検証していく。 ●本体1600円(税別)

ISBN978-4-309-24774-8

〔増補新版〕 **親子が輝く**

### モンテッソーリのメッセージ

—— 子育て・子育てのカギ ——

「家庭で何を教えたらいいの？」と迷うパパ、ママへ。0歳から6歳まで、家庭のできる最高の子育て。 ●本体1600円(税別)

ISBN978-4-309-24733-5

**河出書房新社** 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2  
TEL.03-3404-1201 www.kawade.co.jp

モンテッソーリによる初等・中等教育論の初邦訳

モンテッソーリの一貫教育

## 児童期から思春期へ

児童期から思春期にかけての子どもの各発達段階に  
適応した教育法について実例をあげて展開する。  
特に化学の実験について、いかに理解させながら  
進めていくべきか詳しく述べている。

M・モンテッソーリ/K・ルイメル、江島正子訳

四六/本体2000円

玉川大学出版部 Tel. 042-739-8935  
Fax. 042-739-8940  
〒194-8610 東京都町田市玉川学園6-1-1  
http://www.tamagawa.ac.jp/sisetu/up

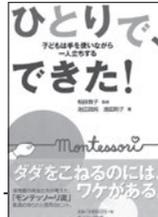
保育園の先生たちが考えた  
「モンテッソーリ流」教具の作り方と活用のヒント。

## ひとりで、できた!

子どもは手を使いながら一人立ちする

大好評 9刷出来!

相良敦子 監修  
池田政純 池田則子 著  
定価=1680円(税込)

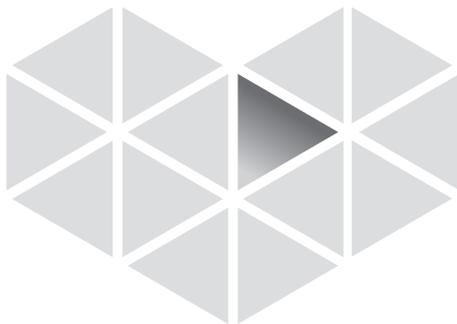


### 【主な内容】

- 子どもは幸せになるよう、創られている
- 「敏感期」は、自然がくれた成長のためのチャンス
- 子どもたちの、心の声——「くすのき保育園」の日常から
- 遊具作りのポイントと活動をサポートするコツ
- 家庭で作れるアイデア遊具
- 感性や知性を高める遊具
- 知性を働かせるお手伝いのすすめ ほか

サンマーク出版 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-16-11  
TEL.03-5272-3166 http://www.sunmark.co.jp

## コミュニケーションをカタチにします



コミュニケーションの良し悪しは、ビジネスに大きく影響します。  
お客様の想いや情報を、いかに心地よく、効果的に伝えるか——。  
プリントボーイはお客様とエンドユーザーとの間に、より良い  
コミュニケーションを実現できるよう企画力、デザイン力を駆使し、  
印刷物・ディスプレイ・IT技術等さまざまなツールやサービスを用いて、  
コミュニケーションを最適なカタチにいたします。

<https://www.printboy.co.jp/>

**株式会社プリントボーイ**

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山6-24-13 TEL.03-3309-1861 FAX.03-3309-1160



# 国際モンテッソーリ協会公認シリーズ



## シリーズ完結！！大好評最新刊 第5巻『モンテッソーリは語る』

新しい時代を生きる人を育てるために

<まだの方は是非一読を。おすすめです>

マリア・モンテッソーリ 著

(100ページ/1C/A5判/1800円(税込)/AMI友の会NIPPON訳・小川直子 監修)

時代を  
超越する  
名著

「子どもには自分を育てる力が備わっている」

Maria Montessori  
マリア・モンテッソーリ

モンテッソーリの生の言葉を読んでみませんか？



第1巻  
『人間の傾向性と  
モンテッソーリ教育』  
普遍的な人間の特質とは何か？



ISBN978-4-86024-538-6  
(136ページ/1C/A5判/2,000円+税/AMI友の会NIPPON訳・監修)



第2巻  
『1946年 ロンドン講義録』  
戦後初のモンテッソーリによる講義33

講義1 生命への援助としての教育  
講義2 科学的教育学  
講義3 心理学に基づく教育  
講義4 発達3段階  
講義5 遺伝と創造  
講義6 無意識の心理学  
講義7 誕生からの教育  
講義8 ことばの発達  
講義9 自然との調和 …以降33講義まで収録。  
ISBN978-4-907537-02-9  
(336ページ/1C/A5判/2,970円+税/中村勇 訳/AMI友の会NIPPON監修)



第3巻  
『子どもから始まる  
新しい教育』  
モンテッソーリ・メソッド確立の原点

第1章：教育の四段階  
第2章：子ども  
第3章：教育の再構築  
第4章：「子どもらしさ」の2つの側面  
第5章：適応の意味  
第6章：道徳と社会教育  
ISBN978-4-907537-08-1  
(144ページ/1C/A5判/2000円+税/AMI友の会NIPPON訳・監修)



第4巻  
『忘れられた市民  
子ども』  
第1章：平和と教育  
第2章：モンテッソーリが訴える永遠の問題  
第3章：忘れられた市民 子ども  
ISBN 978-4-907537-09-8  
(124ページ/1C/A5判/2000円+税/AMI友の会NIPPON訳・監修)



Maria Montessori Speaks to Parents  
**パパ ママ あのね…** 子育てのヒントは子どもが教えてくれる  
マリア・モンテッソーリ著 AMI友の会NIPPON訳

発売後忽ち  
重版決定

本書は、子育て中の母親・父親に向かってモンテッソーリが初めて語った本。本書の発見に際し、原書版元ピアソン社社長が「セレンディピティ!!!」(serendipity:素敵な偶然/新たな価値の発見)と叫んだほど。

【内容】第1章 子どもの環境 第2章 教育における新しいメソッド 第3章 「愛しすぎる親」 他



風鳴舎

<http://fuumeisha.co.jp>

〒171-0005  
東京都豊島区  
南大塚2-38-1  
MID POINT 6F

☎ 03-5963-5266  
FAX 03-5963-5267

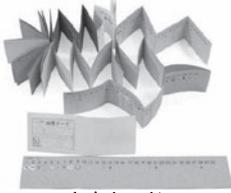


全国の有名書店、風鳴舎のHP、Amazonでお買い求めいただけます。

# m 「こどもの家」 集団



言語 / 生活 / 数 / 備品 (教具棚、じゅうたんなど)  
 子どもに持っている「自立する心」を大切に、  
 モンテッソーリ教育の理念にそって、京都コースにより開発された教具・教材です



## 出席カード

時の流れ (歴史の概念) を、感覚的に知らせる。色は四季と一年を表します。



## 言語教具の一部



## 絵カード (カラー)

- 全8種類 (ABC各6枚)
- みにつけるもの
  - やさい
  - みちかかないきもの
  - くだもの
  - どうぶつ
  - こんちゅう
  - とり
  - はな

↓ 各種の口の巾 (耐熱紙)

ご注文は **FAX 075-645-4181** またはメール **info@montessorimaterial.jp** お願いします。

注文先・発送部 〒612-0838 京都市伏見区深草神明講谷町2-4 URL: [www.montessorimaterial.jp](http://www.montessorimaterial.jp)



## 書籍

モンテッソーリの教育思想—子どもの自立・自由・徳の確立、子どもへの援助—をやさしく解説。

## 子どもこの尊きもの

モンテッソーリ教育の底を流れるもの  
 片山忠次・著 2,530円 (税込)  
 法律文化社



## DVD

いちばん良いものを子どもたちに  
 ~深草こどもの家の一年~  
 2007年製作 本編50分  
 5,000円 (税込)



## 書籍

日本人初のモンテッソーリ教師、赤羽恵子「深草こどもの家」30年のメッセージ

## 自分で考え自分を育てる モンテッソーリ教育

友好学園「深草こどもの家」後援会編  
 1,100円 (税込)



## DVD

モンテッソーリに学ぶ  
 新学期の子どもたちの一日

## 深草こどもの家の5月 新学期のこどもたち

1,100円 (税込)



## CD

- ・美しい日本語のために
- ・心と身体のコントロールのために

## 「あいうえおの歌」「月・日・曜日の歌」

## 「線上歩行のために I・II・III」

作曲: 篠原 真 3,080円 (税込)



## 楽譜

正しい発音の日本語の基本を、  
 美しいメロディで、皆で歌えます。

## あいうえおの歌 I・II 月・日・曜日の歌

作曲: 篠原 真 770円 (税込)

お問合せ・研究部 ● 京都モンテッソーリ教師養成コース TEL: 075-641-8280

FAX: 075-642-8588

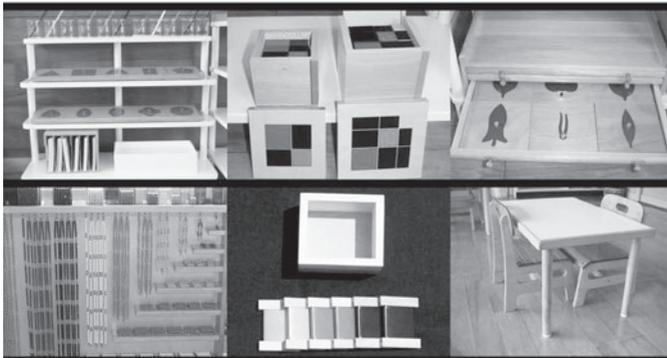
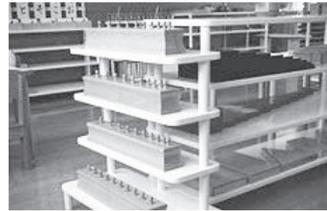


# 松本科学工業有限公司



日本で唯一、  
国際モンテッソーリ協会（AMI）公認の  
教具教材の製造販売を行っています。

日本で唯一、国際モンテッソーリ協会（AMI）公認の教具教材と環境用具の研究・開発・製作、販売を行っています。またモンテッソーリ教育の導入時の人的・物的・環境の配慮、アドバイス、及びケアや国際モンテッソーリ教育の日本国内での講演・講義・実践研究会、教員養成コース、他催し等のお手伝いもしています。



〒579-8002 大阪府東大阪市池之端町8番16号

TEL 072-981-4875

FAX 072-986-0168

E-mail [ka16yu813@gmail.com](mailto:ka16yu813@gmail.com)

URL <http://www.mk.-k..com/>

日本モンテッソーリ協会公認  
東京モンテッソーリ教育研究所

付属 教員養成コース



日本における初めてのモンテッソーリ教員養成コースとして昭和45年より活動してまいりました「上智モンテッソーリ教員養成コース」を引き継ぎ、平成18年より「特定非営利活動法人 東京モンテッソーリ教育研究所」付属教員養成コース（コース長 前之園幸一郎）を開設いたしました。

本コースの特徴は、モンテッソーリ教育の教育理念を基本として、現代の教育学、心理学の潮流をも視野に入れながら、モンテッソーリ教育の理論と実践を調和的に学ぶ点にあります。



足し算版

本コースは、モンテッソーリにならって、「子どもの魂の中に眠っている人間を呼び覚ます」ことのできる教師の養成を目指しています。

平成29年度より、従来の夜間コースに加え、土曜コース（集中）を開設しました。現在は土曜コースを中心に行っております。

令和5年度 第18期生を12月より募集いたします。

令和5年度 第18期生募集

- 募集定員： 25名  
選考日程： 令和5年1月15日（日）  
場 所： 富坂キリスト教センター  
内 容： レポート(小論文)・面接
- ※ 詳細・入講案内は下記事務局までお問い合わせください。
- ※ 科目履修生、理論聴講を希望する方もお問い合わせください。

夏期実技研修会

- テーマ： 数教育  
日 時： 令和4年8月27日（土）  
会 場： 未定  
講 師： 当コース 教 担当講師  
（廣澤弓子、梅野芳子、三浦直樹）
- ※ 受講を希望する方は下記事務局までお問い合わせください。
- ※ 新型コロナウイルスの感染状況により、中止になる場合があります。

特定非営利活動法人 東京モンテッソーリ教育研究所 事務局

〒112-0002 東京都文京区小石川 2-17-41 富坂キリスト教センター2号館

TEL 03-5805-6786

FAX 03-5805-6787

URL <https://montessori.or.jp/>

E-mail [info@montessori.or.jp](mailto:info@montessori.or.jp)



# 東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンター

AMI(国際モンテッソーリ協会)公認 3～6歳コース(国際資格)

昼間部(1年コース) 夜間部(2年コース)

AMI公認3-6歳トレーナー 三浦勢津子

東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンターは開設以来46年の伝統の中で、国際モンテッソーリ協会の基準による、新しい時代に適応するトレーニングを目指しています。

「ひとりのできるようになってください。」  
という子どもの心からの要求に応え、子どもの生命の発達を援助するモンテッソーリ教師の養成を行います。

このトレーニングコースでは  
マリア・モンテッソーリ博士の発達心理学、実践を通して、  
人格形成期として大切な幼児期の子どもの発達を心身両面から  
援助する方法を探求していきます。

- ◆入学願書受付 2022年10月1日～
- ◆選考日 2023年1月予定 内容:面接
- ◆応募資格 (下記いずれかの資格保持者、または取得見込者)

大学卒、短期大学卒、専門学校卒の資格を持つ方、在学中の方  
幼稚園教諭、保育士、各種教員資格、及び、これに準ずる資格を持つ方

\*規定履修条件を満たし卒業試験に合格すればAMIディプロマ(国際資格)を取得できます。



2021年11月より実践の授業と  
学生の練習のために、町田駅徒歩  
3分の場所に新しくトレーニング  
ルームを開設しました。

本部事務局 〒252-0301 神奈川県相模原市南区鶴野森2-20-2 (JR/小田急町田駅 下車徒歩12分)

TEL 042-746-7933 FAX 042-741-9495

トレーニングルーム 〒194-0022 東京都町田市森野1-36-9 森野1丁目ビル8階  
(小田急町田駅 下車徒歩3分)

<http://www.montessori.g3.xrea.com/> Email:ami\_tokyojp@ybb.ne.jp

日本モンテッソーリ協会公認



学校法人小百合学園  
広島モンテッソーリ教師養成コース



- 【目的】 子どもは自分自身を創造しながら明日の世界をつくっていく偉大な力をもっています。  
この使命を確信する当コースは、“モンテッソーリ教育”の実践による子どもの人格形成の援助に奉仕する教師の養成コースです。

## 本科生

### 〔入学資格〕

- ・幼稚園教諭、保育士資格取得者
- ・上記資格取得見込みの者
- ・小、中、高及び養護学校の教員資格取得者
- ・上記以外の者で当コース委員会で認めた者

### 〔取得資格〕

日本モンテッソーリ協会(JAM)認定ディプロマ授与

### 〔履修期間と内容〕

- ・第一年次  
理論科目・実践科目の履修  
日程：1カ月の中の1週間、  
1年で計 10 週
- ・第二年次  
教本提出、集中講義、教育実習、  
モンテッソーリ教師資格試験の受験



【卒業生研修会】 当コース卒業生が更に研鑽を積みます

【園長主任会】 関係各園の園長先生と主任の先生と一緒に職員養成などについて考えます

【講習会】 領域別に どなたでも参加できます

〒733-0002 広島県広島市西区楠木町4丁目16-33  
学校法人小百合学園 広島モンテッソーリ教師養成コース  
TEL.082-509-0980 FAX 082-237-0979  
e-mail syr\_monte@blue.megaegg.ne.jp

日本モンテッソーリ協会(学会)公認

# 九州幼児教育センター モンテッソーリ教員養成コース



## Montessori Training Course Kyushu Institute

Since1974

### 本科トレーニングコース(3-6歳)

- ✿ 基礎(2.5~3.5歳)/中級(3.5~5)/上級(4.5~6歳)クラス別令和4年度より単位取得制を導入、学習範囲を選択できます
- ✿ 上級クラスまで習得すると、協会(学会)発行の教員資格(ディプロマ)取得できます

### Saturday&Sundayコース(隔月土・日開催)

学生や補助教員、その他どなたでも学べる短期学習コースです

### 各種研修

- 📍 リモート研修: 保育現場の取り組みや見直しを行います
- 📍 春・夏 WORKSHOP: 基本的実践の紹介と解説を行います
- 📍 『モンテッソーリ・フィールドチャレンジ』隔年開催の理論研修の場です

本科願書受付 12月1日 ~ 翌年1月20日

(第二次募集については、2月に入ってお問い合わせ下さい)

お問合わせは

〒811-3425 福岡県宗像市日の里7丁目21-4

☎ (0940)36-7008 📠 (0940)36-7078

✉ ktcourse@nifty.ne.jp

九州幼児教育センター

九州幼児教育センター

<http://ktcourse-montessori.world.coocan.jp/>

[コースの学習内容がわかる一冊!]藤原 元一 他著 学苑社

『やさしい解説 モンテッソーリ教育』 絶賛発売中!



# JAM (日本モンテッソーリ協会) 公認 京都モンテッソーリ教師養成コース

1973 年開設以来、着実な歩みで実力ある指導者を世に送り出しています

本コースの目的… 子どもの精神発達を正しく援助できる教師を養成すること

- ① こどもの要求について、幅広い理解ができるように
- ② 人格の創造者としてのこどもに対して敬意を持てるように
- ③ こどもの魂の中の、小さな、デリケートな、  
開きかかった生命の表現を読み取り理解できるように

教育内容を通して、実践力をつけ

こどもと新しい関係をつくり、新しいタイプの教師に  
なれるよう、講師/スタッフ一同が援助します。



講師及びスタッフ：前之園幸一郎（青山学院大学名誉教授、JAM 会長）、岡山真理子（コース委員長）、板東光子（亀田平和の園保育園園長）、根岸美奈子（深草こどもの家園長、コース主任） 他

働  
き  
な  
が  
ら  
学  
べ  
ま  
す  
！

## 専門コース モンテッソーリ教師養成 養成期間 2 年（4 年在籍可）

講義：月に一度の週末（土 3 時～7 時、日 9 時～4 時半）見学/参加実習：平日  
取得資格—JAM 認定モンテッソーリ教師ディプロマ（免許）  
会場：京都モンテッソーリ教師養成コース附属「深草こどもの家」  
コロナ禍においてはオンライン講義あり

\*その他 基礎コース 札幌/東京/福岡会場があります。専門コースへ編入可  
全国から集まる仲間と共に学び合いましょう！

お問い合わせは 京都モンテッソーリ教師養成コース事務局まで

〒612-0817 京都市伏見区深草向ヶ原町 17 TEL: 075-641-8280 / FAX: 075-642-8588

Email: [mc.kyoto@theia.ocn.ne.jp](mailto:mc.kyoto@theia.ocn.ne.jp) URL: [www.fukakusakodomonoie.com](http://www.fukakusakodomonoie.com)

## 深草こどもの家・京都モンテッソーリ教師養成コース 学校法人化プロジェクト



学校法人化  
プロジェクト  
サイト

現在、学校法人化を目指して活動しております。

京都地域創造基金(公益財団)を通して、ご寄付くださると税制優遇が受けられます。どうか多くの皆様からのご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。



京都地域  
創造基金  
サイト

## 長崎純心大学 純心モンテッソーリ教員養成コース

長崎純心大学児童保育学科のモンテッソーリ教員養成コースは日本モンテッソーリ協会から認可を受け平成17（2005）年に設置されました。

本コースでは大学で学びながら卒業時に免許状を取得することができます。卒業生はモンテッソーリ教育を実践している幼稚園・保育園で広く活躍しています。



《定員》 1 学年 20 名



《授業科目》

基礎理論科目・基幹理論科目・実践科目  
・教育実習・教具アルバム作成・卒業論文

**教育機関である大学の学科に設置された  
日本で唯一のモンテッソーリ教員養成コースです**

 **長崎純心大学**

知恵のみちを歩み人と世界に奉仕する

— 知恵と奉仕 —

〒852-8558 長崎市三ツ山町235 番地

TEL 095-846-0084 FAX 095-849-1894

<http://www.n-junshin.ac.jp/univ/>

2019年度より全学科男女共学となりました。

# モンテッソーリ 子どもの家

## ドキュメンタリー映画「モンテッソーリ 子どもの家」 DVD好評発売中



フランス最古のモンテッソーリ学校の  
2歳半～6歳の28人のクラスを  
2年3ヶ月にわたって観察した  
ドキュメンタリー映画！

〔DVD概要〕  
収録時間：本編105分  
特典：深津高子氏監修ブックレット  
「モンテッソーリ教育について」

### 関係者特別割引

定価5,500円(税込)のところ、本誌をお読みの皆様へは  
特別割引価格4,400円(税込)にてお求めいただけます。

送料：全国一律800円(北海道900円/沖縄・離島1,600円)  
※8,000円以上のご購入で送料は無料となります。

#### ■QRコードから簡単お申し込み〈推奨〉

- ①右のQRコードを読み取ってください。
- ②「メール作成画面はこちら」をクリックすると  
メール画面に移行します。  
そこへ必要事項を入力して送信してください。



#### ■メールでのお申し込み

haruka@mytheaterdd.com へお問い合わせください。

About Childcare and Corona, Kyoto Course.....	Mieko Hasegawa-Negishi (133)
Corona Crisis and Teacher Training, Kyushu Course .....	Eriko Fujiwara (136)
Concerns Regarding Childcare During the Corona Virus—Present and Future .....	Seiko Ohara (139)
Childcare and Education During the Corona Virus, Expectations of a New Human .....	Tomone Wano (142)
How to Handle Childcare During the Corona Crisis .....	Naomi Yanagisawa (145)
Childcareeducation During the Corona Crisis.....	Junko Mori (150)
Notification from Saitama Prefecture Regarding COVID-19 .....	Masato Takahashi (152)
In the Corona Crisis .....	Toshimitsu Rikimaru (156)
Report on Childcare and the Corona Crisis .....	Suwako Kawamitsu (158)
Report on Childcare and the Corona Crisis .....	Nozomi Suemune (161)
Childcare with Corona .....	Sumiko Tamura (164)
Report on Childcare and the Corona Crisis, 2020 <sup>+</sup> , Nagasaki .....	Hiroko Ikeda (167)
Childcare and the Corona Crisis.....	Mizue Maeda (170)
Looking Back on the Corona Crisis, Kyushu Branch.....	Satoshi Seki (172)
About the Chubu Branch Study Group on Corona .....	Naoko Murata (174)
Childcare Education: The Things That Change and Those That Do Not .....	Sumiko Takane (178)
Childcare and the New Corona Virus Infectious Disease .....	Mitsuko Bando (181)
The New Corona Virus and Childcare .....	Etsuko Kimura (183)
How Childcare Differs in Okinawa and the Smaller Islands During the Corona Crisis .....	Katsue Teruya (186)
Childcare, Education During the Corona Crisis .....	Michiko Yoneyama (189)
The New Corona Virus and Montessori Education .....	Kazumi Sasaki (193)
Report from the Classroom During the Age of Corona, for the Happiness of the Children .....	Paul Tanaka Dolan (197)
Childcare, Education During the Corona Crisis, Kyoto Course .....	Mariko Okayama (201)
Thoughts on the Corona Crisis .....	Keiko Tomoi (203)
Corona (Covid-19) and Childcare .....	Yurie Maehana (205)
<b>Book Reviews</b>	
<i>Surrounded by Dandelions</i> .....	Kumi Hamazaki (207)
<i>Noticing Children's Signs</i> .....	Koichi Okada (213)
<i>Montessori Education and Children's Happiness</i> .....	Hiromi Suzuki (218)
<i>Montessori Education and Special Education</i> .....	Yumiko Hayata (226)
<b>Memorial</b>	
Memorial for Mrs Ryoko Matsumoto .....	Koichiro Maenosono (231)
<b>Report on the 53<sup>rd</sup> National Conference</b>	
Report from the Secretary General .....	Jiro Okamura (232)
Preparing for the 53 <sup>rd</sup> National Conference .....	Rumiko Yoshimura (234)
Report from Local Chapters .....	(236)
<b>Report from the Office of JAM</b> .....	Hiromi Suzuki (248)
<b>Resumes</b> .....	(259)
<b>Afterword</b> .....	Masako Ejima (285)

# MONTESORRI EDUCATION No. 53 2021

## Special Focus Corona (COVID 19) Crisis and Childcare / Education

**Foreword** Growing with Children: Preserving the Perfection of the Earth  
..... Morio Inui (1)

**Keynote Speech** I Want to Hand a Wonderful Baton to Future Children!  
..... Emile H. Ishida (2)

### Symposium

1<sup>st</sup> Panelist: Seeking a Way of Life That Keeps the World Perfect for Children  
..... Kazuko Hotta (12)  
2<sup>nd</sup> Panelist: Keeping the World Perfect with Children ..... Fumiko Fukuhara (19)  
3<sup>rd</sup> Panelist: What Adults Who Grow Up with Children Can Do for the Earth Masako Tanaka (26)  
Report from the Coordinator ..... Kenichi Ishida (33)

### Papers

Peace and Children: Montessori Cosmic Education ..... Koichiro Maenosono (40)  
A Catholic Perspective on Maria Montessori 's View of Children ..... Etsuko Hayashi (54)

### Research Note

Montessori's Perspective on Listening to Music and Children's Lives Ikuya Machida (66)

### Practical and Case Study

Incorporating Long-term Care Practices in Montessori Education ... Nobuyoshi Waki (76)

### Luhmer Awards

6<sup>th</sup> and 7<sup>th</sup> Luhmer Awards ..... Masako Ejima (89)

### Overseas Information

Corona Crisis and Childcare and Education Overseas ..... Setsuko Miura (92)

### Special Focus: Corona Crisis and Childcare / Education

From the Editorial Board ..... Masako Ejima (96)  
Childcare and the Corona Crisis ..... Madoka Mori (99)  
Tokyo Institute of Montessori Education ..... Koichiro Maenosono (102)  
Proposals for Montessori Education in Light of the Corona Crisis... Shinichiro Sasaki (105)  
2021 Report from the Junshin University Course ..... Rumiko Kataoka (109)  
Montessori Institute of Tokyo ..... Setsuko Miura (112)  
Not Using the Corona Virus as an Excuse ..... Midori Nomura (114)  
Childcare and the Corona Crisis ..... Hiromi Goto (117)  
Childcare and Education in the Age of Corona Virus ..... Mayumi Ueda (122)  
The Practice of Montessori Education During Infectious Corona ..... Kumiko Sakata (125)  
Supporting the Development of Tomisaka Children's Home During the Corona Crisis  
..... Maki Katsumata (129)